

G S 芦 螢 ！ 絶 对 幸 福 大
作 戦 ！ ！ ！ 平 安 大 魔
境

混沌の魔法使い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうも混沌の魔法使いです

京都での陰陽寮の見学や京都の事件の搜索を切っ掛けに、日本だけではなく、世界中で暗躍しているガープ達の悪巧み一角に触れた美神達一行。

搜索の中保護した人造神魔の診察にヒヤクメが訪れたその瞬間、時空の裂け目が発生し美神達は時空を超え平安時代へと辿り着く、だがそこはガープの手によって歪められ作られた正史とは異なるIFの世界だった。

※今作平安大魔境はGS芦菟シリーズその3となります。1作目、2作目を見ていただいている前提での話になりますので、設定・話の流れが原作GS美神から大幅に離れておりますのでご注意ください。

下に1作目、2作目のアドレスも張っておきますので、もし1作目、2作目を見ておられない場合はそちらを見ていただければ幸いです。

第一部

GS芦菟！絶対幸福大作戦!!!

<https://syosetu.org/novel/57190/>

第二部

GS芦菟！絶対幸福大作戦!!! セカンド!!!

<https://syosetu.org/novel/143701/>

目次

その 1 2	その 1 1	その 1 0	その 9	その 8	その 7	その 6	その 5	その 4	その 3	その 2	その 1
190	175	157	137	117	101	83	65	46	29	16	1

その 2 3	その 2 2	その 2 1	その 2 0	その 1 9	アの 横島 君	エイ プリル フル ール 特別 読み きり	その 1 8	その 1 7	その 1 6	その 1 5	その 1 4	その 1 3
396	379	365	351	334	312	カル デ	296	277	259	239	222	207

平安大魔境	おまけ	その3	その3	その3	その3	その3	その2	その2	その2	その2	その2	その2	その2	その2	第29話	その2	その2	その2	その2	その2	その2	その2	その2	その2	その2	その2
589	575	562	553	535	519	504	489	473	458	445	428	415														

おまけ	おまけ
その5	その4
622	605

その1

平安大魔境 その1

く横島視点く

障子から零れてきた朝日に眉を顰めながら目を開くと目の前に一杯に広がる茶色い塊……うりぼーだ。

「…………ふひゆるー」

器用に鼻ちようちんを作り、俺の枕元で気持ち良さそうに寝ているなあと思つた所で身体が動かないことに気付き、唯一自由に動く右腕で布団の中を覗きこんだ。

【のばあ……】

「…………すーすー」

涎だらだらで俺の胸の上で寝ているチビノブと左腕を抱え込んで寝ている紫ちゃん。夜中に起きて寂しかったか、寒くなってもぐりこんできたのかなと思ひ布団を元に戻す。

(起きれないなあ)

とても気持ち良さそうに寝ているので、もう少しこのままにしておいて上げようかなと思ひ。2度寝ではないが、目を閉じていようと思ひゆつくりと目を閉じた。

「……」

「……何してるの?」

顔に吐息を感じたので目を開くと清姫ちゃんの顔が目の前に広がっていた。にっこりと笑ったのでそれにつられて笑い返すと清姫ちゃんの顔が近づいてくる。

「待って!?!なにをする……ふむぎゆ」

口をその白魚のような手で塞がれたが信じられない力で振りほどくことすら出来そうにない。

「本で見ました、朝の口吸いがあると、それが現代の愛を伝える方法だとか……ならやるしかないじゃないですか!」

「むーむー……ッ!」

相変わらず目が怖い、そしてアクセル全開である。お姫様のはずなんだけど、なんで彼女にはブレーキがないのか不思議で仕方ない。俺のイメージで申し訳無いが、お姫様つてもっと御淑やかなんじゃないかなと思うんだけど

(てっやばい!)

そんな事を考えているうちに清姫ちゃんの顔は目の前に来ている、このままでは口を塞がれ声を出せないうちに、唇を奪われることになる。清姫ちゃんは可愛いし、美少女だとは思えけれど龍族のお姫様なのだからそんな事を軽々しくして良い訳が無い。目で駄目だと訴えるが、清姫ちゃんの恍惚の色はますます強くなり、やばいと思ったその瞬間。

「みむう」

「……あは、チビちゃん」

髪の中からもぞもぞと顔を出したチビ、ぱちぱちと放電する音がしているが不思議な事に俺には全く電気が流れてきてない。

「ちよつとした出来心だったんです」

「みぎいッー」

「ふみやあああーッーッ!!!」

余り聞いた事の無いドスの聞いたチビの鳴き声の後、凄まじい放電音と共に清姫ちゃんの何とも言えない悲鳴が屋敷に響き渡った。

「……全く本当に学習しない馬鹿だな」

「冷たい……痛い……寒い」

氷の上での正座に加え膝に氷の重り……拷問にしか見えない光景を紫ちゃんに見せ

るわけには行かないと手で目を塞ぐ。

「なーに？」

「ううん。なんでもないよ、ご飯にしようね」

紫ちゃんの精神衛生上絶対良くないので清姫ちゃんを見せないように背中中で庇いながら、一度だけ振り返り俺と目が合った瞬間に頬に赤みがさした清姫ちゃんやべえと思わず思ってしまったしながらその場を後にするのだった……。

〈美神視点〉

早朝からの清姫の悲鳴と庭で凍り土下座している姿に、横島君を襲おうとしたのだと判り私はたぶん虚無顔をしていたと思う。

「……お気持ちは判ります。でも、清姫様は神魔の中でもエリートの血筋なんですよ？」

「変態のエリートとか言わない？」

「……竜族です」

知ってるわよ……でもなんであんなに残念なのか不思議でならない。

「大丈夫でした？」

「チビが迎撃してくれた」

「みっむう♪」

「偉いわよ、チビ」

「みむー♪」

ハムスターサイズなのに並みのGSよりもはるかに強いチビに、乙事主と同じ神性を持つ新しい神として生まれたりばーに、信長とシルキーの融合したチビノブ……。

「横島君だけでもかなりの過剰戦力よね」

「……ですわね」

横島君自身も大概だが、横島君の周りも相当やばいのよね。

「せんせー！散歩！散歩でござるー」

「朝ごはん食べてからに決まってるでしょ？馬鹿犬」

「ふぎいッ……」

タマモに足払いされて顔面から滑ってくるシロ。余りにも人間が少ない今の状況なのに、なぜか妙に心が落ち着いてしまう。

「西条さん、どうしよう。私人外に溢れてるこの光景になれてるわ」

「……僕もだよ。仕方ないと受け入れるべきなのかな？」

「おはようございます、あ。美神さん、西条さん、まだあの白い子鹿いましたよ」

「「まだいるのッ!?!」」

「「……きゆうーん」」

琉璃に言われて屋根を見ると白い子鹿がつぶらな目で横島君を見つめて……。

【クアー】

【きゅ……】

（（増えたツ!?!））

私達の見ている前で白い子鹿の背中の上に紅い翼にオレンジの長い尾を持つ神々しい鳥が停まった。小竜姫様を見ると目を見開き、くちをぱくぱくさせている。

「……なんだ。朱雀か、横島を見に来たんだな」

シズクが清姫の膝の上に氷を追加して、エプロンで手を拭いながらなんでもないように言うけど四聖獣の朱雀とかなんで来るのよ。

【ノーブウ】

「……ああ、今食事にするよ」

チビノブに呼ばれて台所に向かうシズク、私達も見なかったことにして広間に向かうとした。

【シャア】

【……ガー】

……止めて下さいお願いします。この恐ろしいまでの神通力とか絶対振り返りたくないんだけど、何がいるのか知りたくて振り返り絶句した。

「猫かな？随分と立派な猫だ」

「おつきいねー」

「……………」

「みつむー♪」

「ぶぎいー」

「あれ？シロとタマモ？それに蛭と神宮寺さんもどうかしました？」

庭にいた精悍すぎる猫……と言うか虎……それも白虎を猫と言う横島君に絶句し、岩だと思っていた物から手足が生えて蛇の尾と竜の頭を出したのを見て心臓が止まるかと思っただ。

(…………どうしよう)

(どうしようもないんじゃないか?)

(いや、横島君だけじゃなくて前世がやばすぎると思うんですけど)

何故か四聖獣の3匹が見に……その直後雷の音が響いた。

「あれ？天気雨かなあ？、チビ何かした？」

「みむ?」

そっかーチビじゃないか、じゃあ天気雨だなと言う横島君。だけど私達の目には雲の中を雄雄しく泳ぐ蒼い竜が見えていた。

「……青龍です」

「「知ってる」」

四聖獣が横島君を見に来た。なにこの地獄絵図と思いながら、朝のこの光景を見なかつたことにして私達はそそくさと広間の中へと逃げていくのだった……。

↳ 蜚視点

朝からとんでもない事になっていると思つた。京都は横島の前世の高島のホームグラウンドだったとはいえ、これだけの神魔がやってくるとは思つても見なかつた。

「はい、あーん」

「あーん」

そして横島は横島で紫ちゃんのお世話で平常運転である。あれだけの神通力の持ち主を普通に猫と言える横島は正直天然が過ぎると思う。

(……どうしてこうなつたかなあ)

横島の属性が良く判らなくなつてきていると思う。助兵衛じゃなくなるとどうしてこども天然路線に進んでしまうのか……これは間違ひなく横島の謎だと思ふ。

「今日はヒヤクメが来るので、屋敷で待機しててください」

「ヒヤクメさんですか？」

「はい、1度横島さんの検査と紫ちゃんの事ですね」

「私？」

人造神魔であるからこそ何が判るか判らない、そのための検査ですという小竜姫様。横島に関しては高島の縁の物が多すぎるので、それに対する検査と見て間違いはないだろう。

「まあゆつくり出来ると思うといいですわ」

「そうね。これが終われば観光とかも良いしね」

「……どこか見ておくか」

観光の話や休息の話をしているくえす達には悪いけど、清明神社で得た昔の霊具とかの情報を纏めるのを忘れてないかなあ……でも、私も横島と観光はしたいわね。

「とりあえずご飯にしましょう、その後どうするかは皆で話し合えばいいからね」

美神さんの一声で京都でどんな話をするかと言う話は中断させられ、皆朝食に集中し始めたんだけど……。

「あー」

「はい、あーん」

「あむう♪」

やっぱり横島は紫ちゃんの世話であんまり食事が進んでいないのだった……。

「こんにちわー」

昼の少し前にヒヤクメさんがトランクケースを持ってやって来た。これで横島の今の状態が詳しく判るし、紫ちゃんの事も詳しく判る。そう思っていたんだけど……それが間違いだった。

「え？あ！？な、なんなのねえッ!?ひ、ひええッえええッ!?」

「ヒヤクメさん!?!」

屋敷の中にヒヤクメさんが足を踏み入れた瞬間。ヒヤクメさんの背後に漆黒の穴が開き、その中にヒヤクメさんが吸い込まれそうになり、横島が慌ててその手を掴んだ。

「横島君!?!」

「横島あッ!」

そして私と美神さんもその穴に吸い込まれようとしている横島の手を掴み、腰を落とすその力に耐える。

「千切れるう！腕千切れるのねええ!!」

「我慢してええ……って俺の腕もちぎれるう……ッ!」

横島とヒヤクメさんの悲鳴が重なる中。全員で協力して吸い込まれまいとするが、その力が余りに強く徐々に穴の中にヒヤクメさんが吸い込まれていく。

「ヒヤクメ！貴女何かしたんじゃないですか!？」

「な、何もして無いのねえ！むしろ、これからするところなのねえ」

「「ちよつと、その所詳しく」」

「ひえ!?! 藪蛇だったのねえ!？」

検査つて名目で横島に何をするつもりだったのか、それを問い詰めなければならぬ。

「私もそのところは詳しく聞きたいですねえ!」

「死ぬ！吸い込まれなくても、吸い込まれてもしぬうう!」

「暴れないでえ!」

だがその脅しが良くなかった。命の危機を感じて暴れだしたヒヤクメさんの動きで辛うじて踏み止まっていた横島がバランスを崩し、声を上げるまもなく私達は漆黒の穴の中に吸い込まれてしまうのだった……。

「横島……?」

呆然とした様子でくえすが眩いた。お前達は来るなど言わんばかりに弾き飛ばされ、尻餅をついている間に漆黒の穴は最初から存在しないように消え去っていたからだ。

「小竜姫様!」

「判つてます、すぐに天界と魔界から応援を呼びます！何がどうなっているのか、それを

知らなければいけません」

穴の中に吸い込まれ消えたのはヒヤクメ、横島、美神、螢、そしてマスコツト軍団と清姫とシズクの6人。確かに手を繋いでいたのに、必要ないといわんばかりに弾かれたくえすや琉璃、そして西条やシロとタマモ……それが何を意味しているのか、誰もが判っていた。突然の穴の出現、それがガープによる攻撃であると言うことは明らかなのだった……。

「ギリ……ッ」

近くに居たのに何も出来なかった、それ所か眼中に無いと言わんばかりに弾かれたくえすは唇を噛み締め、拳から血が滴る程に強く拳を握り締めるのだった。

く??? 視点く

長い黒髪を翻しながら女が涙で顔をぐしやぐしやにした男をゆつくりと追い回す、男は必死に逃げていたがついに袋小路に追詰められた。

「ひっ、何故こんな事をする？」

その顔を恐怖に歪めながらそれでもその手に札を持ち、女と対峙しようとする男。だがその指が剣指を取る事も、言葉を発することも無かった。

「さあ？何故でしょう？でも……殺さないといけませんから、死んでくださいな」
「え……あ」

白い光りが走り、男の首は胴体と泣き別れになり、首から噴水のように鮮血が噴出し、女の身体を真紅に染める。

「あはは……私？私……そう、鬼……鬼を殺さない……あは……あはは……」

幽鬼のように女は手にした刀を地面に引きずりながら闇の中へと消えていく……。

「ひつ！またじゃ、また首を切られた陰陽師の死体じゃ」

「どうなっているのだ、これは鬼の仕業なのか」

日が照らす中、昨晩首を刎ねられて殺された陰陽師を見て、恐れ戦く陰陽師から背を向けて歩き出す1人の陰陽師の姿があった。

「おい、何をしている。1人で何をするつもりだ？」

そんな男を目ざとく見つけ1人の陰陽師が慌ててその男の肩を掴んだ。

「西郷か、悪いが今回の件は1人で動く」

「……自分がなんと言われて判つての事か？」

「は、んなもんで俺は止まらないぜ」

「貴族連中は適当な奴を犯人に仕立て上げのことを考えているぞ？」

「ご苦労なこつた、だけどこれは鬼の仕業じゃねえ。死体を見れば判るだろう？」

「……確かに違和感はある。だが……妖の可能性があるんじゃないか？」

「そんな生易しいもんなら俺も一人で動くんなんて言わないぜ、桁違いの化けもんだ。足手纏いを連れて戦える相手じゃねえ、じゃあな、迷惑を掛けるが当主様によ、適当に伝えておいてくれよ。西郷」

疑惑の視線を向けられた陰陽師は手を振りながら朝日と共に起き出した町民の中へと消えていく。

「あの鬼子め、協調性の欠片も無い」

「所詮は孤児よ、我らとは違う」

「いや、あの男が使役しているのではないか？あの男は竜と暮らしている」

「なるほど、自分が犯人と」黙れ、陰口を叩いている暇があつたら動け」

男の悪口を言う陰陽師達を睨みながら言うと、西郷に睨まれた男達は逃げるようにその場を後にする。

「……つたく、「高島」め、少しは協調性を……無理か、はあ……」

陰陽師高島。平民の生まれでありながら、陰陽師として頭角を現したがそれゆえに疎まれた天才陰陽師。そしてそんな高島の数少ない人間の友人である西郷は頭をかきむしりながらその場を後にするのだった……。

平安大魔境
その2へ続く

その2

平安大魔境 その2

（美神視点）

黒い穴に吸い込まれた美神達はどこまでも続くような漆黒の穴を上下左右に複雑に回転しながら落ちていた。目を閉じているのか、開いているのか、吸い込まれる寸前まで手を掴んでいた蛍とシズクの手の感覚すらもあやふやだ。それでも手放してはいけなと身体が闇の中に溶けるような感覚を味わいながらも必死にその手を掴む、自分が手を掴む事で蛍もまた横島の手を放さないと信じて、そして永遠とも思える暗闇を抜ける瞬間に何か揺れる様な感覚を感じると同時に5人の悲鳴が重なった。

「「「「きゃっ!?!」」」」

お尻から落ちたので全員お尻か腰を押さえて呻いている。と、とりあえず全員無事……全員？

「横島君ッ!?!」

「横島ッ!?!」

横島君の声や、うりぼー達の声が聞こえないので、慌てて横島君の名を呼ぶが横島君

からの返事は無く、横島君の姿もない。

「ちよつとヒヤクメ！貴女横島君と手を繋いでたわよねッ!?なんで横島君がいないの!?」

「そ、そんなの判らないのね、わ、私はちゃんと手を繋いでいたのね!」

ヒヤクメが半分逆切れで叫ぶが、その様子では掴んでいた感覚はあつたのだろう。だからヒヤクメ自身も混乱している……1度深呼吸をしてごめんと謝って周囲を確認する。

「蛍ちゃん……」

「はい、判つてます。これ……「濃い」ですな」

流石蛍ちゃんだ、少し意識を集中しただけで私が何を言いたいかを理解してくれたようだ。森の中だが、その中に満ちている灵力の1つ1つの濃度が桁違いだ、それこそうりぼーがいた森の様に、高密度の神通力で満たされた神域の中にあるようだ。

「シズク、清姫。どうなってるか……シズク?清姫?」

声を掛けても返事を返さない2人を怪訝そうに見つめていると2人が同時に弾かれたように走り出す。

「ちよつ!?!急に……まさか横島君を見つけたの!?!」

横島君に対して非常に過保護なシズクと横島君に病的な愛情を向けている清姫だ。

もしかしたらと言う一縷の望みを抱いて私達も後を追って走り出し、森を抜けると同時に目の前に広がった光景に絶句した。そこにはとても現代とは思えない、古風な街並みが広がっていたからだ。

「え？嘘……」

「これって……まさか、またなの!？」

1度中世に時空間移動したことはあった。だがまさか2回目が起きるなんて思っただけでなかった……しかもこれは、平安時代。日本の歴史の中で霊力が満ち、魔界への通路や神隠しが最も多発していたと言う魔境の時代である平安時代だ。下手をすれば魔界なんかよりもよっぽど危険な場所と言える。

「……高島の屋敷がある。間違いない、ここに「私」がいる」

「ええ、そして私もいますわ」

1000年前のシズクと清姫がいると断言した。平安時代の高島の屋敷と現代の高島の屋敷……平安時代で何かが起きて、現代にも何か影響を齎したのかもしれない。それがあの漆黒の穴だったと思うと、辻褄は合う。

「シズク、高島と接触とか出来る？」

「……出来ないことはないが……今は少し様子を見よう。横島の事も心配だ、気配が判らないからな。この山のどこかで気絶しているかもしれない」

「そ、それはありえるのねく平安京に入る前に情報集めをするべき……おえ、急に走ったから気持ち悪いのね……」

この駄女神と心の中で怒鳴り、今にも山を下って行きそうな螢ちゃんの肩を掴む。

「この格好で出歩く訳にはいかないわ、それに明らかに物々しい雰囲気だわ」

都の中を明らかに武装した兵士と陰陽師が歩いている、そんな中を現代の服装で行けば捕えられて、弁解の余地も無く処刑されかねない。

「……はい」

「ええ、横島君は心配だけど……今は私達の心配をしましょう。それに横島君なら心眼が着いているから、きつと助言してくれる筈」

心眼が横島君を守るべく動く筈だ。だから横島君と合流する為にも、今は情報を集めましょうと声を掛ける。

「シズク、着物とかお願いできるわよね？」

「……ああ。全員分何とかしてくる。それまでは森の中にいてくれ」

言うが早く、地面に溶けていくシズクを見送り、私達は巡回している陰陽師に見つからないように森の中に身を潜める事にするのだった……。

く横島視点く

美神達が横島の事を心配している頃。横島はと言うと……美神達の予想に反して、京の近くで鬼の群れと必死に戦っていた。

「でいつーせやあッ!!だああーッ!!数が多い!地味に強い!何だこれッ!なんだこれッ!!!」

栄光の手を両手に発生させ、飛び掛ってくる紫色の鬼を殴り飛ばし、蹴り飛ばし必死に自分の背後にある物を守っていた。

「みーむううッ!!」

「ぶぎーッ!!!」

チビの電撃とうりぼーのビームが際限なく襲ってくる鬼を消し飛ばし、ほんの少しだけ鬼の勢いが止んだが、あちこちの物陰から鬼が既に顔を見せている。

「大丈夫ですか?」

泡を吹いて倒れている牛が引いていた牛車から顔を見せた黒髪の美少女。その姿を見ると鬼の勢いが増した、明らかに鬼の狙いはこの少女だと馬鹿な俺でも判った。

「大丈夫だから隠れててッ!チビノブ、その子を頼んだ!それとおっさん!お前良い加減に動けやあッ!!」

隠れているように叫び、牛車の上でチビノブ銃を構えているチビノブに女の子を守つ

てくれるように頼む。

「フツブウツ！」

屋根の上で任せておけと言わんばかりに勇ましく鳴いたチビノブ。鬼の動きは激しいが、牛車を狙ってきているのでその前に俺とチビとうりぼーがいれば突破される事はない、だが念の為にと護衛だったと思われる今では牛車の影で頭を抱えて震えているおっさんに叫ぶが、俺が怒鳴る以上の声で怒鳴り返された。

「う、うう、五月蠅い！ 検非違使に偉そうに言われるいわれはない！ わ、私は陰陽寮の陰陽師だぞ！」

「なら余計に戦えやあツ!!」

陰陽師だというなら戦えと叫ぶが、怯えて役に立たないことに余計に苛立ちを覚えながら、懐の眼魂に手を伸ばそうとした。

「止める横島。周囲の霊力の流れがおかしいし、何よりもここは現代じゃない、動けなくなるリスクは避ける」

「だけど、心眼。このままツ！ じゃツ！ 本当に不味いツ!!」

「ギギヤアツ!!」

「ギイツ!!」

茂みの中から飛び掛ってきた鬼の顔面を殴りつけ、回し蹴りで鬼を蹴り倒しそのまま

頭を踏み砕いた。だが砕いた感觸などは無く、靈力になつて霧散していった。

【何者かに使役されている、見かけは鬼だが中身は人型だ。恐れずに、冷静に対処しろ。今のお前なら変身しなとも対処できる】

心眼の言葉に本当かよと叫びそうになりながらも、必死に鬼と戦う。美神さんや螢も近くにいるのか、いないのか、それすらも判らないが、心眼が何も言わないという事は近くには居ないという事なのだろう。もし近くに居れば、もう少しで応援が来るとか心眼なら言ってくれる筈だからだ。

「チビ、うりぼー！少し頼むッ！」

「みむッ！」

「ぶぎッ！」

しかしこのままでは焼け石に水だ。使役されていると言うことは陰陽術、陰陽術と言うことは俺でも何とか出来る可能性は充分にある。

「心眼、サポートを頼むッ！」

【判った、無茶をするなよ】

地面に手をおいて意識を集中させる。後ろで喚いているおっさんの声や、チビ達の声も耳に入らない。この周辺に満ちている靈力とその靈力の乗せられている声だけに意識を向ける、出来る、出来るはずだ。

【……せ……せ……】

(遠いな……もつと意識を集中させるんだ……)

相手の霊力を道しるべにして、術を使役している相手の所にまで辿り着けばいい。これだけ同じ鬼がいるんだ、共通している霊力のパターンが必ずある。心眼の助言を聞いて、更に意識を集中させて、かなり遠くから伸びている霊力の糸を手繰り寄せる。

【殺……せ……殺せ……あの……女を……殺せ】

殺意に満ちた小さな声……だが確かにこちらに向けられている殺意の霊力を捉えた。

「掴まえたあツ！ 急急如律令ツ！ 破邪一閃ツ！」

親指を噛み切り空中に文字を刻むと同時に地面に右手を叩きつける。それと同時に雷が落ちたような音が響き、無尽蔵に押し寄せていた鬼はその姿を消した。

「ふいー、疲れたあ」

その場に座り込んで大きく息を吐いた。鬼と戦っていたのもそうだが、なによりもあれだけの殺意が込められた霊力を手繰るのは精神的にも疲れた。

「みぎやああツ!!」

「ふぎいいいいいいーツ!?!」

チビの威嚇の声とおっさんの悲鳴、全然気付いてなかったけど、俺今襲われる所だったのか……。

【大方お前を犯人に仕立て上げようとでもしたのだろう】

「どこにでもいるんだな、狡賢い奴って」

美味しい所だけ搔つ攫おうとしたおっさんをとりあえず縛り上げる。また襲われたらかなわないしな……おっさんを縛り上げながら思うけど、この服装……それにあの牛車。どこからどう見ても平安時代って感じだよな。

「またタイムスリップした？」

【その可能性はゼロではないな、美神達もどこかにいればいいんだが……】

時間を移動した時にはぐれた美神さん達の事を考えていると、馬の嘶きが響いた。

「心眼、これ不味くない？」

【不味いだろうな】

「みむう？」

「びぎい？」

縛り上げられたおっさんと死んでいる牛とチビ達を連れている俺、これ明らかに俺が犯人にされる奴だと気付いた時にはもう囲まれていた。

「怪しい服をしているな、こいつが鬼を召喚していた術師だな」

「捕えろ！抵抗するなら切り殺しても構わんッ！」

「鬼道様！己よくも!!」

ああああ……これ絶対誤解とか解けない奴!!うりぼーを巨大化させて逃げようかと思いはじめたその時、男の人の鋭い声が響いた。

「待て!確かにその童は怪しいが、行き成り下手人と決め付けるなツ!」

「……西条さん?」

服装は違うが、顔付きが西条さんに凄く似ていて、思わずそう呟いた。そして馬の上の男性も俺を見て驚いた表情をしていた。

「高島……いや、良く似ているが違う……?」

高島つて……それつて俺の前世つて言われてる陰陽師の名前じゃ、俺と馬の上の男性が困惑していると牛車の扉が開いた。

「西郷殿。お疲れ様です、それよりも、その少年は私を助け、式神と共に私を守り続けてくれました。私の恩人に刃を向けるとは何事でしょうか?」

十二単を来た黒髪の少女の凜とした声が響いた。それを聞くなり俺を囲んでいた陰陽師は全員が膝を付いた。

「輝夜(かぐや)様。ご無事で何よりです、それよりも……」私の言葉を疑うのですか?」いえ、輝夜様の恩人ならば我らはすることは何もありません」

「そう、鬼道は鬼が出るなり隠れ全くに役に立たず、それに加え、その少年を殺して犯人に仕立て上げようとなりました。私はそんな恥知らずの陰陽寮に守られるつもりはご

「ございません」

「キツと西郷と言う陰陽師達を睨んだ輝夜と言う少女は俺に向けて笑いかけながら駆け寄ってくる。」

「助けていただきありがとうございます。おじいさん達の屋敷でお礼を言いたいので、一緒に来てくれますか？」

「あ、はい。判りました」

「それは良かったです。丁度新しい牛車も来ましたし、参りましょう」

あれよ、あれと言ううちに俺は牛車に押し込まれ、輝夜と言う少女に連れられて、その場を後にしているのだった……。

（あれ？輝夜……）

さきほど西郷と言う人に呼ばれていた目の前の少女の名前を思い返し、真向かいに座っている少女に視線を向ける。

「どうかなさいましたか？」

「え、いえ、なんでも……」

もしかして竹取物語の輝夜姫とか言わないよな……いや、まさか……でも、明らかに気品とか凄い……マジで輝夜姫なのかな。俺の想像を超える事が続き、俺は靈力の消耗もあつた事もあり、完全に思考が停止してしまうのだった……。

くガープ視点く

「アスモデウス、面白いことになったぞ」

「なにがだ？」

「横島達私が作り出した箱庭に迷い込んだ」

実験的に作り出した箱庭。ありえたかもしれない、IFを測定する場所に横島達がい込んだ。本来ならば、過去を変えて現代にどんな影響を与えるかの実験のつもりだったが、横島達が迷い込んだと言うのは余りにも好都合だ。

「英霊を何体か配置していたな」

「ああ、あの時代よりも未来の者をな。それに道真にも術を掛けている」

「いいじゃないか、ここで決着をつけてしまっても良いんじゃないか？」

「それもありと言えばありだが……もう少し様子を見たい気もする……が」

平安時代は霊力が満ちている、天界や魔界と比べても大差ない。横島の成長の上限を見極めるには絶好の機会か……。

「良いだろう、横島の上限を見たらここで回収してしまおう」

「ああ、天界も魔界も浮き足立っている。ここで一気に片を付けるのも悪くあるまい」

人間界と天界や魔界での成長具合の把握と言うのをメインにすれば問題なからう。アスモデウスは勝負に出たいと感じているようだから口では同意したが、今はまだその時ではない。

(楽しみだよ)

ありえないIF、存在してはいけない者、ありえてはいけない結末が用意された箱庭。だがそれは決して現代に影響を与えないものではない、例え箱庭であり、現在と道が繋がっていないとしても、この時代で何か起きたという事実さえあれば歴史改変はなされるのだ。

(どうなるか楽しみだ)

平安時代で成長の限界を見せてアスモデウスに捕えられるのか、それともそれを潜り抜けるのか、そして横島達がおこした何かが現在を変えるのか……今は何が起きるのは判らない、だが1つだけ言えるのは間違いない、私を楽しませてくれるという事だけは決して変わる事のない1つの答えだという事だ。

平安大魔境 その3へ続く

その3

平安大魔境 その3

〔西郷視点〕

輝夜様と奇怪な服装をした青年とその青年の使い魔を乗せた牛車が完全に姿を消してから私は地面に手を当てていた。

(…………この感じ、良く似ている。しかし…………どういうことだ)

地面に残されている霊力の痕跡…………それは高島の使う陰陽術の痕跡に非常に良く似ていた。

(解せんな)

高島の陰陽術は高島だけの物だ。その希少性と汎用性は何百といる陰陽師の中でも群を抜いている。その証拠に高島を貴族階級に上げたい帝の一考で躑躅院との婚姻の話が出ているが、あの青年はどう見ても躑躅院の関係者ではない。それ所か京の人間であるかどうかも怪しい。

「西郷殿、あの青年の引渡し要求をしますか？」

「それで輝夜様に睨まれ、帝まで引つ張り出すか？あのお方はそこまでやるぞ」

帝のお気に入り少女、輝夜様。彼女に手を出す事は自らの死に繋がる、彼女と婚姻する為に要求された秘宝は存在するかどうかとも判らぬ代物。それを持つてこれたら本気だと認めて妻になると言ったが、黄泉の国に踏み込まねば手に入らぬ代物ただの貴族が手に出来るわけが無い。

「鬼道の件を解決せぬ前に会いに行けば飛ぶのは我らの首ぞ」

鬼道は名門貴族だが、それに胡坐をかいて実力を磨かなかつた。貴族同士の繋がりがあるからまだ上役だが、今回の件でその地位も危うくなるだろう。

「判つたらお前達は鬼道を連行してくれ、私は調べる事がある」

鬼道連れて行くように部下に命じて周辺を調べる。あの青年の陰陽術だけでは無い、私達を足止めしていた無尽蔵に沸く鬼の事も気がかりだ。

「……………1つ……………2つ……………足りんな」

先ほど見つけたのは2つ。これで合わせて4つ……………4つで術を使う事はありえない、陰陽道は五行。色違い、触媒違いの人型は4つ……………1つ足りない。

「……………これか、お前の言っていた事は」

高島は元々誰かと組むという事はありえない、独断専行、命令違反の常習犯。そしてそれでいて罰せられなかつたのは独自の陰陽術と龍の姫2人に様々な精霊や神に愛されているからだ。高島を害せば、その倍以上の神罰が下る。それゆえに高島を御せる者

はいない、私だって辛うじて友人と言えるが高島の瞳に自分が映っている所なぞこの10年ただの一度も無い。

「お前は何を見ているのやら……」

回収した4つの人型を封印し懐に隠す。今頃都にいない可能性もあるが、何かの手掛かりになるかもしれない。この人型は高島に預ける事としよう……。

「……嫌な感じだ」

空気が乱れている、そして歪んでいるのが良く判る。

「まだ増える……か」

夜に現れると言う女人の武者、そして異常なまでに増える餓鬼に妖怪……こんな事は今まで無かった。都を、京を揺るがす大きな事件が始まろうとしている……高島が今姿を消しているのは足手纏いが増える事を危惧しているだけではないのは明らかだ。

「内通者がいると言うことか……」

味方である陰陽寮でさえも信用するなと言う事を高島は私に教えてくれたのだろう。

「……気をつけなければ……」

高島をこれ以上孤立させない為にも、そして今回の件に隠れている悪意を炙り出す為にも回りを全て敵と思うべき……。

「うん？なんだこれは」

足に当たった丸い奇妙な物体。見た事も無い上に触ってみると今まで触った事も無い奇妙な質感だ。

「これも高島に預けておくか」

もしかするとあの青年の持ち物つて言う可能性もあるが、どの道あの青年に会うのは難しいのだ、こうして拾った以上は預かるという名目で高島に渡してしまおうと思い、この奇妙な球体も懐に隠し私はその場を後にするのだった……。

くシズク視点く

町民が殆どいない京を歩く、着物姿の妙齡の女性。触れば切れるような鋭利な気配と、全てを見透かすような、温度と言うものを感じさせない瞳をした女性は前を向いたまま、軽く足踏みした。

「……何者だ」

影から伸びた水の触手が曲がり角に向かったが、それは曲がり角の直前で同じく伸びた水の触手によって打ち落された。

「……ミズチか、私に関われば殺すと言ったのに貴様ら……は？」

暗がりから姿を見せた少女の姿をしたミズチを見て私は目を見開いた。見間違える

訳が無い、間違えるわけが無い。

「…………私？」

奇怪な服装に身を包んだ幼い少女の姿をした私がそこにいた。予想外の人物の存在に私は多分間抜け面をしていたと思う。

「…………そうだ、私はお前だ。正し…………1000年後の私だがな」

「本当1000経つてもこの好戦的などころは変わらないんですね、ああ、千年後の方がもつと陰湿になってますわね」

そして続くように姿を見せたのは漆黒の着物姿の清姫だった。こちらも少し幼い姿をしているが、見間違える訳がなかった。

「…………黙ってる、陰湿ストーカー蛇」

「死ね」

その後ろから姿を見せたのも紛れも無く清姫。私と清姫が揃って行動をしている…………そんなありえない光景に私は驚いたが、印を結び結界を作り出す。

「…………さすが私だ、見られても困るからな」

「…………認めよう、お前は私だ。だが、その姿は一体どうした事だ」

神格も霊格も殆ど失っている。1000年如きで何があったというのか…………いや、そもそも何故1000年も先の時代から私の元に現れたのが理解出来ない。

「……高島に繋ぎが欲しい。私達を紹介してくれ、今の私達にはあいつの力がある」

「……何人連れてきた」

「……人間が2人、神が1人」

人間と神が一緒に行動している……しかも私までも……少し考えれば応えはおのずと出る。

「……その人間は高島の転生者か？」

高島の転生者と一緒に行動していると言うのなら私と清姫が共にいる理由も判る。そう考えて尋ねたのだが、2人は首を左右に振った。

「……高島の転生者……」「横島」と言うのだが、あいつが行方不明だ。それを見つけるのを手伝って欲しい」

契約しているのだから魂が繋がっている。どこにいても判る筈なのだが、それが判らないと言うことはただ事ではないということとは良く判る。だがこちらも全面的に協力する訳にはいかない理由がある。

「……高島に話は通してやる。だが、そちらも協力してもらおう」

「……京に人がいないのと関係しているか？」

「……ああ、英霊が暴れまわっている。その件に協力するならこつちも協力しよう、よく話し合って連絡して来い」

互いに認識したのでどこにいても場所は把握できる。協力する気があるなら連絡して来いと2人に告げ、私はその場を後にした。だがこれはあくまで形上のものだ、高島の転生者を見つけるつもりなら危険性があっても向こうは私に協力するしかないのだから……あくまで向こうから協力すると口にしたと言う形式にしたいのだ。

「おう、シズク。どうだった？何か判ったか？」

「……1000年後から私と清姫が来ている」

私の言葉に高島は眉を細め、なんと返して返した？と尋ねて来る。

「……向こうの頼みを聞く代わりに、こちらに協力しろと伝えた。返答はまだだ」

「そっか、ま、1000年経っててもシズクは頼もしいからありがたい限りだ。戦力は多いほうがいい、しかもそれが打算があつての協力関係ならなおいい」

高島はそう笑い、人型を空にばら撒いた。それが飛んで行く光景を見ながら良いのかと呟いた。

「そうだな、正直1000年後の術師なんてさほど信用できるものじゃないが、それでもシズクがついているならそれなりの力はあるだろ？権力しかない愚図を使うよりかは良いさ、それより飯にしよう、飯にな」

背を向けて歩いていく高島、この決断力と冷酷とも言える判断力。そして桁はずれた霊力を見て私は高島の傍にすることを選んだ。

(……お前は何を見ているのか、それも知りたい)

1000年後の私はどちらかと言うと恋慕の色が強かった。高島の転生者と言うことは高島に似ているのか、それとも全然違うのか……。

「どうかしたか？」

「……いや、面白いと思つてな」

犬猿の仲と言える清姫と嫌そうにしながらも一緒に行動していた。それは横島とやらのためだと思つと、私と清姫を一時的にも協力させる事が出来るだけの魅力があると
言うことなのだろう。

(高島とどう違うのか、見てみるのも面白いそうだ)

私と清姫をこうも変える、その相手がどんな人物なのかを想像しながら、あちこちで
怪異がおかえりーと鳴き声をあげる庭を通り屋敷の中に足を踏み入れるのだった……。

く美神視点く

山の中で一晩を過ごしたからか、身体が痛いと思ひながらゆつくりと柔軟を行い靈力を
を巡回させる。

「蛍ちゃん、一気に靈力を取り込み過ぎないように、ゆっくりね」

「……はい」

現代と今の時代の靈力の質は根底から違う。それこそ妙神山での瞑想をしているときと同じ位の気持ちで靈力を巡回させないと靈力酔いを起こすとアドバイスをして立ち上がって身体を更に解す。

「よし、とりあえず。私はこれで大丈夫ね」

「そうねえ、美神さんの靈力は安定したのね」

ヒヤクメのお墨付きも貰って軽く靈力を身体に通してみる。妙神山での瞑想と例えたけど、それ以上かもしれないわね。

「ふう……」

「蛍さんももう大丈夫なのね、現代に戻ったらしんどいかもしれないけど」

「ま、それは仕方ないわね」

現代の靈力に馴染んでいてはこの時代との靈力の差で結局身体がしんどくなる上にこの時代の悪霊に負ける可能性がある。生き残らない事には現代に戻るなんて夢のまた夢なので、靈力の循環に踏み切ったのは当然の事だ。

「横島は靈力の循環してますかね？」

「心眼がいるから大丈夫でしょ。むしろ危険なのは私達かもしれないわよ」

この時代にもシズクと清姫がいるからこの時代のシズクと清姫にコンタクトを圖つて貰っているが、それが逆に危険を呼ぶ可能性だつてある。そう言う面では横島君よりも私達のほうが危険な状態と言えるだろう。

(うりぼーがいてよかつたわね)

乙事主とのしての神性を取り戻したうりぼーがいればこの時代ならば横島君を害せる者はいない。危険だと判断すればうりぼーが横島君を連れて逃げてくれるだろうと思ひ、シズクが発前に取つてくれていた川魚を焼き火で焼き始める。

「それで実際の所、ここが過去つて言う認識でいいの？」

「……ちよつと難しいのねえ、靈力が濃んでいるのは判つていると思うけど……それがこの時代特有の物なのか？」

「ガープが手を加えているか判らないつて事ね？」

「そうなのね、あ、その魚はもういいのね」

ヒヤクメが指差した魚が刺さっている木の棒を抜いて螢ちゃんに差し出す。

「あの穴自体もガープの攻撃なのかしら？」

「イレギュラーだと思ふのねえ、多分私達がここにいるのもガープにとつては想定外のはずなのね」

もし攻撃ならガープの追つ手が既に掛かっている筈。ガープにとつても計算外とい

う可能性はかなり高いか……。

「ガープは何がしたかったんでしようか？」

「多分だけど、西洋の時代の巻き戻しね」

あの時ですらも大きな歴史改変が行われた、しかし今回は日本。可能性として考えられるのは私達の前世に干渉して現代の私達を消すか弱らせる、もしくは霊能者で無くするか……考えられるのはそこら辺だと思う。

「なんでこんな傍面倒な搦め手を打ってくるんですかね」

「そうね、私もそう思うわね」

戦力で押し潰しに来ても困るが、ここまで入り組んだ搦め手を打ってくるのも本当に鬱陶しいわねと話をしてしているとシズク達に戻って来た。

「協力は得れなかったのね？」

「……いや、協力は得れそうだが……英霊が暴れているらしい」

「最悪ね、それ……」

英霊が暴れていると聞いてますます中世の巻き戻しだと思った。あの時は横島君がジャンヌを味方に付けてくれたけど……そうではないとなると英霊から真つ向から戦う事になるかもしれない。

「……横島大丈夫かな」

「大丈夫ですわよ、きつと元気ですわ」

「……………うん」

英霊がいると聞いた但至少でも早く横島君と合流したい、けどどこにいるかも判らないと言うのが問題だ。京に居ない可能性だってある筈だ、もし京に居ればシズクと清姫が判らない筈が無いし……………京に居ない可能性が濃厚って所ね。

「それで私から行くの？」

「……………いや、英霊と戦う事になると言う事、そのリスクを承知した上で協力するなら連絡しろと言われている」

「それなら連絡してくれて良いわよ。英霊だろうがなんだろうが戦うってね」

どっちにしろ戦わなくては生き残れないのだ。それならば戦うしかない、横島君を見つけるためにも、そして現代に無事に帰るためにも……………。

「それに考えたく無いけど、横島君もどこかでもう戦っているかもしれないしね」

「その可能性はありますね……………」

生粋のトラブルメイカーの横島君だ、既にどこかで大きなトラブルに巻き込まれているかもしれない。いや、もしそうなら霊力の流れで見つける事が出来るから、まだ戦ってはいないと思うけど……………本当に無事ならいいわね……………。

美神達が横島の安否を気遣う中……………横島はと言うと……………。

「ふふふ、横島様は和歌が苦手なのね？」

「……いやあ、無理無理。俺馬鹿だし」

「ふふ、じゃあ貝合わせでもやりましょうか？それとも石投でもしましょうか？」

「知らない遊びだなあ……教えてくれる？」

「良いですよ、教えてあげましょう」

輝夜を助けたと言う事で竹取の翁の家に世話になり、そして輝夜が気に入っていると
言う事もあり、彼女の護衛権遊び係になり美神達とは比べれないほどの良い生活を送つ
ていたりする。

「みーむう♪」

「あら、揃ってるわ。凄いわね」

「みむふう♪」

「ぷぎゅ？ぷぎい？」

「いや、無理しなくていいからな？」

【のーふう♪】

「あ、チビノブも揃ってる」

「ふふ、楽しいわね」

「喜んでくれてるならいいかなあ……」

コミュニケーションスト十人外キラー+マスコットの愛らしさは月人輝夜の琴線を揺らし、少女特有の柔らかい笑みを引き出す事に成功していた。

「ああ、あの人が来てくれたのは良かったなあ」

「そうね、輝夜もあんなに楽しそうで本当に良かったわ」

貝合わせをしている横島達を見て翁夫妻は本当に良かったととても嬉しそうな笑みを浮かべているのだった……。

一方その頃。平安京の外れにスーツ姿の美丈夫が浮き出るように現れていた。

「……は……どこだ？ 横島君達が消えたと聞いてから……何が……」

それはアシタロスだった。現代に残った琉璃からの連絡で京都に向かおうとしていた筈の彼もまた何故か平安京に気付いたらいた。

「……何者だ」

混乱していたアシタロスだったが、その顔を険しくさせ拳を強く握る。月光に照らされた白いフードを来た鎧武者はアシタロスを光を宿さない瞳で見つめると狂ったように笑い出した。

「ふふふ……あはははははははッ！今夜は貴方を殺しましょう、そうしましょう。毘沙門天の加護は我にあり……あれえ？ 毘沙門天？ あはははははははッ！ 毘沙門天って何

上空から響いた声で目の前にいた狂った英霊2人は姿を消した、だがそのことにアシユタロスは安堵する事が出来なかつた。

「アスモデウス……」

「アシユタロス、何故お前がここににいる？ガープに送り込まれたのか？」

「いや、気が付いたらここにいたんだ」

「なるほど、事故か。しかし運が悪いな、あの2人に目を付けられると厄介だったぞ？」
厄介なのはお前に見つかったのもだと思いつつも、アシユタロスは笑みを浮かべた。

「ガープの実験に巻き込まれてしまったようだな、やれやれだ」

「あいつは案外考えなしの所があるからな、実験の余波とかは考えて無いさ。どうする？我と来るか？」

「いや、この時代の京には私がいる。私に現代の情報を渡して、お前達に早く協力出来るようにするよ」

「それは助かる。ではな、また見つかったら我の名を出せば2人は退くぞ」

辻斬りにあつたら知らんがなと笑い消えていくアスモデウスを見送り、アシユタロスは険しい顔で歩き出す。これは自分が前に見た過去の記憶、だがその内容は大きく変わっている。

「まずは私だ、私を何とかしなければ」

究極の魔体。そしてメフィストフェレス、魂の結晶、宇宙卵……そのすべてが平安時代である程度形になっていく。アスモデウスに回収される訳に勿論行かないが、研究をこれ以上進められても困ると判断したアシユタロスは過去のアシユタロスを止める為に闇夜を走り出すのだった……。

平安大魔境 その4へ続く

その4

平安大魔境 その4

く横島視点く

輝夜ちゃんのお爺ちゃんとお婆ちゃんのお屋敷はどこか懐かしく、祖父母の家と言う感じがした。凄く暖かい場所と言う感じで、酷く心が落ち着く、だが何時までも落ち着いてはいられない。

(何とかして美神さん達と合流したいんだけど……そうも言えないなあ)

「横島！これ似合うと思うわ、ほら、着てみて着てみて♪」

彼女のお陰でやつてもない罪で囚われる事は無くなつたが、彼女のお陰で自由を奪われている。とりあえず、気を損なわせる訳には行かないので彼女の差し出した服に袖を通す。

「これって……陰陽師の？」

西条さんに良く似ていた人物が来ていたのと同じ服装だった。それを見て、輝夜ちゃんには心底楽しそうな笑みを浮かべる。

「そうーとてもよく似合うわ」

物凄く嬉しそうんだけど……すげえかてえ、後動きにくい……脱ぎたいなあと思いつながら輝夜ちゃんが喜んでるので我慢する。

「みむう?」

「ぷぎゅー」

変な格好と言う感じで俺の周りをちょこちょこ歩くチビとうりぼー。チビノブはお婆さんのお手伝いで洗濯物などを干しているので、この場にはいないが俺の姿を見れば同じ反応をするような気がする。

「あのね、横島にお願いがあるの」

「俺にですか?」

「うん。私の護衛になって欲しいの、陰陽寮はあんまり信用出来ないから、横島は強いし、優しいから横島が護衛が良いわ」

これ絶対断るべきだと思っただけ……仮に断ったしたら屋敷から出ることも難しいぞうだ。

「俺の仲間と合流するまでで良いのなら……引き受けるけど」

「……うん、それで良いわ。じゃ、横島は私の護衛に決定ッ!」

うりぼーを抱え上げて嬉しそうに笑っている。だけどほんの僅か、ほんの少しだけ今

何かが零れた……。

(この子……人間じゃない?)

姿形は人間だ、それに神魔つて言う雰囲気でもない。だけど……今一瞬だけ妙な気配を感じた。

「横島、どうかした?」

「ううん、なんでもない」

「そ、それなら良いわ。蹴鞠また見せてくれる?」

サッカーボールの要領でリフティングをして見せたのを輝夜ちゃんが気に入った様子なので蹴鞠を持って庭に出る。

「ノブウツ!」

「ひゃつ!」

チビノブの声と可愛らしい少女の悲鳴が響いた。俺と輝夜ちゃんが頸を傾げながら声の聞こえたほうに行く到着物姿の銀髪と言うには色が薄い……でも白髪と言うには艶がある奇妙な髪色をした少女がチビノブに捕まっていた。

「ノブウ?」

知り合い?と言う感じで尋ねて来るチビノブを見て、輝夜ちゃんを見るが彼女も首を左右に振る。侵入者ってことなのかな……。

「あ、お前！なんでお父様にあんな無理な事を言ったんだ!!」

お父様……その言葉で俺も輝夜ちゃんも大体理解した。

(いや、アカンやろ、その親父)

輝夜ちゃんと同年代の子供がいるのに、そんな相手に求婚するとか変態だろ。シズクの言っていた平安時代みんなロリコンの話が事実だと判り、俺は心底驚愕した。

「うーん、誰の娘か判らないけど……ちよつと話をしましょう？・ね？」

「話なんて「ぶぎい！」ひっ?!……い、猪？」

うりぼーを見て驚いている少女を見て輝夜ちゃんはくすくすと楽しそうに笑い、笑われた少女の顔が紅く染まる。

「わ、私はお前と話なんか」

「まあまあ、とりあえず話しだけでもしてみた方が良いと思わない？」

「……陰陽師？」

「格好だけね、俺自身は陰陽師とかじゃなくて、旅人」

少し話をしたただけけど、この子はきつとお父さんが好きすぎるに違いはない、そうでなければお姫様が他人の屋敷に侵入するなんて信じられないしな。だけど、このままだと大喧嘩とか憎み合う関係とかになりかねないから、俺とそして可愛いマスコット軍団が間に入ろうと思う。

「ぷぎゃー」

「貴方の式神は可愛いですね」

「おお、うりぼーは可愛いからな。さ、立って。うりぼーと遊ばないか？」

「……良いの？」

うむ、やはり可愛い動物の魔力は最強だな。輝夜ちゃんと一緒に事で少し嫌そうな顔をしているが、うりぼーが遊んでくれないの？と言わんばかりに見上げるとうぐつと呻いた。

「一緒に遊んでやってくれるか？」

「……うん」

勝ったな……とりあえずチビ達と遊ばせてそこから話をする方向に持つて行こう。

(今帰らせるのは危ないしな……)

明らかにさつきまでと周辺の空気が変わった。2人は気づいていない様子だが、明らかに周囲の温度が下がっている。

「貝合せか石投でもしような、さ、屋敷に戻ろう」

「え？蹴鞠してくれないの？」

「後でやるよ、でも先に貝合わせか石投をしよう。今度は勝てそうな気がするんだ」

2人を少しでも早く屋敷の中へと思い、少し強引に屋敷の中に2人を連れて行く、だ

が屋敷の周りを覆う暗い気配は弱まる所かますます強くなつていく事に気付いた。

(心眼どうしよう)

(とりあえず、この娘を外に出すな、狙いはこの娘だ)

屋敷に侵入した子供を狙っていると聞いて、俺は何としてもこの子を輝夜ちゃんの屋敷に留める事を決めた。

(美神さん達が気付いてくれることを祈るしかない)

この気配に気付いて美神さん達がこの屋敷に来てくれることを祈り、心の中に強い不安を抱きながらそれでも俺は笑つて輝夜ちゃん達と遊ぶ事にするのだった。

「あ、ところで君の名前は？俺は横島、この子がチビで、こつちがうりぼー、んでこれがチビノブ」

「藤原妹紅（ふじわらのもこう）」

「もこう？じゃあもこちゃんね」

変わった名前だなあと思いつながらもこちゃんと呼ぶ事にし、具合合わせの準備をしている輝夜ちゃんの所までもこちゃんの手を引いて歩き出す。遊んでいる間に屋敷の周りの気配が霧散するか、それとも美神さんが合流してくれるか……最悪の場合戦う事になることを覚悟し、なんとしてもお爺さん達と輝夜ちゃん達は守ってみせると俺は強く決意を固めるのだった……。

〈蛍視点〉

1000年前のシズク……大人の姿のシズクと共にやって来た陰陽師高島を初めて見た感想は横島とは全然違うだった。そりゃ前世なのだから似ていないわけでは無い、だが私が違うと感じたのはそんな所ではない。顔付きも似ているし、目付きとかふとした仕草も非常に似ている、だがその纏う空気はまるで別物。強いて言うが悪巧み全開の冥華さんとお父さんを混ぜたような……何もかも見通しているぞと言わんばかりに向けられる視線もその全てが横島とは違う。

「さてと、お前が1000年後のシズク……か、何故そんなにも弱体化してるんだ？」
「……ま、色々と訳ありでな。だが大したことじゃないだろ？お前にとって大事なものは使えるか、使えないかの2つだけだろう？」

くつくつくつと喉を鳴らす高島に何故嫌悪感を抱いたのかを理解した。人を見ていくように見ていない、この人にとって重要なのは能力であり、そしてそこに義理も人情も無いのだと……。

「……勘違いするなよ？高島自身は甘すぎるほどの善人だ、だから仕事の時は……」

「おい馬鹿。止めろ」

服の下に何枚も札を貼っているのが見えた。すぐにシズクが捲りあげた服が元に戻

されるがその顔は不機嫌そのものだ。

「……お前、それまだ治らないんだな」

「うっせえ。生まれ持った性分はどうにもならねえんだよ」

えつとつまり、自分の性格が戦いに向かないから陰陽術で性格を変えているって事
……？

「そうみたいなのね、自分の魂に鎖を掛けてるのが見えるのねえ」

「……なるほど、お前は視れる神って事か、つまりこの場では使えない役立たずか」

酷いのねえっ！とヒヤクメさんが号泣する。だけどそれはあながち嘘ではないので
慰めようが無いのよね……。

「さてと、こつちの種はシズクが切っちゃったから言うが、俺はどうも随分と甘い性格で
な、こうして陰陽術で性格を変えないと率先して

戦うなんてことはあんまりしたくない、気を逆撫でるかも知れんが……許せ。陰陽寮
高島忠助だ」

そうやってニツと笑った高島の顔は横島と本当に良く似ていて、前世と言うのを信じ
てしまうそんな不思議な説得力があった。

「美神令子。この時代で言う民間の巫覡って所ね、まあ、1000年後では京抱えの方が
少ないんだけどね」

「はっ、そいつは良い。偉いだけの無能は俺は嫌いだね、実力の有無が大事なのさ、それでお前さんの名前は？」

シズクと清姫は知っているから私の名前を尋ねて来る高島に小さく頭を下げる、

「芦菫です。よろしくお願ひします」

「……弟子か？」

「そ、探してるのはもう1人の弟子なんだけど……妖怪を3匹連れてるんだけど……噂になつてない？」

美神さんの言葉に高島は頭を抱え、深く、深く溜め息を吐いた。

「噂だけは知ってるが、猪と空飛ぶネズミと変な小人を連れてる坊主か？」

「それですわ！横島様に間違いありません！」

他に猪とかを連れてる奴がいるなら私が教えて欲しいくらいだ。横島が目撃情報が出たことに喜んだが、高島は首を左右に振った。

「悪い事は言わん。その坊主は諦めな、少なくとも……3月は無理だな」

「……どういふこと？」

3ヶ月も無理と聞いて美神さんが眉を吊り上げた。それを見て高島は京に視線を向ける、その視線の先は大きな屋敷に向けられていた。

「帝のお気に入り輝夜姫様がその坊主を自分の護衛として抱え込んで。下手に会い

に行けば……」

「帝と陰陽寮を敵に回すってことね？」

「そ、俺も帝の命令は断れねえ。暫くは諦めな、会う方法がない訳でもないからよ」

会う方法があると聞いて笑みを浮かべた。だがシズク達の顔色は悪いままだ。

「……今京に魔神と英霊が3人確認されている。そのどれかを討伐すれば……帝への謁見も叶うだろう」

魔神……それに英霊が3人と聞いて私も美神さんも顔が引き攣った。高島は頬を掻きながら俺が会いに来たのもそれが理由だと告げた。

「1人は民間人を殺す、1人は陰陽師を殺す、もう1人は姿が目撃されただけ、魔神はそいつらを統率してる。お前達を探してる横島っていう坊主に会いたけりゃ俺を手伝え、じゃなきゃ顔を見ることすら出来んぞ」

「……なんで横島だけそんな私達と別の意味で危険な状態になってるんだろう？ だけど、安全と言えば安全な場所にいると思えば私も美神さんも安心できる。」

「良いわ。手伝う」

「よし、契約成立。んじやま、俺が調べた情報を渡すし、少し休んだ方がいいだろ。俺の屋敷まで案内する、月が出た頃には京の搜索を始める。着いて来てくれ」

とりあえず今は平安時代での拠点と目的が定まっただけよしとするべきだと思ひ。

私達は高島に案内され、下山を始めるのだった。

くアシユタロス視点く

京の中に隠された異空間に足を踏み入れると同時に拳を突き出す。

「やれやれ、随分と物騒なお出迎えだ」

「……私?……そうか、未来から来たのか」

「話が早くて助かる」

最上級神魔の魔力だけを感じて襲ってきた過去の私にやれやれと肩を竦める。同じ私だが、横島君や蛍達と暮らしているから丸くなっていると実感はあるが、まさかこうも違うかねと苦笑する。

「何をしにきた、その様子では我が悲願はまだ達成していないようだか?」

「ああ、そうだな。私の願いはまだ叶っていない」

魂の牢獄を壊す、死ぬという望みはまだ叶っていない。そしてその為に戦争を起こすという結論に至ったのも無理の無い話だった、元豊穰神の私には悪と言われるのは耐えられる物ではないからだ。

「別の方法で魂の牢獄から出る手段を最高指導者に提案され、私はそれを飲んだ」

「……本当か？」

疑い半分と言う様子だが、最高指導者の名前が出たことで僅かに過去の私に話を聞こうと言う姿勢が見えた。

「書類もある、まずは目を通してくれ。1000年の間に私も大分考えが変わったと思うが……リスク無く、そして最も平和的に私の願いが叶う筈だ」

ついて来いと言って基地の奥へと向かう過去の私の後を着いて歩く、今のこの基地では宇宙卵、そして究極の魔体の開発が行われている筈だ。

(そのどちらとも開発を破棄させなければ……)

危険な発明だ。もしそのどちらかの情報がガープに渡れば神魔は愚か人間界すらも滅びかねない。元の時代で何とかしても、この時代の私がいる限りその2つはどうしても生まれる。この時代の私を説得しなければ、宇宙卵も、究極の魔体の誕生も防ぐ事は出来ないのだ。

「……未来の娘とその恋人……か」

「その2人が未来を変える。それを成し遂げれば私は魂の牢獄から出れる……」アスモデウス達を止める事が条件と言う事か……不満か？」

私は決して情が深いタイプではない、だが同じソロモン同士として仲間意識はある。アスモデウス達を裏切る結果になる事を認められないか？と尋ねると過去の私はそう

ではないと言った。

「正直私は人間如きがソロモンに勝てるとは思っていない。1000年の間に考えが変わるとしても今の私はそれを受け入れる事は出来ない」

「だろうな」

それは私としても納得の理由だ。人間では神魔には勝てない、それは全てにおいての常識だ。そしてアスモデウスと言えはソロモンでも屈指の武人だ。そんな相手を人間が下せるとは思えないのは当然の事だ。

「だが、1000年後の私とその結論を下したと言うことはそれだけの可能性があると言うことだ。そしてお前が希望を見出した者が今平安京にいると言うのなら……それを見届けよう。その上で私は私の決断を下す」

「ああ、それで良いよ。きつとお眼鏡に叶うだろう、だって」

「同じ私だからだろう？」

過去の私と声が重なった。考え方は今は異なっても元は同じ存在だから判る。1000年と言う時間が過ぎても、その感性は大きく変わることは無いのだから……。

「所で気になっていたんだが、メフィストは？」

「……男の陰陽師の所に行つて戻つてこない……初の娘だから心配で心配で……」

おろおろしている過去の私にやっぱり私だなと嫌な所で確信を得てしまうのだった

……。

(今頃は高島の所だろうか……)

アスモデウスが動いているから過去の私の動きが鈍いのは幸いだった。高島をまだパーンつしてない事に更に安堵する、あれが原因でメフィストに嫌われたんだよな……そこが修正されれば、現代でも何か大きな変化が生まれるかもしれない。

「やつぱり男は狼だから、そんな所に娘を向かわせたのが失敗だったんだろうか？」

「大丈夫、きつと無事に帰ってくるさ」

そっか、そうだよなつとぶつぶつ呟いている過去の私の姿にやつぱり私だなあと思わず苦笑するのだった。

く帝視点く

輝夜が自分の護衛として抱え込んだ陰陽師を見に来たのだが、実に良く高島に似ている。

「ふふ、良いでしょう？良く似合っていると思いませんか？」

「そうだな、良く栄えている。旅人と聞いているが、陰陽寮に入ってみるか？」

私の口引きならば入れるぞ？と声を掛けるが童は首を左右に振った。

「師匠も探したいですし、お言葉はありがたいですが」

「ふふ、そうかそうか。またそれも良からう」

本気で迎え入れようとしている訳ではない、それに実力も未知数の者を精鋭部隊である陰陽寮に入れるわけにも行かぬ。

「して藤原の姫は、ここで何を？」

「えつと、えつと」「ふふ、友達になったのよ。とても楽しかったわ」

輝く笑顔の輝夜を見て私も笑う、ここまで楽しそうに笑うのは久しぶりに見た。5人の貴公子の求婚を受けてからその美貌が曇っていたが、元の輝きが戻ったことに安堵した。

「それは大儀であった。どれ、屋敷に戻るのならば道中だ。連れて「待つてください、今は動かないほうが良い」……ほう？」

外に出ないほうが良いと言う童。護衛の陰陽師が顔を歪めるが、それを手で制す。

「何故そう言う？」

「……空気の流れが妙です、それに嫌な予感がします。もう暫く屋敷に留まった方が良いでしょう。」

ふむ、私としてもそれは大層魅力的ではあるが……帝としての責務もある。

「そうも行かんのだよ、童。私は帝である。京を治めるものとして責務がある。それに陰陽寮の者に予知もさせている、心配する事はない」

鬼道の事は残念だが、それでも腕の良い陰陽師は多数いる。だから心配する事はないと言おうと護衛の陰陽師が童に嘲笑を向ける。

「素人が私達の予知に口を挟むではないわ」

「これだから平民は」

むつとした顔をする童だったが、失礼しましたと頭を下げる。だがその目は私を制止しているように見える……。

「ふむ、輝夜よ。少しばかり私に付き合え」

「はい、判りました。横島、貴方も準備して」

「え、でも……」

「良いのよ、着いてきて。そう言うことでしょうか？」

本当に輝夜は頭が良い、私の考えている事をすぐに理解してくれる。

「言っておくが、これは童を試す物でもあるが、お前達を同時に試していると言うこと夢忘れるなよ」

「「………御意ッ！」」

鬼道の件で私は陰陽寮に対する信用を失っている。その失態を取り戻すだけの仕事をして見せろと私は言っているのだ、民間の巫覡にも劣るといふのならば重要な役目に務めさせる意味もない。

「いつそ高島を頭目に据えた方が良いかも知れんなあ」

「「帝！」」

「何だ？文句があるのなら仕事くらい果たして見せよ。では参ろうか」

陰陽寮の予知が当たるとは、それともこの童の予知が当たるとは……それによつて今後の事を考えねばならぬ。陰陽寮は京の盾であり剣、それが役目を果たせないのならば一度解散して、また新たに人員を揃える必要がある。

（躑躅院も納得したしな）

躑躅院と高島の婚姻で高島は貴族になる。そうならば上役に務められるあやつは平民の生まれではあるが、貴族の生まれよりもよつぽど腕が良い、それに頭も切れる。

（六道家も良いかも知れんな）

高島と懇意にしている六道の姫も嫁ぐには良い頃合だ。貴族の妻を持たせる事で高島の地位を確立させるというのも1つの手段だろうと考えながら牛車へと乗り込み護衛と共に藤原の屋敷へと向かう道中で突然牛が足を止めた。

「そ、そんな……ぎやっ!?!」

「う、嘘だろ!?!何が【さようなら、死んでください】ギギヤアアツ!?!」

護衛の陰陽師の悲鳴が響き渡る。その事に眉を顰めた、童の言った方が当たってしまった。

「帝さん、車の中から動かないでください。輝夜ちゃんともこちゃんをお願いします、チビ、うりぼ、チビノブ。3人を頼んだぞ」

童の使い魔が牛車の中に置いていかれる。開いている窓から外を伺い、私は絶句した。そこにいたのは鎧を身に纏った妙齡の女人……だがその身体から迸る力は人間の物ではなかった。

(神仏か!?)

全身から迸る神通力と魔力……人間が勝てる相手ではない。その全身から迸る雷電で雷神かと私は顔を歪めた。

【貴方……そう、そうですね。今晚は貴方を殺しましょう。そうすれば殺しは終わりです】

女人はそう笑うと刀についた血糊を振り払い、その切っ先を童に向ける。

「悪いけど、そう簡単に殺されてやらない」

【アーイツ！シツカリミナー！シツカリミナーツ!!】

童も周りを黄色い服が踊り始め、童は腰元に手を伸ばした。

「変身ツ！」

【開眼！ウイスプ！アーユーレデイ？】

【イヒヒー♪】

【奇怪な】

上空から黄色い服が女人の突進を食い止め、童の姿が奇妙な鎧姿へと変わった。

「行くぜ！ウイスプ！」

【イッヒヒヒ♪】

暗い夜道に小気味良い音が響き渡ると同時に童の上に黄色の服が覆いかぶさる様に着込まれる。

【OK！レッツツゴーツ！イ・タ・ズ・ラ！ゴ・ゴ・ゴーストツ!!!】

「な、なにあれ……」

「判らない……判らないけど……助けようとしてくれるのは判るわ」

腰元から飛び出しら剣を構え、女人へと立向かう童の姿と私達は混乱しながら見つめる事しか出来ないのだった……。

平安大魔境 その5へ続く

その5

平安大魔境 その5

〔横島視点〕

闇を切り裂く白い白刃……それは尾を引く白い光りにしか俺の目には見えなかった。

〔早い……早すぎるッ！〕

俺の反射神経では対応出来ない神速の刃。辛うじて致命傷を防ぐ事が出来ていたのは沖田ちゃんや牛若丸との訓練で刀を持つ相手の間合い、そして攻撃に関してある程度学ぶことが出来ていたからだ。そうでなければ、最初に切り捨てられた陰陽師同様俺も切り捨てられて地面に倒れていたに違いない。

〔ふふふ、貴方は中々強いですね。久しぶりに骨のある相手と見える事が出来てとても楽しいです〕

〔そいつはどうもッ!!〕

罅迫り合いになり両手と両足に力を込めるが徐々に後ろに押し込まれる。

〔くそっ！岩と力比べでもしてるみたいだッ！〕

背こそ高いが普通……いや、ちよつと尋常じゃなく胸がでかいけど……穏やかな笑みを浮かべた女性だ。だがその力は凄まじい、ガンガンブレードが軋む音なんて初めて聞いた。

【ですが、まだまだと言つた所でしようか？】

「ぐっ!？」

前蹴りを腹に叩き込まれサッカーボールのように蹴り飛ばされる。それでも何とか受身を取つて転がりながら態勢を立て直し、前を見て俺は驚いた。

「い、居ない!？」

俺を蹴り飛ばした女武者の姿が何処にも見えない。すぐに体勢を立て直したから視線から見失つたのはほんの数秒ほど……その一瞬で俺は目の前の相手を完全に見失つていた。

【気配が完全に無い……集中しろ】

心眼でさえ把握出来ないのかよ……直接的な戦闘能力だけじゃなくて姿を隠す能力も一級かよ……ガンガンブレードを構え必死に辺りをうかがうが、月夜に照らされた薄暗い都と虫の鳴き声しか聞こえてこない。

「ッ!!」

【あら、避けましたか】

空を切る音に身体を捻った直後何かが俺のいた場所を通り過ぎて行った。そして口元を押さえてところどころと笑う女武者の手には弓矢が握られていた……

「……マジかよ」

着弾した場所が蜘蛛の巣状に抉れている。しかも地面の凹んでいる面積が半端ではない……

【ふふ、狩事は結構好きなのですよ?】

女武者が左手に弓矢を多数持ったのを見て血の気が引いた。

【ふふふ……遊びましょう?】

「そんな物騒な遊びはお断りだツ!!」

空を裂いて飛来する矢を飛び退いてかわすが、即座に2の矢、3の矢が飛んでくる。

(ちいっ!早すぎる!)

眼魂を交換する隙も考えを纏める時間すらも与えられない、狩事が好きと言っていたが理知的にまるで将棋かチェスに理詰めで追詰めてくる。

【あまり逃げると……判っていますよね?】

距離を取りすぎれば鍬は輝夜ちゃん達がいる牛車に向けてくる。つまり俺は人質3人を背負ったまま、圧倒的格上に挑まざるを得ない状況に追い込まれてしまった。

【勿論変な動きをしても同じですよ】

決まりだな……この女武者の英霊も紛れも無くガープに操られた1人だろう。ゴーストチェンジも封じられ、人質もいる。そして相手は英霊……その絶望的な状況に俺は背中に冷たい汗が流れるのを感じるのだった……。

（狂化英霊視点）

異能者を殺せという命令を遂行している最中で出会った若い男……それは最重要といわれていた相手だった。たかが人間と侮っていたが、それは間違いだった。

「はっ……はっ……」

【お見事、貴方はとても強いですね】

私の放つ矢は決して甘くない、だがそれを喰らい何度も吹き飛ばされながらあの男は徐々に徐々に対応しだした。そして今では4連射の内3射を手にした剣で打ち落とし、残りの一矢は今素手で受け止めて見せた。

（天賦の才……恐ろしいですね）

最重要で遭遇したら捕獲しろと言われた意味を理解した。この短時間で私に喰らいついてくる……その成長速度に驚愕すると同時に、何処まで痛めつけても平気なのかと言う歪んだ興奮が芽生えるのを感じた。

【弓矢も飽きましたね。ではそろそろ貴方の首を刈り取らせてもらいましょうか】

屋根の上から飛び降り、氷を纏った長巻を手にする。

「飽きたなら帰ってくれたら良いじゃないですか」

【ふふふ、駄目ですよ。こんなに楽しいのに、引くなんて勿体無いじゃないですか】

雪の花を散らしながら長巻で切り込む、すると男は手にした奇妙な剣で受け止め受け流す。

（そうですか、そうですか……槍は慣れているのですね）

私の射の速度に慣れていたので、直接切り込んでくるのは男にとつては喜ばしいものなだろう。遠距離では逃げと防御に徹するしかないが、近接ならば男にも反撃する機会が訪れるからだ。

「せいっー」

【そう簡単には折れませんよ】

足で長巻の刃を押さええへし折りに来るが、これは私の■■■■の武器であり魂だ。そう簡単には……

（誰？）

一瞬誰かの悲しそうな顔が脳裏を過ぎったが、それがすぐに赤黒い何かで塗りつぶされた。

【っ！】

「とつと……」

へし折られないはずなのに不安に思い、男を振り払い長巻を虚空に戻し腰に携えた刀を抜き放った。

【槍は慣れているようですから、こちらでお相手しましょう】

決して誰かの姿を見たからではない、ただ相手が対処に慣れている武器で戦う事も無いと思った。ただそれだけだ……。

【はっ！】

「ちえいッ！」

私の刀と男の刀がぶつかり火花を散らす、即座に刀を引いて突きを繰り出す。それを横薙ぎの一撃に切り払われる。

（早い……まさかここまでは）

さつきまでは直撃していた剣が防がれ、そして迎撃されるようになっていた。恐ろしい成長速度だ、このまま切り結んでいては私の技術をいくつも盗まれてしまうかもしれない。

（ああ……でも楽しい……ッ！）

自分よりも幼い子供が自分の技術を盗み、そしてそれを昇華させていく姿を見るのが楽しい。

「おおあああッ!!」

【ふふふ、良いですよ、でも足の踏み込みが足りませんね】

音を立てて弾け飛ぶ男、だけどすぐに着地して踏み込んでくる。それは先ほどの踏み込みよりも更に鋭く、より洗練されている。その姿に言いようの無い興奮が込み上げてくる……。

【良いですよ。私の……私の?】

今何かを思い出しかけた。何か、そう何かとても大事な事だった筈なのに……それがどうしても思い出せない。

【うつくう……】

「当たった?」

突き出された拳が胸を捕え殴り飛ばされる。すぐに体勢を立て直したが、痛みではない、怒りでもない。抑えきれない興奮が私を埋め尽くした。

【ああ。そう、そうです。貴方は私の子供、母を、私を越えてください】

母……そうだ、私は母になりたいはずだった。いやきつと私は母なのだ、私を越えようと打倒しようとする男は……きつと愛しい我が子なのだ。

「え、なんかやべえ」

【変なスイッチを入れてしまったようだな】

「何のスイッチですか!?! 心眼先生ッ!」

心眼? 誰かと話をしていっていると言うことですね、そうですね、そうですね、そうですね……。

【母がいるのに誰に師事しているんですか、私はそんなの許しません】

「やばいよ!?! なんか赤黒いオーラ増してるッ!?!」

駄目駄目駄目……私の子、そうだ。あの子は私の子……私のものッ!!

【少しお仕置きです、もしたら大丈夫。貴方は私の子供ですから、大丈夫ですよ。手足をもぐだけ、ほら大丈夫でしょう?】

「!」

踏み込むと同時に虚空から取り出した斧を両手で握り締める。この一撃で動けなくする、そしてその後で連れて帰ればいい。ああ、それななんと喜ばしい事なのか……。その一瞬を夢想して斧を振り下ろそうとした瞬間、何かが私と子の間に割り込んできた。

【これは?】

赤黒く染まった私の手の中にある斧と瓜二つの斧。それを見た瞬間脳裏にノイズが走った……。何か大事な事を忘れていた気がした。

【頼光の大将……。あんたにこれ以上人は殺させねえ! その為に俺たちが来たッ!!】

雷電を待とう金髪の男の姿を見て私は何かを呟いたのだが、それを音として認識でき

ず……それが何かとても寂しかった、だけどその寂しさは一瞬で消え、激しい怒りが私を埋め尽くした。

【私の邪魔をするなら、殺す！】

【やってみやがれッ！】

この男を見ていると胸が騒ぐ、この男を殺さなければならぬ、それだけを考えると私は再び斧を手にするのだった……。

く横島視点く

どこかおかしくなった英霊に殺されると思った瞬間に割り込んできた金髪の男……目の前の女武者と同じ斧を手にしている男が俺をその背中に庇っていた。

「あんたは？」

【俺か、俺は坂田金時……頼光の大将を止めに来た】

英霊ではあることは判る。だけどその力は弱い、初めて会った時のノツブちゃんに良く似ている。

【頼光……源頼光か！怪異殺しの将だッ！】

心眼が俺達が対峙していた英霊の名前を看破した……頼光の名前は俺だって知って

る。だけど……。

「え？女の人だぞ？」

男の筈じゃん？なんで女なの……命の危機だったはずなのに、凄い間抜けな声が出た。

【牛若丸と信長と言う前例を忘れるな】

「……なんだろう、凄い説得力」

そうだよな、俺知ってるな……男って伝説なのに女になってる英霊知ってるわ……。

「味方ってことで良いんだよな？」

【おう、お前まだ戦えるか？】

正直体力と霊力はそろそろ限界だが……まだ戦える。まだ拳は握れる……だから大

丈夫だ。

「問題なし！」

【うしっ！俺ツチは左から行く、お前は右からだ。宝具を抜かせるな、宝具を使われたら駄目だ】

英霊の必殺技である、牛若丸とかは近づいてどーんだったり、ノツブちゃんは一斉射

撃だけど……。

「ちなみにどんなの？」

【分身で攻撃した後雷が地上を焼き払う】

「あかんやつや……」

殺意に満ちている今まで出会ったどんな英霊よりも殺意に満ちている……ッ！

【邪魔をするなああッ！】

【ぐっ！ぬ、ぬううううッ！】

嘘だろ金時の方が体格に優れているのに押し潰されかけている。助けに入ろうとすると金時に向けている憎悪に満ちた視線と違い、蕩けた甘い視線が向けられる。

【母が恋しいのですね、私も恋しいですよ】

やばい、何がやばいって説明出来ないけど……この人はやばすぎる。どうかガープに狂わされているだけで普段はもつと普通であつて欲しい。凄い美人な分だけ、今の状態が怖くて仕方ない。

【大将！良い加減に目覚ませッ！】

【五月蠅いッ！】

左手に斧、右手に刀……いつの間にか抜刀されていた刀に切り裂かれ金時がよろめきながら下がってくる。それを庇うように前に出るとまた表情が変わる……この人には俺が一体何に見えているんだ……。

「せいっ！」

【踏み込みが甘いですよ？それに刀の握りも】

「いつつつ!？」

万力みたいな力で手を締め上げられ、手からガンガンブレードが零れ落ちた。

【駄目ですよ？すぐに刀を放しては、返してあげましょう】

【避けるッ!】

心眼の言葉に言われるまでも無く頭を抱えてその場に転がる。その瞬間隕石でも落ちたかのような音を立ててガンガンブレードが地面に突き刺さっていた……あれ直撃してたら身体吹っ飛んでいたと思うんだけど……。

【大丈夫か?】

「いやもう無理、死ぬって……」

獲物もない、神魂も交換できない。心眼と相談してたらぶち切れる……やばいつて、今までこんなやばい相手と対峙した事ないって……。

【俺が何とか隙を作る、でかいの1発叩き込めるか?】

「……大丈夫なのか?」

俺の見立てでは霊力は限界ギリギリの筈……恐らく宝具は使えないに違いない。

【俺は育ての親が人間を殺してるのを我慢できねえ】

「判った、無いよりましだと思うけど……火精将来!かの者に力を急急如意令ッ!」

空中に刻んだ文字が紅い光となって男を包み込んだ。

【あんた陰陽師か、助かる。行くぜえ大将!!】

斧を振りかざし突撃する金時の姿を見て、腰のベルトに手を伸ばす。

【ダイカイガン！ウイスプオメガドライブツ!!】

腰を落として右足に霊力が込められていくのが判る。本当ならゴーストチェンジをして大技を叩き込めばいいと思うんだが、下手にゴーストチェンジすれば怒りに油を注ぐだけになりかねない。このままで押し切るしかないッ！

【おあああああッ!!】

【舐めるなッ!!】

紅い斧と金の斧が鍔迫り合いになるが、金時の方が押されていると思った。そして事実押されていた金時は足を振り上げ、斧の柄に足を押し当てて体重をかけて押し込み始めた。

【だらああああッ!!】

【ああッ!?!】

押し込まれ金の斧が頼光に命中した瞬間。俺は地面を蹴り霊力を纏いながら飛び蹴りを叩き込んだ……筈だった。

「外した!?!」

【違う、連れ去られたんだ。回収の為に転移術を刻んでいたか……】

地面を削りながら着地するが当たった手応えは無かった。心眼がすぐに教えてくれたがどうも転移で逃げられてしまったようだ。

【くそ、しくじった……】

全身から光を放ち消え去ろうとしている金時を見て、慌ててブランクの眼魂を作り出す。

「この中に入ってくれ、そうすれば消えないですむ」

【……判った、信じるぜ】

金時にブランク眼魂が触れると白い眼魂は赤と金に染まり金時の姿がその中に消えていった。正直美神さんと合流出来なければ俺1人ではあの英霊……源頼光には勝てない、ここで味方を失うわけには行かないと言う打算があったが眼魂に入ってくれて良かった。

【まだ一息はつけないぞ】

【ですよねー】

牛車から手招きしている輝夜ちゃん達を見て変身の反動でもう寝てしまいたいんだけど、そんな事も言ってもらえない。今の姿の事、そして俺の事も話をしなければならぬ。まだまだ俺の長い夜は明けそうに無い……。

く美神視点く

高島から話を聞いたんだけど、横島君は帝と藤原の姫と輝夜を助けて自分の立場を確立させたらしい。

「あの馬鹿弟子は何をしてるのかしら？」

「……乗りと勢いですかね」

横島君はあんまり深く物を考えない性質だ、その中で帝達を助ける事になったみたいだけど……そのせいで高島でも中々横島君に会わせるのは難しくなってしまったようだ。

「英霊を退治しないと帝に会うのは無理だなあ。それっぽい功績があれば何とかなるんだが……帝の恩人となるとな……」

最初はある程度鬼を討伐して見所のある相手として紹介する予定だったという高島は頭を抱えている。

「……何か問題が？」

「帝が気に入らぬと帝の妹や従兄妹を宛がわれるかもしれない」

……それ笑えないにも程があるんだけど……蛍ちゃんの目が死んでいる。まさか過

去に連れて来られたと思つたら、自分の知らない所で横島君が結婚するとか笑えないにも程がある。

「私なら侵入できませんわよ?」

「……いや、止めてくれよ?俺が帝暗殺を目論んでるとかなつたら一気に追われる身だぞ?」

そうなつたら弟子にも会えなくなるぞと言われるが、そんなことは言われなくても判っている。横島君と早く合流したいけど、今のままでは合流出来ないって言うのが辛いわよね……。

「それで英霊は特定出来てるの?」

「いんや、横島が戦つたのが異能殺しの英霊だ、つまりすぐには動き回らない。俺達が探すのは人間狩りをしている方だ」

それはつまり手当たり次第歩き回って英霊を見つけるしかない……。ヒヤクメも尽力しているが、相手の霊力のパターンが判らないので最初に遭遇しない事には正確な捜査が出来ないらしい

「別れるのはやめましようか」

「だな、各個撃破は洒落にならん」

ただでさえ平安時代は悪霊が強いのに、それらが活発になる夜に英霊を探して歩くと

か冗談じゃないけど、横島君と合流する為には仕方ないと深く肩を落とし、高島と共に夜の京に繰り出す。

「まあ楽にやってくれ、危ないと思えば割り込むからよ」

そう言つて目の前に現れた大量の餓鬼を見て下がる高島。シズクと清姫はおらず、英霊を探しているヒヤクメも居ない。私と螢ちゃんだけでA―A++の鬼を20体近く退治する……。

「泣きそうです」

「横島君に会う為よ。頑張りなさい」

横島君はマスコット達は一緒だが、英霊眼魂にノツプ達は居ない。心眼こそいるが、平安時代の人間に囲まれているので確実に心労は私達よりも上だ。そんな状況で横島君は自分一人で立ち位置を確立させて、そして自分の身の安全を確保している。それよりも甘い条件の私達が泣き言を言う訳には行かない。

「それに今後の事を考えれば良い修行になるわ」

「……そうですね、そう思う事にします」

今後はもつと敵の動きが激しくなるだろう。下手をすれば現代でもこのクラスの鬼が大量に発生するかもしれない、その前哨戦とでも思えば良いわと言つて私は神通棍を油断無く構え、涎を垂らす餓鬼を睨みつける。まず大事なのは気持ちで負けないこと、

靈力は魂の力だ。つまり気持ちで負けなければ一気に不利になることは無い。

「過度に緊張せずにも通りよ」

「はい、頑張ります！」

絶対無事に横島君と合流して現代に帰る。そう心に誓い、私達は餓鬼との戦いに身を投じるのだった……。平安時代の長い夜はまだ明けない……。

平安大魔境 その6へ続く

その6

平安大魔境 その6

〈横島視点〉

英霊源頼光の襲撃を切り抜けたのは良いが、変身の反動。そして蓄積した疲労とダメージで俺は逃亡も出来ず、帝さん、輝夜ちゃん、もちちゃんの3人の詰問に耐え切れず自分の事を話してしまった。

「なるほど、遠い未来から来たと……何を馬鹿なと言えなくも無いが、あれを見れば納得せざるを得まい」

「ですね。横島は私を守りに来てくれたのですか?」

「んーそれは偶然かなあ? 師匠と逸れてどうしようって思ってた時だし」

つまり俺にしても、輝夜ちゃんにしても運が良かったと言える。俺はこの時代ので拠点を得て、輝夜ちゃんは死なずにすんだ。本当に互いに運が良かったのだと思う。

「帝……その私はどうすれば」

「ふむ、私と輝夜とお前が狙われている以上、お前は自分の屋敷に戻るのは得策ではある

まい。しばし、輝夜と共に横島に守られておれ」

源頼光は何かを察知していた素振りを見せていた。それが俺か、それとも帝さんか、輝夜か、もこちゃんか判らない以上慎重になる必要がある。だから帝はもこちゃんに輝夜ちゃんと共にいるように命じた。

「横島よ、大儀であった。だが私はお前の師とお前を合わせる訳には行かぬ。師に会えば、お前は屋敷を離れるだろう?」

「……その可能性はあると思います」

えつと言う顔をしている輝夜ちゃん達には悪いが、俺としては美神さん達と合流したいと思っている。だから本音を言えば探しに行きたいが、それでももう知り合いになつてしまった輝夜ちゃん達を見捨てられないと言うのも俺の本音だ。

「向こうから来る場合も暫くは許可できん、しかしお前が輝夜達を守るのならばそれに便宜も図つてやれる。判るな?」

「……はい、判りました」

この時代では違法に霊能力を使えば犯罪者である。それをもみ消してやるからと言われれば俺も領くしか出来ず、俺は全面的に帝さんの言い分を受け入れる事となるのだった……

「ふいっ……」

「んー可愛い」

「は、はわわわ……」

「みむうッ！」

分身したうりぼーを膝の上に乗せてお腹を撫でている輝夜ちゃんは本当に楽しそうだし、猫じやらしモドキを振ってちびに掴まえられてはわわつとあわてているもちちゃんも楽しそうだ。こういう顔を見ていると俺としてもこの子達を守ってあげたいと思うわけで、別に脅されなくても俺は美神さんたちなら大丈夫と思っ探しに行かなかつたかもしれない。

「横島。見てみて」

「ふぎゅー。ふぎゅー」

寝てるうりぼーを抱き上げて踊らせている輝夜ちゃん。分身じゃなかったら怒ってるだろうなあと思いつつも、美少女と動物の組み合わせにはやはりほっこりしてしまう。

「え、えい」

「みむう、みみー♪」

「わわわー」

そして意外にもチビはもちちゃんに懐いた。気難しいチビだが、何かもちちゃんに思

うところがあるのかもしれないな。

【ノブー♪】

「ご飯ですよー」

お婆さんとチビノブに呼ばれ食事になるのだが、平安時代の料理は正直少し微妙だったが、こうして面倒を見てくれるのに文句を言える訳も無く、美神さん達はちゃんと食事が出来ているのかなあと心配しながら固いご飯を何度も噛み締める。

（金時さんにも話を聞きたいんだけどなあ）

あの英霊源頼光と因縁がある様子だった。話を聞けば源頼光と戦う上でのヒントを得る事が出来るかもしれない……。

（出来れば話を聞きたいんだけど、もしかすると無理かもしれないな）

眼魂に入って靈力を回復させているが、牛若丸とノブちゃんの事を考えれば暫くの間は意識を取り戻さない可能性が極めて高い。

「横島、どうかしたの？美味しくない？」

「ううん、そうじゃなくて少し考え事」

「そう。もしも困ってる事があつたら私も協力するからね」

「私も！お手伝いしてあげる」

協力してくれるという輝夜ともこちゃんにありがとうと返事を返した、1人だと寂し

いからこうして2人に出会えて良かったと俺は思うのだった。

く輝夜視点く

英霊の襲撃の後、横島の話聞いたが未来から来たと言うのは正直驚いた。

(少しだけ疑ってたけど……大丈夫そうね)

最初はその不思議な雰囲気から月の追手かと思ったけど、そうじゃなかったことに安堵した。横島は腹芸が出来るタイプじゃなさそうだし、敵じゃないのは確かだった。

「こうやってこう」

「みむう、みみー、みむうっ！」

猫じやらしとか言う奴を動かして、チビを動かしている横島。お尻を降って猫じやらしに飛びつくチビは可愛いが、それを回避して振る事でチビも楽しそうに追い回している。

「私もやりたい！」

「輝夜ちゃんもやる？ はいどうぞ」

渡された猫じやらしを振るんだけど、思ったよりもチビが俊敏だった。

【ノブウー】

「のぶー？」

【ノノープ♪】

「の？」

あんたなにやってるの、絶対意味判つてないんだからノプで会話をしようとするんじゃないわよ。

「みむきゅー♪」

「あー！」

猫じゃらしに組み付かれ、前足と後ろ足で捕まえてあぐあぐと嘯んでいる姿は凄く可愛かった。

「よーし、次ー！」

「みむうー！」

これは面白い、チビも可愛いし、何よりも案外面白いわ。猫じゃらしを振り、チビを走り回らせる。

(見かけよりもかなり賢いのよね)

小さいけどかなり賢く、私達を楽しませるって事を十分に理解しているチビ。妖怪だけど穢れも何もない、こんな妖怪もいたのだと正直驚いている。

(でも横島がいなくなるのはなあ……)

英霊を倒せば横島は師匠を探してしまう。そうなると横島がいなくなってしまう

……それは酷く寂しい物に思えた。

(英霊なんて見つからなければいいのに)

横島がいなくなっても未来でまた会えるかもしれない。だけど、その間にどれだけの月日が流れるかと思うとやはり嫌だなと思った。死なない……老いない、病気にならない、不死者である「蓬莱人」である私の心を動かす、美貌にだけ惹かれ私に求婚した五貴族とは違う。

「どうかした?」

「ううん。なんでもない」

優しくそこにくれるだけ、それが妙に心地よくて手放したくない者と私は思い始めてしまっているのだった……。

くアシユタロス(現在) 視点く

昨晚の横島君の戦いには肝が冷えた。まさか怪異殺しの「源頼光」が狂神石で狂わされ、ガープ達の尖兵になっているとは想像もしていなかった。神殺しと感じたのは間違いでなかったが、怪異全般に特攻を持つ「源頼光」なんて想像もしていなかった。

(よく耐えてくれた)

坂田金時がカウンターとして召喚されていたが、彼が合流するまで本当に良く耐えてくれたと思う。

「どうだろうか？横島君は凄いだろう」

「……確かにな。彼は凄いと認めざるを得ない」

英霊を相手に人間が良く粘つたと言う過去の私に思わずガッツポーズを仕掛けるが、私だから判る。まだ納得に程遠いと……。

「彼が私の命運を変える要員と言うのは認めよう、だが1人の人間だ。彼は認めても良いが、他はどうなんだ？」

「なるほど、まだ見極めが足りないと言うことだね」

「その通り、あの稀有な陰陽術、そしてあの鎧を召喚する能力。確かに神魔には牙も届くだろう」

過去の私はそこで紅茶を啜り、カップを丁寧に皿の上に戻す。

「しかしあれは人間とは言い難いだろう。あれは魔人に愛されている」

「……確かにね」

横島君はまだ人間ではあるが、今のままではそう遠くない内に魔人に堕ちる。つまり人間と言うよりかは私達に近いカテゴリーと言つてもいい。

「神通力、魔力、そして妖力に霊力、魔人に転生する要因は揃っているな」

「神や魔族になる可能性もあるよ」

「……本気で言っているのか？」

自分で言うのもなんだけど、正直かなり苦しいとは思っている。横島君はどう足掻いても神魔の精神性には程遠い、どこまでも彼は人間として強欲な己を捨て切れない、だが善性も捨て切れない。神魔よりも、魔人に高い適正を持っているのは明らかだ。

「お前が彼に感情移入するのは自分の娘が関係しているからだ、だが私に取ってはまだ娘ではない、見極めている段階だから甘い決断などはしない」

流石私、石頭だ。自分のあり方を変えるかも知れないから慎重になるのは判る。

「横島君はいい子だよ？」

「……それは判ってる。だが私情は挟まない」

横島君はいまどき本当に珍しいタイプのいい子だ。ちょっとあれな部分もあるけど、話せば結構判ると思うんだけどな。

「ほう、丁度いい。横島の師が英霊と戦うぞ」

「……長尾景虎」

私がこの時代に来た時にはじめてであった英霊と蛍達が対峙している、メンバーは……つと視線を向ける。

(悪くは無いか)

令子に蚩、それに私達の時代のシズクと清姫。神族と龍族がいれば勝率はそこまで高くないとしても死にはしないだろう。

「毘沙門天の加護を失っているが、それでもあの娘は難敵だ」

「だろうね、今の彼女には自制心が無い」

元々サイコパスの長尾景虎が狂神石で更に狂っている。その驚異は間違いなく神魔に匹敵するだろう、それでも私は彼女達なら無事に切り抜けてくれると信じている。

「ねえ、アシユ様……え？アシユ様が2人？」

扉を開けて入ってきたのは私の初めての娘「メフィストフェレス」だ。私と私が向かい合って座っているのを見て目を丸くするメフィスト。

「入る前にノックをしなさい」

「え？したよ？」

集中しすぎていて聞こえなかったのかもしれないと私も過去の私も思った。それくらい私達には深く考え込む悪癖があるからだ。

「それで何を見てる……え？私？」

「……お前が人間に転生した存在らしいぞ」

「え？私死ぬの？」

「役目を終えたら願いを叶えてやると言っただろう？多分それで望んだのだろう」

まあ彼女にとっては未来だから困惑するしかない訳だけど……このままなら私が頭をパンンして高島を殺すこともなさそうだし、メフィストも普通に輪廻に入る可能性もゼロじゃないな。

「ふーん、それでこの黒髪の子は？」

「妹かな？」

蛭はメフィストの妹になるからと私が言うとメフィストの目が輝いた。

「え!?妹いるの!?ちよつと妹が死んじゃうじゃない!私行くからね!!」

しかし長尾景虎と対峙しているのを見るとその顔を険しくさせ、転移の魔法陣を展開してしまおう。

「待てええツ!!!」

直情思考のメフィストは言うが早く飛び出してしまい、私と過去の私の静止の声が重なったが、メフィストは足を止める事無く基地を後にしてしまう。私達に出来る事は1つだけ、メフィストが私達の事や妹がいると言うことを口にしないように術を組むだけだ。

(ああ。わずらわしい)

アスモデウスがいなければ私が助けに行くのに、アスモデウスがいるからそれすらも出来ない。口止めの術のほかにメフィストに能力強化の術を辛うじて掛ける。

（どうか助けになってやって欲しい）

色んなしがらみに絡め取られて動けない私の変わりに蛍達を助けて欲しい、私は心からそう願うのだった……。

（蛍視点）

横島と再会する為に京の出現する英霊の討伐に出ていた私達。ヒヤクメさんは霊視が本調子ではなく、それに加えて強力な神魔の魔力が満ちているからいつも以上に役立たずなので高島の屋敷に残して来たんだけど……たとえ戦力として期待できなくても連れて来るべきだったと私は後悔していた。

「ふふ、貴女達は人間ですね。あはははッ！そうだそうしましょう。今日は貴女達を殺しましょう、そうしましょう」

高島と別行動で搜索していたが、まさかこんなに早く英霊と遭遇するなんて思っても見なかった。白い僧服に身を包んだ細身のシルエツト……声からして女性だが、その声のトーンが尋常じゃなく低い、声が低いという訳ではない。空気を冷やすほどの圧倒的な殺意が全身から迸っている。

（空気が重い……それに真つ当な英霊じゃない）

元々狂神石で狂わされているのだ。真つ当じゃないのは判りきっているが、それを差

し引いても真つ当ではない、纏っている空気が尋常じゃないほどに歪んでいる。

「……下がってろ、前衛は清姫がやる」

「私ですか？まあ良いですけど、貴女達が怪我をすると横島様が悲しみますし」

私達を庇うように清姫とシズクが前に出た。すると英霊は困ったように首を傾げ、ゆっくりと口を開いた。

「私は人間を殺せって言われてるんですよ、神魔はちよつと困るんですよえ」

なんでもない世間話のような口調だが、明確な敵意と悪意が叩き付けられるのが良く判る。

「……それで？」

「神魔は斬っても面白くないのでどいてくださいな……ええー。なんでそんな事をするんですか？」

清姫の放った火球をいつの間にか抜刀していた刀で両断する英霊。だがフード付きの僧服は耐え切れず焼失し、僧服に隠されていた人物の姿が明らかになった。

「まあ別にこれはあってもなくてもかまわないんですけどねえ」

白い髪に黄色の瞳。その顔には笑みが浮かんでいるが、目は全く笑っていない所か黒く濁っている。

(な、何この人……)

けらけら笑い出す英霊、だが毘沙門天の言葉に私も美神さんも英霊の正体に辿り着いた。

「越後の龍……長尾景虎」

「泣けるわね……」

平安時代ではまだ生まれていないからこそこれまでの実力はないはずなのに、恐ろしいほどに強い。これがもし現在だったらそれこそ小竜姫様がいなければ対処できないほどの英霊だっただろう。

「そう思えば平安時代で良かったと思うべきね」

「そうですけど……勝つには余りにも厳しすぎますよ」

八華の備えと戦国時代ではありえないほどに武器を使い分ける才能に長け。飛び道具こそ無いが、それでもリーチを自在に変える、なおかつ武器を変えてもそれを完璧に使いこなすその才能。

「馬を持ち出してくる可能性もあるわよ」

「判ってます」

長尾景虎は騎乗戦にも長けていた武将だ。今でこそ自分の足で歩いているが、馬を召喚する可能性は十分にある。

【つと、もう回復しましたか】

水を媒介にした転移でシズクに先に行くように高島は頼み、美神達の元に合流しようとした。しかしその瞬間に高島の目の前に上空から何者かが舞い降りてきた。

「妖かッ！」

「ちよ、ちよい待ちッ！私は別に戦いに来たわけじゃないよ！」

札を構えた高島に舞い降りてきた何者か……「メフィスト・フェレス」は両手を向けて戦う気は無いと抗戦の意志は無いと訴える。

「それなら良い、お前は何をしに来た」

「ちよつとね、野暮用。どう？私に協力してくれない？」

メフィストの言葉に高島は顔を緩めた。他の陰陽師ならば問答無用で相手を殺したが、神魔や妖怪と親交のある高島だからこそ、メフィストの話に耳を傾けた。

「俺も困っていた所だ。本当に力を貸してくれるのか？」

「勿論、私も凄く困ってたのよ。それで協力してくれるかしら？陰陽師さん？」

挑発するようなメフィストの言葉に高島は笑みを浮かべ、指の間に挟んでいた札を着物の内側に戻してメフィストに手を向ける。

「高島だ。悪いけど手助けを頼むわ」

「OK、よろしくね。高島殿」

美神達が長尾景虎との戦いを始めている頃。高島はアシユタロスの娘であるメフィ

ストと出会い、そして互いの目的の為に協力する事を約束し、2人で美神達の元へと向かうのだった……。

平安大魔境 その7へ続く

その7

平安大魔境 その7

（美神視点）

平安京を荒らしている英霊2人。そのうちの1人……人間を殺して回っている英霊と遭遇する事が出来た。英霊と戦ったという実績があれば横島君との再会が早くなる。私も蚩ちやんも考えていたけど、長尾景虎の存在感は圧倒的だった。

【あはははッ!!神魔は興味が無いんですけどねえッ!!】

擦れ違い様の一閃でシズクの上半身と下半身が両断され、清姫が弾き飛ばされる。

【ふっ!!】

刀から斧に持ち変えられたその一撃を神通棍で2人で受け止めるが、その衝撃の凄まじさに私も蚩ちやんも足が地面にめり込むのを感じた。だけど全身に力を込めて弾き飛ばす事が出来た。

【へえ?】

弾かれた勢いで宙回転して着地した長尾景虎の目がまるで猫のように細まった。その目は今までの狩る獲物とでも言っているのか見下していた目からほんの僅かに興味

を抱いたという感じの目の色に変わっていた。

「蛍ちゃん。難しいと思うけど、合わせて行くわよ」

「……はっ」

声や合図を出しては長尾景虎に反応されてしまう。私がフオワードで前に出て、蛍ちゃんに何の合図もリアクションも無く私の動きに合わせてもらう必要がある。

「良い夜ですねえ……ああ、酒があればもっと楽しいでしょうにッ!!」

「ッ!!」

ゆらりと傾いた瞬間に鋭い踏み込みで突き出された槍の切っ先を神通棍で横から叩いて、その切っ先を辛うじて逸らす。

【良い組み合わせですね】

切っ先が地面に刺さったと同時に、開いている左手に握られた刀による刺突を蛍ちゃんが私の背中から飛び出して、結界札で弾き飛ばす。

「ふっ!!」

「……つつう」

突き出した神通棍の先がほんの僅かに長尾景虎の頬を捉えたが、致命傷には言うまでも無く程遠い。それに僅かに赤くなっただけは殆ど一瞬で回復されてしまった。それでも英霊相手にほんの僅かでも手傷を負わすことが出来た。そしてこれは第二、第三の矢

たとえガープに狂わされていても英霊としての矜持は捨てていない。今も血反吐を吐きながら私達に戦えと叫んだ。

「やるわよ」

「はいッ!」

真つ向から英霊と戦うなんて冗談じゃないけど、この平安京で魔神がいると言うことが長尾景虎の口から告げられた。長尾景虎を退けたとしてもそのあと魔神と戦う事になるだろう。ならここで立ち止まることなど出来はしない。

【さあーさあさあさあッ!!いざ尋常に勝負ッ!!この堕ちた軍神に勝てねば、魔神になど勝てはせぬぞ!抗えッ!】

歯が砕けんばかりに歯を噛み締め、血涙を流している長尾景虎の発破に答える様に私達は長尾景虎という誇り高い英霊と向かい合うのだった……。

くアスモデウス視点く

昨晚源頼光と横島の戦いは源頼光のカウンターとして坂田金時の召喚を誘発した。想定範囲内の事なので問題は無いが、横島と抑止力に召喚された英霊の遭遇と言うのは正直想定していた段階よりもかなり早い。

(なるほど、これがガープの言っていた事か)

横島が世界に愛されていると言う意味を理解した。正直源頼光と横島の戦闘では横島が不利になるのは当然。しかし、源頼光の戦術を知る坂田金時が助っ人に入れば横島の勝利の目は生まれる。しかし戦闘開始すぐで召喚された英霊と合流するというのは余りにも出来すぎてている。これが世界の助力と考えれば、なるほど確かに横島は世界に愛されているだろう。

「長尾景虎も中々にしつつこい」

狂神石をあれだけ投与したのに、英霊としての最も大事な核だけは決して手放そうとしない。自分が信仰していた毘沙門天の事すら忘れているのに、英霊としての最低限の核はどうしても手放そうとしない。

「だが、それも時間の問題だな」

狂神石のガープの術による精神制御にいつまでも耐えられる訳が無い。血涙を流し、全身を激しく痙攣させながら殺すまいと手加減しながら戦い……いや、鍛えているがそれもいつまでも持ちはしないだろう。

「見世物としては面白いがな」

ここで美神達が死んでしまえば横島の精神性は一気に魔に傾くだろう。あくまで今回は実験だったが、そこに横島達が現れたのは実に幸運だ。

「アスモデウス、少し良いか？」

「アシユタロス？どうした」

魔法陣から顔を出したアシユタロスに視線を向ける。その顔は酷く申し分けなさそうだった。

「私の娘が離反した。恐らく、美神令子に加勢する」

「ほう、それは面白いな」

「……怒らないのか？」

私の言葉に驚いた表情をするアシユタロスだが、今のままでは長尾景虎が美神達を圧倒して終わると思っていたので、多少のてこ入れで丁度良いだろう。

「物事にはイレギュラーがあつて当然だ。それで一々目くじらを立てはしない、だがアシユタロスよ。しっかりと後始末はつけて貰うぞ」

加勢する事を追及するつもりは無い。だが身内から裏切り者を出したとして自らでメフィストフェレスを始末するように言う。

「判っている」

「ならば良い、お前も見えていけ。ここから面白くなる」

横島に良く似た陰陽師と美神令子に似た魔族……メフィストフェレスが戦場に割り込んだのを見て、私は笑みを寄り深くした。アシユタロスの娘が応援に入った事を喜んだのではない、ガープから聞いていた話が真実味を帯びてきた事に笑ったのだ。

(やはり横島だけが特別か)

横島が戦い始めてすぐカウンターとして坂田金時が現れた。だが美神達が戦い始めて1時間近く経つが、英霊が召喚される気配は無い。

「世界に愛された男か」

「何か言ったか？」

アシユタロスには私の眩きが聞こえなかったのか、何か言ったか？と尋ねて来る旧友になんでもないと返事を返すのだった。

(楽しみだ)

直接まみえるその時が楽しみで仕方ない。今まで映像でしか見ていなかったが、ガープがあそこまで警戒する横島と言う男がどれほどの存在なのか……それを自分の目で確かめるその時が楽しみでしょうがないのだった……。

〈蛍視点〉

神速で振るわれる槍に薙刀。縦横無尽に切り替わる武器と間合いの変化はまさしく変幻自在としか言いようがなかった。だがそれは最初の内だけであり、耐久に持ち込めばその剣術には徐々に荒が見え始めていた。

(見える、見えてきてるわ)

妙神山での修行がここになって生きてきた。確かに完全に見切れているとはまでは言わない、それでも反応しきれずに切り捨てられるという最悪の事態は避けることが出来て来ている。だがそれは私達が動きに慣れてきていると言うこともあるが、何よりも長尾景虎がガーブ達の呪に抗うのに全精力を向けているから動きが少しづつ、少しづつ稚拙な物に変わり始めていたからだ。

「うっ、うあああああッ!!」

獲物を自在に切り替え振るうたびに飛んでくる霊破刃。それは触れればそこから両断される鋭い物だったが、現れた時の知性で振るわれていないというだけで何とか対応出来るようになっていた。勿論シズクの水や氷の防御があるからだが、それでも対応出来るようになったと言うのは非常に大きいと思う。

「……哀れ」

「(ここ)で眠りなさいなッ!」

シズクと清姫の攻撃が命中する瞬間。空から飛来した蝙蝠が長尾景虎の首元に噛み付いた。

「あ、あああああああああ————ッ!!」

魂までが凍りつくような苦悶の悲鳴に思わず私も美神さんも足を止めた。

「……止まるなッ！あれはー」

シズクに最後まで言われるまでもなかった。あの蝙蝠は血を吸っているのではない、長尾景虎に狂神石を与えているのだと気付き、打ち落とそうとしたが、それは余りにも遅かった。背後から引き寄せられた瞬間、目の前に深い傷跡が出来ていた。

「す、すみません」

「良いのよ。でも……状況は最悪すぎるわね」

今までの苦悶の表情が嘘のように安らかになっているが、その目は赤黒く染まり、白い僧衣も漆黒に染まっていた。

「ああ。とても、とても良い気分ですね」

白い肌を浸食するように赤いラインが浮かび上がる、それは血管の中に注入された狂神石が肌の下から浮かび上がった姿だった。

「そう、貴女達を殺せば、もっと気持ちいいですよね？」

手にしていた刀にまで赤黒いラインが浮かびあがった。その姿は長尾景虎のままだが、もう『長尾景虎』では無いのだと一目で判った。

「オルタナティブ……」

中世でのジャンヌオルタ。それと同じく存在が歪み変質した姿……。先ほどの比ではない殺気が叩きつけられ、私は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。それでも私達は

負けるわけには行かないのだ、気持ちで負けないように神通棍を握り締めた。

「え？」

視界に影が落ちた。顔を上げるとにんまりと笑う長尾景虎と目があった。だがその顔は微笑みとは程遠く、残酷な獣のような笑みだった。

【死ね】

油断していた訳ではない、気を緩めたつもりも無い。自我を失った長尾景虎の踏み込みが余りにも早すぎた、今までの動きがどうしても脳裏に焼きついていた。だからその動きに反応出来なかった、美神さんの叫び声が聞こえるが体が動かない。何もかもゆっくりに見える中輪私の首に向かって伸びる日本刀に思わず死を覚悟したその時。

「しゃああッ！間に合ったあッ!!」

「死ぬわあぼけえッ!!!」

空中から飛来した電撃の槍が長尾景虎と私の間に突き刺さり、上空から高島の悲鳴が重なった。だけど、そのあとに美神さんの驚愕の声が響き渡った。

「……私ッ!?!」

「え？私がいるッ!?!」

美神さんの困惑した声とよく似た声が響き渡る。その声の主は美神さんと良く似た魔族の女性……。

(メフィストフェレスッ！)

私達姉妹の前のお父さんの娘。メフィストフェレスの姿がそこにはあった。何故ここにいるのか、何故助けてくれたのかと言う謎は残る。それでも今は少しでも戦力がいる状況だ。味方になってくれるなら、これ以上頼もしい味方はいないと思う。

【全く邪魔者ばかり沸いてきますね。なら全部切り捨ててあげますよッ!!】

「ッ！話は後！判るわよねッ!？」

「馬鹿にしないでよねッ！それくらいは判るわよッ!!」

額に青筋を浮かべた長尾景虎が刃を向けるのを見て、美神さんとメフィストが背中合わせに立つ。その姿にメフィストが味方だと判断し、私達はメフィスト、清姫、シズクの3人の神魔を軸に、長尾景虎との戦いに再び挑むのだった。

く美神視点く

高島と共に現れた女魔族……認めたくないけれど、あれは私の前世だと、見た瞬間に理解してしまった。でもそれで私は長い間感じていた1つの疑問が氷解したのを感じた。

(縁があったのね)

横島君を護つてあげないと、助けてあげないとって思ったのは……今、この時。これが理由なんだと判つた。

「急急如律令ッ！雷精将来ッ！」

「ありがと！高島殿ッ!!そら行くよッ！」

雷の鎌を振るう私の前世は高島の支援を得て、水を得た魚のように縦横無尽に駆け回っている。

「くっ！厄介な」

「相性が良い見たいねッ！」

刀や薙刀を使う長尾景虎は雷の武器と打ち合うと感電するのか、打ち合いを避け避けるに回っている。

「そこッ！」

「逃がさないわよッ！」

「ちいっ!!」

逃げに回っている所ならば私と蛭ちゃんて狙い打てる。足を徹底して狙い、その機動力を削げば雷の一撃と炎が長尾景虎に向かつていく。相性と言うのは非常に大きいと言ふ事は知っていたが、それを改めて思い知らされた気分だ。

「くっ、鬱陶しいですね！」

「そう言うのなら死んでおきなよッ！あ、もう死んでたっけ？」

【貴様ッ！】

戦いの中で軽口をたたけるだけの余裕がああ魔族にはあつた、それはああ魔族が上級なものもあるが、やはりそれ以上に長尾景虎との相性が物を言っていた。

「……気になることはあると思うが、今はそれを考えない事だ」

「そうですね。魂は輪廻転生してますからね」

「……ありがと」

横島君の事ではないけど、私の事も少しは気にしてくれているのか考えすぎるなど言うシズクと清姫に感謝の言葉を告げる。自分の前世が魔族だった、そして高島と親交があつた。

（それはそうなるわよね）

霊体ボウガンの矢を番えながら自分で考え、そして自分で納得した。普通のGSならばあれだけ妖怪と親交やつながりのある横島君を弟子として扱おうとは思わない、それでも私は仕方ないと思つてそれを受け入れていた。最初は蛍ちゃんだけを重要視していたが、いまは横島君を護ろうとして動いている。情が沸いたのもあると思うけれど何よりも縁が強かつたのだろう、横島君と居て神魔への偏見は薄れてきたと思うけど、それでも自分の前世が魔族なんて思つても見なかつたなあ。

「シッ！」

【くっ、急に狙いが正確にッ！】

そのやるせない気持ちや矢に込めているからか狙いが急に良くなったと自分で思っている。でも今私が考えるべきことはそこじゃないのよね。

「……」

支援はしてくれているし、私のフォローもしてくれている。でも違いますよね？美神さんは違いますよね？つと訴えかけている蛍ちゃんやんの目が死ぬほど恐ろしい。下手をすれば、長尾景虎よりもやばいのは蛍ちゃんかもしれないと思った。

【……月が、ちっ、ここまでのようです。次は殺しますからね】

地面を蹴り飛び上がった長尾景虎は屋根の上を走りどこかへと去っていった。月がどうか言つてたけど……。

「……月の見える時間が関係している？」

「……その可能性はあるな」

月の満ち欠けか、それとも時間か……何らかの制約がある可能性は高い。確かに私の前世は長尾景虎にとって有利に立ち回れていたが決め手に欠いていた。

「それで貴方は何をしに来たのかしら？」

「何をつて……あれ？何をしに……」助けに来たんだろ？「あ、うん、そうそう……で、

私は誰を助けたかったの？」

高島に逆に尋ねる私の前世。その顔は本当に判らないと言う顔をしていた。

「とりあえず、1回俺の屋敷に戻ろう。あれだけ派手に立ち回ったんだ、陰陽寮の連中がくると面倒だぞ」

確かに遠くからこつちに向かつてくる人間の気配が近づいている。見つかる今回件の首謀者にされかねないわね……高島の言う通り私達は憲兵達に見つかる前にその場をあとにすることにした。

(問題はかなり増えたけどね)

横島君と合流する事の難しさに加えて、長尾景虎の狂化。そして私の前世……何が原因で私達が平安時代に来たかは判らないけれど、何かずつと前からこうなる事が決まっていたような気がする。

(まさか……ね)

一瞬脳裏を過ぎった考えを馬鹿馬鹿しいと首を左右に振り、私達は高島の屋敷に向かつて走り出すのだった……。

「運命は廻る。1つ目の鍵はもうすぐ傍に来ている。お前達はそれに気付けるか？」

走り去る美神達を見つめるロープ姿の男はその手に巨大な眼魂を持ち、楽しそうに笑うと風の中に溶けるように消えていくのだった……。

平安大魔境
その8へ続く

その8

平安大魔境 その8

〈美神視点〉

長尾景虎との戦いに乱入してきた魔族……私と瓜二つの容姿の女魔族と共に高島の屋敷に戻り、そこで念の為にヒヤクメに私と魔族……メフィスト・フェレスの魂の波長を調べて貰っていた。

「……美神さんとメフィストさんの魂の波長は87.8%合致してるのね」

87.8%……50%くらいなら他人の空似で行けたかもしれないけど、80%を越えているとなるとやはり私とメフィストは前世と現世と言うのは間違いないようだ。

「私が生まれ変わると人間になるんだ。ふーん」

「……なにかしら？」

「いやあ、私が人間に生まれ変わるなんて……ね、思っても見なかっただけよ」

それを言うとも私も前世が魔族なんて想像もしていなかったんだけど……ね。

「……納得は出来たな。美神は人間にしては霊力が強いしな」

「あと質もですわね、かなり上等ですし、普通の人間ではないと思ってましたしね」

……神魔からすれば凄く納得出来るらしいけど、人間からすれば驚愕の真実と言う奴だと思うんだけどね。

「美神とメフィストが前世同士と言うのはとりあえずおいておいて良いだろう。メフィスト、お前ちゃんと覚えてるか？」

「……………めん。全然まったくこれっぽっちも覚えてないのよ。凄く焦っていたっていうのは覚えているんだけどね」

メフィストが何を焦っていたのか、そしてどうして助けに来たのかを覚えていなかった。

「1回落ち着いて考え直してみたらどうですか？」

「……………うーん」

蛭ちゃんに言われて腕を組んで考える素振りを見せるメフィスト。うんうん唸っていたけど、メフィストは万歳した。

「駄目だわ。全然思いつけない……………」

深く肩を落とすメフィストの姿はとも芝居のようには見えない。本当になんで助けに来たのか、どうしてあんなにも焦っていたのかを完全に忘れていた。

「……………考えられるのは契約か」

「親を裏切ったと言う事で、記憶を抹消されたという事か……」

メフィストが自身の親を裏切つて助けに向かった事で魂に刻まれた契約が発動して、その記憶を消去されてしまった……か。

「ヒヤクメ、もしかして何とかかなる？」

「……止めといた方が良いのね。出来ない事は無いけど……今ここで戦力を失うのは辛いと思うのね。」

長尾景虎と戦うのに電撃を扱えるメフィストの存在は非常に大きい。無理に記憶を思い出させて離反されるくらいなら、思い出せないまま協力して貰った方が好都合だ。

「あ、でも助けに来た理由とかは全然覚えてないけど……平安京に居るもう一人の魔族の名前と英霊の名前は覚えてるわよ？」

「「え？」」

なんで自分の目的を覚えてないのにそつちを覚えているのツ!? って思いはしたけど、もう一人の魔族が何者かと尋ねるとメフィストは険しい顔をしたまま、もう一人の魔族の名前を教えてくれた。

「アスモデウスと源頼光よ」

「アスモデウスツ!?!」

「源頼光ツ!?!」

ソロモン72柱のアスモデウス……ガープ達の陣営の最高権力者。今まで名前だけだったけど、まさか最高責任者が自ら乗り出してきているなんて思っても見なかった。

「源氏……？それって貴族の源氏と関係があるのか？」

「……だが、頼光なんて奴はいなかったが……」

源氏と関係があるのかと高島とこの時代のシズクが尋ねて来る。そうか、そうよね。平安時代に源氏と平家は既に存在している、源つて名前を聞けば、源氏と関係あるのかと尋ねてくるのは当然よね。

「今からもう少し未来の源氏の武将よ、怪異殺しって呼ばれるほど高名な相手よ」

「……なるほどな、確かにそいつは不味いな……殺されているのは術師ばかりだし高島から話を聞いていたが、異能殺しによって殺されているのは陰陽師ばかりらしい。確かに陰陽師では、怪異殺しと恐れられた源頼光と戦うのは不可能だ。ある程度は戦えても殺されてしまうのは仕方ない事だが、横島君が戦っている相手も長尾景虎以上に厄介な相手だ。」

「でもなんか英霊がもう一人横島に協力してるらしいわよ。えっーつと……金……金

……金時だったかな？」

「坂田金時ねッ！良かった、それなら少しは安心出来ますね」

「多分抑止力として召喚されたのね、でも今は本当に助かるわ」

源頼光の四天王の1人が横島君に協力してくれているのならば、私達よりも横島君の方が安全だと思うわ。それに坂田金時自身も知名度が極めて高い英霊だ、日本と言う土地に召喚されたのならば非常に強力な存在と言える。そう考えれば当面合流出来ないとしても横島君自身はある程度安全だ。問題があるとすれば私達の方だろう……メフィストが仲間に加わったとしても狂神石に飲み込まれた長尾景虎と戦うには戦力が余りにも足りない。

「……うし、1回出掛けよう」

話を聞いていた高島が出掛けようと私達に提案してくる。

「出掛けるって戦力の充てが？」

「あるっちゃあるが、あいつもそう簡単には動けないからな。道具や情報収集に頼もしい味方が居るんだよ」

突発的な遭遇戦になったら戦力の差で負ける。倒しきるとまでは言わなくても、互角に戦うにはそれ相応の準備を整える必要があると笑った高島に何処へ行くのか？と尋ねる。すると高島は横島君を彷彿とさせる笑みを浮かべて自信満々と言う表情で告げた。

「六道家だ……どうした？」

六道家と聞いた瞬間になんとかなるかもしれないという気持ちが無さも萎えた。

だって初代様でしょ？六道の試練の洞窟に居る……

(（駄目かもしれない))

あのぼわぼわさんが頼もしい味方とは到底思えず、私達は駄目かもしれないと思ったのだが……それは実際に会った時、良い意味で裏切られる事になるのだった……。

く横島視点く

昨晚の霊力の高まりで美神さん達も戦っている事が俺には判っていた。応援に行こうと思いはしたが……だけど、俺は屋敷を出ることが出来なかった。

『横島。どこへ行くのかしら？』

闇の中で俺を呼び止める輝夜ちゃん。その姿は幼い少女なのに有無を言わさない凄みが合った。その目に見つめられては外に出るとは言い出せず、輝夜ちゃんに手を差し伸べられた事でその手を握り、美神さん達に申し訳無いと思っけていてもあの時の目を思い出して、俺は外に出ることが出来ないうた。

【昨日の霊力は大将じゃねえ、俺ツチが断言する】

「やっぱりか……」

俺は昨日の事がどうしても気になり、眼魂の中で休んでいる金時に尋ねてみたのだ。

昨日の戦闘……恐らく英霊は源頼光ではない、帝さんから聞いた人間を殺して回っている英霊である可能性が高い筈だ。

「ちなみそれ知り合い？」

「いや、俺ツチの知り合いじゃねえ。そもそも俺は大将を止める為に召喚されただけだから、知り合いなら判るけどそれらしい気配は感じねえよ」

【そうか……では四天王ではないと？】

【そいつは間違いねえ。他に四天王が居れば皆大将を止める為に動いてる】

「そっか、居てくれれば良かったんだけど……」

正直あの狂気的な顔を思い出すだけで怖い。味方が少しでも多ければ安心できるんだけどなあ……

「そう言えば頼光さんっておかしくなってるあれなんだよな？」

【……いや、子供とかいうのは昔からだ】

【……うえ？】

俺はてつきり狂神石で発狂しているからだと思ってたのに……あれが素って言うのは幾らなんでも怖すぎる。

「手足もぐとか言うのは？」

【そっちは多分狂ってるからだと思う】

【多分がつくんだな……】

心眼の若干呆れた様子の子の声に俺も溜め息を吐いた。蕩ける様な顔をしていたけど、あの目に宿っている狂気的な光は思い出しても恐ろしい……。

【とりあえず霊力が回復すれば俺ツチももう少し力になれると思うぜ】

「良いよ、良いよ。焦らないでゆっくり身体を休めてくれれば」

霊力の枯渇間際から回復するのは英霊でも難しいとノツブちゃん達も言っていた。だから無理をしないで身体を休めるようにと言う、英霊と戦う事になるのだ。同じ英霊である金時の体調が俺達の勝機を大きく左右する筈だ。

【昨日の今日で動き回るとは思えない、少なくとも数日は余裕がある筈だ。無理をせず霊力を回復させるんだな】

【……すまねえ、言葉に甘えさせて貰うぜ】

その言葉を最後に金時の気配が遠ざかる、完全に意識を断った所を見ると深い眠りに落ちたようだ。それを確認してから立ち上がり部屋の扉を開ける。

「あれ、もこちゃん。どうかした？」

「……う、ううん。な、なんでもないよ？」

部屋の外で座り込んで待っていたもこちゃんに何かあった？と尋ねると慌てた様子でなんでもないよと両手を振る。

「はい、立てる?」

「……ありがとう」

着物姿で座り込んでいたので簡単には立てないと思い、手を貸してもこちゃんを立ち上がらせる。

「うりぼー達と遊んでて良かったのに」

「……横島様がどうなるのかなって」

「……この様付けって慣れないよなあ。俺はそんなに偉い人間じゃないのにと思いつながらどうなるのかな?と尋ねてくるもこちゃんにどういう意味?と尋ね返す。

「……輝夜のお婿さんになるの?」

「なんで?」

まさかの言葉に逆になんで?と尋ね返す。輝夜ちゃんってお姫様だ、そんな天上人と俺みたいな一般人が結婚するとかありえない。

「……そっか、それなら良いよ。安心した」

「何が?」

勝手に納得してくれた様子だけど、一体何を聞きたかったんだろうか……俺が首を傾げているともこちゃんは俺の手を引いて歩き出した。

「あ、お話終わった?後でお客さんが来るから横島も準備しておいてね」

「俺も？輝夜ちゃんともこちゃんのお客さんじゃなくて？」

俺居候だし、そもそもこの時代の人間じゃないから知り合いなんて居ないし、何かの間違いじゃない？と言うと輝夜ちゃんはにっと笑った。

「陰陽寮の西郷さんがお会いしたいって文をね。ほら、あの時の英霊の事とかあるでしよ？」

どうしようめっちゃ嫌な予感がする……蛍とか美神さんとかがない時に偉い人とお話をするのは嫌だなあと思いはしたものの、断れる雰囲気ではなく、俺は判ったよと返事を返すのがやつとなのだった……。

く蛍視点く

高島と一緒に六道の屋敷に来た。高島も居る事もありすぐに当主の元へ案内されたけど、そこは部屋の中ではなく裏庭とでも言うべき場所だった。

「そー……」

【うーツ！】

ショウトラとそれを撫でようとする生前の初代様。だけど唸られてびくつと身体を竦めて半泣きになっている。

「シヨウトラー！」

【わんツ！はっはっはツ!!】

高島が呼ぶと尻尾を振って初代様を無視して高島に駆け寄るシヨウトラー。

「うー、高島さまあ！この子達全然私に懐いてくれない！」

「言っただろう？幸華（さちか）。この子達は特別な式神だと、俺が君の為に作った式神だ。だから普通の式神と思わないほうがいい」

頭をなでられわふんつと鳴いているシヨウトラーは幸華さんに目もくれず、高島の足元にじゃれ付いている。

「頑張る」

「そうしな、大丈夫だよ。この子達はまだ警戒しているだけだ。ちゃんと君を守ってくれる」

「……うん」

高島が幸華さんの頭を撫でながら言うと、幸華さんは少しだけ頬を赤く染めて高島を見つめている。

（……横島君の個性って昔からなのね）

（……みたいです）

年下と人外に好かれる性質は高島も持っていたようだ。いや、むしろ横島の物よりも

強力かもしれないと思うレベルだ。

「あら、シズクと清姫……遊びに……？ 貴方達本当に清姫とシズク？」

清姫達を見て笑みを浮かべた幸華さんだが、すぐに怪訝そうな顔をする。

「……ここより先の時から来た」

「お元氣そうで何よりですわね」

「……そうなのね！ いらっしやい」

にぱーつと笑う幸華さんは冥子さんよりも更に幼いこともあり、本当に幼女と言う感じだった。

「ちよつと手伝って欲しい事があるんだけど大丈夫か？」

「うん大丈夫よ、高島様のお手伝いならいつでもできるわ」

にここにこと笑い屋敷の中へどうぞーと言って歩き出す幸華さんの後を追って屋敷の中に足を踏み入れる。

「それで、何をお手伝いすればいいの？」

「英霊が居るんだが、真つ向に戦うと勝てない。今京で一番靈力が高まっている場所と減っている場所を知りたい」

了解くと笑い棒を振る幸華さん。12神将が手に入る前の六道家は今とは違う靈力の形態だったのかしら……。

(ギリギリって所ね)

(そうですよね)

見た目は綺麗だったが、中はボロ屋敷だった。それにお手伝いらしい姿も無く、数人がほそぼそと働いていると言う感じだ。未来の事を知るからこそ、あの六道家にこんな時代があつたのかと驚いた。

「(こことこ)こね、後(こ)こだけ……(こ)こは近づかない方がいいわね」

「理由は？」

「霊力が暗く、重く澱んでいるわ、英霊の拠点かもしれないし、もしかすると地獄の入り口かもしれないわ」

「なるほど、判ったよ。ありがとう」

地獄の入り口……アスモデウスが私達の時代から来ているならそこが未来に帰る場所かもしれない。だけど、それは敵の本拠地となっているのならば今の戦力で突入する事は難しい、出来れば、ううん、出来て欲しくないんだけど自然発生の地獄の入り口だと思いたい。

(平安時代は魔窟だったらしいし……)

鬼や悪魔が闊歩する時代、あちこちで神隠しの伝承があるのは地獄の入り口に飲まれた人間が数多く居るからだ。暗く澱んだ霊力と言うのが、アスモデウス達の拠点でない

ことを心から祈る。

「それで、お弟子さんかしら？」

「1人じゃ勝てないから助っ人だ。あんまり屋敷の外に出るなよ、今は危ないからな」

「うん、それは判ってるわ、みんな助けてくれるのよ、懐いてはくれないけど」

どうも今の12神将は高島から譲渡されたばかりで懐いてはいないようだ。だけど主としては認めて護ってくれていると言うのなら六道の屋敷は安全な拠点の1つと言えるだろう。

「それなら少し庭を貸して貰ってもいいか？」

「いいわよ、高島さまなら何時でも訪ねてきてくれていいんだから」

「ありがとう、迷惑を掛けるけど迷惑ついでにお願いしても良いか？」

「なーに？」

「武器が欲しい、いくつか手配できるだろうか？」

「全然大丈夫よ、没落寸前だけど、まだまだ名家だからね」

今の私達に足りない戦力と装備、平安時代の強力な霊具ならば武器としては申し分ないだろう。

「いいわよ、準備してあげる」

「ありがとう、本当に助かるよ」

「ううん、良いの、良いの、高島様の為だもの」

凄く嬉しそうな顔をしているけど、幸華さんがホストか何かに貢いでいるようにしか見えぬ大丈夫かなあつと思わず心配になってしまった。

「さてと、じゃ、シズクと清姫にメフィスト、それと令子と蛭はここに立つてくれ」

地面に印を書いた高島にそう言われるが、いきなり印の上に立てと言われてもはいそうですかとは言えない。

「警戒するのは無理はないが、霊力を上手く取り込めれてないだろ？ここは上質な霊脈だ。こここの霊力に入れ替えておくべきだと思うぞ？」

「……そうね、お願いするわ」

「何戦力向上だ。後は簡単な陰陽術も伝授する。昨日の今日だから襲ってこないとは思わぬが、樂觀視も出来ないいな」

英霊長尾景虎との戦いに備え、私達は六道の屋敷で準備と装備を整え始めるのだった……

く西郷視点く

帝の護衛の陰陽師が殺された。それは悲しいことだし、殺した相手にも殺意を覚えてた。だが帝の話を聞けば、行くべきではないと止められたのに占いで大丈夫だと言って

無理に向かい、そして逃げようとした所を殺されたと聞いては私としても複雑な気持ちになる。

「えつと、横島です。よろしくお願ひします」

「……あ、ああ。よろしく、西郷だ」

帝から命の恩人である少年が輝夜様の屋敷に居る。話をしてくるようにと命じられたが……こうして間近で見ると本当に高島に良く似ている。

「横島ー、頑張れ」

「ふぎー♪」

「が、頑張れ」

【ノーブー♪】

「みみーむ♪」

……こいつ高島以上か？あの気難しい輝夜様が猪を抱きかかえて笑い、鬼子といわれていた藤原の姫も笑っている。こんな事は高島でも出来ないぞ……。

（顔が似ているだけではないのか）

高島から偏見ととつつきづらさを取り除いて、素直さが加わった少年……横島に少しばかり驚いた。

「さてと帝からのお言葉だが、お前の師匠達だが、高島と行動を共にしているようだ。顔

見せは許可できないが、とりあえずは安全だと言っておこう」

「……そう……ですか、良かった」

高島と行動している巫覡達。これが横島が探している相手と言うことは帝も判っているが、高島にも私にも釘を刺した。

『横島と居ると藤原の姫も輝夜も機嫌が良い。横島の気持ちも判るが、京に骨を埋めて貰うとしよう』

酷な事を言いなされる。だがそれだけ帝も横島の能力を評価していると言うことだと思えば、帝の意見を私が曲げる事は出来ない。五貴族よりも横島に輝夜様が好意を持つているのは明らかだ、帝もそれを見抜いているからこそその決断をしたのだろう。

「陰陽術を正式に学んだ事がないそうだね？」

「はい、殆ど独学で」

独学……か、私はまだ彼の陰陽術を直接見たことが無いが、帝が言うのだ。類稀なる術者なのは間違いないだろう。

「では得意な物でいい、1つ見せてくれないか？」

「あ、はい。判りました」

横島が了承したので札を筆を渡そうとすると横島は親指を噛み切り、空中に文字を刻んだ。

「は？」

「こんな感じですかね」

……札も無しで術を発動させるだと、どうなっている。今までの陰陽術の常識を全て覆している。

(なるほど、納得だ)

これほどの才をむぎむぎ手放す事は誰だつてしない、今代の陰陽寮が腐敗しきつていてその再構築を考えておられる帝だ。藤原の姫、輝夜様を楔にしても残そうとするのは横島を頭目に据えるつもりなのだろう。

「それは余りにも一般的ではないね、劍指と足の動きは知ってるかね？」

「……劍指は判りますけど、足の動きも関係あるんですか？」

「良いだろう、それも含めて指導しよう」

恐らく彼は基本的な技術を何も納めていない。空中に文字を刻んだのは霊力操作に長け、血文字は血自身に陰陽術に関する情報があると言うことだろう。

(間違いなく、彼もまた鬼子)

旅をしていると聞いていたが、恐らく前住んでいた場所から追放されたのだろう。だがその決断をした者に感謝する、これだけの才を持つものはそうはいない。それを自ら手放した愚か者を脳裏で嘲笑い、私は横島に陰陽術の指導を始めるのだった。

(良かったのか?)

(ああ、これでいい。目の色が変わっただろう? 学べるだけ学んでおけ、これは滅多になりチャンスだ)

西郷に札を使わないで発動させれる陰陽術を見せたのは心眼の指示であり、横島に足りない知識と術を指導させる為の行動だった。

(ちよつと気が引ける)

(どうせこの時代からはいずれ去る。割り切るんだな)

何もかも利用しろと言う心眼に対して横島は世話になつていゝ人間や、親身に相談に乗ってくれる西郷を利用する事に抵抗があつた。しかし心眼が居なければ横島は簡単に情に囚われ、どつちつかずになつてしまつていた。冷酷とも取れる心眼の判断が、横島を救つていゝことに横島は気づく事は無く……。

「そう、その感じだ。印を結ぶときは手早く正確にだ」

「は、はい!」

申し訳ないと思ひながらも横島は西郷から陰陽術の手ほどきを受けて、確実に陰陽術に対する理解を深めているのだつた……。

しかし横島達が戦いに備えているのと同じく、アスモデウス達もまた動き始めていた。

その9

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その9

くくえす視点く

横島達が消えて2日、東京にいるブリュンヒルデやビュレト様達も集まり、高島の屋敷の周辺を調べていた。

「……やっぱりだな、時空の裂け目がある。こいつがどこかの霊力か魔力に反応して開いたという所か」

「それを開いたら横島の所へ行けますか？」

ビュレト様にそう尋ねるとビュレト様は首を左右に振り、私の方を見ながら後ろ親指で背後を指し示した。

「これは自然の時空の裂け目だ。下手に開いたらそれこそ未曾有の災害を起こしかねない」

「魔界や天界と繋がるくらいなら良いんですけどね……」

天界でも魔界でも無い場所に繋がれば何もかも終わると遠回しに言う2人に私は唇を噛み締めるしかなかった。

(私と何が違うと言うのか)

何故あの時私達は弾かれ、美神と蛭達だけが横島と姿を消したのか、私とあの2人とは違うのか、ただ運が悪かったのか、それとも縁が弱くて弾かれたのか……。

「落ち着け、動揺しても何にもならないぞ」

「……はい」

自分と蛭達の何が違うのか、歯が砕けんばかりに噛み締め悔しさと胸が一杯になりながら僅かな残滓を必死で調べる。ここ2日間調べているが、ジツとしていると焦燥感ばかりが胸に募って集中も何も出来ないのだ。

「……共通点があるはず。横島君達に何か……縁を越える共通点があるはずなのよ」

「そうですね。そうでなければ説明が付きませんものね」

屋敷で暮らしている間に時空の裂け目が開く前兆は無かった。ヒヤクメが来た瞬間に裂け目が開いた事を考えると、ヒヤクメが鍵だったのか……それとも神魔の人数？。

(紫は天魔の所にいますが、最悪呼んでみますか……?)

空間に干渉する能力を持つ紫は目の前で横島が消えたショックで意気消沈してしまい、仲良くなった天魔の所……即ち天狗の所で世話になっているが……呼び寄せて時空間を調べて貰おうかと考えていると躑躅院が戻って来た。

「天狗の方はどうだった？協力してくれそう？」

一応京都は躑躅院の領域だ、天狗も京都に住んでいる以上交渉の優位は躑躅院になる。琉璃が協力を得れそうかと尋ねるが、躑躅院は首を左右に振った。

「何の手掛かりも無く動きはしないと云われてしまったよ」

「……無駄な事を嫌いますからね」

「お前が交渉しても駄目か？」

【無理でしょう、主殿がいればまだしも、基本天狗達は必要以上に人間には干渉しませんしね】

信長と牛若丸も気落ちした様子で呟いた。天狗はかなり横島に対して友好的だったので、もしかしたらと思っただけに、何の手掛かりも確認も無く動かないと言われたのは想定外だった。

（いえ、天狗は既に譲歩しているって事ですか）

もっとも神魔に狙われるであろう紫を保護している。それが天狗としての横島に対する最大の協力なのだろう、これ以上は何か手掛かりが無ければ天狗を動かすことは出来ないだろう。

「手掛かりなんて、私達が欲しいわよ」

「本当だな」

突然生まれた時空の裂け目……気配も何も無く生まれたそれが何が原因だったのか、

何故このタイミングで、そしてどうして横島達を吸い込んだのか、何故私達を拒絶したのか、この2日間考えても答えは愚か、何の手掛かりも得ることが出来ない。

「天狗の助けは無理そうね」

「そうですね。仕方ありませんわ」

天狗の知恵があればと思いはしたが、今の状況では何の進展もない可能性が高い。そう思えば仕方がないと割り切って、また別のアプローチが出来ると前向きに考えるべきだと私は思った。

「やつと来たか」

「随分遅かったですね……おや？誰か一緒ですね？」

ビュレト様達の声に顔を上げると小竜姫が飛んでくる姿が見えたが、その後ろに白い陰陽服に身を包んだ男性の姿があった。

「ッー！」

「これは……凄い」

姿を確認するだけでびりつと霊力が全身に走った。小竜姫と同格……もしくはそれに匹敵する神魔であることは明らかだった。

「すいません、遅れました。でも頼りになる助っ人が来てくれました。なんでも今回の事件についてご存知だそうです」

小竜姫が笑いながら告げると、小竜姫から少し遅れて着地した男が頭を下げた。

【失礼、それがし大宰府天満宮に祀られている神。菅原道真と申す、此度はかつての戦いについて語りに参った】

菅原道真……怨霊であり、学問の神であり雷神……確かにこの霊格、桁外れの神魔であることは間違いない。

「かつての戦いとはなんだ？」

【平安時代にそれがしは、アスモデウスの手によつて怨霊へと成り果てた。その呪縛から解き放ってくれたのは横島殿達なのでな。その時の恩返しに参った】

平安時代に今横島達はあるようだが、まさかそこにアスモデウスがいるなんて想定外だ。

「横島さん達はご無事なのですか？」

【……今の所は無事じやろう、しかし狂神石によつて狂わされた長尾景虎と源頼光との戦いはこれからの筈。終わっておれば……美神殿は

一度この時代に戻ってくる筈じやからな】

「な、長尾景虎ッ!？」

「それに源頼光ですか……」

日本では拔群の知名度を誇る武将が2人……しかもそれが狂神石によつて狂わされ

ている。そんな相手と横島達が戦っていると聞いても、私達はそれを助けにも行けない、ただ無事に戻ってくる事を祈るしかない事に私は強く唇を噛み締めた。

(どうしていつもこんなことになるのですか……)

守る事も、助ける事も出来ない場所に横島はいつも行ってしまう……自分だけが置いて行かれる事が辛くて、何故私では駄目だったのか、私と螢の何が違うのか……1度考えないようにはしていたのに、再び脳裏を過ぎった考えが繰り返し繰り返し私の頭の中を流れ続けるのだった……。

く横島視点く

満月が昇った頃合で叩きつけるような霊力が屋敷に向かつて放たれた。言うまでも無くそれは挑発、私はここにいと、俺にだけ霊力を向けているのが良く判る。

「……行くしかないよな?」

【罨と判っていてもな】

陰陽服からGジャン、Gパンに着替え、服の内側に陰陽札とお守り代わりの精霊石を入れて最後に額に心眼を巻いた。

「みむう……」

「ぶぎゅ……」

「輝夜ちゃんともこちゃんを頼むな」

俺が動き出した事に気づいて起きてきたチビとうりぼーに2人を守ってやってくれないと頼み、机の上の金色の眼鏡に手を伸ばす。

「戦える？」

「……全快とまでは言わないが、それでも行けるぜ」

本当はもう少し金時の霊力を回復させたかったんだけど……あの戦いから2日。2日の猶予が与えられただけでも十分と思うしかないだろう。

(グレイト、牛若丸、ノツブちゃん、金時……か)

急に時空の境目に吸い込まれたので手持ちの眼鏡は決して多くない、もしもなら物理に強いシズク眼鏡とかがあればまだ何か変わったかも知れないなど思いながらも、ない物強請りは出来ないので準備を終えてスニーカーを履いている屋敷を出ると背後から声を掛けられた。

「びっへ行くっ？」

西郷さんの声に俺は振り返ること無く返事を返した。

「……戦いに行きます」

「1人でどうこうなるか？ 増援を呼ぶ、1人で死地へ行くな」

「ありがとうございます。心配してくれて、でも俺に任せてください」

陰陽師では英霊には勝てない、俺だって本当なら勝てない。だけど俺には眼魂と金時がいる……それだけが俺の勝算で、そのどちらも通用しなければ俺は死ぬだろう。

(絶対に死なないけどな)

絶対に現代に戻って見せると誓い、必死に俺を呼び止める西郷さんの声も無視して、俺は源頼光が待つ場所へと向かうのだった。

「ああ、やっと来てくれましたね。母はとても嬉しいです」

刀も鎧も身に付けていない着物姿の頼光は俺の姿を見るなり、その顔を嬉しそうに緩ませ俺に向かって蕩けるような甘い声で囁いてきた。その声自身が俺自身を蝕んでくような気がした。いや、事実そうだったのだろう……心眼の気をつけろという声が無ければ呼ばれたら無防備で近づいていたかもしれない、首を左右に振って頬を叩いて気合を入れる。

「頼光の大将。俺ツチはあんたを倒すぜ」

「……黙れ、お前の顔を見ると頭が痛くなる、私の前から消えうせろッ！」

さっきの甘い声から一転して周囲を揺さぶるような激しい一喝。そしてそれと共に頼光の姿は着物姿から鎧武者姿へと変わり、その目が真紅に輝いた。

「こいつを殺したら、貴方を連れて帰りますからね？ 私の愛しい子」

狂気と愛情が見え隠れしている、これが狂神石によつて狂わされた英霊の末路なのか……。俺は強く拳を握り締め、グレイト眼魂を握り締める。

「俺達はあんたを止めるぜ、絶対な」

これ以上あの人を人を殺させない、絶対にここで止めてみせる。グレイト魂のボタンを押し、ベルトに押し込む。

「アーイー！ガッチリミナー！ガッチリミナーッ！」

ゴーストドライバーから飛び出した黒を基調にしつつ、金色の兜を被ったようなパーカーが俺の周りを踊る。

「ふふふ、いいですよ、母が遊んであげましょうね」

にこにこ笑っているが頼光の全身から溢れる殺気に背中に冷たい汗が流れた。これほどまでに怖いと思つたはマタドールと対峙した時か、ガープと戦つた時以来無い。つまり頼光がマタドールとガープと同等の強さを秘めていると言う事が嫌でも判つてしまった。

「俺ツチもいる、2人なら何とかなるさ」

「ああ。頼りにしてる」

きつと俺一人では、この場に立つことも出来なかつただろう。歴史に名を刻まれた怪

るのだった……。

く金時視点く

雷のような音が響き、俺ツチと横島が吹き飛ばされ地面を転がる。

「くそっ！前より全然早いッ!!」

【ありやあ頼光の大將の全盛期だッ！前とは比べ物にならねえッ!!】

羽を思わせる頭飾りと全身の具足。しかも前回は刀を主武装にしていたが、今回は刀と弓矢をほぼ同時に使ってきている。

【がっ!?!】

「金時ッ!?!」「ふふ、余所見は駄目ですよ?」「ぐあっ!?!」

俺ツチの肩に弓矢が突き刺さり吹き飛ばされるのを見て、横島が俺ツチの名を呼んだが、その瞬間に頼光の大將が横島の前に移動して大太刀を振るう。火花を散らして吹き飛んできた横島を受け止めるが凄まじい衝撃に俺ツチも地面を再び転がる。

【大丈夫かッ!?!】

「な、なんとかか！ウイスプだったらやばかったッ!」

黒い姿だから耐えれたという事なのだろうか、とりあえず耐えれたのは良かったが英霊である俺と違って生身なのであまり無茶はしないで欲しいと思う。

【支援とか出来るか？】

横島を死なせる訳にも行かない、なら俺が前衛を張り横島に支援をしてもらうのが最善策だ。

「火繩銃と弓矢なら使えるぞツ!!」

【うっし、得意な方で頼む!】

黄金喰を手にして頼光の大将へと走る。靈力も何もかも万全じゃない状態で、全盛期の頼光の大将と何処まで打ち合えるかわからねえが……

(ぐだぐだ考えてる場合じゃねえツ!)

考えている時間があるなら突っ込め、あの赤黒い靈力を振り払えば正気に戻るかもしれない。それにこれ以上人を殺させる訳には行かない、刺し違えてでもここで大将を止めるツ!!

【ウオラアアツ!!】

【邪魔】

渾身の力をこめて振り下ろした一撃も虫でも払うような腕の一振りで弾かれる。がら空きの胴に刀の一閃が叩き込まれる前に背後から放たれた矢が刀の切っ先を僅かに逸らした。

【ぐうっ!?!】

斬られたわき腹を押さえ、地面を蹴つて間合いを離す。俺の知っている頼光の大将よりも遙かに力が強い……これが狂神石の力。

(神魔と英霊を狂わせる……そりゃ頼光の大将には耐えれないわな)

俺は知っている頼光の大将の中に眠る魔を、それが狂神石によって目覚めかけている……俺はそれを本能的に感じ取っていた。

【良いですね、良くこの切っ先を弾きました】

俺に対しては何の興味も移していないが、横島に対しては一挙手一投足を一つも見逃すかと言わんばかりに注視している。

(……頼光の大将)

将であれと言われ、世継ぎを作れといわれた、そのどちらもやろうとした大将。どこまでも真面目でそして融通が聞かないところもあつたけれど……鬼子と言われた俺を育ててくれたのはあの人だ。だから俺は何としても大将を止めるッ！血反吐を拭いながら大将を睨みつけていると大将は思い出したように手を叩いた。

【うふふ……ああ、そうですそうです。瓢箪を抱えた鬼がいましたね】

【!?】

大将の口から語られた言葉に走り出そうとした足が止まった。大将はそんな俺を見てくすくす笑った。

「私の方が化け物だと言って、もう一人の鬼を逃がして最後まで笑っていたので首を刎ねましたよ、なんて思い出したんですかね？」

ギリツと歯を噛み締めた。間違いない、酒呑だ……俺ツチだけじゃなくて、大将を止める為に呼び出された英霊は他にも居たんだ。ほかの四天王の武器を持っているのもカウンターとして召喚されたが、止める事が叶わず打ち倒され宝具を奪われたのかもしれない。

「小僧の事も忘れた牛女って言われましたけど、ふふふ……小僧って誰の事なんですかね？」

挑発だとわかっていても額に青筋が浮かぶのがわかる。これでよーつく判った。姿形は大将でも、もう大将じゃねえ。一元に戻すなんて考えていたが、それがどれだけ甘い考えかが良く判った。

「もう良い喋るな」

「まあ酷い、母に向かってなんて口を利くのですか」

横島が俺の手に何かを握らせた、それは小さな丸い球体……手の中で靈力を放出する球体。身体に活力が満ちていくのが判り、困惑していると横島が小声で声を掛けてきた。

（言っとくけど、回復した訳じゃないからな、誤魔化しだから効果が切れると一気に身体

が重くなるから気をつけてくれ)

短時間でも身体の事を気にしないで戦えるのはありがたい、だが横島が前に出てくるのは不味い。

(下がってもいいんだぜ?)

(冗談、前に出ても、後ろにいても結局は同じ。それなら前に出るぜ俺は)

この思い切りの良さ……嫌いじゃねえな、横島が手にしている剣に黄金喰を打ち付ける。人間だから守らなければならないと思っただが、横島は背中を預けて戦うのに相応しい相手だった。

「うっし、行くぜッ!!」

「おうッ!!!」

俺と横島は同時に地面を蹴り、頼光の大将に向かって駆け出すのだった……。

く頼光視点く

愛しい子と金髪の大男が同時に駆け出してくるのが見える。それは確かに普通の人間で考えれば、十分に驚異となる速度なのでしょうが……。

【遅いですよ】

愛しい子の剣を素手で受け止め、大男の斧を刀の腹で受け止める。左右からの挟撃だ

が、この程度恐れる事は勿論警戒するまでもない。

「マジか!?素手で受け止めるか!？」

【馬鹿ツ!うろたえるんじゃねえ!踏み込んで押し切れツ!!】

斧から感じる圧力が増したのを感じ、刀を振り上げ斧を上に向かって弾き飛ばしながら空きの胴に前蹴りを叩き込んだ。

【げぼっ!？】

「■■ツ!」

くぐもった声を上げ鞠のように飛んでいく男を見て愛しい子はその名を呼んだ筈だ………だけど私の耳はその名前を認識する事が出来なかった。

(そう言えばあの鬼も………なんであんなに執着したんでしょね?)

「ぬっ!くぬうっ!!」

愛しい子が必死で剣を振るうのを見つめながらも、頭の中はべつのことを考えていた。何故あんなにも徹底してあの鬼を切り刻んだのか………今思うとその理由が判らない。

「変身ツ!!」

【カイガン武蔵ツ!決闘!ズバツト!超剣豪ツ!】

赤い衣服を着込んだ瞬間動きが格段に鋭くなり、考え事を中断させられる。

「踏み込みがまだまだ、もっと思い切り踏み込まなければ駄目ですよ」

「あぐっ?! なるおッ!」

突っ込んできたタイミングで足を蹴りつけ動きを止める。それでも愛しい子は動きを止めず、両手の剣を即座に振るってくる。

「まだまだですわね」

剣筋は鋭くなっている、だがそれは明らかに付け焼刃。自分の物として昇華されていない技術など恐れるまでもない。

「少し大人しくしていきくださいわね」

腹に拳を叩き込み殴り飛ばすと同時に抜刀し魔力刃を飛ばす。

「うつくくう……うわあッ!」

剣で魔力刃を受け止めようとしていた愛しい子ですが、耐え切れなくなったのか苦悶の声を上げて吹き飛んだ。

「さあ、手足を落としましょうね、大丈夫ですよ。母がずっと愛してあげますからね」

動けないようにして連れて帰ろう、そして誰にも邪魔をされない場所ですつと暮らそう。

（ああ、それは何と素晴らしいことなのでしょうか）

私がいなければ動く事もできない我が子と長い時間を過ごす、その素晴らしさを考え

ながら一步踏み出そうとした瞬間、私は反射的に腕を振り上げていた。

【オラアツ！】

【邪魔ですツ！】

後ろから斧を振り下ろしてきた一撃を受け止め、そのまま背負い投げの要領で愛しい子の方へ投げつける。

「■■ツ！うおっ!？」

【がつ！すま……あぶねえツ！】

2人が話している隙を突いて男の顔面に矢を放つが、私の矢は男の髪を僅かに消し飛ばすだけに留まった。

「これでもくらえツ！」

【おや、これは面白い。でも無意味です】

剣の先から靈波が飛んでくるのは面白かったですが、面白いだけで警戒する必要も恐れるもない。避けると同時に手にした弓を引いた。

【あぶねえツ！】

男が愛しい子を庇い、流血する。愛しい子を狙った訳ではないが……なるほど、あの男が邪魔をするならばここで愛しい子を狙う振りをして消し飛ばしてしまっただけが早いですね。

【牛王招雷・天網恢々】

【やべえ宝具だツ!!】

「嘘だろツ! くそつたれ間に合えツ!!」

男の方が気付いき、愛しい子が障壁を作り出すのを見てほくそえむ。愛しい子を殺すつもりは無い、障壁で動きを制限したのならばそれは私にとつて好都合。私の分身が放つた矢が一撃で障壁を打ち砕く。

【俺の後ろにツ! がツ!?!】

大男に斧の大上段の一撃が叩き込まれ、その身体に深い切り傷を残す。

「■■■■! だい…… 【横島! 後ろだツ!】 がっ!?!」

愛しい子に燃える刀の一撃が叩き込まれるが、峰を返しているのでその身体が引き裂かされる事は無い。そして氷を纏った槍から放たれた冷気が2人の姿をその場に縫い止める。

「——ふふ……あはははははっ! 矮小十把塵芥になるがいい!」

雷電が宿った魔力刃を大男目掛け振るう、愛しい子も巻き込まれるがこの一撃で間違はなく抵抗することは出来なくなる、その後手足をもいで連れて帰ろう。爆発で起きた砂煙を見つめていると突如砂煙が内側から吹き飛んだ。

【カイガンツ! 金時! 雷光! 正義! ゴールデン・スパークツ!】

【……なんですか。その姿は】

煙の中から姿を見せたのは愛しい子のはず……だがその姿からは大男と同じ気配がして、思わず眉が寄った。

【「あんたを止める事が出来るのは俺達だツ!!」

愛しい子の声に重なるように聞こえる大男の声に激しく苛立つのと同時に、思わず後ずさりかけるほどに威圧感に唇を噛み締め刀を強く握る。

【私の愛しい子から離れろツ！亡霊風情がツ!!】

愛しい子に憑依している男に激しい怒りを覚えた、何故こんなにも腹立たしいのか、何故こんなにも怒っているのかも判らず、私は激情に飲まれたまま駆け出すのだった。

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その10へ続く

その10

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その10

（横島視点）

宝具に飲み込まれる前に金時眼魂にチェンジしたが、全身に走る痛みには俺は顔を歪めていた。

（大丈夫か？）

（大丈夫ツ!!!）

歯を食いしばって大丈夫だと心の中で声を張り上げる。だがその間も全身にびりびりと走る電撃には正直顔を歪めるしかない。

【悪い、多分俺ツチの伝承のせいだ】

【人食い鬼の子供にして、雷神の子。それが坂田金時だ。英霊眼魂だが……恐らくその分類は「神霊」だ】

やっぱりかあツ!!小竜姫眼魂とかを使った時の感覚に似てるからもしかかしてと思っていたけど、その通りで本当に叫びそうになったが、叫んでいる余裕は無かった。

「ぬっぐうッ!!」

【我が子から離れろおッ!!】

やべえよ……完全に目が逝つてる……ッ!!俺達で止めるとか叫んだけどこれはやべえッ!!目の前の圧力と全身に走る痛みで意識が飛びそうだ。

【集中しろ、一瞬たりとも気を緩めるなッ!】

心眼の一喝で歯が砕けんばかりに嘔み締め、右手の黄金喰いと左手のガンガンブレードを振るう。

【ちいいッ!!】

光にしか見えない神速の一撃を弾き飛ばすが、右手の斧が重くてバランスが上手く取れない。

【シッ!!】

刀を一瞬間に納め、瞬きの間に放たれた弓を黄金喰いで防ぎ、ガンガンブレードを振り上げる。矢を放つと同時に上空に飛び上がっていた頼光の全体重を乗せた突きを両手で受け止める……だが、霊力と魔力、そして純粹にその臂力の凄まじさに地面に足がめり込んで行くのがわかる。

【少し我慢しろッ! 行くぜえッ!!】

頭の中で金時の声が響いたと思った瞬間。全身がカッと熱くなるのを感じ、そのまま

腕を振るうと頼光が空中で蜻蛉を切っている姿が飛び込んできた。急に力が増した感覚がしたが……きつと金時が何かしてくれたのだろう。

【長くは持たねえ、今の内に攻め込むぞッ！】

【それしかあるまい、横島。前に出ろッ!!】

2人の声に背中を押されるようにして地面に突き刺さったままの黄金喰いを片手で掴んで地面を力強く踏みしめると同時に地面を蹴りつける。

「おりゃあああッ!!」

【速いッ!!】

一瞬で20m近い間合いを詰め、そのままの勢いで黄金喰いを振るう。だが頼光はその奇襲にも完全に対応して、刀で黄金喰いを受け止める。だからその上から左手のガンブレードを叩きつける。

【くっ……ッ!!】

「うぐぐうっ……ッ!!!」

完全になから押し潰す形になったのだが、押し切れない。少しでも力を抜けば一瞬で弾き飛ばされるのが判る。

(すげえ力だ)

英霊である事は勿論把握している。だがそれを差し引いても頼光の力は凄まじい。

だけどこそのまま何としても押し切る……。

【横島！離れろッ！】

心眼の音が聞こえたが、すぐに反応出来ず気が付いたら俺は満月を見つめていた……いや、水平に吹き飛んでいるのだと気づき、黄金喰いを地面に突き立て無理やり静止する。

「……………うつ……………何が起きた……………」

頼光は動いていない、なのに何故俺は吹き飛んでいたのか、何が起きているのか判らず混乱していると金時の声が脳裏に響いた。

【影だ、影から腕が出てきた】

「……………そんな能力まであるのか？」

今はそれらしい物は見えていないが、腕が出てきたと言うのならそれは嘘ではないだろう。問題は頼光がそんな能力まで持っているのかどうかだ、何度でもそんな攻撃が出るのならば下手に白兵戦も仕掛けられなくなる。

【いや、恐らく……………頼光自身も想定外なのだろう】

【い、今のは……………私……………私なの？】

茫然自失という感じの姿を見ればそれがどれだけイレギュラーな事だったのかが判る。

(どうすれば良い?)

このまま前に出るのか、それとも距離をとって様子見すれば良いのかと心眼と金時に問いかける。

【金時魂のままでは遠距離攻撃が出来ない、眼魂を変えるなら構わないが……7割の確率で押し負ける】

それは俺も判っていた。頼光のほうが射撃の技能が高い、グレイト魂をロビンフッドに変えれば互角の打合いが出来るかもしれない。けどそうなると間合いを詰められると防御力の低いロビンフッドではそのまま変身解除に追い込まれかねない。

【かなり苦しいがどうするつもりだ?】

【そんな物は決まってる】

金時の言葉に返事を声にして返す。頭の中で返事を返す事も出来るが、それだといざってという時に足が止まってしまいそうだから、決意を固くすると言う意味も込めて口にした。

【しょうがない奴だ】

心眼がしょうがない奴だと苦笑する。正直俺だってそんなことをしたくないが、この絶望的な30mを駆け抜け再び間合いを詰めなければ勝機は無いのだ。

「苦しい時はなッ! 歯あ食いしばって前に出るんだよおッ!!!」

先ほどの身体が燃える様な熱はない、それでも前に出るしかないのだ。なんとしても再び間合いを詰めて今度こそ頼光を止める。俺は決意を新たにガンガンブレードと黄金喰いを握り締め頼光に向かって駆け出すのだった……。

〈金時視点〉

眼魂とやらに吸い込まれて、横島と融合したのは正直俺ツチも驚いた。だが、宝具のダメージで消滅寸前だった事を考えれば横島の取った行動は決して間違いではない。

「う……あ、頭が……」

顔を歪め頭を振る頼光の大将。月明かりに照らされたその影がその姿よりも遥かに大きく、そして不気味にうごめいている。

（まさか……）

思い当たる節が無い訳ではない、だが確証が無い。生身であったころならばありえないと言い切れるが、今の俺は「英霊」だ。そうあれと、そう会ってほしいと、そして歴史によって作られた部分が大きく自分にも影響している……頼光の対象の影で蠢く何か……それも自分と同じなのではと言う可能性が脳裏を過ぎった。

「くっ、こ、のおッ!!」

横島の苦しそうな声と金属の音で思考の海から引き上げられた。苦しそうなその顔を見て、どうしても救いたいと思つたから考え込んでしまつていた。

【大丈夫か、横島!】

「な、何とか! でも長くは持たないかもしれないッ!!」

横島と頼光の大将の距離は殆ど変わっていない、横島は勇敢に前に出ようとしているがその度に空を裂く弓矢に足止めされている。

【金時、お前の目で何とか見切れないか!】

【む、無理を言うなよ! 心眼ッ! 頼光の大将の射の腕前は尋常じゃないんだぜッ!】
見切れるのならば眼魂に入る前に見切つて間合いに入り込んでいた。それが出来ないということとは俺ツチではあの射を見切る事が出来ないのだ。

「じゃあ、おらあアッ!! 大体判つたぞおッ!!」

一際大きな音を立てて弓矢が天に向かつて弾かれる。天性の反射神経と常人離れた動体視力……くやしいが俺ツチには無い物を横島は持つている。だがそれに腹を立てる事も嫉妬する事も無い、今は味方なのだ。それを喜ぶのは当然の事だった。

(これなら行ける)

俺の頑丈な肉体と怪力、そして横島の天性の反射神経と動体視力があればこの弓の雨

を潜り抜け、黄金喰いとガンガンブレードと言う剣の射程距離に頼光の大将を捉える事も決して不可能ではない。

【抜刀術に気をつけろ、それと影だ。判ってるな?】

「おうツ!! 判ってるツ!!」

ジリジリとすり足で少しずつ、少しずつ横島は前に出ている。だけど、俺ツチには判ってる。横島は恐ろしくて、今だつて逃げ帰りたいと思っている。

(凄い奴だ。お前は……)

俺ツチの頼光の大将を止めたいと言う願いを叶えようとしてくれている。

自分では無い誰かの為に横島は頑張っている。

きっと、こいつは誰よりも戦場と言う場所から程遠い男だ。それでも、戦わなければならぬ場所と言う事を理解している。

ここで逃げて、頼光の大将が完全に魔に堕ちたのなら、もう頼光の大将は英霊としては死ぬ。

人類の抑止力が闇に落ちたことを世界は認めない、どこまでも世界と言うものは残酷で、そして合理的なのだ。

【ううう……痛い……頭がいたい……】

頼光の大将が苦しそうに言う、頼光の大将を操っている何かに無意識に反抗している

のだろう。だからこそ、それが頭痛となつて頼光の大将を襲っている。だがそれは紛れもなく、俺ツチ達への頼光の大将の支援だった。

【横島あッ!!!】

心眼と同時に叫んだ。今まで雨霞のように打ちこまれていた矢が止んだ、俺ツチ達の声に横島が即座に反応し、地面が陥没するような踏み込みで頼光の大将へと肉薄する。

【っー!】

「でやあああッ!!!」

渾身の気合と共に黄金喰いが振り下ろされようとした時、またもや頼光の大将の影が蠢いた。だが、それは横島の攻撃を防ぐのではなく、足に絡み付いて逃げようとした頼光の大将の動きを封じた。

【あああッ!!】

辛うじて直撃を回避した頼光の大将だが、足を封じられた状態で今の一撃は耐え切れる物ではなく苦悶の声を上げて吹き飛ぶ。そして殺気は一瞬だったから認識できなかったが、この距離だったから俺ツチは感じていた。あの影の腕の正体は何なのかを俺は叫んでいた。

【やっぱりあんたかッ! 丑御前ッ!!!】

【……金時、早く私達を止めなさい、何もかもが手遅れになる前に……】

【ううううーッ！ 誰だ！ 私の中で喋るなあッ!!】

半狂乱の頼光の大将とそれとは対照的に冷静な丑御前。本来ならば逆の関係ではある、だが丑御前の存在が頼光の大将が完全に堕ちる寸前で踏み止まっていられる理由なのだ。俺は理解したのだった……。

く横島視点く

丑御前……？ 金時の口から語られた言葉に困惑していると心眼が気を緩めるなよと忠告してから教えてくれた。

【源頼光の兄弟とされ、天神の子とされた鬼子だが……どうも事実は異なるようだな？】
【……おう、頼光の大将は二重人格にされちまったんだよ。世継ぎを生めだの、将として活躍しろだの……女としての大将と男としての大将の人格が生まれちまって、女としての部分が多分丑御前だ】

「糞じゃねえかよ……」

なんで過去のお家騒動ってこんなにどろどろしてるんだよッ！ そんな話は聞きたくなかったが、その話の内容が好機を作り出してきてくれた。

【男の部分がガープによって操られ、女の部分がそれを止めようとしていると言う所か】
【多分な、だけど丑御前は俺ツチが封印した……つまり……】

「金時がいるってのが駄目ってことか……」

英霊には明確な弱点がある、今回は丑御前が頼光を封じているが、金時がいる以上丑御前は本来の力を行使できず、いつまでも頼光を封じることが出来ないと言うことだろう。

【もう時間はそう多くないが……行けるか?】

「行けるかじゃねえ、やるんだよッ!!」

やる前から諦めるなんて真似はしない、金時の思いも、丑御前の願いも背負って俺は頼光を倒す。地面を強く蹴り、頼光へと肉薄する。

「おおおおおーッ!!」

【くっ……舐めるなッ!!】

その言動と声色に既に女としての柔らかさは無い、男の人格と言うのも間違いではないのだろう。

「ぐっ! がっ!」

黄金喰いの一撃を刀の柄で防がれ、反撃に繰り出された蹴りで肺から空気が無理やり押し出される。それでも歯を食いしばり、ガンガンブレードを突き出す。

【ッ!】

「おらあッ!!」

顔を逸らして突きを交した頼光の服を掴んで悪いと思つたが無理やり引き寄せ、頭突きを叩き込む。

【うぐつ……】

【つつう……】

互いによるめきながらも反射的に獲物を振るう。風を切る音と火花が何度も何度も散り、互いの身体に攻撃が当たる事を繰り返す。

（くつ……やつぱりかッ！）

互いの攻撃が交差していると言つてもやはり俺の技量が劣っているのは明らかだ。頼光よりもダメージが蓄積しているのが判る……いや、これはダメージだけじゃないか。

【横島、長くは持たないぞ】

【……すまねえ】

神霊眼魂の体に掛かる負担は決して少なくは無い、ダメージよりも先に俺の身体が悲鳴をあげ始めていた。

「気にすんな、行くぜえッ！」

【誰に話しているッ!!】

大切な人を助けたいと思うのは当然の事だ。俺だって、美神さんや蛍、それに琉璃さ

んや神宮寺さん……カオスのジーさんや西条さん。助けたい人、守りたい人は沢山いる。俺は弱くて、何も知らなくて、そんな俺を助けてくれている人に今は守られているけど、いつかは俺が守れるようになりたいってそう思っている、だからッ!!

「金時は何も間違つてねえッ!!」

大切な人を守りたい、救いたいという気持ちの間違っている訳が無い。それはきつと、なによりも正しい気持ちの筈だからッ!!

【がつ!!】

雷電を纏った黄金喰いを振るつた。それは始めてクリーンヒットし、頼光を大きく弾き飛ばす。今までなら、即座に態勢を立て直していたが今はふらつき、頭に手を当てている。それは頼光と戦い始めて初めて見たかもしれない大きな隙だった。

「こいつで決めるッ!!」

【ダイカイガンツ!金時ツ!オメガドライブツ!!】

ガンガンブレードを投げ捨て、両手で黄金喰いを握り締めるとカートリッジが5つ排出された。

「う、ぐぐうう……ッ」

【大丈夫かッ! 横島ツ!!】

黄金喰いから伝わってくる電撃に歯を食いしばる、少しでも油断するとその一瞬で意

「滅びの因子は目覚めた、だがこれは運命に刻まれた出来事。その力をどう使うかは……君次第だよ。横島忠夫」

金時に担がれ運ばれていく横島を見つめフードの男は楽しそうに微笑み、月夜の中手にした本をゆつくりと捲り、夜風と共に姿を消すのだった……。

く美神視点く

まだ生きている初代様の元で世話になっていた私達だが、その顔は全員が険しかった。

「昨日の異様な雷は……まず間違いないと思うんだけど、どうかしら？」

「确实だと思えます」

「……全くあいつはまた無茶を……」

「やっぱり私が行きましようか？」

神通力も魔力の気配も無い雷……しかしそれでいて尋常じゃない霊力があるとすればそれは眼魂しかない。まず間違いなく横島君が新しい眼魂を使い、英霊頼光を撃破したのだろう。

「それってそんなに不味いの？」

「不味いわよ、魂に過負荷をかけるから下手をすると数日は動けないわよ」

「うげえ……どうするのよ、あんた達が探してる奴なんでしょ？」

「ここ数日で仲良くなったメフィストがどうするのさと言うが、私たちの方面としては何としても横島君と合流するのが第一目標だ。」

「術式の陣も刻んだ、後は待つだけね」

「……そう、ですね」

突発的な遭遇で勝てるほど、長尾景虎は甘くない。しかも勝つためには戦力を整え、そして罠に追い込まなければならぬのだ。焦る気持ちを抑え、長尾景虎が動き出すのを待つしかない。

「……寝ておけ、高島が今夜と言っている、後メフィストはこっちに」

平安時代のシズクが顔を見せて無愛想に言つて、すぐに姿を消した。

「んじゃ、私は高島が呼んでるみたいだから行くよ、頑張ろうね」

頑張ろうと言つて宙を浮いて部屋を出て行くメフィスト。変な言い方になるけど、姿は大人でも中身が子供だから紫ちゃんとか天竜姫が横島君にじゃれ付いているような感じなのよね。

(この時からつてことか)

横島君の子供や、精神面が幼い人間に好かれるのはこの時からなんだと思うと、何と

もいえない穏やかな気持ちになった。

「シズクさんもく横島さんと一緒だと、あだだあああッ！」

「……首をもぐぞ、貴様」

シズクをからかつて締められているヒヤクメを見てると何か日常だなど思う自分がある。それはきつと、横島君がいる騒がしい日常に慣れたからだと思っても思う。

「今夜が勝負よ。頑張りましょう」

「はい、判つてます」

「……早く横島の様子を見に行きたいんだ、今夜何をしてもけりをつける」

「ですわね、はあ……横島様が心配ですわ」

大きな戦いが迫っているが、それでもいつも通りのやり取り。そして今回は前回と異なり万全の準備をして戦いに挑む事が出来る。

（今度こそ勝つ）

今度は絶対に勝つ、そして横島君と合流する。私達はそれだけを考えて、夜の戦いの備えて眠りに落ちるのだった……。

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その11へ続く

その11

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その11

〔高島視点〕

京で噂になっていいる横島と言う若い陰陽師が英霊を撃破したと言う話。正直眉唾物程度に思っていたが、西郷も加わり、帝、そして輝夜様……忌み子といわれている藤原の姫まで動けばそれは紛れも無い事実。

(……ちと不味い事になったか)

ここまで大々的にするという事は帝自身も相当横島を気に入っている。あの人は悪い人ではないんだが、権力などに揉まれて育ったからか、信用出来る人間は何をしても自分抱えにしようとする癖がある。

(横島が取り込まれちまうわな)

五貴族と言う盆暗が輝夜様に婚姻を申し込んでいるが本人がその条件として宝を持つてきたらと言った。だがそれは帝が口を挟んでいないからだ。ここで帝が横島と言えば五貴族の申し出は全て却下されるだろう。

「悪いけど、清姫とシズク。横島とやらに接触してきてくれるか？」

「……それは構わないが、英霊はどうする？」

「多分お前達はいない方が良い」

シズクと清姫の力は京でも有名だ。そんな2人が討伐に加わったとなれば、いらぬやつかみを受けるだろう。そうなると帝のお気に入り横島と美神達を面会させるというのは難しくなる。危険は承知だが、俺の時代のシズクと清姫は参加しないほうが良いだろう。

「まあ、1000年後の私もいますし、大丈夫でしょう。では私は高島様の転生者とやらを見に行くとしましようか」

「……そうだな、気にはなっているしな」

本気で2人が動けば陰陽師の結界なんて何の問題も無い。それに英霊討伐の実績の問題でやつかみを受けるかもしれないから、その護衛位にはなってくれるだろう。

「高島様くやすまなくて大丈夫？」

「いや、今から休むよ。幸華」

そう笑い掛けて目の前を通り過ぎようとする到着物を掴まれた。

「気をつけてくださいね。私は出来る限りの準備をしました。でも……それでも相手は強い」

「ああ。判ってる、ありがとう。心配してくれて」

幸華に礼を言つて宛がわれた自室へ向かう。

「呼んでおいていないとか悪いと思わないの？」

「はは、すまないな。打ち合わせをしていた」

頬を膨らませているメフィストに悪い悪いと謝罪の言葉を口にし、六道の屋敷に居間に用意していた特注の陰陽札を渡す。

「英霊との戦いはお前が切り札だ。札を切る所を間違えないでくれよ」

「責任重大ね、でも任されたわ」

俺でも用意出来たのはたったの2枚。これを外せば、俺達にあの化け物を倒す手立ては無い。真正正銘の切り札だが、これを使えるのはメフィストしかいない。神妙な顔で特製の陰陽札をメフィストへと託すのだった……。

くシズク視点く

六道幸華、そして高島忠助と平安時代でも指折りの陰陽師の作り出した術式の中に英霊「長尾景虎」を追い込むというのが1番の難関であると私達は考えていた、だが目の前の光景に呆気にとられながらも、英霊の誇り高さを私は見た……。

【ギリイ……ッ!!】

歯が砕けるほどに噛み締め、拳からは血が滴らせながら長尾景虎は陣の真ん中にいた。

「……コレガ……ワタシに出来る……サイゴ……」

血涙を流し私達を見つめる長尾景虎。最早これ以上アスモデウスの支配に抗うのは不可能と言うのが目に見えて判った。

「……までやってもらって、出来ませんでしたじゃないわね」

「……そう、ですな」

正直自我を失った所で長尾景虎と言う英霊は桁違いに強い、陣の中でどれだけ弱体化させられるかも未知数だ。だが自分から不利になる場所に踏み込み、そして待っていたと言う長尾景虎の意志に報いなければならない。

「俺と幸華の作った陣は月が昇るほどに効果を發揮する。最初は無理せず行くぞ、特にメフィストな」

「……判ってるってッ!!」

月は今登り始めたばかり、最大の効果を發揮するまでは相当の時間が掛かるだろう。それに焦れて突貫するなよと高島がメフィストに注意する。

「……お前も考えなしで突っ込むなよ」

「判ってますわよ、私は死にませんわ。横島様に再会するまでッ!」

こいつは殺しても死にそうに無いなと苦笑し、地面に手を当てる。

【小賢しい真似をツ！】

「……人間と戦うんだ。知恵を使うのは当然だ」

前回は突発的な戦いだったので何の準備も出来ていなかった。だが今は違う、大量の水を吸収してきているので戦場を自分達に戦いやすいように整えるのが私の役目だった。

「スケートの要領よ、大丈夫ねツ！」

「は、はい！大丈夫です！」

美神と蛭は水を最大限に生かす戦法……スケートの要領で氷の上を滑り徹底して援護に回る、言ったら悪いが美神と蛭の攻撃力では英霊にはダメージを与える事が出来ない。それならばダメージを与えるのは無理と割り切り、妨害に回ってもらった方が有効だ。

「急急如意令ツ！風精招来ツ！」

【くつくつく……ツ!?!】

そしてそれは高島も同じ事だが、高島は陰陽術による攻撃で妨害と僅かに攻撃を兼ねている。

(……分析の結果は間違いじゃない)

確かに長尾景虎は恐ろしく強い部類に入る英霊だ。だがその根底は毘沙門天の化身と言う事に帰結する。そんな長尾景虎から毘沙門天の事を忘れさせたらどうなるか？ 答えは簡単だ。今の長尾景虎はただ身体能力の高い英霊にまで落ち込んでいる。

「……しくじるなよ」

「言われなくてもッ！」

そしてダメージを与えるのは私と清姫の2人。神魔であり、龍族である私達とメフィストだけが長尾景虎に有効打を与える事が出来る。

【神魔には興味が無いとッ！】

「そんなにつれないことを言わなくても良いんじゃないッ!!」

【ッ！】

捕縛ロープで腕を狙う美神。それは手首に巻きつき、長尾景虎の注意をそちらに逸らす。これは本来ならばありえない隙と言っても良い、人間を殺せという命令に従い、それに過剰に反応してしまっている。そしてその過剰な隙は私達にとつては非常に大きな隙だ。

「せいっ!!」

「隙だらけよッ!!」

清姫の薙刀の一閃とメフィストの魔力弾が炸裂し、長尾景虎を大きく弾き飛ばす。だ

が即座に水の腕を伸ばして足を掴んで引き寄せる。

「せーのツ!!!」

「ぐっ! 人間があッ!」

引き寄せた所を蛭と美神の両サイドからの神通棍の一撃を叩き込む。激昂した長尾景虎が刃を振るうが、それは氷で防いだ。

「これは……思った以上に厄介なッ!」

「……人間を舐めるからこうなる。人間は時に神魔よりも悪辣だぞ」

そこまで言う?と美神が呟いたが、私の中ではお前は神魔よりも悪辣だぞと返事を返す。確かに今は優勢だが、ダメージは殆ど通っていない。

(……想像以上に厄介かもしれないな)

戦闘の流れを取ることが出来ても、ダメージを与えないのでは意味が無い。こうなると高島の用意した陰陽札だけが倒せる好機かもしれない……こうなるとほんの僅かなミスも命取りになる。私は背中に冷たい汗が流れるのを感じるのだった……。

〈蛭視点〉

戦況は有利……と言いたかったが、既に有利性は徐々に失われ始めていた。いや、そもそも有利性なんて私達にはなかったのかもしれない。

【滑ると言うのなら蹴り砕くまでッ！】

分厚い氷を蹴り砕き、自分の思い通りに景虎が動き出した段階で私と美神さんは逃げに回らなければならなかった。

「ちいつ！見目は良いのに化け物かッ！」

【遅いッ！】

「舐めんなッ!!」

光にしか見えない景虎の太刀筋を剣指で防ぐという規格外の芸当を見せる高島だが、即座に腹に蹴りを叩き込まれその身体が宙に舞う。

「シズク！清姫！頼んだわよッ！」

美神さんがシズク達にフォローを頼み吹き飛んできた高島を受け止める。

「大丈夫!？」

「げほっ……何とかな。くそ、特製の防御札が一発でお釈迦かよ」

高島が作った札でも景虎の攻撃は防ぎきれなかった。月はもうすぐ頂点を指し示そうとしている……それなのに何故。

【……………から辺で一献いただきますよ】

流れるような素振りで景虎がその手に取り出した杯、その中身が赤黒い液体だったのを見てシズクと清姫が即座に動いた。

「させませんッ！」

「……させるかッ！」

私達の目では捕えることが出来ない神速の一撃だった、だが吹き飛んでいたのはシズクと清姫のほうだった。

「え？」

【あはッ！あははははははっは！！！！】

液状の狂神石を飲んだ景虎の全身から赤黒い魔力が放たれ、呆然としていた私と美神さんもボールのように弾き飛ばされ壁に背中から叩きつけられる。

「げほっ！げほっ！おえっ！！」

「ごほっごほっ！！こ、これはやばいわね」

たたきつけられた衝撃で肺から酸素を押し出され、必死に呼吸をしようとするがどうしても息が吸えず嗚咽が零れる。

「くっ！ちよつとこれ以上は無理よッ！」

「駄目だッ！メフィスト！早すぎるッ！」

高島の制止を振り切り、メフィストが陰陽札を切り、増大させた雷を放った。だが景虎はそれを見てにやりと笑うと腰に納めた刀を勢い良く抜刀した。

【シッ！！】

鋭い斬撃音と共に雷は断ち切れ、刀の切っ先から飛んだ赤い刃で視界が真紅に染められた。

「…………間に合えッ！」

シズクの珍しい焦った声…………それがこの戦いで私が覚えている最後の事なのだった…………。

く美神視点く

メフィストの強化された電撃を自分の魔力で巻き込んで弾き返すと言う荒業で反撃して見せた景虎。その一撃で私達は壊滅寸前に追い込まれてしまった…………。

(あんな芸当が出来るなんて…………ッ！)

他人の魔力に自分の魔力を上乗せして跳ね返す。そんな芸当が出来ると判つていればメフィストの霊波砲を増幅して叩き込むなんて真似はしなかった。

(これが…………英霊ッ！)

英霊とは横島君が何度も戦っていた。そして何度も勝利していた、だから勝てないわけではない…………横島君の戦いを基本的に見ていることしか出来なかったのにそう考えたのが私達の根本的な所のミスだった。

「……最悪撤退するぞ」

「これは状況が悪いにも程がありますわ」

相手の戦力を見誤っていたのは最大の失敗だ。だが確かに最初は私達が優勢だった。イニシアチブも取っていたと思う、計算外だったのは液体の狂神石を景虎が飲み干した事だった。

「ごめん、私のせいだわ。なんとか足止めはするから離脱する方向で考えて」

今回の討伐作戦は失敗だった。最早これ以上戦いを続けても勝機は無い……逃げるのが最善の一手だと判っている……どこかで逃げたら残るのは完全に狂神石に飲まれた英霊だ。もう2度とこのようなチャンスは訪れる事は無いだろう……。

「高島！ 蛍ちゃんをお願いッ！」

「おい！ そんな事言ってる場合じゃないだろ！ 今回は失敗だ。逃げるべきだッ！」

思いっきり頭からたたきつけられていた。今もぐったりとして意識の無い蛍ちゃんを高島に預けて、匍匐前進で無理に移動する。高島の言う通り逃げるのが1番の正解だとわかっている。だけど私達には確実に次は存在しないのだ。

(無理でもここですとめない……)

とは言え放出系ではまた反射されるのがオチだ。手首につけた隕石落としの時の使った擬似神具を起動させ、弓矢を構える。ただ、立ち上がることが出来ないので、上

「ふっ!!」

シズク達が私が何をしようとしているのか理解し、足場に氷をばら撒き、そして清姫の炎が景虎の視界を防いだ瞬間。私は矢を放った、ギリギリまで消耗しているのもあり、放った瞬間に霊力が枯渇し、意識を失ったが……

【あ……】

驚くほどに静かな声が聞こえてきたので、命中したと私は確信しながら意識を失うのだった……。

くアスモデウス視点く

「やられた……か。まあ良かろう」

景虎と頼光がやられたが、そこまで重要視はしていなかったもので、これも当然と云うべき結果か……。

「やはりガープでないと駄目だな」

我も精神操作は出来るが、やはり歴史に名を刻まれた英霊だと我程度の精神操作では抗われるか。

「しかし、自ら当たりに行くか。誇りばかりが高くて困るな」

美神の放った攻撃は明後日の方向だったが、まさかそれに景虎が当たりに行くとは想定外だ。だがそれとは別に判った事もある。

「やはり警戒するべきは横島だけか」

美神達は確かに稀有な霊能力や知識を持っているが、所詮は人間の枠の中に留まっている。今回も景虎自身が抗わなければ美神達は勝てなかった。

「特出した物は無い」

あくまで人間として優秀なだけだ。我から見れば横島の激情を駆り立てる存在ではない、つまり戦う上では何も警戒に値する相手ではないと言う判断に辿り着いた。

「さてと、ではそろそろ我も挨拶くらいはしておくか」

【伴を致しましょう】

「ああ、来い。配下無き王など笑い話にもならん」

あれだけ何度も我が友の計画を防いで来たのだ、それなりに我を楽しませてくれるだろう。我はそう判断し、道真を連れて拠点の後にする……今まで映像越しで見ているが、さてさて我らの計画を幾度も無く邪魔してくれた者達の実力がどんな物なのか、この身を持って体感するのも悪くない。

GS 芦 蚩 外 伝 平 安 大 魔 境
その12へ続く

その12

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その12

く横島視点く

「お前は本当に考えなしだ。この馬鹿、馬鹿者がッ！」

「はい、はい……すいません」

心眼先生の説教を俺は甘んじて受けるしかなかった。狂神石に取り込まれている頼光を眼魂にして、使おうとした俺は完全にダウンしていた。ジャンヌさんの眼魂を使つた時のような身体のだるさと重さ。今も布団に横になっているが、起き上がれる気がまるでしない。

「大丈夫？」

「うん。もう少し横になってれば大丈夫だと思う」

「一人で無茶をしたら駄目だよ？」

「うん。ごめん」

輝夜ちゃん達に駄目だよと注意されると罪悪感が凄い……心配されているのも判るし、何よりもこの不安そうな顔を見ると罪悪感に押しつぶされそうになる。

「みむーみみーむうー！」

【ノブ！ノブブウーッ！】

ぺちぺちと俺を叩くチビとチビノブにも叱られ、罪悪感で本当に押しつぶ……

「へぶうつ!!」

!!

うりぼーが子供モードで筆筒の上からダイブしてきた。やばい……めっちゃ痛い、と言おうか本当に実際に押しつぶされてしまった。

「うりぼーが女の子になった!?!」

「……………!?!」

驚いている輝夜ちゃんと言葉もないもこちゃん。そして喋れないうりぼーはぼこぼここと胸を叩いてくるので、本当に罪悪感が……。

「大分絞られたみたいだな」

「西郷さん……はい、すいません」

「全く私の警告を聞かないからだ。独断専行の癖でもあるのか?」

怒りながら俺の額に札を貼った西郷さんはそのまま指で印を結ぶ。

「あれ、大分体が楽に……」

「霊力の乱れを整えたただけだ。後は安静にしている事だ、3日後に帝がお前の師と謁見

を認めてくださる。それまでに体調を整えておくんだな」

美神さん達に会えると聞いて判りましたと返事を返す。皆無事だと良いんだけど……本当に心配だったからな。

「……」

しかし俺は美神さん達に会えると聞いて完全に浮かれていて、無表情で俺を見つめる輝夜ちゃん達に最後まで気付けなかった。

「少しだけ散歩してくるね」

「あんまりうろつかないほうが良いんじゃないかしら？」

「大丈夫。すぐ帰るから」

あれから更に2日後。明日美神さん達に会う前に少しだけ身体を動かしておこうと思ひ、うりぼー達を連れて散歩に出る。

「全然人がいないな」

「みむ」

「ぶぎゅ」

昼間だというのに人が全然いない。もしかして結界？と思つたが心眼が何も言わないので結界ではないのだろう。そんなことを考えながら輝夜ちゃんの屋敷の周りを歩いて曲がり角を曲がった所で俺は目を見開いた。

「シズク？清姫ちゃん？……じゃない？えつとお？」

シズクと清姫ちゃんの姿を見て駆け寄りかけたが、気配が微妙に違う気がして踏み止まった。

「……シズクではあるが、私はお前の知るシズクとは違うだろうな」

「私もですわね」

もしかして平安時代の2人だと気付いた。もしかして美神さん達からの伝言でも聞いて来てくれたのだろうかと考えていると2人は俺を見つめて、何か納得したように頷いた。

「……あいつの転生者と言うのは間違い無いようだな」

「でも、愛くるしいですわ。ちよつとこの幼い感じが良いですわね」

……なんだろう。2人とも知っているはずなのに、目つきが違うからかとてもじやないけどシズクと清姫ちゃんに思えなかった。

「……警戒心もまずまず、悪くない。まあ良い、元気なのは確認した。明日また会いに来る」

「まあ帝がいるので思うように話は出来ないと思いますけどね。ではでは、またお会いしましょう」

2人はそう笑うとゆっくりと歩いていく、俺はその姿を無言で見送り、その姿が見え

なくなつてからその場に座り込んだ。

「みむう……」

「ノブウ……」

「びぎー……」

「ああ、怖かつたな……あれが本当のシズクと清姫ちゃんつて事なのかな」

神魔として龍族としての2人はあんなにも怖いんだなと初めて理解した。元の時代だと親しいからこそ、神魔の恐ろしさつて言うのがハッキリと判つた。

「お前の時代の2人は既に神魔とは縁を切っている。だから自由に生きているつて事さ」

「まだ役職があるつてことなのかな……」

小竜姫様が妙神山の管理をしているようなものかなと思ひ、肝を冷やしたのもあり輝夜ちゃんの屋敷に戻ろうとしたその時。

「ひゃあああーッ!?!」

足を血塗れの手が掴んできて思わず悲鳴をあげて後ずさつた。茂みから伸びている血塗れの手の主が俺が下がつたことで姿を見せる。

「女の子?」

「違う、鬼だ」

鬼……確かに頭には立派な角がある。でもその黄色い着物は真紅に染まり、呼吸も虫の息だ。

【連れて行くのか?】

「こんなのを見てほっておけないだろ」

血塗れの少女を背中に背負い、慌てて輝夜ちゃんの屋敷へと走った。

「おかえ……ちよ、ちよつとどうしたの!? 血塗れじゃない!?」

「怪我人を見つけて、どこかで横にさせれないかな?」

「……離れなら良いと思うわ。こつちよ」

最初は驚いた輝夜ちゃんだったが、休ませたいと言うと離れへと案内してくれた。その後俺達は濡れたタオルなどで少女の血塗れの腕や顔を拭いて、服を着替えさせて……勿論俺は席を外してだ。離れの布団の中に彼女を横にさせるのだった……。

〈蛍視点〉

やつと横島に会える……そう思っていたんだけど、実際は私の期待したものではなかった。横島は上座で、西条さんに良く似た陰陽師にがつりちと動きを封じられていて、高島も上座に上がったけど私達は下座に座らせていた。

「暴走した英霊の討伐。真に見事であった。褒美を取らそう」
「ありがたき幸せにございます」

高島が褒美を受け取るのと私達は頭を下げてみているしかない。横島がおろおろしているのが判る、横島自身もこんなのを望んでいないというのが良く判る。

「民間の巫覡と聞くが実に良い腕をしている。望むのならば、私の配下として迎え入れよう」

「お言葉は大変ありがたいですが、私達にはやらねばならぬこともあります。つきましては、私の弟子をお返し願いたい」

「……ふむ。なるほど、確かに弟子ならば師に返すが道理」

帝の声質はすつと胸の中にしみこんでくるような声だ。だがその声が危険だというのは私も十分に把握していた。

「輝夜も藤原の姫も横島を気に入っている。弟子として連れまわすよりも、その幸福をと思うのが師としてやらねばならぬことではないか？」

歯を噛み締める、横島は能力を見せすぎた。それを見て帝が惜しいと思い、横島を自分の懐に取り入れようとしている。

「お、俺は「今、お前に発言の許可は無い」……うつく……」

西条さんに似た陰陽師に動きを封じられ発言すら横島は出来ないでいる。これは完

全に横島が人質と言う立場であると言う事を示していた。

「どうだろうか？ お前の許可さえあれば、横島の婚姻をと私は考えている」

「……それは出来ません」

「ほう？ 帝たる我に逆らうか？」

護衛達の気配が鋭くなり、帝自身の目付きも鋭くなった。

「私の弟子はその親御より預かった大切な子であります。師として親の元に帰するのが第一です」

「ほほ、それならば親御もこの場に呼んでも良いぞ？」

「ご冗談を、それに輝夜様と言えば五貴族より求婚を受けているとお聞きします。こういうのはなんです、私の弟子は平民の出、貴族との婚姻しかも、輝夜様と、藤原の姫との婚姻など恐れ多い」

帝の意思に刃向かうかと言う怒声が飛び交うが、それは帝の拍手で抑えられた。

「ふふふ、私にここまで意見するとは面白い。お前のような者が、陰陽寮にいればまた京も発達するであろう」

楽しそうに笑った帝だが、手にしていた扇子を閉じる。すると私達の周りにいた衛士が私達に棒を向ける。

「帝！ それは余りにも非道が過ぎると思います」

「高島、おぬしの気持ちも判る。じゃが、横島は余りに優秀、手放すには惜しい。故に、お前達に返す事は出来ぬ」

「話が違う!」

「政治と言うものじゃ、西郷。横島を連れてゆけ」

「御意」

「ちよつ!? 本当に話が……「御免」うっ」

「横島ツ!」

「動くなツ!」

横島が倒れこみ、西郷がそれを抱えて運び出していく、それを見て美神さんと同時に腰を浮かせかけたが、棒によって肩を抑えられその場に拘束される。

「望むだけ金子を渡そう、横島の事は忘れるが良からう」

「……いいえ、忘れません。弟子は返してもらいます。今は……引きますが」

「はっは、それくらい豪胆でなければ巫覡など出来ないか、取り返せるものならば取り返せばよからう。出来るものならな? 高島、下がれ」

「……御意」

高島が拳を握り締め私達に戻るぞと声を掛ける。屋敷の奥に姿を消した横島と衛士に追い立てられるように屋敷を出ようとした私達の耳にこの場に似つかわしくない声

が響いた。

「愚か、実に愚かなり。比翼連理の翼を奪えば、飛び立つことは叶わず、籠の中の鳥となれば鳥は生きてはおられぬ」

冷酷な響きを伴った声と共に帝の屋敷の庭に火柱が上がる。その中を悠々と歩く赤髪 of 優男……

(違う……人間じゃない！)

息をすることも出来ない圧倒的な威圧感。全てを支配するような圧倒的な気配……間違いなく神魔……しかも最上級の神魔だ。

「美神令子、芦蝻……そして横島忠夫……は気絶しているか、いさかか残念だが……それも良からう。ふふふ、初めまして、やっと合間見えることが出来たな。ソロモン72柱序列32位と言えば判るか？」

「アスモデウスッ!?!」

神魔への反逆者達の頭領であるアスモデウスの登場。平安京にいるとは判っていたが、こうして姿を見せるとは思ってたなどいかなかった。最悪の場面でのアスモデウスの出現に私達は息を飲むのだった……。

く美神視点く

想定していた範囲内だが、正直まさかと思っていた部分もある。しかし今回の件で横島君がかなり……いや、相当に帝のお気に入りになってしまった、ここは一度身を引いて打ち合わせをして横島君を連れ出そうと思っていたのに、まさかのアスモデウスの出現に冷や汗が流れる。

「神魔よ、何ようか？」

「ほう、我を前にして気丈に振舞うか、愚かではあるがその胆力は認めよう」

「貴様帝に……」「黙ってる、耳障りだ」あがッ！う、うがあああッ!？」

アスモデウスに一瞥された衛士が火達磨になって庭を転がりまわる。だがその炎は消えず、骨すら……魂すら残さずその衛士は燃え尽きた。

「「ひッ!」」

「凡弱、見るに耐えぬ」

「「あ、うわああああーッ!!」」

帝の護衛と思わしき陰陽師が次々と発火し、火達磨になって死んでいった。視線を向けるだけで人をこうも容易く殺す……これがアスモデウスの力。

(駄目だ、死ぬ)

帝との謁見と言う事で装備も何も無い、このまま何の抵抗も出来ず死ぬ。その逃れる事の出来ない死を私は見た……

「比翼連理の翼を引き裂く愚か者。美神があり、横島であり、横島があり、美神と蛭である。引き裂けば、その力は何の意味も無くなるだろう」

「……何が言いたい」

「別に、ただ……愚かな王として死ぬ。このような状態の美神達を倒しても何の意味も無い、愚かな飾り者は去ね」

アスモデウスが指を帝に向けた瞬間。帝ではなく、高島が吹き飛んだ。

「ほう？」

「つうつ……つたく半端じゃねえなあ」

「今の一瞬で移し身を使ったか、なるほど良き術師のようだ。ふん、良い部下に恵まれたな。その事に感謝するが良い」

アスモデウスから殺意が消え、この場に似つかわしくないスーツのポケットに両手を入れて背中を向ける。

「今日は顔見せよ。我が友の計画を何度も潰してくれた人間を見に来たに過ぎん。しかし、しかしだ」

アスモデウスの視線が私を射抜いた。その圧倒的な威圧感に息が出来なくなつた。

「確かに時の権力者に逆らうは得策ではない、だが、抗え。でなければ態々表に出た意味が無い、我を精々楽しませるんだな。なあ？道真」

黒い稲妻と共に黒い導師服の男がアスモデウスの隣に現れた。

「道真公……何故」

【無論憎いからよ。貴様らが憎くて憎くて仕方ないからよッ!!はははっ！我が主君により再び我は生を受けた。恐怖せよ、我が怒りッ！我が恨みッ！その身を持つて知るが良いつ!!】

鳴り響く雷鳴、あちこちから聞こえてくる悲鳴。

「貴様！」

「これは貴様が背負うべき業。比翼連理の翼を己の浅ましき欲で穢そうとした罪よ。精々悔いるが良い、くつくくっ！はーッははははっッ!!」

アスモデウスは高笑いしながら、道真公を連れてその場を後にした。残されたのは骨すらも残さず焼き尽くされた衛士と陰陽師の亡骸。そして少数の官僚と帝……私達だけなのだった。

「……我が意は変えぬ。高島、下がれ」

「……帝、後悔しますよ」

「……だとしてもだ。私は引かぬ、横島は輝夜をこの世に繋ぎとめるのに必要なのだ」

足を引きずる高島に手を貸して、私達は帝の屋敷を後にした。

「これ絶対何か裏があるわね」

「そうですよね」

「ああ、帝は決して馬鹿じゃない、最後の一言……それが鍵を握る筈だ」

輝夜……なよ竹の輝夜姫……彼女を現世に繋ぎとめる……それが意味するのは1つ。

（月神族……か）

神魔の中でも月に移住した少数の神がいると言う話は知っている。恐らく月の使者が現れると言う話が出ているのだろう……いや、それが無くても帝は横島君を手放すのに難色を示しただろうが、ここまで強硬に出る事は無かった筈だ。

「少し調べるわよ、蛍ちゃん。大丈夫、横島君は何としても取り戻すわ」

「……はい」

あそこまで帝が強硬姿勢を崩さないのならば、こちらも考えがある。本当は嫌だが、ここは1度引くしかない。アスモデウス、そして道真と言う規格外の神魔が出現したのだ、私達が排除される事は無いだろう。その間に横島君を取り返す機会を伺えば良い……私はそう考えこの場は引くことを決めた。

（それに聞かないといけないことがある）

シズクと清姫からアスモデウスと道真の名は聞かなかった。これがもしも歴史改変

の影響だと言うのなら、私達の行動で歴史が変わるかもしれない。それを考えてある程度は慎重に動かなければならない……。

(面倒ね)

戦うだけでも厄介なのに、行動自身では私達も消えてしまう可能性がある。そんな状況で、勝ち目の無いアスモデウスを何とかして退けなければならぬ……。

「最悪だわ」

「そうですね……本当。最悪です」

状況はどんどん悪化する。せめて神魔の支援を得る事が出来ればと思わずにはいられないのだった……。

くくえす視点く

バンつと机を叩く音が高島の屋敷の中に響いた。それは言うまでも無く、私が机を叩いた音だった。

「アスモデウスが出てくるのに、神魔の支援もなしに戦えと!？」

「うむ。そうなるの……とは言え、本格的な戦いになるわけではない、それに助かる機会はある」

「だとしても、危険が高すぎる!」

「くえす、落ち着きなさい」

「……ッ。判つてますわッ!」

琉璃の言葉に吐き捨てるように言うが、こんな話を聞いて冷静でいられるわけが無い。

「道真公。どうやって横島さん達はその戦いを切り抜けるのですか?」

「1度、美神が現代に戻ってくる。この場所にだ、その時に共に平安時代に小竜姫様、そしてビュレト様、貴方方御2人が向かいます。それによりアスモデウスは抑えることが出来るでしょう……正し、非常に大きな選択を迫られる事になる」

神妙な顔をする道真公は小さく息を吐いてから、私達が到底受け入れることが出来ない言葉を口にした。

「横島殿は狂神石に飲まれ、狂気への道を歩む。そのきっかけは平安時代にて生まれる」
その声はとても小さく、そして一瞬何を言われたのか理解出来なかった。だが私に気が付けば、道真公に馬乗りになっていた。

「どういうことだ貴様ッ! お前は何を知っている! 答えろッ!」

「くえす!!」

「離せッ! 答えろッ!!」

私を琉璃が羽交い絞めにするが、それを振りほどき道真公の顔に拳を叩きつける。

「……戦いの末だ。横島殿は既に神通力、魔力、妖力、竜気……その全てをその身体に宿している、故に狂神石に飲まれるだけの素質は既に出来てしまっている」

「私達ね……」

「む、そうでござるな」

タマモヤシロ、そして私の魔力に、シズク達と言う規格外の神魔と暮らしていれば、その力は確実に横島を蝕んでいる。

「それが関係しているのか？」

「私が見たとき、既に横島殿は狂神石に飲まれ、黒き姿へと変わっていた」

これは最早変えられぬ結末だ、それをどうするかは私達次第と言われた。それは危険人物として横島を処理するのか、それとも何時狂神石に飲まれるかも判らない横島とこれから過ごすと言う事を示していて、たとえ平安時代から戻ってきてても今まで通りに過ごす事が出来なくなるかもしれないと言う事を道真公から告げられた私達は脱力し、その場にへたり込んでしまうのだった……。

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その13へ続く

その13

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その13

（横島視点）

帝に言われた美神さん達との再会を禁じると言う言葉と、まさかの輝夜ちゃんかもこちゃんとのこ、婚姻とか……もう訳が判らなかつた。溜め息を吐きながら釜戸の上に乗せた鍋の中身をかき混ぜる。なんかこうでもして無いと、考えが纏まらず混乱しっぱなしになってしまふ。

【危惧していた通りになってしまったな……】

「心眼はこうなるって判つてのかわ？」

帝に呼ばれる前に保護した鬼の女の子の為におかゆを作っているのだが、心眼の言葉に嘘だろと思ひながら尋ねると心眼は詳しく説明してくれた。

【流石に妹紅と輝夜が引き合いに出るのは想定していなかつたが……ありえない話ではないと思つていた】

「マジかよ……」

心眼は予想していたと言うが、俺はそんな話は1度も聞いていなかった……もし判つ

ていたなら、覚悟を決める為にもその話は聞いておきたかった。

【だがまさか帝も懇意にしている輝夜をお前に宛がおうとしているのは想定外だ、それなりに地位のある姫くらいは想定していたんだがな……】

平安時代でも指折りの名家である藤原の姫のもこちゃん、そして竹取物語の姫である輝夜ちゃんとの婚姻の話なんて考えても居なかった。

【……正直、お前はどう思っているんだ】

【どうって……?】

【あの2人の事だよ】

【言ってる意味が判らないんだけど……】

心眼の問いかかけの意味が本当に判らなかつた。何故急に、しかもそんな話を持ち出したのかがだ。

【形だけでも婚姻を結べば、帝もそれを喜ぶだろう。そうすれば自由に歩けるようになるぞ】

【心眼……ッ】

【冗談だ。お前にはそう言うことが出来ないって判っているさ……そう言う腹芸が出来るなら、最初からさせている】

むしろ俺がそう言う事を言い出さなくて安心したと言う心眼。確かにもこちゃんや

輝夜ちゃんの事は嫌いじゃない、嫌いじゃないがそれはあくまでアリスちゃん達に似た物だ。

「こう、妹が大切みたいな……そんな感じなんだよな。俺にとっては……さ」

まあおこがましいかもしれないけど……俺にとつては本当にそんな感じなのだ。

【アリス達がどう思っているのかは判らないがな】

「……ん？」

【いや、なんでもないさ、それより鍋が噴くぞ】

「おつととおツ!？」

お粥が焦げるなんて冗談じゃない。慌ててタオルを腕に巻きつけて、俺はお粥を机の上に乗せて、小皿に移し変えて台所を後にした。

「……」

柱の影から俺を見ている輝夜ちゃんともちちゃんの姿には最後まで気付かないまま
で俺は気付けないのだった……

◇ 蛍視点 ◇

想定外の事やイレギュラーには相当強くなっていると思っていたけど、文字通り思っていただけだったと思ひ知らされた気分だ。

「いちち……あーくそ、流石最上級神魔……化け物だな」

化け物だなと嘆いているけど、十分高島も化け物だと思う。帝へのアスモデウスの攻撃を肩代わりしてびんびんしてるとか、正直信じられない。

「……あまり無茶をするなよ。身体よりも魂が危ないのだからな」

「判ってる。だけどまあ、呪とか掛けられないだけマシだ」

常人なら即死していてもおかしくない一撃だった。現に何人もの陰陽師が目が合うだけで殺されているのだ、良く生きていてくれたと思う。

「……あたしから一個提案なんだけどき」

メフィストが神妙な顔をして私達を見つめながら口を開いた。

「あんた達には悪いけど、弟子は諦めたほうが良いと思う。アスモデウスに目を付けられてるんだよ？ 人間でどうこう出来る問題じゃないよ」

メフィストに言われなくてもそれは十分理解している。正直戦力も、装備も足りない今。アスモデウスと戦うのは正気の沙汰ではない……逃げるのが間違いない、正解なのも判っている。

「駄目よ、私は横島君を諦めないわ」

「私もよ」

「……必要なら水の中からでも横島は連れ出す」

「と言う訳で、横島様を諦めると言う選択肢は無いのであしからず」

私達の言葉に高島は深く深く溜め息を吐いた。

「そうかいそうかい、それに対しては俺は別に反対しない。そっちの好きにしてくれっ
ていうさ……だけど、連れ出すのは並大抵じゃないぞ。輝夜様の屋敷は厳戒態勢、その
中に横島もいるんだ。横島が自分から出てくるのも無理、侵入するのもまた無理、更に
言えば陰陽師がたむろしているから結界の中もぐりこむのも神魔としても不可能、正直
言つて今帝の屋敷の次くらいに輝夜様の屋敷は護られてる」

それは私達も判っている。京の中にある規格外の結界はここからでも十分見えてい
る。

「正直そこまでするとは私も思ってたわ」

「私もですね、帝があそこまで横島に固執するのが誤算でしたね」

「そうね、結構あっさり返して貰えると思っていたんだけどね」

横島はこの時代では言えば根無し草に加えて平民の陰陽師。そんな相手に帝がそこ
まで固執するなんて思っていなかったのが誤算だと話していると高島に違うぞと言わ
れた。

「確かに帝も横島に固執していると思うが、それ以上に藤原の姫と輝夜様が横島に執着しているように思える」

「え？」

まさかの言葉にどういふことだと、高島に説明を求める。

「藤原の姫は白子と言われてな。雪のように白い肌と髪、そして紅い瞳をしている。それゆえに忌み子として疎まれていた」

白い髪……赤い目……アルビノと言うことだろうか、平安時代にアルビノが居たことにも驚いたが、高島が何を言おうとしているのか、このタイミングで理解した。

(いやいや、なんでこうなるのかな)

忌み子として嫌われ、恐れられていた子が普通に接してくる年上の青年が居たらどうなるか？ そんなの考えるまでも無い。

「……それに輝夜も美しいとかその外見だけで相当言い寄られていて辟易していたしな」

「そうですわよね、同じ女としては同情しますわ」

内面ではなく外見だけで言い寄られていたのが、全くそう言うのに触れず普通に接してくれる相手が現れたらどうなるか……。

「ちなみにさ、2人ってどれくらい年齢なのかしら？」

「ん？ 蛭より少し年下って事かな」

「大体判った、横島君のせいね」

帝が悪いのではない、2人のお姫様が悪いのではない。横島の年下に優しい事、そして妖怪や神魔と接しているので外見を殆ど気にしないこと、それらが噛み合った結果が今の横島の状況なのだと言われ、私も美神さんも大きく溜め息を吐いた。

「……まあ横島は明らかに人間より、こつちよりだしな」

「……一目で判った。高島よりも人外に好かれるな」

「そらまたどうして？」

「人外を殺した気配が無いからですわ」

「横島様は人間と人外、神魔が手を取り合える世界を作りたいと考えていますからね」

「あーそうなれば確かに人外には好かれるわな……」

職業柄妖怪や神魔を調伏しないといけない高島と最初から人外と手を取り合おうとする横島。そのタイプは少し異なっているが、大本は似ている。となると後は殺した気配があるかどうかで……。

「横島君が好かれる理由が判った気がする」

「私もですわね」

……結論横島も相当な人たらし、それが横島が帝と2人の姫に執着される理由なのだ

と判り、私達はどうやって横島を連れ出すかに頭を悩ませるのだった……。

く
???
視点く

痛む身体に顔を顰めながら目を開くと木の天井と柔らかい布団の中に居る事に驚いた。

「吾は何故ここに……」

どうしてここに居るのか、それが判らず頭を傾げていると襖が開いた。

「ああ、良かった、目が覚めたんだ」

そこに居たのは人間だった。何故人間がと混乱していると意識を失う寸前の事を思い出した……

【逃げ、あの牛女には今は勝てんわ】

そう笑い、吾を弾き飛ばした愛する同胞の事を思い出し、目に涙が浮かんだ。だが人間に涙を見せるわけには行かず、それをぐつと堪える。

「倒れてたから、連れてきたんだ。でもここは安全だから大丈夫だよ」

にへらと警戒心もまるで無い顔で笑う人間。一瞬でその首をへし折れそうだが、身体

が痛くて腕も緑に上がらず、虫のように蠢く事に留まる。

「何故助けた？吾が鬼であることが判らない訳ではあるまい」

今は変化する力も無い、視線だけで部屋を確認すると結界を張られている。それはこの中に吾を閉じ込める物であるのと同時に、外からの気配を遮断する物だと判った。何故鬼にそこまですると問いかけると額に赤い布を巻いた男は首を傾げて、不思議そうな顔をした。

「困っている人を助けるのに理由がいるのか？」

「は？」

「いや、だから困ってる相手を助けるのに何か理由がいるの？」

「いやいや、吾は鬼ぞ！そして汝は人間だ」

「うん、そうだな」

「じゃあ何で助ける!？」

「助けたかったから？」

「何故そこで不思議そうな……いちち」

「ああ。もう、怪我人なんだから無理をしない」

布団から身体を起ここそうとした時に走った痛みに顔を歪めると、男に再び布団の上に戻された。

「お前……馬鹿か？」

「よく言われる」

「言われてどうする……」

なんだこいつ……馬鹿なのか？ 霊力は凄まじい物を秘めている、少なくとも並の霊能者ではないだろう。そんな男が鬼である吾を助ける、その理由が本当に判らなかつた。

「ああ、まあ良いや。お粥を作ってきたんだけど食べれる？」

お粥を差し出された時。脳裏を過ぎつたのは人間に毒殺された記憶……お粥を振り払うと床にお粥が広がった。正直空腹だったから食べたいと思つたが、人間から与えられる物なんて……そう考えていると頬を張られた。

「貴様ッ！」

やはり人間など信用出来ないと男に手を伸ばそうとした時。思わず手が止まつた……怒っている表情に威圧された訳ではない……ただ、そうただ、母上に似ていたのだ。「食べ物は何だと思つてる！ 勿体無いだろう！」

「……ッ！」

その一喝に思わず身を小さくした。本当に母上に良く似ていたのだ、男はお粥を片付け、御盆の上に乗せて吾をジツと見つめている。

「……」

何も言わず見つめてくるので、目を逸らそうとするがそれは手で防がれた。

「悪い事をしたら?」

「え?」

「悪い事をしたらどうする」

「……ご、ごめんなさい」

その威圧感に負けて謝ると男はまたほわつとした笑みを浮かべた。

「ちゃんと謝れたな。偉い偉い」

「なでるなッ!」

頭を撫でる男の手を振り払おうとするが、それよりも早く男の手は吾の頭の上から退かされていた。

「またすぐ持ってくるから」

呼び止める間もなく、部屋を出て行き、すぐ戻つて来た男の手の中には湯気を放つお粥がある。

「はい、あーん」

「吾は子供かッ!?!」

口を開けという男に怒鳴るが、匙は口元に向けられていて食べるしかなく小さく口を開けて頬張る。

「美味しい……」

空腹なのを差し引いても美味かった。霊力が体の中から回復していくのが判る……。

「それは良かった、はい、あーん」

「待て、それ全部やるつもりか!？」

「そうだけど? はい、あーん」

また匙を向けられ、吾は子供のよう最後まで男によつて食事をさせられるのだつた。

「ご馳走様でした」

「はい、お粗末様でした」

「待て、お前名前は?」

そう笑つて立ち上がる男を呼び止める、すると男はまたにへらと力の抜ける笑みを浮かべた。

「横島、横島忠夫つて言うんだ」

「邪だな。覚えた、吾は茨木童子だ」

これだけ邪気の無い男なのに、邪とは変わった名前だと思ひながら礼儀として自分の名を名乗る。

「多分勘違いしてると思うけどなあ……まあ良いや、茨木ちゃんね……覚えておくよ、

じゃあ、ゆつくり休んでくれよ」

またにへらと笑い歩いていく邪の背中を吾はほんやりと見つめているのだった……これがまさかこの後何年にも及ぶ横島との腐れ縁の始まりになるとは、吾は想像もしないのだった……。

くアシユタロス（現在） 視点く

いや、横島君。君本当に良い加減にしてくれないかな……私の娘が好きじゃないのかい？と面を見て言いたくなかった。

藤原妹紅 3. 2

輝夜 2. 8

……なんで藤原の姫とかぐや姫の名前がトトカルチヨに刻まれているんだい？君は平安時代で一体何をしているんだい？

【アシユタロス様、どうかしましたか？】

「ああ、うん。大丈夫、なんでもないよ」

そしてアスモデウスに部下として押し付けられた道真公にも正直辟易している。

（根が根だからなあ）

生真面目な学者だから、道真公の目を掻い潜って横島君達の支援をするのも難しい……。

(信用されていないのか、それとも信用されているからか……)

私を疑って道真公を送りつけてきたのか……。

それとも私の働きを見て応援として送りつけてきたのか……。

あるいはその両方か……少なくとも言えるのは、横島君達には接触出来なくなつたと
言う所だろう。

「そうだ、道真公。君にこれを預けよう」

何故か持っていた大きな眼魂、それを道真公に預ける。自分で動けないのならば、横島君達に出会う確率の高い者に預けるのは当然の事だ。

【これは?】

「靈力を溜め込んでおける道具だ。既に私の靈力と魔力を込めてある、上手く使えばより有利に戦えるだろう」

【おお、ありがとうございます。必ずやご期待に伝えて見せましょう】

着物の中に眼魂を入れる道真公を見つめ、心の中のため息を吐いた。

(私が出来るのはこれくらいか……後は横島君達に賭けるしかあるまい)

自分出来るのはここまでだ。後は、横島君達の頑張りに賭けるしかない。

「もうすぐに出るのかな？」

【いいえ、すぐに戦に出るは愚の骨頂、戦況そして相手の戦力を見極めてから仕掛けますとも、どうかご安心ください】

……やっぱり彼もこういうタイプか、力を持って、それに溺れる事無く、冷静に戦力を見極め策を練る。

(ガープとの戦いの前の訓練にはなるといいけれど……)

完全に道真公とガープの戦いのスタイルは同じだ、この道真公との戦いでガープとの戦いの切り抜け方を学んでくれればと私は祈りながら、使い魔を飛ばし、情報収集に余念のない道真公を見て、戦力、策略共に不利な横島君達がどこまで喰らい付けるか……を考えた。

(やはり早いうちに合流出来れば良いんだけど)

分断されたままでは勝ち目はない、難しいとは判っているが蛍達と横島君が合流出来る事を祈らずには居られないのだった……。

GS 芦笛外伝平安大魔境 その14へ続く

その14

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その14

く琉璃視点く

横島君が魔に墮ちる……それはきつと何よりも避けなければならぬ事だ。横島君の才覚はどの何れもガープの手に渡つてはいけぬ物だ。私達はそうならないように尽力して来たつもりだ。

【横島殿は狂神石に飲まれ、シェイドなる姿を用いて、月軍、そして私を退けた。今でも、その時の傷は我が霊体を蝕んでいる】

道真公が僅かに着物をはだけるとそこにはまるで獣に噛み付かれたような鋭い傷跡が痛々しく残っていた。

「うっ……」

「ぐっぐう……」

「シロ、タマモツ!? どうしたのツ?!」

急に頭を抑えて蹲ったシロとタマモの口からは涎が垂れ、その目からは正気が失われそうになっていた。

【失礼、これは我が神力で押さえ込んでいるが……やはり毒だな】

道真公が着物を元に戻すとシロとタマモは荒い呼吸を肩で整えていた。

「いやいや、これ駄目でござるとよ」

「……横島でも発狂するわよ……下手したら」

九尾の狐であるタマモでさえも発狂するという桁違いの負の霊力。私にはあまり影響がなかったけど、かなり不味い物なのは間違いない。

だがそれも当然と言えば当然だ、英霊を操り、神魔さえも支配する。そんな狂神石を人間が取り込めばどうなるかなんて言うまでも無いだろう。

「くえすは大丈夫？」

「……別にこの程度でどうにかなるほど軟弱ではありませんわ。ただ……長時間触れるのは不味いですわね」

「だろうな。神魔ならまだしも混ざり物には辛いかもしれない」

混ざり者か……それを言うところも私もだけど、私の場合は神だから平気だったのかもしれない。

（もしかすると横島君も……？）

後天的に妖力、神通力、魔力、竜気を手にした横島君だ。だからもしかすると狂神石にもある程度抗えるのかもしれない……だがそれはあくまで客観的な、もつと言えば楽

観的な考えで、それを口にする事は出来なかった。

「それよりも月軍とは月神族の事ですか？」

そんな中躑躅院が月軍について道真公に問いかける。月軍と言えば、月に移住した土着の神魔……。「月神族」の戦闘部隊の事だが、地球に残った神魔や人間を穢れていると言うなど選民思想の強い神魔と言うのは私でも知っている。

「ああ。横島殿はなよ竹のかぐや姫の元にいてな。丁度そこに迎えに来た月軍の言葉が切っ掛けになったのは間違いない」

横島君が何をしているのかと言うのは気になるところだが、あの温厚な横島君を激怒させた月軍の言葉も気になる。

「確実に月神族は横島さんと相性が悪いですね」

「それは確実ですわね、横島とは余りにも間逆ですしね」

「と言うか、そもそもあの連中を好きな奴なんてそうないでしょ？」

「そんなにひどいんか？」

「主殿が嫌うなんて、正直想像出来ないんですけどね」

「拙者もでござるよ」

横島君は人外に好かれる。それは間違いないことだが、月神族だけは別だと思う。正直神魔の巫女である私でさえも、月神族には関わりたくないと思うのだから……。

「んんっ、話を戻しましょう。月神族が何かしたのは判りますが、道真公。横島さんがそれほどまでに激怒した月神族の言葉はご存じないのですか？」

【流石にそこまでは……ただ私の元に現れた時はその瞳は血の様に真紅に染まり、魔力と神通力を同時に扱う、獣のようなおぞましき姿であった】

何があつたのか、それは私達には想像するしかない。だが、事態は間違いなく悪化しているだろう。

【横島の魂が魔により過ぎるのは不味いな】

【心眼が何とかしてくれる事を祈るしかないですね】

出来る事ならば私達が何とかしたいと思っている。でも横島君は今現代にいない、そして私達には過去に行く術がない。

（戻って来た横島君が別人になつていたらどうしよう……）

もしも無事に現代に戻ってきてても、もう私達の知る横島君ではないかもしれない……そう思うと恐ろしくて、そして悲しくなる。なによりも争い事からほど遠い横島君をこの道に引きこんだのは私達だ。だけどその結果が狂神石に蝕まれ、正気を失うかもしれないなんて余りにも救われない。

「道真公。横島さんは完全に暴走してしまっているのですか？」

【それは問題ないと思います。私を倒した後は元に戻っている様子でしたから】

「つまり今すぐは問題では無いと言うことか……確か横島達と一緒にヒヤクメも消えていたな？」

「え、ええ！確かそうです！」

魂の専門家のヒヤクメが一緒にいるのなら本当に最悪の展開になる事は避けられるかもしれない。いや、ヒヤクメが何とかしてくれると祈るしかないのが事実だが、それでも無事に私達の知る横島君が戻ってきてくれることを祈るしかないのだ。

「雷……近いな」

ビュレトさんがそう口にする。ふと窓の外を見ると先ほどの晴天が嘘のように曇り空になっていて。それを見て、私は慌てて座布団から腰を上げた。

「これって……間違いないわ！美神よ！」

「私もそう思う！道真公、そうですよね！」

【間違いないでしょう、参りましょう。それで私達が何をすべきなのか、そして何が起きようとしているのか……それを知る事が出来るはずです】

美神さんが戻ってくると道真公は言っていた。この雷がその予兆である事は間違いない。道真公もそれを認めた、正直躑躅院があるので美神さんの時空転移の事は言いたくなかったが、それ所ではない。私達は横島君の今の状況を知るためにも、そして平安時代に美神さんが戻るのなら、私達も一緒に行けるかもしれない……不安なまま待つ

ているのもう耐え切れない、それは私やくえすだけではなく、小竜姫様やビュレトさん達も同じで、誰が言い出すでもなく、雷にうたれるかも知れないという危険性も承知したうえで私達は雷の元へ走り出すのだった……。

〈高島視点〉

俺は美神達を幸華に庇うように頼み、姿を隠して西郷の屋敷を訪れていた。……と言
うか、西郷の屋敷も警護が増えていたので姿隠をしたまま、西郷の私室に直接侵入した。
「……普通に門から入って来い」

「今そんなことが出来るか、馬鹿」

あきれたと言わんばかりに溜め息を吐く西郷とその隣にいる姫を見て目を細めた。

「これはこれは躑躅院の姫君にこのような場所でお会いするとは、このような来訪どうかお許し願いたい」

「許すも何も、貴方は私の夫になるお方だ。そのような人に目くじらを立てるほど、私は器量の狭い女ではない」

……女傑と言われるだけはあると肩を竦めた。霊能者としての格は中々上と言うくらいだが、潜在的な霊力は帝にさえも匹敵すると言っても良い、不幸なのは躑躅院は自

分達で靈力を扱う術が余りにも弱いと言うところか……。

「して高島様は何ようか？」

「……躑躅院様。私の客なのですが？」

「別に構わないだろう？」

くすくすと笑う躑躅院に西郷が連れて帰れという視線を向けるがそれを無視して、

どっかりとその場に腰を下ろした。

「帝は何故横島に拘る。その理由を知りたい」

「……月の使者が訪れた。輝夜様を連れて帰ると……」

その言葉で何を言いたいのかは理解した。理解したが、同意できるかどうかは別問題だ。

「横島を戦力にするつもりか」

「……悔しいが、横島の能力は私よりも上だ。それは認めざるを得ない」

正直俺は横島の戦いを目の当たりにしたわけではないが、西郷がそこまで言うのならそれは間違いないだろう。

「言つとくが、今回の件は俺はどちらにも与しない。それが俺に出来る最大限の譲歩だ」

「……すまん」

「別にお前が悪い訳じゃない」

帝と美神達、横島を取り合っているわけだが、それに対して俺はどちらにも協力しない。

平民の生まれの俺をここまで取り立ててくれた帝にも恩がある。

しかし美神達の気持ちも判らない訳ではない、だけど帝への恩があるから美神にも協力しない。

「あの最後に現れた赤髪の男、あいつに気をつけるんだな。どうも外つ国の神魔らしいが……強さの桁が違う」

「それは見ただけで理解したよ。忠告感謝する」

その後西郷と月の使者についての話を聞いて、当たり障りが無いように躑躅院の姫とも話をして、夕暮れ時に俺は西郷の屋敷を後にした。

(月の使者……か)

判らない訳ではない、輝夜様の魔性の美を考えれば神の国の姫と言われても俺は納得するだろう。

「本当なら帰するのが正解なんだろうな」

迎えに来るといふのならそれを帰すのが一番の正解だ。だが、帝と爺さん達の事を考えるとそんなことを言える訳が無い。

「ままならんあ」

俺は自由な立場で立ち回ってきたつもりだが、今回の件は本当に参った。どちらに与しても、俺の立ち位置を悪くする。

「何がままならないのさ？」

「……メフィストか、いや、なんでもないよ」

いつの間にか俺の隣にいたメフィストになんでもないと言うと、メフィストは目を細めて俺を見つめる。

「ま、あたしはあんたが何をしても構わないけどさ。契約は護ってもらおうよ」

「……判ってる。俺が死んだらな」

正直今の俺はメフィストのお陰で生きているといっても過言ではない。あのアスモデウスとか言う神魔の一撃で魂が傷ついた、そこをメフィストとの契約で死ぬまでは最善の状態を維持しているだけで、恐らく寿命を全うするまでは生きれないだろう。これでは俺が折角泰山父君の祭に挑戦した意味も無くなった。

(……だけどもあ、納得だな)

横島が俺の転生者と言う割には顔以外はあまり俺に似ていないと感じていたが、その原因が元になる俺の魂が損傷しているは本来継承できる物も中途半端になったのも納得だ。

「簡単に死なないですよ」

「おう、俺も簡単に死ぬつもりは無い」

それなら良いけどと黙り込んだメフィストと六道の屋敷に足を向ける。死ぬつもりはないと言ったが、恐らく俺の命は持つて数日だろう……

(道真公か、それともあの魔神か……どっちにせよ、俺は死ぬな)

泰山父君の試練のせいか、死期が近い人間が判るようになった。だからその死相が自分の顔に浮かんでいることには気付いていた……だがそれも天命だ。それならば仕方ないともう一步踏み出そうとして足を止めた。

「……何者だ」

メフィストの動きが止まっている……いや、それだけではない、周囲の時全てが止まっている。

「いや、素晴らしい。流石天才陰陽師高島と言うべきか」

浮かびでるように姿を見せた顔を隠した漆黒の男……姿形は人間だが、この男……人間所か神魔ですらないぞ。背中に冷たい汗が流れるのを感じていると、その男は丸い球体を投げ渡してきた。

「つとー」

咄嗟にそれを受け止めてしまった。手の中には白と黒の奇妙な球体があった、しかも何だこれ……霊力と魔力と神通力を感じる。

「それは君の物だ、だから返しておくよ。ではまた会おう、どうか後悔無き選択を……」
男の姿は現れたときと同じ様に消えていき、思わず待てと叫んだがその姿は殆ど一瞬で消えていた。

「待てつてどうかした？」

「あ、いや、なんでもない。それより早く帰ろう、夜になると不味いからな」

怪訝そうにしているメフィストを促して少し早足で歩き出す。一瞬の邂逅だったから夢のように思えたが、俺の着物の中にはあの男から投げ渡された球体がある。それがあの男との出会いが確かにあったという証拠なのであった……。

く横島視点く

アスモデウスの出現から数日経ったが、向こう側からのアプローチは一切無く、警戒はしているが穏やかな日々を過ごしていた。

「吾のだぞ?!」

「横島は物じゃないわ!」

「うーっ!」

……平和で穏やかな日々である。茨木ちゃんも元気になったのは本当に喜ばしいこ

とだと思っ、ただ人間の体は3方向から引つ張られたら千切れます

「……」

声も出ないって多分この事だと思つた。もちやん自身は非力だけど、後の2人の力が凄まじい。本当に千切れるんじゃないかとか、意識が飛び掛けた時に助けは現れた。

【ノツブアーツ!!】

チビノブの一喝に3人がびくんと身を竦めると同時に、俺はその場に崩れ落ちた。

「あわわわああ」

「た、大変大変ツ！おじいさん、おばあさーんツ!!」

「おろおろおろ……」

薄れいく意識の中。お姫様って実は結構力が強いんだなと言うそんな的外れのことを考えているのだった。

「めっさ痛い」

【茨木はともかく、輝夜の力にも驚いたな】

こう子供に好かれるって言うのは自覚していたけど、俺の知ってる子供の3倍は力が……。

「アリスちゃんと同じ位だったかな？」

【あの突撃は普通は死んでる】

だと思おう。でもまあ、慕われていると思うとそう邪険にも出来ないのも現実なんだよなと思いつながら月を見つめながら、ぼんやりと考え事をする。

(考えることが沢山あるな)

美神さんや蛍の事……。

帝の事……。

取り込んでしまった狂神石の事……。

茨木ちゃんの事……。

それでもこちゃんや輝夜ちゃんの事……。

俺は考え無しだと良く叱られていたけど……ここまで話が入り組んでくると大変なことをしてしまっただけだと思う。だけど、まあやってしまったのはしょうがないと割り切ろう。人間諦めが肝心だ。

「横島」

「んー？輝夜ちゃんどうした？」

ちよこんつと俺の隣に座った輝夜ちゃんは月を見つめて目を細めた。

「私ね、あそこから迎えが来るの」

「お姫様だから？」

「……ちよつと違うかな、罪人だから裁きに来るの」

裁きと聞いて今度は俺が目を細めた。それを見て輝夜ちゃんは雪のように白い肌を俺に向けた。

「見せて」

止める間もなく懐に持っていた小太刀で腕を切った輝夜ちゃんに俺は目を見開いた。

「な、何をして「良いから、見せて」見せて……て……ええ？」

確かに俺は小太刀が輝夜ちゃんの腕に刺さる瞬間を見た。だが、傷は無く元通りの白い肌がそこにあつた。

「私ね。不老不死なの」

「……マジ？」

「馬路？」

「ああ、ごめん。本当？」

「うん、本当よ。死んでも生き返るし、怪我も治る。見たでしょ？」

確かに目の前で傷を治る瞬間を見たので信じるしかない。輝夜ちゃんは俺を見て少しだけ驚いたような顔をした。

「化け物って顔で見ないんだ」

「輝夜ちゃんは輝夜ちゃんだし、俺別にそういうの気にしてないし」

と言うか、そんなの気にしてたらチビとかと暮らせないしと言うと今度は輝夜ちゃんが目を見開いた。

「あはははッ！本当横島は面白いわ。貴方に会えたのは地上で良かった事だわ」
「どういたしまして？」

多分褒められていると思ひ礼を言うと言つて輝夜ちゃんはお腹を押さえて更に笑い出した。
「私月になんか帰りたくない、私ね……地上が見たいの、楽しい物、面白い物……そんな物がたくさん見たいの。だから……ね。横島、一緒に逃げましょう。もこも連れて行つてもいい、あの子は……あの子は私に凄く似てる。月にいた時の私に良く似てるの……だから、3人で逃げましょう」

「ごめん、それは出来ない」

迷う事無く無理だと言つた。俺には帰らないといけない場所がある。だから逃げる事が出来ないと言うと輝夜ちゃんは酷く悲しそうな顔をした。

「女に恥をかかせるなんて酷いわ」

「……ごめん、それでも……俺には逃げる事は出来ない、だけど約束する」

「約束？」

「うん。月から輝夜ちゃんを捕まえに来るつて言うのなら、俺が護るよ。輝夜ちゃんが逃げ切れるまで」

「……月軍は凄く強いわ、負けちゃうかも」

「絶対に負けない、輝夜ちゃんを絶対に護るよ。だから約束」

小指を出すと輝夜ちゃんは小さく笑い小指を出した。月明かりの下、俺は輝夜ちゃんと約束した。何があっても、彼女を護るって、彼女が見たいって言う物を見れるように、ちよつと不器用だけど優しいこの子を護りたいと俺は思ったのだ。

「約束よ、絶対に……嘘をついたら許さない」

「大丈夫、絶対に護るよ」

例えそれが……許されないことだったとしても……俺は彼女を助けてあげたいと思ってしまうのだから……。

「……お前らを……俺は許さないッ！」

「止めろ！ その力を使うなッ!!」

【ギガン、シェイドツ!! OK! レッツゴー! イ・ツ・ワ・リッ! ゴースト!】

「……殺してやるッ!」

世界とたつた1人。知らない1000人と知っている1人……それを秤に掛け、その結果が世界の命運を分ける最初の出来事であると言う事を俺が知ったのは何もかも手遅れになったその後なのだった……。

G S 芦菟外伝平安大魔境 その15へ続く

その15

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その15

（横島視点）

輝夜ちゃんと約束した次の日に一気に事態は急転した。帝の下に再び書状が届けられたというのだ。その内容は勿論——輝夜ちゃんの引き渡し要求。それを見た帝は直ぐに屋敷の警備体制を強くし、西郷さんを始めとする優秀な陰陽師が屋敷に留まることになった。

「……大丈夫？」

「え、ええ……大丈夫、大丈夫よ」

もこちゃんが輝夜ちゃんと一緒にいるが、彼女の顔色は悪くとても大丈夫には見えなかった。

「隠れておれば大丈夫だろうに、少しは落ち着け」

「……う、うん。判ってる」

茨木ちゃんも喧嘩して過ごしていた輝夜ちゃんが弱っているのを見て、可哀想に思ったのか励ましている。

(そんなにも怖いのか……)

月軍が怖いと言っていたが、まさかここまで怯えるとは思ってもいなかった……。

(チビ達もいるから大丈夫だよな)

チビ達に目配せして、1度西郷さん達と話をしようと思いい気配を殺しながら立ち上がろうとしたその時。

「待つて、行かないで……」

俺が腰を上げようとするのと直ぐに行かないでと声を掛けられた。

「ちよつと廁。直ぐ戻るよ」

不安そうに見ている輝夜ちゃんに大丈夫だよと声を掛けてから俺はその部屋を後にして、庭で待機している西郷さんのほうに足を向けた。

「横島か……輝夜様達を頼んだろう、こんな所で何をしている」

敵しい口調の西郷さんにすいませんと謝罪して、庭に詰めている兵士を見る。

「……陰陽師少くないですか？」

「……ああ、そうだな。8人ほどしかここには詰めていない」

殆どが帝の兵士で陰陽師の姿は無い。西郷さんは肩を落として、深く溜め息を吐いた。

「アスモデウスとやらのせいだな……実戦派を除いた陰陽師は逃げ出したよ」

「……あれだけ偉そうにしていたのにですか？」

「ああ、貴族だからな。命を賭ける理由は無いって事さ、ついでに言う……輝夜様に求婚していた五貴族からは何の支援も応援も無い」

吐き捨てるような西郷さんの言葉を聞いて、俺でもその心境を理解してしまった。

「大丈夫ですか？」

「いらぬ心配をするな、お前は輝夜様の側にいてやれ、そのほうがあの方も安心する」
だから部屋に戻れと言われれば俺には出来る事は何も無い。

(横島。どうするつもりだ?)

「どうするも何もやる事は決まってる、輝夜ちゃんを守るのさ」

金時の言葉に俺は拳を握りながら返事を返す。正直言ったら悪いが西郷さん達で護れるとは思っていない——正直俺でも出来る事はないと思う。それでも彼女が逃げるくらいの時間は稼いでみせると言って歩き出そうとしたその時

【横島!】

「ふおっ!」

心眼の警告と同時に空を切る音を聞いて、俺は殆ど反射的に腕を動かした。

「あ、あぶねえ……」

目の前の柱に当たる前の弓矢を見て背中に冷たい汗が流れた。これもう少し前だっ

たら、俺の頭石榴だったんじゃないかと恐怖するレベルだ。

【大丈夫か？】

【おいおい……闇討ちか？いや、今は朝だから朝討ちか？】

心配してくれる心眼と訳の判らないことを言っている金時。俺自身も混乱しているし……

「ん？手紙？」

矢の真ん中に手紙が括りつけられている。それを解いて広げると手紙の表面に名前が書かれていた。

「八意 永琳……心眼、これなんて読むんだろ？」

【知らん】

名前の読み方が判らん……だけど明らかに俺を狙っていたし……俺は少し考えてから便箋を引っくり返したりしほかに手掛かりがないかと見つめていると月のマークが刻まれていることに気付いた。

「輝夜ちゃん、これ矢文が来たんだけど……知り合い？」

「えーりん……えーりんだ」

もしかしたら帝に手紙を送った同一人物かもしれない、そう思うと輝夜ちゃんに見せるのは不安だったが、それは俺の考えすぎだった。手紙の主は知り合いなのか、安堵し

た様子の輝夜ちゃんの手紙を広げ、中身に目を通す。

「……横島お願いがああるの、手紙の返事を書くから永琳に届けてくれないかな？」

「別に良いけど……俺、その人判らないよ？」

「大丈夫、待ち合わせの場所が書いてあるから……お願い」

もう一度お願いと言う輝夜ちゃんに判ったと返事を返し、彼女の手紙を携えて警護の兵士達に見つからないように屋敷を抜け出した俺は落ち合う場所に書かれていた竹林に来ていた。

「えっと、貴女が永琳さんでしょうか？」

赤と青の服に身を包んだ三つ編みの女性が浮き出るように現れ、ビクツとしながらも永琳さんですか？と問いかける。

「はい、私が八意 永琳です。姫様の手紙は受け取っていますか？」

挨拶もそこそこに手紙をと言う永琳さんに手紙を渡し、俺は永琳さんが手紙を読み終わるのをジツと待つのだった……。

く 永琳視点 く

ここ数日姫様の回りを見て、姫様と一緒にいたのはアルビノの少女と、妖怪の少

女、そしてもう一人……人間でも、神でも、妖怪でも、悪魔でもない……全てが混然と
なった奇妙な青年だった。

(……そう、そうなんです。 姫様)

姫様からの手紙にはアルビノの少女……「藤原妹紅」と全てが混ざり合った奇妙な青年「横島忠夫」と一緒に逃げようと言ったが、横島はそれを拒否して、逃げられるように護ると姫様と約束したと……それがとても嬉しかったと書いてあった。

「ありがとうございます。 姫様を護ってくれたのですね」

「……いや、その俺はそんなに大したことが出来た訳じゃないですよ」

おろおろしている横島を見て思う、最初は警戒したがこの青年はどこまで行っても善人なのだろう。感謝されるのも、礼を言われるのも慣れていない……見ていると微笑ましくなるようなそんな好青年だ。

「えつと永琳さんは月の人で良いんですか？」

「月神族……そう言われております」

姫様が見初めたと言うのなら、それは私に取っても主に近い、敬語で喋ると横島はもつと楽で良いですよと笑った。

「姫様に見初められたのでしよう？」

「……えつとすいません。何の話でしよう？」

……姫様の好意に気づいていないのか……いや、これは気付きたくないのか……それとも心に決めた女性がいるのか……何にせよ、これはあまり触れないほうが良さそうだ。

「いえ、私の気のせいのようなですね。すいません」

「は、はあ……そうですか、それなら良いんですけど……その月神族って神魔とは違うんですか？」

「地球のしがらみから逃れた種族と言いましようか……選ばれた存在と驕る神とも思ってください」

正直私も月神族ではあるが、決して月神族であることに誇りを持っているわけではない。むしろその名に怒りと恨みを持っていて、蓬萊の薬を飲んだ姫様は追放され、私は月に軟禁された……同じ罪人と言うのなら私も地上に流刑にしてくれれば良かったのだ。

「姫様の事は何処まで？」

「えつと不老不死つて言う事と……地上が好きだから、もつと地上を見たいつて言う話は聞いています」

姫様がそこまで話したという事は相当心を許したと言うことなのね……。

「でも月の人なんですよね？輝夜ちゃんを捕まえに来た……つて訳じゃないですよ

「？」

「ええ、そうね。私は姫様の教育係りだった、そんな私が姫様を捕まえると思う？」

「……思いません。助けに来た……んですか？」

「正確には一緒に逃げに来たかしらね」

今の月の情勢には正直うんざりしている。第一自分達で流刑にして、次の姫が見つからないからって姫様を連れ戻し、子を産ませる為だけに使おうなんて許せる訳が無い。

「今日の夜、月軍は動くわ。姫様を逃がす準備をしてくれるかしら？」

「……はい。判りました」

「それと……貴方も来る？」

一応駄目元で尋ねてみると横島は首を左右に振った。

「俺……戻らないといけない場所があるんですよ。1000年……後の未来に」

その言葉に私は眉を顰め、そしてそれと同時に疑問が解決したのを理解した。

「そう、時空転移者がいるのね？」

極めて稀少な能力だが、神魔に関係のある人間なら開眼してもおかしくない能力ではある。

「はい、だから……俺は一緒に行けないんです。だけど……そうですね、本当に輝夜ちゃんか不老不死なら……1000年後にまた会いに行きます」

「ふふ、姫様にちゃんと伝えておくわね」

ここで別れてもまた会える……そう信じている横島。そして姫様もそんな横島を信用しているから使いとして送り出したというのが良く判った。

「じゃあ、俺は戻ります」

「ええ、姫様に宜しくって、ちゃんと迎えに行きますって伝えてくれる？」

判りましたと笑顔で去っていく横島を見送りながら思う、月軍は決して甘い相手ではない。横島が護ると言っているからそれを信じたという姫様の気持ちも判る……だけれど横島がどれだけ優れた相手だとしても、人間である以上月軍には勝てない。

「それが姫様の考えなのですか？」

横島を瀕死にさせて、蓬莱の薬を飲ませることが目的なのだろうか……それとも……。

「本当に月軍と戦えると思っている？」

横島を見極めるには時間が足りなかった……人となりは判ったが、戦力としては不明だ。姫様が何故そこまで横島を信用しているのか……その理由が判らない永琳は首を傾げる。だが何時までも悩んでいる時間は無い、姫様とその友人である妹紅、そして最悪の場合横島を回収して逃げるための準備を進める為に永琳もその場を後にするのだった……。

く横島視点く

静まり返った屋敷の中を俺の走る音だけが響いていた。太陽が落ち、そして月が登り始めれば、輝夜ちゃんは朝以上におびえ始めた。

「……………」

「大丈夫、大丈夫だよ」

「う……………」

震えて立ち上がることも出来ない様子を見れば尋常じゃない恐怖を感じているのは明らかだった。

「今の音はッ!？」

月が上空を差した時、乾いた音が響き渡り屋敷の中の雰囲気が変わった。

「……………」

その声を聞くと同時に俺は輝夜ちゃんの居た部屋を飛び出し庭へと走った。

「心眼、今のは!？」

【指向性の精神攻撃だ。恐らく月軍の攻撃だろう】

あの乾いた音は境界にその指向性の精神攻撃とやらが弾かれた音だったのだろう。今屋敷中に静寂が広がっているのはその精神攻撃で全員意識を失っているか……眠っていると見て間違いないだろう。

【相手の目的はあくまでお姫様を連れ帰る事だろ。これは人払いなんじゃないのか?】
金時の言葉も判る、自分達の目的を達成する為に人払いをする。それは美神さん達も何度もやっていったし、その手伝いをしたこともある。

(だけど何なんだ。この胸騒ぎは……)

金時の言うことも判る。俺自身もそうであると思っている……それなのにそれ強烈に嫌な予感がした……そしてその予感の中していた……。

【……これが神魔のやる事か……】

【……信じらんねえ……嘘だろ】

心眼と金時の言葉が遠くに聞こえた。庭で待機していた兵士と陰陽師の詰め所……それは跡形も無く吹き飛ばされ、そして今も静かに炎上を続けている……それだけならば威嚇で吹き飛ばしたと思えなくもなかった。何よりも、俺もそうであって欲しいと思っていた……だが静まり返った庭から聞こえてくる鈴のような声に俺は自分の願いが裏切られたことを知った。

「ああ、穢らわしい」

「本当ね。見るに耐えないわ」

そこにあつたのは地獄だった。仮面を付け、鎧を身に纏った女の兵士……それが倒れている兵士達に刀をつき立て、蹴りを入れ、まるで子供が蟲を躡る様な残酷な有様が繰り広げられていた。15人ほどの兵士の中に永琳さんの姿はあるが、顔を背けその顔は悲壮そうにしていた。輝夜ちゃんが恐れ、そして永琳さんが顔を顰めていた理由を俺は知った……月神族と言う神魔の一種であれ神魔だと、敬うべき存在だと思っていた。そう、小童姫様やブリュンヒルデさんのように、厳しくはあるが優しい人であると俺は思いたかった。だが現実は……非常だった。

「……これが月人……なんとおぞましく、醜悪かッ！」

「口を慎め、人間」

西郷さんだけが立っていたが、リーダーと思わしき女の一闪で吹き飛ばされてきたのを受け止める。

「ぐっ……何故来たッ！」

「無理に動かないでください！」

俺が来ている事に気付き声を荒げる西郷さん以上の声を出して、屋敷の中に西郷さんを横にして代わりに前に出る。

「今度は子供か」

「良いじゃないか、子供は泣き叫ぶ。穢らわしいが……痛めつけるには丁度良い」
死んでもなお切り刻まれている兵士、陰陽師を見て顔を歪める。

「穢れ人よ、姫を反すが良い、そうすれば苦しみ無く殺してやろう」

にやにやと笑う女達に初めて、女性に対して明確な敵意と殺意を抱いた。

「穢れ人って何だよ」

「地上にいる者は皆穢れていて、そしておぞましい。同じ空気を吸うのも不快だ」

顔に付けている仮面は酸素マスクって事か、おぞましい、穢れていると聞いて頭に血が昇るのを感じた。それでも冷静に、対応しようとする。

「輝夜ちゃんをどうするつもりだ」

「流刑はすんだ、ならば月に戻すのが道理だろう？そこで子を生まれ処刑する。我らに必要なのは姫ではない、その血だけだ」

蟲や何かを見る感情も何も無い冷酷な瞳……それがガーブ達を連想させ、面白半分に切り刻まれた人達の死体と人間を見下している月神族の態度に激しい怒りを抱いた。

「ぐっつ!」

胸の中で何かが脈動した気がした。その痛みと苦しみに胸を押さえて蹲る、胸に手を当てると胸を突き破るのではないかと思わんばかりに心臓が鼓動している。

(横島!大丈夫か!よ……し……)

心眼の音がノイズ交じりに遠くなっていき、その代りに気が狂いそうな怒りが心臓が鼓動する度に全身に駆け巡るのを感じた。

「不老不死なんだろう……どうやって処刑するんだよ」

「獣に食わせればよからう、蘇っても死に、死んでも蘇る。後は顔と身体は良いから蘇らせた後は男に与えればいい、ああ、だが子供は孕まないようにしなければならぬか」

それは彼女を人間とも思わない言動だった。月神族は神魔であるが……俺の中ではもう敵にしか過ぎなかった。

「隊長話しすぎですよ」

「くすくす、どうせ殺すのに」

「良いんじゃない？この屋敷にいるって事はあの姫様の男でしょ？」

「自分の愛した女がどうなるか位は穢れ人でも情けとして教えてやるべきだろう？」

それは自分達以外を見下したあまりも冷酷で、そして余りにも人を馬鹿にした言葉だった。そしてそれと同時に輝夜ちゃんが月神族を恐れて……いや、嫌悪していた理由が判った。

（ごめん、俺は全然理解してなかった）

輝夜ちゃんの事も、永琳さんの事も俺は全然理解してなかったのだ。そして何よりも人の善性……正しさと言う物を信じすぎていたのだ。

「ぐっ!？」

肩に衝撃が走り吹き飛ばされるが、地面に足を叩き付け無理やりに立ち止まる。

「倒れなかったわね、失敗だわ」

「じゃあ次は私」

「その次は私だからね、いきなり頭を撃つなんて止めなさいよ。盛り下がるんだからさ」

「穢れ人を殺すのは最高の遊戯だからね」

「これが本当に楽しいのよね」

怒りが、憎悪が押さえられない……人を殺す事が楽しい……そんな理由でこの人達は殺された、家族や大切な人達がいただろう。それなのに、神魔のおぞましい趣味の為に殺された。そして遺体も原型が判らないほどに切り刻まれた……。

(そんなにもこの人達は悪いことをしたのか)

いいや、そんな訳が無い。広い世界を、景色を、そこに生きる人を見たいと願った輝夜ちゃんを護ろうとしただけだ。それが悪な訳が無い……

「てめえら……何様のつもりだッ!こんな事をして良いと思ってるのかッ!!」

「おい!横島駄目だッ!戻れッ!戻ってこい!!」

「おいおい!やべえぞこれ!!」

俺の言葉に月神族は一瞬きよとんとした表情になったが、俺を指差して笑い始めた。

頭の中で心眼と金時の声が聞こえたがそれ以上の声でその言葉は掻き消された

【殺せ、殺せ殺せ殺せ殺せッ！】

殺せと言いつける何かの声、そして俺を指差して笑う。だがそれは嘲笑と言うべき、侮蔑に満ちたおぞましい声だった。

「穢れ人が何か言ってるわよ」

「はいはい、虫が何を言っても私達は気にしないわよ」

「それよりさー、次のやつ撃ちなさいよ。私が撃てないじゃない」

「じゃ行くわよ」

俺に向けられた銃から放たれた銃弾が命中する寸前、懐から飛び出した漆黒の眼魂がそれを弾き飛ばす。

「!?!」

驚愕に顔を歪める月神族を睨み、空中に浮かぶ眼魂を握り締めてゴーストドライバーに押し込む。

「……お前らを……俺は許さないッ!」

ここにいる人達に罪など無かったッ!

永琳さんだつてこんな光景を見たかつたわけじゃない。

あの優しい輝夜ちゃんが生きながらに食われ、慰み者になる理由なんて何て無いッ!

(全部全部全部ッ！悪いのは月神族だッ!!)

【止めろ！ その力を使うなッ!!】

【殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せッ!!】

心眼の制止の声も殺せという声に掻き消される。目の前が真紅に染まるのを感じているとベルトから漆黒の禍々しいパーカーが飛び出した。

【アーイツ！ユガンデミナー、ニクンデミナーッ！】

「きやつ!? なによこれ！」

「ぎっ!？」

「ああああーッッ！」

パーカーゴーストに襲われ血を撒き散らし、混乱している月神族を睨みながらレバーを強く握り締める。

「変……身ッ!!」

【ギガン、シェイドツ!! OK! レッツゴー! イ・ツ・ワ・リッ! ゴースト!】

全身を包み込む怒りと憎悪……目の前が真紅に染まり、1つの事しか考えられなかった。死ぬ理由の無い人達が死んだ、悲しむ必要の無い人達が涙した……その全ては月神族のせいだ。こいつらさえいなければ……こんな事にはならなかったのだ!

「……殺してやるッ！」

月神族は存在してはいけない、ここで全て全て殺してやるッ!!そしてお前達が殺した人達のみまで痛めつけて、傷付けて殺してやるッ!!

「■■■■ーーーッ!!」

平安京に響き渡る横島の絶叫。だがそれは最早人の者ではなく、血に飢えた獣の咆哮なのだった……。そしてその全ての引き金を引いた月神族が怯え、身を寄せ合う中永琳が駆け出し、横島の横を通って屋敷の中へ向かう。

「……」

「任せて」

一瞬シエイドに睨まれたと感じた永琳だが、そう言うときシエイドは小さく頷き、永琳を屋敷の奥へと通した。そしてその後を追って1人の月神族がシエイドの横を通ろうとした瞬間。水が湧き出すような音が屋敷の中に響いた……。勿論それは水の音などではない、そして雨の音でもない……。

「イハ………ン」

素手の横殴りの一撃、それでその月神族の上半身と下半身は泣き別れし、下半身から吹き出た血が屋敷の庭を濡らす音だった……。無造作に地面に落ちた月神族の頭目掛けシエイドが足を振り上げ、何の躊躇いも躊躇も無く月神族の顔面を踏み砕いた。

「■■■■ッ!!!」

「「ひっ!」」

頭が潰された月神族は大きく1度痙攣すると動かなくなるが、シエイドはそんなことなど関係ないと言わんばかりに何度も何度も足を振り上げ執拗にその顔を踏み砕き、そしてその足ですりつぶした。シエイドの全身から溢れる憎悪と殺意、そして惨たらしいまでの攻撃に月神族は悲鳴を上げるが、それは全て自分達が穢れ人と呼んだ地球人に行つたのと同じ行い……自らの暴虐、そして悪逆の全てが自分達に跳ね返つてくると初めて月神族は知つた。

「退却だッ! 八意 永琳に反逆の意図あり、月へ……」
 「■■■■ッ!」……ごぼ……ば……化
 け物……」

退却命令を出している女もまたシエイドの腕から伸びた真紅の靈波刃に無慈悲に下半身と上半身を両断され、血を吐きながら地面に落ちる。それを見た月神族は悲鳴を上げて逃げ出すが、余りにもそれは遅く、そして許されないことだった。

「■■■■■■■■■■ッ!!」

輝夜の屋敷から逃げ出す月神族をにがさないと言わんばかりに響いた咆哮。それと同時に屋敷は結界で覆われ、逃げようとした月神族の退路は全て立たれ。半狂乱になる月神族を睨みながらシエイドは拳を地面に叩きつける、地面から引き抜かれた漆黒の斧「ガンガンアックス」とベルトから飛び出したガンガンブレードがぶつかり合う火花は

周囲に散る中、ゆつくりとシエイドは月神族に向かって歩き出した。走るのではない、ゆつくりと肉食獣が獲物を食べるような……そんな異様な雰囲気、シエイドの全身から放たれていたのだった。

「み、美神さん！今の声は！」

「横島君しかないでしょ！ 行くわよッ！」

そして美神達もまた六道の屋敷を後にする。今響いた獣の咆哮……それが横島の声であると気付いていたから、だが美神達を待つのは信じられない光景であった……横島の中に眠る獣性の開眼。鮮血に染まる両拳と逃げ惑う月神族、そして陽炎の様に立ち上る殺気と魔力に美神達は声を失うこととなるのだった……。

「世界の終焉は今この時より始まる、さあ、この世界、この時代に生きる者達よ。悔いなく選択をする時が来たぞ」

そしてこうなる事を知っていた一人の男の楽しげな声が、闇夜の中に消えていくのだった……。

その16

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その16

輝夜の屋敷に木霊する怒りの咆哮……それはまだ幼い輝夜と妹紅の足を竦ませるには十分な物だった。

「ぶぎゅー！」

「みむうッ！」

「ノブウ！」

「みーッ!!」

横島に輝夜達を守れと言われていたチビ達だが、横島の異変に気づき外に行こうとするチビノブとうりぼーをチビはその小さな身体で止める。横島の命令を護ることがチビにとっては最優先であり、そしてそれと同時に外に行けば自分達が危険であると判断していたのだ。

「姫様！」

「永琳！」

そんな時輝夜達が隠れている扉が開き、永琳が姿を見せる。不安で一杯だった、輝夜

は永琳の姿を見て抱きついた。

「遅くなつてすいません、さ、姫様。そして妹紅さん……でしたね、後悔しないのならば……私達と共に行きましょう」

「……はい」

どの道忌子と言われている妹紅にとつて家出すら安全な場所ではない。それならば、初めて出来た友人と共に旅に出るのも悪くないと考えていた。

「……永琳。横島は……？」

「大丈夫です」

「嘘を言うな、女。あの獣の声……横島であろう」

壁に背中を預けて座っていた茨木の言葉に永琳は眉を顰め、輝夜達は目を見開いた。あの優しかった、横島の声とは到底思えなかった……怒り狂う獣の叫び……それが横島から発せられていると信じたくなかったのだ。

「姫様、駄目です。行つてはなりません」

「で、でも！」

このままでは横島が人間に戻れなくなる。そう思ったのか駆けて行こうとした輝夜の手を永琳が掴んで止めた。

「姫様達を行かせる為に戦っているのです。彼を思うのならば、私達は早くこの場を離

れるしかありません」

「……永琳……うん、判った。妹紅、いこ」

「うん」

輝夜と妹紅が手を繋ぎ、そんな2人を永琳が抱きかかえる。

「横島にありがとうって、それと……またって」

「楽しかった、またね」

「……ああ。またな」

茨木にそう告げ、2人は永琳と共に屋敷に唯一残されていた結界の隙間から脱出し、外の世界へと飛び出していった。

「さてと、横島を止めてくるか。おぬしらは大人しくしておれよ」

「みむうー！」

「案ずるな、あの考えなしの優しい馬鹿がいつまでも獣でおれる訳あるまいよ。だからここで大人しくしておれ」

ついてこようとするチビ達を止め、茨木は静寂に満ちた廊下を高速で駆けて行く、その道中でその姿は幼い幼女から額に角の生えた鬼の姿へと変わる。

「くはは……姦計にて断たれ、戻りし身の右腕は怪異と成った！走れ叢原火ツ——羅生門大怨起!!」

廊下を蹴り碎き、庭に飛び出ると同時に右腕を恨みの炎と共に射出する。それは金時の首を掴んで片手で持ち上げていたシェイドの背中を捉える……。

「ちいつ、全然効いておらんではないか！」

【げほっ！ ごほごほっ！ すまねえ。助かった】

「勘違いするなよ。お前を助けたのではない、横島を止めに来ただけだ」

不意打ちによる最大火力の一撃で昏倒させることを狙ったのにシェイドは全くダメージを受けておらず、それ所か恨みの炎すら吸収し、全身に走る紅いラインをより輝かせる。

「月軍とやらは」

【……死んでも生き返らせられて、また殺されるの繰り返しだぜ、腸が煮えくり返っているのは俺ツチも同じだけど、このままじゃやべえ。完全に飲まれちゃう】

「だろうな。おい、金の字。お前は右から、吾は左から、狙うは1つ……」

【ああ、判ってる！】

シェイドの全身に走っている紅いラインは腰のベルとから発生している。そのベルトに収まっている漆黒のシェイド眼魂を取り出せば、あの暴走は収まる。金時も茨木もそう考え同時に地面を蹴り、シェイドへと肉薄するがシェイドはその漆黒な空虚な瞳で2人を見たと思った瞬間闇の中に溶けるように消え、2人の背後で女の悲鳴と血飛沫の

音がする。

「ちいっ！　なるほど吾は眼中にない！」

2人が横島を止めたいと願っても横島の敵は2人ではなく、月軍……ひいては月神族だけだ。切り裂かれ、絶命した筈の月神族がビデオの撒き戻しのようにもとの姿に戻り、斧で頭から両断され再び鮮血を撒き散らす。

「どういうからくりだ」

「わかんねえ。でもそれだけ怒ってるのは確かだ」

殺しても飽き足らない、何度も生き返らせて殺してやる。発狂していた者も正気に戻し、殴り蹴り殺し、あるいは切り裂き殺す。英霊である2人の人智を越える能力を持つシェイドの姿に2人の背中に冷たい汗が流れるのだった……。

く金時視点く

横島が怒るのは当然だ、俺だって月神族には腸が煮えくり返っている。人を人とも思わず、そして殺しをスポーツと言う外道は死んで当然だとも思う。

「ぐっ！　いい加減に落ち着け！」

「??？」

月神族の女に振り下ろそうとした斧を横から受け止め、そのまま全力で押し潰そうとするがぴくりとも動かない。

【憎いのも、殺意を抱いたのも判る！だけど、これ以上は駄目だ！】

「ッ！」

うるさいと言わんばかりに放たれた衝撃波に弾き飛ばされ、砂利の上を転がる。

【ぐはっ!?】

屋敷の壁に背中から叩きつけられ、口から血が零れる。

「ええいつ！ 止めぬか！」

「?……?」

茨木の奴が切りかかるが、横島は茨木と切り結ぶのを嫌がり地面を蹴って大きく距離を取る。

「今のは……」

【どうもお前を攻撃したくないみたいだな】

横島と言うのは元来優しい男だ。女子供に手を上げるのは本位ではないのだろう。だから幼女の姿をしている茨木と切り結ぶのを嫌がった……だがそれは月神族には当て嵌まらないのか、地面を滑るように移動し逃げようとしていた月神族を背後から貫き投げ飛ばす。

「い、いたい……いたいよお……」

「あは。あはははははははッ!!」

「……ば、化け物め、神に手を上げるとは……」

すすり泣く声、狂ったように笑う声、自分の罪を認めず横島を化け物と言う声。

(馬鹿を言うな。あいつほどやさしい男はいないんだよッ!)

自分ではない誰かの為に全力で動いて、そして自分が傷ついてもそれでも護りたい物を守る……争いなんて最も程遠いのに、それでも戦わなければ護れないと知っているから横島は戦うのだ。そんな横島を狂わせたのは、お前らの傲慢だと怒鳴る。

「喋ってる暇があったら取り押さえろ。にやああッ!」

【大丈夫か!】

「く、首……飛ぶかと思った」

茨木が涙目だが、今の攻撃は茨木を狙った訳じゃねえ。その後ろから攻撃しようとした月神族に反応しただけだ。周りは殆ど見えてなくて、本能的に大事な物を見極めて攻撃している。

「金の字、お前の宝具で感電させれんか?」

【そいつはもう試した。でも駄目だったぜ……どうも攻撃全般がきかねえみたいだ】

攻撃が当たっても手応え無く、すり抜けるようなそんな感じだ。何らかの特別な手段

大事な物を触るように茨木の手足に巻きついていた縄を断ち切った横島は立ち上がる、だがその全身から立ち上る殺気は今までの比ではなかった。

【くそつたれ！余計なことばかりしやがって!!】

今のは駄目だった。ギリギリで踏み止まっていた横島を更に怒らせた……霊力がどす黒い形になり、横島の手足を覆っていく……。

「竜……だど?」

「人間の癖に竜神を模したのか!不敬もここまで極まるか!」

その姿は龍その物だった。その姿を見て月神族が罵声を飛ばした直後、無造作に掲げられた左腕から放たれた漆黒の炎が周囲を埋め尽くし、そして呪いその物のその炎は決して消える事無く、月神族を飲み込み続ける。

「おい、金の字!動けるか!」

【すまねえ。矢を抜いてくれ……自分じゃ抜けねえ】

俺を拘束している矢を抜いてくれと茨木に頼む。このままでは本当に駄目だ、横島が獣に落ちて戻ってこれ無くなる。なんとしても、ここで、まだ踏み止まっているうちに止めなくてはならない。

「い、行くぞ?」

【おう、一思いに頼むぜ】

腹を中心に走る激痛に必死に耐える、英霊であっても耐えられないその激痛に顔を歪めながらも、耐え黄金喰を背負う。

【止めるぞ。なんとしてもよ】

「……ああ。判つてる」

ここで止めなければ何もかも終わってしまう、それを感じ取った俺達は同時に地面を蹴り再び横島へと駆け出すのだった……。

く心眼視点く

汚泥のように横島の心を埋め尽くそうとするとす黒い靈力を必死に弾き続ける。

「横島！横島！しっかりしろ！」

闇その物の中に浮かぶ白い球体。それが横島の心であり、魂であるのは明らかだった。それに向かって必死に声を掛けるが、横島からの反応はまるではない。

「あの腐れ神共め！余計なことばかりしておつて！」

月神族が強烈な選民思想なのは知っていたが、1000年前は輪にかけて酷すぎる。

「何が選ばれた神だ、ただ追放されただけだというのに！」

地球の神魔との軋轢に耐えかねえて地球を脱出した。言うならば逃げ出した相手が

何が選ばれた神だ、何をしても許されるだッ！

「月神族など滅びえてしまえッ！」

横島をここまで悲しませ、苦しめた月神族を私は決して許さない。

必ずや、この行いの落とし前はつけさせてやる事を心に誓う。

「くそ、だがこのままでは……」

横島の心が完全に狂神石に呑まれてしまう、金時や茨木童子も奮闘してくれているが、2人の声は横島には届かない。

「美神達が来る事を祈るしかない」

もうこれ以上は狂神石の靈力を抑える事が出来ない。私に出来るのは横島の魂を保護し、これ以上狂神石に浸食されないようにする事だけだった。

(……ああ。ごめんな、横島)

私に身体があれば、お前を止める事出来ただろう。こうして間近で横島を苦しんでいる姿を、悲しむ姿を見ることが出来ない……そのことが辛くて私には身体などないのに、胸が張り裂けそうなほどに苦しく悲しいのだった……

くシズク視点く

輝夜の屋敷に向かって走っていたが、その途中で私は足を止めた。いや、清姫もその足を止めていた。

「ちよつとどうした……つて大丈夫!？」

私達の顔色が悪いのに気付き、美神が駆け寄ってくるがソレを手で制す。

「……高島、文珠あるか？」

「あるが、それが必要になるのか？」

「……ああ。考えられる限り最悪の展開だ……この感じ間違いない、横島の奴……狂神石に飲まれた」

狂神石に飲まれたという和美神達の顔色が変わった。

「ちよつ、ちよつとソレどういこと!？」

「まさかアスモデウスに何かされたの!？」

狂神石……英霊と神魔を狂わせる魔の結晶……それを人間が取り込めばどうなるかなんて言うまでも無い。

「……判らない、だが手遅れになる前に止めるしかない!」

「ええ、時間がありませんわ……この怒りの業火……生半可な物ではありません!」

魂さえも燃やし尽くすような激しい怒りの業火……近づけば近づくほどにその熱量は増していく。そしてそれと同時に狂おしいまでの横島の怒りが伝わってくる。

「……月神族め、余計なことを……ッ！」

「やっぱりそんなのね？」

「ええ。傲慢を絵に描いたような神ですからね、間違はなくそれでしよう」

横島ほどの男が我を失うほどに怒り猛っている。この怒りは横島を飲み込み、その人格を歪めてしまうだろう。早く横島を止めなければ……それだけを考え、輝夜の屋敷に辿り着いた時私を初め全員が言葉を失っていた。

「……化け物……め……」

月神族の頭を無造作に握り潰した漆黒のウイisp……その手足は龍その物で、鎧を纏っているようにも見えた。

【横島！それ以上は駄目だ！戻れなくなる！】

「あちちちちちいッ！これ無理！」

英霊と鬼が横島を止めようとしているが、そんな2人には目もくれず月神族をひたすらに屠るウイisp。

「横島あ！止めて！」

蛍の制止の音が闇の中に響くと、拳を振り下ろそうとしていたウイispの手が止まった。だが安堵したのも束の間、再び動き出したその拳は月神族の胴を貫き、無造作に振るわれた腕によって胴に風穴の開いた月神族がこちらに転がってくる。光の無い空虚

な瞳と一瞬目が合うが、すぐにその瞳に光が戻り、穴が再生していく。

「ひ、やだやだ！もう殺してよ！死なせ……」

空気の破裂する音と共に月神族の頭が吹き飛ぶが、再び再生する。

「これは……強制的な蘇生術か！くそつたれ、どうなってるー！」

高島が札を貼ると再生しかけていた月神族の身体が崩れ落ち、砂となって消滅していく。

「これ、やばいわよ……爆発寸前の特大の魔力炉心つて言っても過言じゃないわよ」

メフィストが顔を引き攣らせる。それは私も清姫も感じていた、今の横島は爆発寸前の爆弾だ。

「横島君！止めなさい！」

美神の一喝で動きを止めたウイスプは振り返る。その瞳からは血涙が流れていた、その余りに悲壮な姿に私達は言葉に詰まった。

【ユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイッ!!】

無機質でありながら激しい憎悪に込められた声に息をのんだ。凄まじい激情の込められたその声は声だけで人の動きを縛った。

「破ッ!!」

高島が印を結び気合を込めると砕け散る音共に身体が動くようになった。

「い、今のは……」

「……神託……今の横島は神魔の領域に足を踏み入れている！」

思えば横島はいつ人外に転生してもおかしくない状態だった。それが怒りを切っ掛けに爆発的に進んだ状態が今の横島のだろう。

「もう止めろ！敵はおらんツ！」

【なるおツ!!】

英霊と鬼が腰に飛びついて、ベルトから眼魂を取り出そうとするが無造作に放たれた魔力波であつさり弾き飛ばされ、転がってくる。

「ちよつとどうなってるの！説明して！」

【説明もくそもねえ！月神族が穢れ人だなんだと言って人を殺しまくったからこうなっちまったんだよ!!】

穢れ人……自分達だけが絶対と思っている月神族ならありえない話ではない。そしてそれと同時にどうして横島がこうなったのかも理解した。

「……美神、蛍、タイミングを見て精霊石で横島を封じ込めろ。その後文珠で正気に戻す！清姫！」

「判つてますわ！」

横島が完全に狂うまでそう時間が無い、最悪眼魂を使わせて魂に干渉しなければ横島

「今の横島は月神族しか攻撃しない！無差別の攻撃に巻き込まれないように注意しろ！」

「……なるほど、判った」

なんで鬼の娘までと思ったが、いつも通りの横島だと思うことにした。だからこそまだ間に合う……私も清姫もそう思っていた。

「じつとしてるとか性に合わないよね。蛭ちゃん！」

「はい！」

馬鹿が……だが、確かに蛭と美神の声に横島は反応していた。ならばあの2人が声を掛け続けられ……横島の意識も戻ってくるかもしれない。そう思ったとき、高島が前に出た。

「待てよ、あんたらは待つてな。俺が行く」

「いや、でも」

「生身だと死んじまうかもしれないだろ、俺に考えがあるんだよ」

高島が美神と蛭を静止し、文珠を2人に投げ渡しながら、高島は手にしている何かを掲げる。それは紛れも無く眼魂だった。

「なんだこれって思っていたけどこう使うんだな。大体判ったぜ」

【陰陽師ッ！】

それは白い眼魂だった。眼魂から飛び出したパーカーゴーストが踊る光景に私達は思わずその足を止めた。高島の腰を見ると狩衣の腰の所に横島と同じベルトが巻かれていたからだ。

【アーイツ！シツカリミナーシツカリミナー】

高島の腰には何時の間にかベルトまで現れていた。手にしていた眼魂をベルトに押し込み、右手で印を結びながら左手でベルトのレバーを掴む。

「変身ってか？」

【カイガン！陰陽師！小粋生意気男意気ツ!!】

暴走しているウイスプと対なす白いライダーへと変化した高島に私達は声も無く呆然と見つめる事しか出来ないのだった……。

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その17へ続く

その17

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その17

～高島視点～

拳を軽く閉じて握るといふ動作を繰り返し、身体感覚を確認する。靈力で身体を強化しているときよりも身体が軽く、そして力に満ちているのが判る。

(あいつの思惑に乗るようで嫌だけどな)

俺に眼魂とか言うのを渡した男……その男はこの事態を予測していたのだろう。生身では決して勝てない相手……それを御す為の装備。

「悪いな、月神族に苛立ちを覚えてるのは判るが……それ以上はさせん」

月神族を助けるなんて言う意図はない。ただこのままではあの男……横島の魂が穢れきってしまう。それを防ぐ為だ。

「■■■■ーッッ!!」

咆哮と共に飛び掛ってきた横島の拳を頭を下げて回避する。その風圧、その速度……当たればその瞬間に身体が千切れ飛ぶと判り背中に冷たい汗が流れる。

「おらッ!!」

拳を突き出すが、何らかの障壁に阻まれ勢いが大幅に削がれる。

「高島ツ！」

「うおっ!？」

メフィストの声に咄嗟に身体を反転させると、影から槍が飛び出していた。

「ふー……あぶねえ、ありがとな、メフィスト」

「それは良いけど、大丈夫なの？」

「大丈夫じゃなくてやるしかないだろうが」

生身の美神達では一撃喰らえばこの世からおさらばだ。それならば、同じ様な姿をしている自分が戦うしかない。

「■■ツ!!」

「ぐっ!! この馬鹿力ツ!!」

横薙ぎの一撃を受け止めたが、衝撃を殺しきれず身体が浮かぶ。反撃に足を振り上げるが、獣染みた動きでかわされ、その手にしている漆黒の斧が振るわれる。

「……高島ツ！」

「すまんツ！」

完全に命中するタイミングだったが、シズクの作り出してくれた氷の柱が盾になって直撃を防ぐことは出来た。

「ふんっ!!」

氷柱に斧がめり込み僅かに動きが止まった瞬間に顔面に拳を叩きつける。

「……」

「全然効いて……があっ!?!」

全く効いておらず、それ所か振り上げられた踵落としが背中にたたきつけられ、身体が跳ねて浮かび上がる。

「■■■■ツ!!!」

宙に浮かび上がった俺に漆黒の殺意が込められた戦斧が迫る。

「姦計にて断たれ、戻りし身の右腕は怪異と成った! 走れ叢原火ツ——羅生門大怨起!!」

【黄金衝撃（ゴールドデンスパークツ!）】

命中する寸前に凄まじい勢いで飛んできた巨大な拳に握り締められ、そのまま腕が戻る事で命を刈り取る一撃は辛うじて避ける事が出来た。そして入れ代わりに跳躍した英霊の大上段からの一撃が横島を捉えようとした瞬間。無造作にその斧の一撃は片手で受け止められる。

【う、嘘だろ!?! がはあツ!!!】

突き出された拳に男が鞆のように弾き飛び、砂利を巻き上げながら転がっていく。

「さっさと体勢を立て直せ!」

く美神視点く

変身した高島とシズク達……上級神魔の一撃を一蹴し、その余波で弾き飛ばされた私は頭を振りながら何とか身体を起こした。

「いつつつ……蛍ちゃん。大丈夫……」

周囲に残されている獣——いや龍の牙の傷痕はすさまじく、直撃を受ければ私達なんて跡形も無く消し飛んでいた事が容易に想像でき、顔から血の気が引くが、今立ち止まっていられる状況ではないと活を入れて無理に立ち上がる。

「な、何とか……でもやばいですよね……」

黒いウイスプ——中世で蛍ちゃんが死んだ時に横島君が変化した姿。あの時は全身が黒い靄に覆われていたけど、今は完全に具現化していた。

(やばいわよね……)

あのまま暴れ続けなければそれこそ本当に狂神石に吞まれてしまう。それだけは何としても防がなければならぬ。背後の屋敷を攻撃していない所を見て、まだ僅かでも横島君の意識が残っていると信じるしかない。

「いつつつ……あーくそッ！これどうすれば良いんだ！」

瓦礫を吹き飛ばして変身している高島が姿を見せる。何故高島が変身できたのかそれは謎のままだ。だが仮説は立てることが出来る、横島君の出来る事は高島の出来る事。つまり横島君と接触した事で、横島君が出来る事も高島が出来る事となっていると言ふ事なのかもしれない。

「高島！あんたは陰陽師でしょうが！陰陽師の戦いをしなさいッ！」

だが私はこれだけは言わなければならない。高島は陰陽師であり、決して直接戦う者ではない。そして横島君は幾度も変身し、その力を使いこなして、勝利してきた。例え意識がないとしても、その身体に染み付いている戦闘技術と言ふものは決して錆び付いたりしない。高島が白兵戦で横島君に挑む事自体が前提から間違っている。高島の戦闘スタイルは決して白兵戦に秀でた物ではないのだ、そして陰陽師魂となればその性質は横島君とは間逆の物になる筈なのだ。

「……ッ！そう言うことかッ！」

高島が印を結ぶとその背後に無数の五芒星が浮かび上がる。眼魂は込められた魂の性質でその能力を変える。つまり陰陽師なのに白兵戦を仕掛けたのが高島の失敗した点である筈なのだ。

「シッ！」

劍指を振るうと五芒星が輝き様々な色の霊破弾が放たれる。それは色鮮やかな花火

と言つても過言ではなかつた。

「■■ツ?!?!」

上下左右から打ち込まれる霊破弾に横島君が悲鳴を上げて吹き飛んだ、その声に顔を歪め思わず顔を背けたが、今は横島君を何とかして取り押さえる事が大事だ。

「水精、火精、雷精将来ツ!!」

高島が拍手を打つと5つの五芒星がシズク、清姫、メフィスト、そして英霊と鬼に張り付いた。

「……なるほどな、悪いな。横島、少しいたいが我慢しろッ!」

「このままそちら側に行かせるわけには行かないのですッ!」

シズクが手を地面に当てると凄まじい勢いで水の鎖が飛び出す。それは最初横島君を捕らえようとして失敗した攻撃だった。だが今は違っていた。

「ッ!?!」

両手足に絡みついた鎖を振りほどこうとする横島君だが、完全に拘束されていてそれを引きちぎる事は愚か、手足を動かす事すら出来ないでいた。

「後でお詫び申し上げますッ!!ハッ!ハッ!せいッ!!」

清姫の手にした薙刀の一撃は変身している横島君に確実にダメージを与える。鎖が引きちぎられるが、即座に再び鎖が伸びてその手足を拘束する。

【横島あ！今止めてやるぜ！この坂田金時がなあッ!!】

「ええい、やかましいぞ金の字ッ！だがまあ……止めるという事には同意するがなあッ！」

坂田金時つて……四天王の……なんどと思うよりも先に抑止力として召喚されたのだと理解した。

「蛭ちゃん。長くは持たないわよ、文字を込めるわよ」

「は、はい！」

今の状態で私達に出来る事は無い。私達に出来るのは横島君が戻つてこれるように闇に飲まれ、横島君が消えてしまわないようにただ祈る事だけだった。

私は心から願つた、横島君が元に戻るようにと……だから文珠には「願」と文字が浮かび上がった。

そして蛭ちゃんは心から懇願した……だから文珠には「懇」の文字が浮かんだ。

それは1人1人では弱い言葉。だけど2人で願えば「懇願」となる。

「美神、蛭ッ!!」

高島の私達を呼ぶ声に私達はその手に握りこんでいた文珠を横島君目掛けて投げつけるのだった……。

く心眼視点く

白い光——横島の心の最深部まで浸食してきた黒い泥に私は焦りを覚えていた。

「くそッ！これが狂神石なのかッ！」

竜気を全開にしているが、それはほんの僅かに侵食を留めるだけで、私の竜気の壁をゆつくりと浸食して徐々に横島の心の最深部まで来てしまった。ほんの僅かな結果……それが私の残りの命綱だった。

(これ以上浸食されると本気で不味い)

ほんの僅かでも狂神石が横島の魂に触れれば、横島の魂は汚染される。そうやってしまえば、横島は戻って来れなくなる。

「力が足りない……ッ！せめて横島の意識があれば……」

私単体の竜気はたかが知れている。横島の意識が覚醒していれば……そこまで考えた所で自分の考えが間違っている事に気づいた。

「いや、駄目だ。それだけは避けなくては……」

確かに横島は月神族に強い怒りと殺意を抱いた。

だがそれに飲まれ、何度も月神族を生き返らせて殺したと言う事実を横島は受け入れる事が出来ない。

を蝕んでいた狂神石の泥を追い出すのに使う。

【……もう遅い。悪意の種は消えん……何れこの身体、この魂……俺が貰い受ける】
泥が消え去る寸前に盛り上がり人の姿になる。それは……紛れも無く横島の姿だった。

「ツ!!失せろツ!!」

【クククク……ああ、だが……またすぐに会うさ……必ずな……】

狂神石の泥が消え去る寸前に横島の姿を象った……今は横島の魂の中に狂神石の泥がないのに、その悪意に満ちた視線が私と横島を見つめているような気がして恐怖など感じない筈なのに、恐怖を感じてしまうのだった……。

く 蛍視点く

文珠の輝きが闇を照らす。元に戻って欲しいと心から願った、いつもの横島の笑顔が見たいと心からそう願った。

【ガッ!■!アガガガッ!?!】

黒いウイスポの動きが電池の切れかけたロボットののようにギクシャクした物になり始める。

「……効いてる！横島!!」

「横島様ッ！」

「横島あーッッ!!」

「横島君ッ!!」

黒いウイスプと黄色のウイスプの姿がノイズ交じりの中で何度も何度も入れ代わる。だが徐々にだが黒いウイスプの姿に変わることが多くなってきた。

「ちいっ！」

【ダイカイガン！陰陽師！オメガドライブッ!!】

「ちよつと!?横島君を殺すつもり！」

「そんなつもりはねえッ！だけどこのままじゃまた暴走するだろうッ！こうなりや外から黒い姿を封印するッ！」

空中に5色の五芒星が浮かび上がり、高島が飛び上がりその五芒星を潜り抜けながら急降下する。

【ギ……ギギイ……】

【ダイギガンッ！シエイドッ！オメガドライブッ！】

ノイズ混じりの姿のままシエイドが飛び上がり、急降下してくる高島へと回し蹴りを放つ。

「……うっ!？」

「きやあッ!？」

「くうううっ!？」

「うっうううーッ!」

「ふみやあ!？」

【茨木ッ!!】

2つのライダーキックがぶつかり凄まじい靈力が発生する。その凄まじい暴風に吹き飛ばされるのを必死に堪える。

「おーりやあああッ!!!」

!?!?

高島の裂帛の気合と共に黒いウイスプのライダーキックを突き破り、高島の蹴りが黒いシエイドのベルトを捉えた。

【■■■■ーッ!!!】

五芒星から伸びた様々な鎖に絡め取られ、断末魔の悲鳴を上げる黒いウイスプ。鎖が動く音が響くに連れて、横島から引き剥がされるように黒い影が姿を現す。

【クハハハ……無駄な事を……今は……今は……俺の敗北を認めよう】

黒い靄は私達の見ている前で人の姿を取った。それはバンダナを巻いていない横島

の姿だった。

【人の心の悪意は消えぬ、憎悪は消えない。俺は殺意、そして憎悪ツ！俺は消えんぞツ！陰陽師ツ！！そして人間よツ！】

鎖に引きこまれ、封印されているのに。その封印を砕きながら黒い横島は叫ぶ。

【光ありて闇ありツ！闇ありて光ありツ！一度生まれ闇は消えぬ！例え封じてもそれは所詮一時しのぎ！必ずや、あの身体は貰い受ける！！ハハハツ！ハハハハハハツ！！ハハハハハハハハハハハツ！！】

狂ったように笑いながらその人影は鎖の中央にあつた黒い眼魂の中に封じられ、鎖で雁字搦めになり沈黙した。

「い、今のは……」

「狂神石の意思……なのかしら……それとも」

美神さんはそれ以上口にしなかった。人間には誰しも闇を抱えている、それが狂神石によつて具現化した。それはこの場にいる全員が理解していた。そしてその事を話し合う前に私は弾かれたように駆け出していた。

「横島ツ！」

糸が切れた人形のように崩れ落ちる横島を抱き止める。

「……す……す……す……」

「よ、良かった。生きてる」

寝息を立てる横島の姿を見て、思わず目の前がゆがんだ。本当に良かったと呟きながら横島を抱き締める。

【オヤスミー】

「くっ……結構きついな……だけど……なんとかなつたみたいで良かったぜ。月神族も逃げた見たいだしな」

ふらついている高島の視線の先を見ると船が月へと戻っていく姿が見えた。でも今はそれ所じゃない、眠っている横島を担ぎ上げて立ち上がる。

「どうしましょう、戻りますか?」

「いえ、もうこの場に残りましょうか」

「そうだな。帝に話をしないといけないしな」

馬の嘶きを聞いて、兵士達が近づいてきていると悟り。意識の無い横島を動かす危険性を考え、私達はこの場に残り。恐らくこの場に現れるであろう帝と話をする為にこの場に残ることを選んだのだが……。金時の焦った声に振り返った。

【ちよ、ちよいまち!あの黒いのは何処だ!?!】

「……無いッ!何処にもないぞッ!?!」

「そんな!さつきまで落ちていたのにッ!?!」

高島が封印した漆黒の眼魂——確かに落ちていたそれは何時の間にかどこかに消えていた。私達の脳裏には先ほどの狂笑が響いているのだった……。

くガープ視点く

アスモデウスから送られてきた平安時代での戦いを見て私は笑みを浮かべた。横島が狂神石を取り込み、闇の側面を芽生えさせた。それだけで平安時代にアスモデウスを送り込んだ意味がある。

「想定通り……いや、想定以上だ！くくつははははッ!!」

横島自身は悪意や憎悪とは程遠いように思える。だがそれは強すぎる光によってそう錯覚されていただけだ、誰の心にも闇はある。そしてそれは一度目覚めれば決して消える事は無い。

「き……様……」

「おや、まだ生きていたか、このくたばり損ないが、その汚い手で私の服に触れるな」私の足を掴んだ女の顔を蹴りつける。血で汚れたズボンに私は顔を歪めたが、それ以上に気分が良いので今は許してやろう。

「まあ良いさ、それにくたばり損ないと言ったが、お前達は死ねない。そうだろう？傲慢な月神族よ」

私は今月にいた。月は人間界でありながら最も魔界に近いポイントだ、ここを掌握する事は私の計画を進めることに大きく繋がる。

「死んでも生き返る。傲慢にして愚か、それが貴様らの限界だ」

選ばれたと傲慢にも言い、全てを見下す愚か者。そんな愚か者だからこそ利用価値がある。

「月の都の場所を言え」

「だ……れ……が」

「そうか、まあ判っていた。ではお前達が言いたくなるようにしてやろう。蘆屋」

「どうぞ、ガープ様」

私と共に月神族狩りを楽しんでいた蘆屋から差し出されたアタツシユケースの中身を受け取る。それは瓶に入った液状の狂神石だ。その蓋を開け、月神族の口の中に流し込む。

「うぶっ！げっ」

「吐くな。稀少な物なのだからな」

異物感に吐き出そうとした月神族の口を押さえ、無理やり飲み込ませる。大きく痙攣し、泡を吹いている月神族をその場に投げ捨てる。

「処置は済んだな？」

「はい、大丈夫です」

「ならば戻るぞ」

普段使う狂神石よりも調整してある。今すぐに効果が出るわけではない、時間を掛けて狂神石は月神族の体内を蝕み、いずれは私の手中に落ちる。

「宜しいのですか？今すぐにでも月の都の場所を知ることにも出来るでしょうに」

「それではつまらないのさ。それに都自身に大した価値も意味も無い、囿程度に使うのだからな」

必要なのは月の都の魔力であり、月の都も月神族も利用価値は無いのだ。ただ私達の計画を邪魔されないように月の都に攻撃を仕掛けるだけだ。だから焦る事も無い、時間を掛けて仲間が変貌していく様に恐れ戦く月神族を楽しませてもらうとしよう。私と蘆屋に壊滅させられた月神族が持つていた通信機を操作し、SOS信号を出せさせてからその場を後にした。

(横島は狂神石を取り込んだ、全て私の計画通り)

今の所全て私の計算の範疇——私の計画が崩れる事は無いことを確信し、私達は魔界へと引き返していくのだった……。

GS 芦 蛩 外 伝 平 安 大 魔 境
その18へ続く

その18

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その18

く横島視点く

ひたすらに冷たく寒い……それだけが俺が認識出来る全てだった。

何でこんなにも寒いのか……。

何でこんなにも悲しいのか……。

何でこんなにも暗いのか……。

何もかもが判らない、ただ歩みを止めてはいけけない、それだけしか判らず。

光なんて何一つ見えない闇の中をひたすらに進み続ける。

【どこへ行くこうというんだ？】

耳元に聞こえた声と共に肩を誰かに掴まれた。つかまれた場所から、氷水を掛けられた様に全身が冷えていく……。

【もう逃げられない】

【お前の中に生まれた俺はお前を逃がさない】

囁くように聞こえる声に嫌悪感と恐怖が俺を埋め尽くしていく、振り返ってはいけな

い……………そう判っていたのに、俺は思わず反射的に振り返っていた。

「お……………俺?」

【そうだ、お前は俺で、俺はお前だ】

そこにいたのはバンドナを巻いていない俺自身の姿だった。にやりと邪悪そうに笑った、俺と同じ顔をしているのにその顔には恐怖しか感じなかった。

【お前は思った壊したいと】

「ち、違うツ?!」

【いいや、違わない、お前は壊したいと殺したいと願った筈だ】

「違うツ!!!俺は……………俺はツ!!!」

【何を恐れる、何を恐怖する?守ると言う事は敵対する者を壊すと言う事だ。恐れることも、嫌悪することも無かるう?】

「違う……………違う……………」

【違わないさ、殺すことでお前は守りたい者を守った。それを恐れる事も無い、嫌悪する事も無い】

俺を諭すような声に俺は恐怖しか感じなかった。闇が俺を覆いつくすようなそんな恐怖を感じ、その場から走り出すが、俺の声は俺の側から離れない。

【その手を見る、お前はもう逃げられない】

「……あ、ああ……ッ」

鮮血に染まった両手を見て、走っていた足が止まる。

「お、俺……俺は……」

【そうだ。お前が殺した、お前が壊したんだ】

囁く声に恐怖して、自分の手が紅く染まっている事が恐ろしくてその場に膝を付いて俺は動けなくなった。だが、闇の中に光が差し込んだ時、俺は上に引き上げられるような感覚を感じた。

【もう、お前は逃げられない。お前はまたここに来るよ】

引き上げられていく中もずっとびったりと付いてくる声は、決して俺から離れる事は無いのだった……。

「はっ……はっ……」

寝かされていた布団から飛び起きる。何が怖かったのか、何が恐ろしかったのか……それは俺の記憶から抜け落ちていたが、酷く冷たく寒かったという事は覚えていた。

「横島!」

「蛍……蛍ッ!」

俺の名を呼ぶ蛍の声に気付き、俺は反射的に蛍の身体を抱き締めていた。

「横島。大丈夫、大丈夫よ」

背中を撫でられ、乱れていた呼吸がゆっくりと落ち着いてくるのが判る。蛍の体温で安心したのか、俺は再び眠りに落ちていくのだった……。

〈蛍視点〉

驚かれるように跳ね起きた横島は何かに怯えるような様子だった。私を見つけて抱きついて来た横島の背中を撫でて上げると落ち着いたのか、再び眠りに落ちる。だがその顔は今だ、恐怖に怯えている。

「心眼。横島は大丈夫？」

「……完全に大丈夫とは言えん。やはり狂神石の影響が色濃く出ている」

高島が封印したが、やはり完全ではなかったのだろう。桶の中に布巾を入れて、絞って横島の額に乗せる。

「それで貴女は？誰なの？」

「……ふいッ」

部屋の隅で胡坐をかいて横島を見つめている童女。だがその額には赤い角が生えているから鬼だと思っただけ……餓鬼や都に出る鬼とは明らかに格が違う。

(英霊なのね)

どういう原理かは不明だが、完全に現界している英霊なのだろう。あの金髪の英霊……「坂田金時」と親しげとまでは言わないけど知り合うって言う様子だったから恐らく「酒呑童子」か「茨木童子」だと私も美神さんも予想している。

「みむー?」

「う、ううーむ。だがな?」

「ぶぎー、びつぐう?」

「いや、吾は確かに横島が心配だ。だけど人間は好きじゃない」

【ノブーブ?】

「いや、確かに横島は人間だけど……」

……チビ達を会話が出来るといね。横島は好きだけど、人間は好きじゃない。だから私がいるから警戒していると……へんな言い方だけど猫みたいな鬼ね。

「……何?」

「混ざり物か?」

「……失礼ね。まあ。そうだけど……」

混ざり物って言われ方は好きではないけれど、まあ魔族の血が入っているからか混ざり物って言うのは間違いではない。

「そうかそうか、汝は何だ？鬼か？」

「いや、西洋の悪魔かな？」

「そうなのか？鬼ではないのか？」

……なんか凄い急にフレンドリーになったんだけど……、まあでもうん。私達が知らない横島の話聞けるかもしれない。

「私は蛸っていうの、貴女は？」

「茨木、茨木童子だ」

……物凄いビッグネームね。しかもこれ絶対、横島の家に住み着くわ……私はそんな確信を得ていた。

「輝夜様達と横島は何してたの？」

「ん？もこと輝夜とは横島の取り合いをしていた。途中で何度か横島が失神してな、慌てたぞ」

……一体横島はこの屋敷の中で何をしていたのだろうか。そして何故お姫様2人と鬼で取り合いになっていたのか……。

「そしてチビ達も仲良くなった」

「みーむう♪」

茨木の膝の上でよいよいと踊っているチビ。そつと手を伸ばすが、手を弾かれた。

「汝嫌われているのか？」

「……そうなのかしら？」

なんで付き合いの長い私は駄目で、茨木がOKなのかチビ達のアウトとセーフの境界が今だ判らない。

「横島は優しくて面白い。早く起きて欲しい」

「私も早く起きて欲しいけど、無理はさせれないわ」

もう水分が蒸発してしまっている布巾を横島の額から取り、再び水の入った桶で冷やして額に乗せてから再び、茨木に向き直る。

「お話ししましょう。貴女が何を見ていたのか、それを私に教えて欲しいわ」

「う、うーむ。うん、良いぞ！まずな、横島が御粥をくれた。最初は引っくり返したが、怒られてな……」

いや、私が聞きたいのはそう言う話じゃないんだけど……いや、この話の中に何かヒントがあるかもしれない。私は前向きにそう考え、茨木の話に耳を傾けるのだった……。だがその話の大半は如何に横島が優しいかと言うもので、私の求めていた話は殆ど無いのだった……。

〈美神視点〉

悪夢のような夜を終えた私は高島と共に、輝夜の屋敷に訪れた帝と向き合っていた。

「……そうか、すまぬ事をした……」

月神族によつて殺された陰陽師と兵士の数は100人では効かない。輝夜姫に地上に留まつて欲つた代償はとんでもなく大きかった。

「この手紙には横島のお陰で逃げれると、横島に深い感謝とそして師の元に帰して欲しいと言う輝夜と妹紅の言葉がある。遅きになつたが、横島は返そう。申し訳無い事をした」

かなり気落ちした様子だけど、私とすれば横島君を返してくれるのなら文句は無い。

「そして恥を承知で頼みたい、怨霊とかした道真公を止めるのを協力してくれまいか？」

「……それに関してはずぐ返事をするとは出来ません。暫くの猶予を」

「そうだな。すまぬ、高島よ。屋敷まで付き添いを頼めるか？」

「判りました。すぐに」

「すまぬな」

酷く肩を落とした様子で席を立つ帝に付き添つて高島も屋敷を出て行く。その姿を見送り、私は深く溜め息を吐いた。

「あれどうするつもりなのかしらね」

「……捨てるだろうよ。アレにそこまでの価値は無い」

シズクが床の隙間から姿を見せて溜め息を吐いた。手紙と共に残された蓬萊の薬——それ持ち帰った帝だが、シズクの言う通り、私もあの薬を帝が使うとは思えなかった。「横島殿の師の方ですね。本当にありがとうございます」

「横島殿がいらつしやつてからは、あの子も本当に幸せそうで……私達もとても楽しい時間を過ごさせてもらいました」

「いえ、そんな……」

私は何もしていないのだから感謝の言葉を告げられても困る。だけど、翁夫妻は穏やかに微笑んだ。

「私共の屋敷をどうかお使いください、あの子がいなくてとても寂しくて」

「ご迷惑なのは承知ですが、お願いできないでしょうか？」

「……そう言うことでしたら、お世話になります」

私がそう返事を返すと翁夫妻は嬉しそうに微笑み、もう一度あの子を助けてくれりがとうと頭を下げて部屋を出て行った。

「救えたのかしらね……」

「……少なくとも、あの夫婦にとつてはそうなのだろう。それよりも……私達にはやらないといけないことが残っている」

「そうね。坂田金時……あの英霊に話を聞かないとね」

私達がいけない間、横島君に何があったのか、そして何故狂神石を吸収してしまったのかそれを知らないといけない。だけど私は1つ気がかりになっていた事があった。

「藤原の姫と一緒に逃げちゃったけどこれどうなるの？」

「……判らない、少なくとも妹紅はこの場に残っていた。だが……現にいない」

「横島君のせいかしらね？」

「……恐らくそうだろう」

ガープは横島君を特異点。歴史を改変する鍵だと言った、そして現にそれを私は見ている。輝夜姫と共に藤原の姫が姿を消した……これはかなり大きな影響があると見て間違いない。

「高島の処刑ってどうなるの？」

「……判らない。だが……高島が生きていれば、横島に影響を与えるかもしれない」

「そうね……」

高島が変身出来たのは横島君の影響だろう、そして高島が生きていれば横島君にも影響があるかもしれない。なににせよ、これからはアスモデウスの動向に加えて、高島の事も見ている必要があるだろう。

「ごめんね。随分と待たせたみたいで、それで何があったのか教えてくれるかしら？」

「……おう。つうか、正直今回の件は正直俺ツチもかなり堪えてる。横島にもお前達にも申し訳ねえ事をした……先に謝つとくぜ、すまねえ」

深く頭を下げる坂田金時は暫く頭を下げ続け、それからゆっくりと顔を上げて、今回の件……正確には横島君が何故狂神石を取り込んでしまったのかということの顛末を話し始めた。

「……牛頭天王を封印したのか」

「ああ。横島が眼魂つて奴に封じ込めたんだが……その時に大将は狂神石に吞まれていた」

つまり源頼光を眼魂に変えたことで、源頼光を蝕んでいた狂神石が横島君にも伝染したわけだ。

「その眼魂は？」

「……すまねえ、それもどっかに消えちまった……」

高島に封印されたシェイド眼魂と同じく監視していたのに消えたと言う眼魂。何処に消えたのかと考えるよりも先に、酷い胸騒ぎを私は感じずにはいられないのだった……。

く清姫（現代視点）く

横島様が心配でしたが、私はそれよりも気になることがあって独自で行動しておりま
した。

（これはどうなるのですか）

私の記憶では藤原の姫に手を出したと言う事で、高島様は処刑されました。しかし、
その肝心の藤原の姫がいなければ高島様の処刑は無くなるのか、それとも別の要因で処
刑されるのか……私はそれがどうしても気がかりでした。

「ええい！あの役立たずめッ！我が妻となる輝夜姫を護り切れなかつたとは！」

やはり予想通り、車持皇子は荒れ狂っていた。表面上は穏やかだが、その激情の凄ま
じさを私は知っている。

「忌み子とは言え、好き者に宛がう予定もあつたというのに！なんとと言う役立たずかッ
！」

怒り狂う車持皇子を見てみると逆に頭が冷えてくる。だが、その次の言葉に頭に血が
上るのを感じた。

「あの役立たずを殺せ、高島と似ているのも腹立たしい！その為にお前を解放したのだ
鬼道！精々働け！」

「……御意」

……鬼道まで引つ張り出したか。しかし、聞き捨てならないのは横島様を殺せと言うその言葉……。

(これは最悪の展開かもしれません)

高島様の変わりに横島様が処刑されるかもしれない。私はその事を伝える為に、気配を消したまま車持皇子の屋敷から脱出するのだった。

「……なるほど、あの狐め、そんなことを考えているか」

「でもそれってかなり不味いわよね」

「はい、ただでさえこの状況ですしね」

道真公の怨霊に加え、輝夜姫を失った事で気落ちした帝……今の平安京の状況は決して良くない。

「歴史の修正力って問題もあるわよね？」

「そうなのねー、もしも高島が死ぬ事が運命で定められていたのなら」

「……生贄がいる」

「横島様か高島様かって事ですネ？」

考えたくない事だが、もしも、もしも高島様が死に。私が怒り狂い平安京を焼き払う事が歴史に、運命に刻まれた因果と言うのなら……そう遠くない内に、横島様か高島様が命を落とさなければならぬという事だ。

「私は、横島君を護るわよ。高島よりも、私は横島君のほうが大事。蛍ちゃんは言うまでもないだろうしね」

今横島様の看病をしている蛍も言うまでも無く、横島様と高島様を秤に掛けるのならば横島様を選ぶだろう。だがそれは私も同じ……だけど……。

「……この時代の私達は……」

「高島様を選ぶでしょうね……」

この時代の私達は横島様を知らない、むしろ逆に考えれば高島様が生きていけば横島様は現代でも生きていけると言うことになる。そうなれば、横島様が死んでも問題ないという結論を出すかもしれない。

「……争うことになるかもしれないな」

「そうですわね。でもそれは防ぐ事が出来るかもしれません」

「鬼道ね」

あの余計なことしかしない、鬼道家。それを防ぐ事が出来れば、もしかすれば、横島様も高島様も生きたままと言う可能性は出てくる。

「でも今は動かないほうが良いのね」

「……口惜しいがな」

「本当ですわね」

鬼道はなんだか言っても、帝の護衛を任せられるほどに優秀な陰陽師だ。そして権力もある、そんな相手が車持皇子と手を組めば、どんな厄介な手を打って来るか判らない。下手をすれば、今まで協力し合っていた高島様と決別する可能性もある。

「向こうが動いてくるまで待つしかないって事ね」

「どうせ待つなら横島が回復するまで動いてこないと良いんですけどね……」

権力に吞まれた相手がどんな手を打って来るのが判らない。更に言うと、高島様の評価も決して高くない、情報操作などで高島様や横島様が追詰められる可能性もある。

「何時の時代も厄介なのは人間ですね」

「そうなるわね、本当に……」

権力、地位、金。それらの欲によつて暴走する人間は多い。その中でも鬼道はそれら全てを欲する……その欲は確実に悪魔に狙われる。面倒な事になると言う事を、私も、シズクもそして美神達も口にする事は無いがそれを感じ取っているのだった……。

そしてシズク達の予想は当たっており、使用人もいない、護衛もない、ほぼ無人の静寂と闇に包まれた鬼道の屋敷の中では狂笑が響き続けていた。

「へ、ふへへ……ひやは。ひひっ！ひやはははははーッ!!」

「人間の業は深い、神魔よりもよっぽどな……」

杯に赤黒い液体を注ぎ、狂ったように笑いながら呑み続ける鬼道を蔑んだ瞳で見つめ

ているアスモデウスの姿があるのだった……。
GS 芦蚩外伝平安大魔境 その19へ続く

エイプリルフルール特別読みきり カルデアの横島君

カルデアの横島君

人理継続保障機関フィニス・カルデアには運命の日と呼ばれる日があった。この日の出来事はカルデアにいる魔術師全てに緘口令が敷かれ、家族にも、そして時計塔にも報告する事を禁止された。無論人の口を塞ぐという事は出来ない、どこからその話が外に出ることも十分に考えられそうな物だと誰もが思うだろう……だが最後の英霊召喚実験——万能の人レオナルド・ダヴィンチの召喚実験の後の行なわれた第4号英霊召喚実験によつて現れたの英霊ではなく、真正正銘の生きた神魔とその神魔が作り出したであろう結界の中にいる人間と無数の幻想種の姿だった。青いワンピースに身を包み、金色の髪を翻しその姿は圧倒的な美、そして力強さを伴っていた。その背中に純白と漆黒の6枚の翼を羽ばたかせた。それは軽やかな物だったが、その場にいた全員を跪かせ、顔を上げることすらも許さない圧倒的な重圧を放った。

『初めまして、自分達が人理を守る等と驕っている人間達よ、私はルイ、ルイ・シファア……明けの明星と呼ばれる者だ』

明けの明星——その名前を知らない魔術師がいるわけが無い、神に反逆した最も位の高い天使、そして魔界を統べる悪魔王——少女にしか見えないルイがそう口にすれば何を馬鹿なと思うかもしれない、だがこの場にいた全員はその言葉を信じた。

『余りにも愚か、そして余りにも傲慢——しかしだ。その頑張りを馬鹿にするとするのは些かどうかと思つてね、私から君達に助っ人を貸してあげようじゃないか』

『すいません、ルイさん。ちよつと遊びに行こうかつて言うから着いて来たんですけど……』

結界の中から響く青年の親しげな声に魔術師達は驚いた。一体ルシファーとこの青年に何の関係があるのかと困惑した。

『遊びだよ、平行世界のここで君が何をするのか、そこでどんな出会いをするのか、とっても面白い遊びさ』

『……俺が困つたりするのを見たいだけですよね？』

『そうとも言うね。なに、私以外の全ては私の玩具だよ、あと貸して上げるだけだ。彼を殺したり、君達の愚かな封印指定なんて物にしてみたまえ……すぐに殺しに来るからね』

悪びれも無く、自分以外の全てが玩具だと告げるルシファー、それが世界に定められ

た絶対の法だと思われた。そしてルシファアの連れてきた人間を殺せば自分達が死ぬというのを全員が理解した。

『じゃあ暫くしたら迎えに来て上げよう、十分に私を楽しませてくれたまえ』

その言葉を最後にカルデアを機能不全に追い込んだルシファアは姿を消し、ロマニ達の前には数十匹の幻想種を連れた紅いバンダナを巻き、GジャンとGパン姿のどこからどう見ても一般人という様子の青年だけが残された。

『なんかルイさんがすみません、少しお世話になります』

ペコペコと頭を下げる青年の姿とカルニアデスの前に残された白と黒の羽——それだけがルシファアが確かにこの場に存在したと言う確かな証拠なのだった。

貴方から見た横島忠夫とは？

く 回答者 カルデア所長く

最初は何の冗談かと思ったわ、明けの明星に預けた人間なんてどうすれば良いのかって完全に私の手に余ると思ったわ。けど……今なら横島がいてくれて良かったと思う。だって彼がいなければ私は最初のレイシフトで消滅していたから……。

「ああ。ブラックホールと何も変わらない。それとも太陽かな？ まあどちらにせよ。

人間が触れれば分子レベルで分解される地獄の具現だ。遠慮なく、生きたまま無限の死を味わいたまえ」

私の味方だと思っていた、理解者だと思っていたレフが敵で、私をカルデアスへと落とそうとする。人間が耐えられる物ではない、マシユも、藤丸も吸い込まれないように耐えるのに手一杯だった。

「いや……いや、いや、助けて、誰か助けて！ わた、わたし、こんな所で死にたくない！」

爆発事故で死んでいると聞かされていても、例え魂だけでも私は生きてる。死にたくないと声を上げる、そんな私をレフは冷酷な瞳で見つめ楽しそうに笑っている。

「だってまだ褒められてない……！ まだ、誰も私を認めてくれてないじゃないッ！」
お父様が死んだからカルデアを引き継いだだけの小娘——誰も私を褒めてくれない、誰も私を認めてくれない。

『へえ、マリーさんは所長なんだ。凄いなあ、俺なんか馬鹿だからさあ……そういうの全然判らないし、魔術師なんて言われてもさっぱりだけど、俺はマリーさんが凄いと思うよ』

消える、死ぬという恐怖の中で脳裏を過ぎったのは能天気には笑う横島の姿だった。その能天気さに、私の事も、カルデアの事も何も判っていないのに、そんなことを言う横

島に腹が立った、怒鳴りもしたし、ビンタもした。それでも横島は私を氣遣ってくれていた。

「どうしてッ!? どうしてこんな事ばかりなのッ!」

頑張つてもがんばつても、寝る時間を惜しんで、食べる物すべてを戻すほどの重圧に押し潰されそうになって……。

『マリーさん、酷い顔だ。うりばー、大きくなつて増えてくれる? もふもふで暖かいし、柔らかいから少し横になってくださいな。その間にお粥でも用意しますから』

怒鳴つても、嫌味を言つても横島は私の事を氣遣ってくれたし、それでも側にいられた。魔術を知らないから、私達の話は理解出来ないし、ルシファーに殺されたくないから話なんてしたくないのに……それでも横島という時はとても気持ち穏やかだった。

「誰も私を評価してくれなかった!」

違う、横島だけは私は評価してくれていた。頑張っていると、大変でも頑張れと励ましてくれた……。

「皆私を嫌っていた!」

カルデアスが近づき、自分が消えていくのが判る。走馬灯のように脳裏を過ぎるのが短い時間だった筈なのに、色濃く脳裏に残っているのが横島事ばかりだった……

「やだ、やめて。いやいやいやいやいや……ッ！　だつてまだ何もしてないッ！」

叩いてしまった事も、八つ当たりで怒鳴った事も謝っていない……カルデアで唯一本当に味方だったかもしれない人間を私は傷つけて……今も尚勝手な事を言おうとしている。

「助けてくれるって言ったのにッ!!　味方だつて言ったのにッ!!　横島の嘘つきいいいいッ!!」

爆発事故でどうなったかも判らない、Aチームと同じで死んでいるかもしれない。いや、きつと死んでいるかもしれない、ロマニが見つからないって言ってたからきつと死んでる。それでも本当は縊っていた、助けてくれるんじや、味方でいてくれるんじやと期待していた。傷つけて、怒鳴って、八つ当たりをしたのにそれでも横島の優しさを私は信じたかったのかもしれない。

「手を伸ばせッ！　俺の手を掴めッ!!」

「えッ……」

翡翠の粒子を撒き散らし、Gジャンを紅く染め、額から血を流していてもなおその瞳を強く輝かせる横島が目の前にいた。

「早くッ!!」

なんでここにいるのか、どうやって浮いているのかとかそんな事はどこかに吹き飛んでいた。助けに来てくれた、勝手な約束だったのに、私の元へ来てくれた……そこから必死だった、必死で手を伸ばして来る横島の手を掴もうとその手を伸ばす。

「無駄だよ。オルガマリーは死んでる」

「うるせえボケエツ!! 俺は助けるつて味方だつて約束したんだよツ!!! 男が1度言ったことを、約束した事を覆せるかツ!!!」

私の手を横島が掴むと同時に光が弾け、私はマシユと藤丸の近くにいた。

「所長ツ! 大丈夫ですかツ!」

「ごめんなさい! 何も出来なくて、見てることしか出来なくてごめんなさいツ!」

マシユと藤丸の涙声の謝罪が何度も何度も口にされる……だけど私はその言葉に返事を返す事は出来なくて……。

「魂魄がずいぶんと消耗してる。マリーさん、ごめん。文句は後で聞くから」

横島がそう言いながら丸い球体を私の胸に押し付け、私は一瞬でその球体の中へと吸い込まれた。

『何が、何がどうなつて』

球体の中にいると言うのは判るし、外の光景を見える。それでも私の声は聞こえないのか、マシユと藤丸の困惑している声が響く。

「お前……何者だ。何をしたッ!!」

「俺が何者かって? んなもん簡単だッ!! てめえをぶつとばすもんだッ!!」

横島の姿が掻き消え、レフの顔面に何時の間にか鎧に包まれていた右拳を叩き込む姿——マシユや藤丸の心配する姿よりも私はその横島の姿に目を奪われたのだった……。

その後は本当に怒涛の展開だったと思う……。

横島は魔術師ではないけど、魔術師だった。だけど魔術使いではなく、魔術が秘匿されておらず国家資格となっている平行世界の住人だったという事。そしてあの球体は眼魂と言つて、横島の武器の1つであり、その中に格納された魂は保護され自然に成仏する事も、悪霊化することも無い。Aチームのヒナコを除き……と言うか、横島から告げられたのは衝撃の言葉だったし。

「この人生きてるぜ、と言いか人間じゃねえな。とりあえず霊力叩き込めば復活しそう。と言う訳でそおいッ!!」

軽くそう言うのと両手から魔力ではなく、霊力をヒナコに叩き込み蘇生させた。

「お前は馬鹿かッ! 破裂するわッ!!」

「ふぎやあッ!?!」

コフィンから飛び出したヒナコはそのままの勢いで横島に飛び膝蹴りを叩き込み、横島が吹っ飛ぶ光景に悲鳴を上げた。しかもヒナコは始祖の吸血鬼でまた悲鳴を上げた。

「とりあえず今だとえーつと一人か二人なら死者蘇生できるけどどうする?」

「へ? 横島君。今なんて?」

「え? いや、俺の切り札を使えば多分蘇生出来ると思うんですけど、ロマンさん」

死者蘇生が出来ると言う横島にも驚いたし、本当に蘇生したキリシユタリアにも驚いた。ルシファアが連れてきた横島は限定的な聖杯を創り出す能力を持った。英霊とも戦える能力を持った生きた英霊とも言える凄まじい力を持つゴーストスイーパーだった。

「マリーさんもその内蘇らせるから」

「……………うん、でも今は……………これで良いかな」

眼魂の中において、横島の側にいるのはうん……………そう悪い気持ちじゃない。ずっと一緒じゃないけど、霊体つてことで横島の側にいるのは本当に穏やかな気持ちだった。

【マシユ、藤丸。なんで横島の部屋から出てきたのか私に説明してほしいのだけ……………】

「しよ、所長!? 悪霊! 悪霊になりかけてますよ!」

「疚しい事は何も、ただ横島さんがお守りをくれただけで」

【お守り……………そうお守り、私は持てないのね……………ふ、ふふふふふ。しねえッ!!】

ただ一つだけ問題があるとすれば自制心とかが無くなってしまった事と……………横島が好きって言うのと嫉妬心とかを抑えられなくなったって言うのは問題だし、私は今も死

んでるけど……生きてるときより幸せです。

「誤解です！ 私も先輩も横島さんに何もしていません」

「確かにいい人だとは思うけど、所長の思ってるような事はありません」

ポルターガイストで植木鉢や本棚を浮かべ、泣きながら逃げているマシユと藤丸を追い回しながら私は笑みを浮かべるのだった……

～ 回答者 紅い弓兵～

私がカルデアに召喚された時の事を話そうと思う、座からカルデアに召喚された私を出迎えた物それは……。

『やった成功じゃない!?!』

『やりましたね、先輩!』

緋色の髪を持つ少女と眼鏡を掛けた桃色の髪の少女。そして……

『みむ?』

『ぶぎー?』

『うきゅー』

『ノブノブ』

『ぎゃーう』

『ぴー』

『フカア?』

『ヨギ?』

『モーノ』

『ココオ?』

『ぴいぴい?』

『マリーさん、チビ達の踊りは効果なかった? それともあったのかな?』

『どうかしら? 幻想種の舞だから何らかの効果はあるはずなんだけど……』

『幻想種の定義が私には判らないが、英霊を人外と定義すれば効果はあったのだと思われる』

ドラゴンや見たことの無い無数の幻想種が踊り、紅いバンダナに目が浮かび、Gジャン、Gパン姿の青年とそんな青年の肩を両手で掴んでいる足の無い銀髪の少女の幽霊……。

『なんでさ……』

理解を超える現象、そして光景に思わずそう呟いた私は絶対悪くない、あと後に聞いたのが召喚された英霊を出迎えるのは横島が言うマスコットによる歓迎の踊りらしく、幻想種の群れを普通にマスコットとか言っただけで愛玩動物のように可愛がっている横島

が本当は化け物なのではなからうかと思つた。なぜならば……。

『ガブツ!!!』

『くくくくくッ（声にならない絶叫）!!!!!!』

『クーフーリンの手が!』

『サメ丸が物凄い勢いで連続で噛んでるッ!!』

横島が普通に頭を撫でているので、ちよつと撫でて見ようとした英霊の数多くが連続噛みつきによつてよつて沈んだ。英霊でなければ腕が千切れ飛んでいるレベルだ。

『キシヤアアアッ!!』

ちよつと横島が診察とか、風呂に行つている間は凶暴性が剥き出しだ。横島がストツパーであると言うのは明らかで、下手をすればマスコットに制圧されるかもしれないという笑えない癖に結構現実味のある結果に天を仰ぎそうになった。

『野生が完全に向き出しになつてる……』

『どれだけ可愛くても幻想種は幻想種つて事ね……』

『おーい、サメ丸ー? ヨーちゃん? どこだ〜』

『フカ!』

『ヨギイツ!』

野生モードからマスコットフォームになり、横島に駆け寄るその姿は二重人格その物

だ。というか、横島が言うには魔界でも危険とされる生き物らしく、神魔が普通にいる世界でも容易に手を出せば死ぬと言われるほど凶悪な魔物らしい。そんなのを当然のように數十匹世話をしているのは異常としか思えなかつた。

『なんで横島さんは普通に連れてるんですか?』

『なんか俺は動物と子供に好かれやすい体質みたいだから?』

『こいつは自分で判つてないから気にするな、人外と子供に異様に好かれると思つてろマシユ、立香』

そこは一番気にするべきところだと突つ込みを入れたのは私だけではない。天然でぼやぼやしてて基本的に何も考えてなさそうなのが横島だ。そしてナーサリーライムやジャック・ザ・リツパー、アレキサンダーや英雄王の子供の姿子ギルとも仲が良く、戦闘者ではなく保父やブリーダーが天職なのではないか? と思うほどだ。これほど戦闘から縁の無い男というのも珍しいと思うほどに闘争心が感じられない、私達には出来ないメンタルケアを行なう為の人材では? と私は考えていた。

『馬鹿ね、あいつは生粋の気狂いよ。優しい、子供に好かれる? そんなのただの隠れ蓑よ、その気になれば私だって殺せる。あいつはそういう奴なのよ』

真租の吸血鬼である虞美人の言葉を私は話半分で聞いていたが、ロンドンでのソロモンの出現時にそれが嘘偽り無い物であると言うことを知つた。

『おら、立てよど三流』

『何を……何をした貴様ツ!!』

『俺が知るか。だけどお前がソロモンって言うのなら俺はお前には絶対に負けない、だって俺はアスモデウス、ガープ、セーレを倒した神

殺しだぜツ！　ここでお前をぶっ潰して人理焼却なんて止めさせてやらあツ！　変身ツ！』

『カイガン！　ウイスプツ！』

英霊である私達が完膚なきまでに負けたソロモン王と互角に戦うその姿に虞美人の言葉が真実だと思いきらされたのは記憶に新しい。

「ガウ」

「プギ」

「あ。ああ……手伝いに来てくれたのか、ありがとう」

鳴き声に思考の海から引き上げられた私の目の前にいたのはうりぼーとオルレアンで横島が捕まえて来たと言うアルビノのウエアウルフ。

ほかにもキメラの赤ちゃんにぼんたと名付けていたり、火の精霊を仲間にしていたりと本当に横島の行動には節操が無い。

「ではこれを頼もうか」

畳んだ洗濯物を籠に入れて渡すとうりぼりとウルはそれを器用に抱え上げて歩いて行く、その姿を見送り厨房で夕食の準備をしていると横島がマスコットとちびっ子サーヴァントを連れて食堂にやって来た。

「エミヤ、おやつを出してくれよ」

「ああ。判った、だが夕食の前だから少しだけだぞ？」

「OK OK、よし、皆ちゃんとを手を洗って席に座って待つてような」

「「はーん」」

戦闘者としても紛れも無く横島は優れているだろう。だがその本質はやはり戦闘には向かない優しい男なのかもしれないと私は思うのだった……。

く 回答者 盾のデミサーヴァントく

横島さんですか？ そうですね、とても優しい人だと思えますよ。ただちよつと……何を考えてるか判らない時はありますが、とても穏やかで優しい人だと思えます。

『……やっぱり横島君は私のお父さんになってくれる人なのですね』

『相変わらずなんかわからない事を言ってるなあ』

ただ膝枕をしていて、股間に顔を埋められかけてるのに平然としているのは正直どう

なのかと思えます。横島さんが悪いのか、それともそれをしている別の世界の沖田さんが悪いのかと悩みます。

『ノツブ！ 放して！ 放してください！ 私の顔をしているあの変態を始末しなければ沖田さんまで変態にツ!!』

『もう手遅れじゃろ、お前だつて偶に横島に頭を撫でられて、赤面してるじゃろ?』

『そうそう、無理無理。横島の父性にHITしたら負けじゃろ』

『Wノツブも手遅れですけどねツ!』

『そうじゃけど?』

横島さんは魔術が公表され、国家資格になつている世界の人だ。私もぼんやりとですが、ルシファーさんの降臨の日は覚えてる。はつきりと思いつけないのは魂の防衛機能だそうです。話はそれでしたが、横島さんの世界にも英霊はいて、その英霊が横島さんとの縁を辿つて、カルデアに出現する事があります。今の目の前にいるW沖田さんとWノツブさんとか……。

『……出来た』

『凄いな、ここまで料理が出来るのか』

『……横島は私が育てた。徹底した栄養管理と食事でだな』

『神霊よね? なんてそんなことをしてるの?』

神霊で龍神のシズクさんとか……。

『同じ私なのに違うのですね』

『私は横島様の世界では龍神の姫ですしね』

『嘘ではないですよね？』

『嘘じゃないですよよ？』

清姫さんと龍神の姫の清姫さん。同じ姿をしても進んだ歴史、生まれが違う英霊もいます。

『お兄さーんツ!!』

『お兄ちゃーんツ!!』

『ふっぐうツ!?!』

ナーサリーさんやジャックさんのように子供の英霊……ではなく神魔だそうですが、人造神魔の紫さんとネクロマンサーでゾンビのアリスさんの体当たりで横島さんがカメリアの天井に追突する光景は良く見られます。普通なら死んでいると思うほどのダメージですが、平然としているのは凄いと思うのと同時に少し怖くもあります。だけど仲良く昼寝をしている姿を見たりするととても穏やかな気持ちになります。

『ツチ』

『チツ』

余り横島さんの世界の英霊や神魔がカルデアに召喚される事は無いのです。1ヶ月に1回か、2ヶ月に1回という頻度です。その理由はダヴィンチちゃん曰く強すぎるのだという事です。

『普通に神魔がいる世界の英霊だ。スペックが違う、同じ英霊でも内包してる力が違うのさ。だからそう簡単に召喚は出来ないんだ』

横島さんという強すぎる縁があるから召喚されるが、それがなければまず召喚される事はないと言うダヴィンチちゃんの言葉に私も先輩も納得したのですが、それだけではないと言うのをすぐに悟ることになった。ジャンヌダルク・オルタさん、私達の世界ではジルドレさんが作り出した贗作の英霊、だけど横島さんの世界では真正銘のジャンヌダルクさんの反転英霊同じ顔、同じ姿をしていても、異なる存在。だけどその大元は良く似ていて……。

『横島にちよつかいを掛けるの止めてくれないですか?』

『はあ? なんであんたにそんなことを言われなはいけないわけ?』

好きな人の好みもやはり似るようで、2人のジャンヌオルタさんはしよつちゆう喧嘩をします。横島さんが止めてくれるとすぐに収まるのですが、結構な問題だと思つています。

『あいつは駄目だよ。女神とかに好かれてる段階でアウト』

『……気をつけろとあれほど言ったのに……』

オリオンさんの言う通り、横島さんの世界の女神も沢山カルデアに訪れていた。

武神にして龍神の小竜姫さん。

横島さんの世界の冥界の女主人エレシユキガルさん。

魔界の重鎮であるベルゼブルさんとルキフグスさん。

神話や伝説に名高い数多の神魔がカルデアに訪れています。ただ横島さんの世界を長くは離れられないと言う事で余り長時間居られることはないですが、それでもカルデアに居る時は皆さんがびりびりしているのが良く判ります。

「皆良い人なんだけどな……マシユちゃんも怖かったりする？」

「ちよつとだけ、ちよつとだけ怖いです」

「私は結構平気だよ？ よーし、綺麗になった」

先輩と一緒に横島さんのマスコットのブラッシングをしながらそんな話をしていたのですが、横島さんが目を逸らした一瞬に牙をむき出しにしたサメ丸さんを見て、横島さんの前だから優しかったり大人しいじゃないかな？ と思ってしまうのは仕方ない事だと思ふのだった。

〈回答者 一般枠マスター〉

横島さんは凄い良い人だと思うよ。とにかく優しいし、気がついたら側にしてくれるし私とかマシユの事を良く見てくれると思う。殆ど同じ歳なのにあの父性は本当に反則だと思う。

『みーむみーむ!』

『ノツブノツブ!』

『ぎやーうぎやーう』

横島さんの周りをびよんびよん跳ねているマスコットは可愛くて、愛嬌もたっぷりだけれど本当は凄く強いのを私もマシユも良く知ってる。

セプテムで巨大化して火炎放射やドラゴンに進化した姿を見て腰を抜かしたものだ。だってそうでしょ? 子犬みたいな大きさが突然3mを越える恐竜とかになったらそれは腰を抜かして、尻餅をつくと思う。

『いけービームだ!!』

『『『』があああ——ツ!!!』』

ゴレムやラミアを薙ぎ払い、周囲を炎の海に変えたその勇ましさと強さは本当に凄かった。と言うかタロと呼ばれている犬っぽいのかなんか三つ首のドラゴンに進化したのを見て、初めてタロが犬では無くドラゴンだと知った私の驚愕は凄まじかった。

『……やべえ、やりすぎちゃった』

『『『ぎや?』』』』

ただその後のやりすぎたと言う横島さんと言って顔をしている皆の顔を思い出すと今でも思わずくすりと笑ってしまいそうになる。

『正座』

『はい、心眼せんせー』

その後にはバンダナが消えて女の人が横島さんの隣に現れたのも驚いたけど、それ以上に楽しい、面白いつて思ったのだ。自分ひとりですんなりに気負わなくて良い、私よりももっと凄い横島さんでも失敗するんだから大丈夫って思ったのだ。それに困った事があつた時、もう駄目だと思つた時も横島さんは私達を助けてくれた。それに少しづつだけ、Aチームやカルデアの人達も横島さんが助けてくれて、少しづつだけで、良い方向に向かつている気がする。

王子様って感じだけど、天然でどこか抜けてるキシシユタリアとか。

嫌味って言うか、ちよつと怖いけど私やマシユの事を気に掛けてくれているヒナコパイセンとか。

おかまさんだけど明るくて優しいペペロンチーノさんとか。

横島さんだけじゃなくて色んな人に助けて貰つて私はゆっくりだけ前に進んでいると思う。だけどそれは横島さんが支えてくれて、そして励ましてくれるから進める道

だ。

「横島さんはいつまで一緒にいてくれますか？」

いつかは横島さんはいなくなると所長とマシユ、そしてロマニとダヴィンチちゃんから聞かされている。それが何時のなのか判らず、激しい不安と恐怖を感じながらそう問いかける。

「ルイさんが迎えに来るまでかな、でも迎えに来ててももう少し残らせてくれないかっつきつと俺は頼むと思うよ」

だから大丈夫と笑いかけてくれた横島さんに私は凄く安堵したと思う。だけど横島さんがいなくなったらわたしは立っていられるだろうか、前に進めるだろうかと不安に思わずにはいられないのだった……。

その19

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その19

く横島視点く

蚩に看病されて1日寝ていたら感じていた寒さも頭痛も完全に無くなっていて、絶好調とまでは言わないけど、それでも十分に動けるレベルにまで回復していた。ただ……月神族との戦いの記憶が途中からすっぱり抜け落ちているのがどうしても気になったが、心眼に美神さん達に助けられたと聞いて、美神さん達もそうだと言えば俺はそれ以上聞くことも出来ず、むしろそれよりも輝夜ちゃんともこちゃん達が無事に逃げ切れたのか、そればかりを心配していた。

「……ふしゃああッ！」

「いや、横島君。その子何とかしてよ」

「すいません、無理です」

俺の膝の上に陣取っている茨木ちゃんは美神さんが近づくとそれは凄まじいほどに威嚇する。猫の化身かと思うレベルだ、輝夜ちゃん達がいるときも凄かったけど、あの2人がいなくなつてからは輪に掛けて猫っぽい。

「みむー」

「む、そうかそうか、ほれ」

「みむうー♪」

ただチビ達が近づくと威嚇をしない。穏やかに笑って、自分の膝の上に乗せている。どうも茨木ちゃんはアリスちゃん達同様チビ達と会話が出来るようだ。

「蛭ちゃんは威嚇されないのよね？」

「そうみたいです」

蛭が近づいても威嚇しない、茨木ちゃんが威嚇するのは美神さんやヒヤクメと言った感じだ。一体美神さん達と蛭に何の違いがあるのか、そこが不思議で仕方がない。

「……もうすぐ昼食だから離れろ」

「ふしやあツ……ん、んんん？」

シズクが近づいてきても一瞬威嚇したが、茨木ちゃんは不思議そうにシズクの顔を見つめる。

「酒呑に似てる」

「……八岐大蛇の系譜だからな」

「酒呑の妹か？姉か？」

「……別にそう言うわけじゃないんだが……」

「じゃあ従姉妹？」

「……なんでも良いが、とりあえず昼食だ」

「判った！」

なんかシズクには凄く懐いたようだ。その理由が全然判らないけれど……あんまり威嚇とかを繰り返されるよりもよっぽど良いだろう。

「美味しいな！」

「そっか、良かった良かった」

ただし、昼食の場所でも茨木ちゃんは俺の膝の上からは退いてくれませんでした。だけど、アリスちゃんや紫ちゃんも似たような物なので、あんまり気にせず。

「口にお米付いてる」

「む？そうか？」

アリスちゃん達にやるように、茨木ちゃんを世話をしていると何故か心休まるものを俺は感じずにはいられないのだった……。

〈蛍視点〉

茨木童子……「大江山」の鬼の首魁にして、鬼の中で1・2を争うほどに有名な鬼だ。

そんな鬼が何をしているかと言うと……。

「すやあ……」

なんで横島と一緒にうりぼーに背中を預けて寝ているのか。私達が知らない間に横島にどれだけ懐いてしまったのか……それが謎で仕方ない。しかも話を聞けば、輝夜姫も藤原の姫もこんな感じだったと言う……。

「なんか横島が悪い意味で凄くパワーアップしていると思うんです」

「私もなのよね……」

「……まあ横島は人外に好かれるし」

「それに何よりも子供にも好かれますしね」

「横島さんらしいのね」

横島らしいって言ってもなんにしても何事も限度って物があると私は思う。

「これ付いてくるって言ったらどうするんですか？」

「……琉璃に丸投げするわ」

「琉璃さん泣きますよ？」

普通の妖怪ならまだしも……いや普通の妖怪だってこれだけ面倒を見ていけば泣きそうな物なのに、そこに鬼の代名詞見たいな茨木童子までくれば琉璃さんが泣き崩れる未来しか見えない。

「と言うか、なんでシズクには友好的なんですかね？」

「……酒呑童子は、八岐大蛇の息子とされる鬼だ。だからだろう、ただ茨木の話聞く限りでは……歴史と違うようだが」

茨木童子は酒呑童子の部下のほずで、酒呑童子を怖がっていると思っただけで、どうも違うようだ。

【酒呑の奴はあつちこつちうろろしてて、茨木の奴が鬼らしい酒呑に惚れこんで、食客として招いたんだよ】

眼魂から出てきた金時が茨木童子と酒呑童子の関係性を教えてくれた。

【自由奔放で楽しければ何でも良いって奴だったけどよ、案外義理固くて面倒見もいい奴だったんだよ。だから茨木の奴も随分と懐いてたみたいだぜ】

「と言うか随分詳しいわね？」

まるで見てきたかのような喋りっぷりだ。坂田金時と言えば、源頼光四天王だ。何度も戦ったから知っているのかと思いきや、坂田金時は頬を掻きながら。

【幼馴染なんだよ……】

「誰と誰が？」

【俺と酒呑……】

……いやいや、え、ええッ!? なにこの複雑な人間関係。しかもこの反応を見れば、明

らかに金時が酒呑を意識しているように思える。

【もう少し俺ツチが早ければ、あいつに会えたのによ……茨木を庇って死んじまつたらしいぜ】

あ、これ決まりですね。坂田金時は酒呑童子に恋してた……あの複雑な表情を見れば嫌でも色々感じ取ってしまう。牛若丸と信長が女性だったのも驚きだけど、それ以上に坂田金時と酒呑童子が幼馴染だった、しかも坂田金時が、ううん。もしかすると酒呑童子も意識していたかもしれないとか、ここ数年で1番の驚きかもしれない。

「そ、そうなのね。それで貴方から見ても坂田童子はどうかしら？」

【随分と横島に懐いているみたいだから大丈夫だと思うぜ。ただ……横島が死んだり、傷ついたりするとやべえかもな】

「……何故そこで私を見る」

「何でそこで私を見ます？」

「「ううん別に？」」

私も美神さんもヒヤクメもきつと同じ考えだろう。横島護り隊（ガチ）が増えると、横島が傷付けられた時の暴れっぷりを考えると、本当になんてこうも厄介な人物ばかり集めてくるのか、横島が不思議でしょうがない。

【ただよ、酒呑の奴はすげえしぶといんだ。だからもしかすると……】

「生きているかも……しれない？」

【可能性はあるぜ、あいつが操られて敵に回ってたら、相当やべえ。その所も少し調べたほうがいいかもな】

道真公とアスモデウスでも厄介なのに、もしかしたら酒吞童子も敵に回っているかもしれない。坂田金時の言葉に私達に緊張が走った……今はまだ可能性の段階だが、もしもそれが本当の事だったら相当不味い事になると思う。

「まあ色々話を聞かせてくれてありがとう」

【またなんか聞きたい話があれば呼んでくれ、酒吞の気配は俺が覚えてる。近くに居れば判るから、それも気配を感じたら伝えるぜ】

眼魂の中に消えていく金時を見送り、私達は話し合いを再開する。

「確実にまた鬼道はちよっかいを掛けて来るわね」

「一番最悪の展開は道真公が絡んでくる場合ですね」

「……そうだな、雷神の道真は私とも相性が悪い」

「火力の問題でも相性が悪いですわね」

問題はここにいる全員が道真公とは相性が悪いという事、そして第二にアスモデウスが出張ってくる可能性もある。そして坂田金時から聞いた酒吞童子生存説……もしもその通りになったとなれば、今の戦力で勝つ事は不可能に近い。美神さんもそれを理解

しているのか、険しい顔で口を開いた。

「最悪の場合、文珠で雷を起して現代に逃げるしかないわね」

「……成功するんですか？」

「……判らないわ、ヒヤクメ。そのところどうかしら？」

「う、うーん。そうなのねー、美神さんは完全に時間移動を使いこなしている訳じゃないから……人数が増えれば増えるほど失敗するリスクは増すのねー私がコントロールできればいいんだけど……」

「……お前が出てきたら真つ先に狙われるな」

ヒヤクメは神魔としての能力は低いが、その反面、魂の分析は神魔でも随一と言われている。そんな相手が出てきたとなれば、アスモデウスは嬉々としてヒヤクメを狙うだろう。

「厄介ね」

「本当ですわね」

真つ向勝負では勝てない相手が2人、そしてそれに加えてこっちの足元をすくおうとする相手もいる。こんな状況で道真公、そしてアスモデウスと戦わなければならぬという事に私達は頭を抱えるしかないのだった……。

〔茨木童子視点〕

輝夜ともこがなくなつたのは吾としても寂しかったが、まさかまさか酒呑と似た気配を持つ竜神が横島の知り合いに居るとは驚きだ。

「むー」

「はいはい、暴れないなー」

今は横島に髪を梳かせているのだが、妙に子ども扱いされているような気がして面白くない。

「なー、横島。お前は何故人間側に居るのだ？」

「俺は人間だけど？」

横島はまだ自分を人間だと思っているのか……その本質はもう人間から遠く離れていると言うのに……それを教えてやれば、横島は吾と一緒にいてくれるだろうか？

「……茨木。あまり横島を困らせるな」

「そうですねよ？ 全く、髪を梳いてもらうなんて羨ましい」

「そうなの？ じゃあ、髪梳いてあげようか？」

「い、良いんですか!?! お、お願いしますッ!!」

「……はあ、頭が痛くなるな……」

「竜神2人に睨まれてしまった。だがあの2人も気付いているだろうに……もう横島はこちら側に足を踏み入れていると……。」

「んふふふ」

「へんな風に笑ってどうした？」

「んー別に、ありがとうな。チビ、うりぼー、遊ぶぞー！」

横島が連れている子鬼と猪に声を掛けて横島の前から跳ね起きる。

「みーむうー」

「ぶぎいー」

「ぬあッ！」

蹴鞠で遊ぶが、思ったよりもチビとうりぼーの動きが早い。だがそれでこそ遊びがいがあると言うものだ。

「は、はわわわ……」

「だ、大丈夫？ 凄く揺れてるけど」

「だ、だだだだだだッ！」

「……ポンコツめ」

横島にじやれ付いている竜神2人を見て思う、横島は人間ではない吾らの心を掴んで離さない。あの無色の魂に惹かれるのは当然だ、あの白い魂をどんな色に染め上げるか

と思うと愉悦を感じずにはいられない。

(だがまあ……それはそれでつまらんのももしれん)

横島のあの危うい感じがあるからこそ、その不安定さが吾らを引きつけて離さないのかもしれない。

(酒呑が見たら気に入るそうだ……酒呑……生きておるよな?)

あの牛女に襲われた時に吾を逃がした酒呑。吾は死ぬ所を見ていない、だから生きていると信じた。

「はい、綺麗になった」

「ああ、あああ……ありがとうございます」

髪を翻しかけていく竜神の娘、ああ見ると本当に生娘か何かには見えんな。

(いや、むしろ横島が凄いのか?)

竜神である娘を生娘のようにしてしまう、横島の魅力が凄いのかと吾は割りと真剣に悩んだ。そしてその答えは割りとすぐに出た。

「……ん」

「あれ、シズクも?」

「……清姫が良くて私は駄目なのか?」

「いや、そう言うわけじゃないけど、珍しいなと思つてさ」

「……そう言う気分るときもある」

横島に髪を梳かしているシズクを見ると、酷く上機嫌の時の酒呑と同じ気配を感じるから好きだ。そしてそれと同時に横島が凄いのだと吾は認識するのだった。

「む。蛍か？」

そんなことを考えていると蛍が吾の隣に座るので、蹴鞠をチビ達の方の転がしてから蛍の隣に腰掛けた。

「うん、茨木は調子はどう？」

「勿論、元氣一杯だ」

蛍も魔の気配が嫌いではない、ただあの美神という女は駄目だ。確かに魔の気配を感じるのだが、どことなく母上に似ているような気がして、人間である横島に慣れている自分を見られると怒られるという気がして、苦手と言う感覚がどうしても消えない。

「この後はどうするのだ？」

「そうね、私達をこの時代に送った相手を倒す事を考えるわ」

「勝てるのか？」

「……わかんない、でも最初から負けるつもりではないつもりよ、帰らないといけない場所もあるからね」

横島達は今よりも先の未来から来たと言う、輝夜ともこは未来で会う事を夢見て一時

横島から離れた。

「どうしたの？」

「ん、別に」

並んで座っていた螢に何でもないと行って、シズクの髪を梳き終えた横島の背中にぶつかるときに抱きつく。

「つと、どうした？」

「……吾とチビ達を構え！退屈だ！」

「みむうー！」

「ぴぎいいッー！」

チビとうりぼーの声を聞いて遊ぼうかと言って立ち上がる横島。自然に吾の手を取る横島を見て、輝夜やもこのように先を夢見て待つのか、それとも無理を言っても、横島のいる時代に一緒に行こうと願うのか……吾は自分でも上手く制御出来ない、己の心に頭を悩ませるのだった……。

横島達が輝夜の屋敷で身体を休めている頃、高島の屋敷には一通の手紙が届けられていた。そしてそれに目を通した高島はその文を力いっぱい握り締めた。

「……どうした？」

「問題ごとですか？」

シズクと清姫の問いかけにも暫く高島は答えず、その場にしゃがみこんで頭を押さえ、深く深く溜め息を吐いた。

「陰陽寮の馬鹿共が、横島が月神族と共謀したかもしれないと言っているそうだ」

「……本当に馬鹿だな」

「愚か者、ここに極まれりですね」

月神族の襲来で陰陽寮も武闘派の陰陽師を失い、既に陰陽寮としての体裁は崩れている。

「もしも本当に月神族を退けるだけの力があつたというのならば、それを見せてみると言っている……帝の印は無い、陰陽寮の一部の暴走か……つたく、傍めんどくさい事をしてくれる」

頭をかきむしりながら立ち上がる。

「何処へ行くんですか?」

「躑躅院と六道、それと西郷。後帝にも声を掛けてくる、こうなったら御前試合つて言う体裁にするしかないだろう」

陰陽寮でやれば確実に乱入者が出てくるのが高島にわかりきっていた。今横島は帝の命を救い、そして月神族の狂気から翁夫妻と輝夜を逃がした陰陽師だ。そんな話が出て、陰陽寮が大人しくしている筈が無い。

「それに恐らく焚きつけたのは鬼道だ」

車持皇子が鬼道を軟禁から開放したと言う話を高島は聞いていた。今弱りきった陰陽寮が行き成りこんな暴挙に出るわけが無い、確実に先導したものが居ると考えていた。

「御前試合にすれば、帝の前で非道をする訳にも行きませんし」

「……助けやすいというのもあるな」

「そう言うことだ。向こうの好きにはさせない」

陰陽寮の暴走、それによって横島達を死なせる訳には行かない。そう考えた高島は陰陽寮から届けられた文を片手に屋敷を出ようとして、足を止めた。

「どうしましたか？」

「……見張られてるな。シズク、すまないが俺を運んでくれ」

「……判った、これは相当厄介ごとだな」

神魔である清姫とシズクの感覚を人間がすり抜けられるわけが無い。恐らくはアスモデウス一派だと高島は考えていた。

「これは少しの厄介事じゃないな」

「……そのようだな」

自分達の屋敷を監視している神魔の存在に陰陽寮は既にアスモデウスの手に落ちた。

もしくはそれに操られている者が指揮をとっている……。

「気配が無くなりましたね」

「……何を考えているんだ？」

「判らない、判らないが俺達が気付いたからと言うわけではないだろうな」

屋敷を監視している神魔の気配が消えたのを確認し、シズクに水で運ばれる方法を止め、高島はシズクと清姫に護られながら屋敷を後にするのだった……。

「ふん、想像以上に愚か」

屋敷から移動する高島達を見つめながらアスモデウスは吐き捨てるように呟いた。

「いかがが為さいませしょう？ 鬼道を処理しますか？」

道真公の言葉にアスモデウスは首を振り、その視線を陰陽寮へと向けた。

「愚か過ぎる道化の狂った劇を見るのも悪くない、暫し様子見だ」

高島の屋敷周辺にいたのは監視などではなく、狂神石を与えた鬼道がどんな行動をするのか見ていたアスモデウスと道真公だった。だが余りに程度の低い行動に出たことにアスモデウスは落胆し、興味を殆ど失っていた。

「横島に投与された狂神石の様子も見たい、それに鬼道に与えた鬼がどう動くのかも見るのも良かろう、だが」

「存じております。向こうの暴走が酷ければ、乱入させて頂きます」

横島を殺させる訳にはいかないアスモデウスは道真公にそう命じた。横島達が負けることはないと思うが、万が一と言うことがある。人間の愚かさや醜さを知るが故にアスモデウスは1つの安全策を講じることにしたのだ。

「任せるぞ、道真」

陰陽寮による横島への挑戦状。それがどのような展開を迎えるのか、それを見届ける事を道真に命じアスモデウスは漆黒の炎の中へと消えていくのだった……。

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その20へ続く

その20

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その20

（美神視点）

夜遅くに尋ねて来た高島の言葉に私も、シズクも清姫も憤りを隠せないでいた。それこそ、今すぐにでも陰陽寮に向かつて、陰陽寮を焼き払いかねないレベルで怒りを露にしていた。

「一応もう一度聞くわ何だった？」

「……陰陽寮の馬鹿共が、横島が月神族と結託したと言っている。本当に神魔を退けるほどの陰陽師ならばその實力を見せてみると、決闘の申し込みが出ている」

高島が頭を抱えながら言うのと、黙って聞いていたシズクと清姫が額に井形を浮かべて歩き出す。でも正直私もそうしたかった、言う事かいて、よりにもよってそれ、横島君の気持を考えていないにも程がある。

「ちよい待ち、何するつもり？」

「……全員凍らせればいいだろ？殺しはしない」

「ええ、ちよつと呪いをばら撒いてくるだけですわ」

「止めてくれ、それだと俺まで飛び火するだろ……」

「……そこで殺しに行かない当たり、丸くなってるな」

「私なら骨も残さず燃やしますわね」

過激派龍族は命を賭けても止めなければならぬ……横島君に対して非常に過保護な龍族2人がとんでもなくやばい。

「でも、高島さんがこうやって来たって事は何か良い考えがあるんですよね？」

「ああ、帝に上申書を出してある。陰陽寮の連中は今回の事も出来てない、役立たずと言われる前に実力を示したい。となると、あいつらの手の内は大体読めてくる」

心底嫌そうな顔をしている高島を見れば、大体私も予測がついた。

「正式な形の決闘ではないって事ね？」

「俺も経験済みだがあいつらはそれこそ何でもしてくる。1対1の決闘なんて絶対にありえないから、帝も巻き込んで御前試合にする。そうれば向こうの手段がある程度絞り込める。そうすれば後はこっちで護れば良い」

伏兵や、霊力の巡回の妨害、外からの陰陽術のキャンセルと言った妨害工作ならば、同じく外から妨害出来る。

「だけど、高島。横島君の陰陽術はまだ未熟よ？本職に勝てるとは思えないわ」

横島君の陰陽術は未完成で、未来で一定の成績を出せているのは陰陽術が使える相手

が少ないからだ。いかに実力が落ちていたとはいえ、本職の陰陽師との陰陽術での真つ向勝負では余りにも分が悪い。

「そこは帝の御前試合にすることが出来たら、俺と西郷で指導する。正直付け焼刃に過ぎないと思うが……」

「ある程度の対抗策になるって事ですね？」

「ああ、横島の霊力はそれこそ桁違いに大きい、初歩的なものでも良いそれらを習得出来れば、後は霊力の差で押し潰せる」

相手が蛇口から水を引つ張つてきているのに対して、横島君がダムから膨大な水を引きこんでいると考えれば、その霊力の差は明らか、高島の言う通り初歩的な陰陽師でも勝てる可能性は十分にあるだろう。だけど、問題はそこではない。

「それでヒヤクメ、陰陽術は使わせても大丈夫かしら？」

「……ん、んー横島さんの様子を見ながらじゃないと何にも言えないのね」

狂神石によつて暴走した横島君、あの時は何とか食い止める事が出来たけど、2回目も上手くいくとは限らない。

「不安要素はありますわね」

「……無視して逃げるという手もあるが……」

「それだと面倒事になる可能性もありますよね」

正直に言えば私達に陰陽寮との決闘を受ける利点なんて何処にも無い。だけど、決闘から逃げて月神族と共謀し、陰陽師と兵士を殺したなんていちゃもんをつけられて、追っ手を放たれる可能性を考えれば、何の旨みもないけれどその決闘の申し出を受けないわけには行かない。

「帝の御前試合に出来るのよね？」

「ああ、なんとしても御前試合に持ち込む」

陰陽寮での決闘なら受けるつもりは無いが、御前試合となれば話は違う。帝が見ているので余計な茶々を入れる事も出来ず、そして帝が正式に勝敗をつけるのでいちゃもんをつける余地も無いほどに完璧な形で勝敗をつける事が出来る。

「御前試合に出来るならやるわ」

「すまん、こんなことをしている場合じゃないのにな」

アスモデウスと道真公への対策をしたいのにな、こんな馬鹿馬鹿しい権力闘争に巻き込まれる事になった事に頭を抱えるしかない。

「仮に負けたとしても、向こうの言い分は何一つ通させるつもりはないぜ」

「そこは高島と帝に任せるわ。本当お願いよ？」

「ああ、任せておいてくれ、清姫、シズク行こうか」

横島君が負けて、犯人として処刑なんて流れにもなりかねないが、そこは高島と帝に

何とかしてもらおうと思う、まあ本当に最悪の場合は逃げて、陰陽寮と兵士に追われる事を覚悟しなければならぬだろう。

「面倒な事になっちゃいましたね」

「……本当ね、考えられる限り最悪の展開よ」

「……本当に陰陽寮は余計な事しかしない連中しかないな」

「まあ、最悪の場合は焼き払いますので大丈夫ですわ」

「大丈夫なのね？今の清姫様に罪を押し付けるんじや〜」

「大丈夫ですわ、同じ私ですもの」

もしかして平安京を焼き払ったのつて私達の時代の清姫なんじやと言う考えが頭を過ぎったが、平安京を焼き払った犯人を特定するよりも、明日の朝なんて横島君に説明すればいいのか、そっちの方に私達は頭を悩ませるのだった……。

〜高島視点〜

明朝一番に俺は帝の屋敷に呼ばれた。そしてそこには当たり前だが、陰陽寮の頭領の姿もあつた。

「さて、高島の屋敷に届いたと言う陰陽寮からの決闘の申し出、これに異論は無いな？」
開口一番の帝の言葉に顔を歪める頭領。俺を睨みつけているが、俺はその殺気の込め

られた視線を無視する。

「どうした？まさか以前のよう^に決闘と^{いう}名目で処刑を行うつもりか？」

「め、滅相ありません。これは正式な決闘の申し出になります」

陰陽寮には前科がある。それは俺と同じく、平民上がりの術師に陰陽術の指導と^{いう}名目で何人も再起不能^にしている。帝もそれを懸念^{して}いるからこそ、俺の申し出を2つ返事^で了承^{して}くれた。

「では後日、私の前で御前試合と^{いう}形で決闘を行^{って}もらおう。立会人は高島と西郷で良いな？」

「私は異論はありません」

殺気^だった目で俺を睨^む頭領を無視^{して}了承^{する}。これで頭領もまた了承^{する}しかない。

「わ、私も異論は^{ござ}いません」

「ならば、決闘ではなく御前試合とする。更^にだ、高島の屋敷^に送^られた文^にある月神族との横島の共謀は無^かった、彼は私の命^に従^い、

命懸^けで輝夜姫^を逃^がして^くれた。この御前試合^の勝敗^に関係^{なく}、彼ら^に危害^を加えることを禁^ずる」

「帝、し、しかしそれでは殺^{され}た我が陰陽寮^の術師^はどうなるのですか!？」

「では逆に聞くが、何故陰陽師が殺された責任を横島に求める？彼は私の命に従った、そして死んだ陰陽師には申し訳無い事をしたと思っっているが、それは全て私の指示。異論があるのならば、私に申してみよ」

「……………ツ……………いえ、何もございませぬ……………」

子供の喧嘩に親を引つ張り出してきたような気がして、気分は良くないが腐敗しきっている陰陽寮が何をしてくるか判らない以上対策は必要以上に取りたいと思う。

「ああ、後聞いておきたいのだが、鬼道が逃走した。まさか陰陽寮に匿ってなどおらぬな？」

「ま、まさか……………反逆者を匿う等と……………我らはしておりませぬ。では私はこれで」

冷や汗を流しながら足早に帝の屋敷を出て行く頭領。その姿を見れば、今の発言が嘘であると言うことは明らかだ。

「高島よ、こつちへ来い」

「失礼します」

帝に呼ばれてから御屋敷に足を踏み入れる。帝は門から出て行く頭領を鋭い視線で見つめながら俺に問いかける。

「高島お前は どう見る？」

「鬼道を匿っているのは確実かと……………」

「で、あろうな。不服ではあるが、鬼道の家には私の家の血が混じっている。帝の地位を奪おうとしていると見て間違いなからう」

「しかし、それは遠縁では？」

「うむ。だが、血縁であると言うことに変わりはない」

今の帝の5代前が確か、鬼道家と縁組を交わしている。そんな薄れた血を持って、自分が帝だと鬼道は名乗り出るつもりなのだろうか。

「御前試合の場が謀略の場になりかねん。高島、護りは任せるぞ」

「お任せください、我が命に代えてお守り申し上げます」

深く頭を下げて帝の屋敷を後にする。だが予想通りと言うか、背後について来る何者かの気配を感じ早足で曲がり道を曲がる。

「い、いない!？」

「ど、どこへ!？」

「くそっ!しくじった」

足元で騒いでいる陰陽師達を見つめながら、手を繋いでいるメフィストに視線を向ける。

「悪いな、メフィスト」

「ううん。良いよ別に、でも言った通りになったね」

「そうみたいだな、そこまで馬鹿はいないと正直考えていたんだけどな」

あの陰陽師達は木術……雷に特化した陰陽師達だ。さしずめ、俺を暗殺して道真公のせいにするつもりだったんだろう。

「早く戻ろう、これは美神達にも警告しておくべきだ」

「了解、ちよつと飛ばしていくよ」

メフィストに手を引かれ、空を駆ける。吹っ飛んでいく景色を尻目に、今回の件はただの勢力争いではなく、その後ろで外つ国の神魔であるあすもでうすとやらが手を引いているかもしれないと考えながら、俺はその場を後にするのだった……。

く横島視点く

「横島君、陰陽寮から決闘の申し込みがあったから、西郷さんと高島に陰陽術を教えるもらって」

「すいません、どういうことですか？流れが全然判らないんですけど」

陰陽寮から決闘の申し込みがあったから、陰陽術を覚えるという美神さんの言葉に俺はどういうことですか？と尋ねた。アスモデウスと道真公の襲撃があるかもしれないのに、決闘ってどういう事なのかが全く理解出来ない。

「……簡単だ。陰陽寮がゴミって事だ」

「燃やしても燃えないゴミの塊ですわ」

辛辣ツ！だけど、陰陽寮の見学をした時の事を考えれば、シズクと清姫ちゃんの言う事も間違っていないと思う。

「本当はそんな事をしてる場合じゃないんだけど、挟み撃ちとかにされるリスクを考えるとね、受けるしかないのよ」

「なるほど、やりかねないって事か、面倒な事だ」

「マジで？そこまでやる？」

「『絶対やる』」

アスモデウスと道真公と戦っている間に陰陽寮からの挟み撃ちを避けるためと言うけど、まさか全員がやると断言するとは思ってなくて、俺は絶句しながら頷くしか出来なかった。

「横島はまず基礎が出来てない、精霊召喚には長けているようだが、陰陽術師とは言い難い」

「まあ、精霊召喚は上級技能ではあるんだけどな」

平安時代で最強と言われる2人の陰陽師の指導を受けるんだけど、どうも言うか、やっぱりと言うか……俺は正規の陰陽術とは相性が悪かったようだ。

「……怪異に好かれすぎて、普通の陰陽術でも精霊が出てきているな」

「これは想像して無いな」

「……なんかすいません」

相手の霊札を無効化する術を聞いて、やってみたが精霊が出てきてガードした（らしい、俺は精霊が見えないので、確証はなし）

五行による陰陽術の行使。精霊が勝手に術をパワーアップして制御不能。

精霊は俺に褒めて欲しいと言うか、俺が好きだから頑張ってる模様。なお完全に空回りなのは、愛嬌。

「どうする、西郷。俺は……正直無理だと思う」

「……非常に厳しいが、そうだな。相手の術に被せて、相手の術を打ち破るのはどうだ？」

「それ完全に力押しだろ？」

「教えようが無い」

「……本当すいません」

【大丈夫だ。横島、お前が悪い訳じゃない】

心眼がフォローしてくれるけど、あーだこーだと話している西郷さんと高島さんを見て、本当に申し訳無い気持ちで一杯になる。

「……なら水と炎に絞ってみないか？」

「シズク様。それはどう言う事でしょうか？」

「……私と清姫は横島と契約してるから、ある程度外部から接触出来る。それで私と清姫が精霊を脅……んん、頑張り過ぎないように言う」

「今脅すつて言いかけなかった？」

「……気のせいだ」

「気のせいですよ？」

凄く綺麗な笑顔をしてる2人に絶対これ脅すつもりだと確信したが、これで普通に陰陽術が使えるなら、決闘の時だけでもお願いしようかなと思つた。

「横島君の性格を考えると、無効とか、防御とかそう言うのを重点的に教えてもらえると嬉しいわ」

「攻撃は他に手段がありますから」

美神さんと蛭は決闘の話ではなく、元の時間に戻つた事で考えているようだ。でも確かにその通りかもしれない、攻撃手段で言えば、栄光の手、勝利すべき拳、アンちゃんから貰つた霊破銃など、自分で言うのもなんだが、攻撃手段は多彩にある。それならば、俺の苦手な防御系を充実させるというのもありかもしれない。

「防御系か……確かに横島の場合それがいいかもしれないな」

「そうだよな、横島はどっちかと言うと生粋の術師じゃないしな」

美神さんの提案で攻撃系ではなく、防御系を重視した陰陽術を教わる方向で訓練の指針が決まったのだが……。

「本気ですか？」

「攻撃を防ぐのが一番学ぶのに早い。基礎は教えるから、後は自分で掴め」

「お前は俺と似ているから、自分で理解して身体で覚えろ」

その習得方法が防御手段を教えるから、それを自分で考えて効率的に使えという攻撃するから死ぬ気で防げという余りにスパルタ方式で美神さん達に思わず視線で助けを求めたのだが……。

「まあ横島君には向いてる習得方法よね」

「あんまり危なそうだったら止めに入るから」

「……怪我は治してやるから」

「横島様、頑張れ！」

「チビ達も応援しておるぞー、横島。頑張れ」

「ぶぎい！」

「みーむー♪」

「ノブノブ！」

味方0と言うことに絶望し、気持を整理する間もなく放たれた陰陽札を必死に飛び退いてかわし、札を指に挟んでいる西郷さんと高島さんが心底怖いと思いながら、この超スパルタ方式の陰陽術習得修行を始めるのだった……。

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その21へ続く

その21

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その21

くくえす視点く

何度も鳴り響く雷鳴、それに打たれるかもしれないと言うのは全員の頭の中にあつた。それでも、この雷が平安時代から美神が戻ってくる合図と思えば、私達は足を止める事が出来なかつた。

【来る！皆止まれッ!!】

道真公の怒声と共に一際大きな雷が私達の目の前に落ちる。凄まじい煙の中で人影が2つ動くのが見えた。

「げほ、ごっほ!!死ぬかと思つたわッ!!」

「私まで道連れにするつもり!?!」

煙の中から聞こえて来たのは2人の美神の声……その事に困惑していると煙が晴れ、雷が落ちた場所にいる人物の姿がはつきりと見えた。

「いや、ワシさ、美神つて偶に魔族よりあくどいつて思うことがあつたんじゃけど……」

【まさか前世が魔族とは……想定外……ああ。いえ、想定内ですね】

美神と瓜二つの容姿をした尖った耳の女魔族と美神がボロボロの姿でそこにいた。

「美神さん！大丈夫ですか！」

「琉璃!?!それにくえすに小竜姫様も！急いで探さないとって思ってたから助かるわ!!」

亀裂の間から這い出るように姿を見せた美神は宙に浮いている道真公を見て一瞬目を顰めたが……。

「元の道真公ね、文珠頂戴！時間が無いのよ！」

「存じておる。持ってゆけ」

道真公が4つの文珠を弾き、美神はそれを受け取り服の中に乱暴に詰め込む。

「小竜姫様とビュレト、それと……」

「いや、これ以上は止めといた方がいい。人間だと死ぬ」

ビュレト様と小竜姫の名前を呼び、私に視線を向けた美神の手を掴み、女魔族が制止する。

「どういう状況なんですの!?!横島は大丈夫なのですか！」

「せんせーは！せんせーは無事でござるか!?!」

「状況を説明してよ！」

私達の言葉に美神は説明してる時間が無いのよと叫んだ！

「このままじゃ手遅れになるのよ！後で、戻ってきてから全部説明するわ！小竜姫様と

ビュレトは急いで！早く行動不能にしないとそれこそ本当に手遅れになるから!!」

美神の必死の表情に小竜姫とビュレト様が美神に駆け寄り、その手を掴む4人が手を繋いだ時、その中央で光を強くする雷と刻まれた文珠を見て、琉璃達が離れていく、私はその霊力の渦に逆らいながら叫ぶ。

「貴女達が死んでも、横島は助けなさい！後は私が面倒を見てあげますわ！」

「誰が死ぬかッ！絶対全員無事で帰ってくるわよッ!!」

私の声に負けないくらいの大声で叫ぶ美神。その声を聞いて安心した、戻ってくるという強い意思があればきつと何があっても戻ってくる。

「引っぱたいてでも横島を正気に戻しなさいよ！それが師匠の貴女の仕事ですわッ!!」

「……ッ！そんなこと言われなくても判ってるわ！じゃあ、行くわッ！」

「くえす！もうこれ以上は無理よ!!」

雷鳴が鳴り響く中、琉璃に手を引かれ美神達の側から離れた瞬間。凄まじい雷が目の前に落ち、今までの嵐が嘘のように静まり返り、静寂に満ちた草原の中を呆然と見つめる。

「なるほど、GS協会とオカルトGメンが必死に匿う理由が判りましたね」

「……言ったら殺しますわよ」

私が睨むと躑躅院は怖い怖いと肩を竦め、その顔に笑みを浮かべながら私達を見つめ

る。

「陰陽寮を解体して、GS協会の傘下にはいると言うのに、トップに睨まれる様な真似はしませんよ。これでも道理は弁えているつもりなのでね」

「……そう、今はその言葉を信じるわ。「今」は」

「今だけではなく、ずっと信じてくれて構いませんよ?」

獅子身中の虫と言うことは判っている。それでも躑躅院を抱え込まないといけないのが今の私達の現状だ、それが分かっているからこそこの態度……くえない男……いや、女? 正直いい加減どっちか知りたい所ではある。

「それで道真公、今はどうなっているのですか?」

「……恐らく、シエイドで暴走し、そしてその上で12神将を全て取り込んだ姿で暴走しておられるのだろう」

12神将を全て取り込んだという言葉に一瞬何を言われたのか理解できなかった。

「何が、何が平安時代で起きたんですか?」

「愚かなる鬼道によって酒吞童子を呼び出し、その暴走によって起きた大惨事の後の事だと思う……」

2度と聞くことの無いと思っていた鬼道の名。しかし平安時代で考えれば、鬼道は帝お抱えの陰陽師だ。

「余計な事しかしないな……鬼道」

私と琉璃と躑躅院の声が重なった。本当に鬼道は余計な事しかしない……私と琉璃と躑躅院の呆れたような声が重なるのだった……。

〈西郷視点〉

私も高島も出来る限りの技術を横島に教え込んだ。横島の知識は非常に尖っていたが、それは感覚の物で、教えれば教えた分だけ知識を吸収し、そして己の物にした。正直、1年も修行を積み私を越えると確信し、その才覚には私も高島も恐怖した物だ。

「それではこれより御前試合を行う。審判は陰陽寮から西郷、そして私の代理として高島が勤めるが、異論はないな？」

帝が立ち、横島と変装している鬼道に声を掛ける。高度な陰陽術で姿を変えているが、私と高島にはその変装はまるで意味がないものだった。なぜならば、既に私も高島も鬼道よりも陰陽師として高みにいる。慢心し、己を鍛える事を止めた鬼道よりも技術が秀でているのは当然の事だ。

「ありません」

横島と鬼道の声が重なる。だが異論はないと言っておきながら御前試合の場と言う

のに、帝に対する敵意を隠す事が無い。それにその靈力が濁っているのを見て、やはり西洋の悪魔と内通していると確信した。

「立会いとして六道家当主、躑躅院当主、そして横島の師も含まれる。これは正当な決闘であり、御前試合である。勝敗がついた場合、試合中であれ殺しは禁止とする。過度な攻撃に出たと判断した場合、高島、西郷両名により、拘束を行う。異論は無いな？」

これは私と高島で話し合った予防策だ。躑躅院当主は靈力こそあるが、それを扱う術に劣る。だが自分の靈力を他人に譲渡するという術には秀でている。その靈力を六道に渡し、その増幅した靈力で12神将で拘束する。そして美神達は外からの乱入者及び、周囲の警戒と陰陽寮の陰陽師の乱入や異議申し立てに備えている。だからこそ、横島はこの場に不安も恐怖も無く立つ事が出来ている。

「ありません」

横島はすぐ返事をしたが、鬼道は返事を返さない。帝は鬼道に視線を向ける。

「もう1度聞く、異論は無いな？」

「……ありません」

不服と言う態度を隠しもしない鬼道にやはり、御前試合と言う場を与えず反逆者として捕えてしまえば良かったという考えが一瞬脳裏を過ぎった。

「また勝敗に問わず、謂れのない誹謗中傷を行った陰陽寮所属の者は全て高島と横島に

謝罪を行う事。良いな?」

返事を返さない陰陽寮に帝は眉を吊り上げるが、小さく息を吐いた。

「帝の言葉に返事を返さぬと言うのなら、全員反逆者として処理する」

その言葉と同時に兵が動く慌てて陰陽寮の陰陽師達も御意と返事を返す。だがその態度を見れば不服、不満を抱えているのは明らかだった。それに私を爪弾きにして、何か話しているのも見ている。この御前試合で何かを企んでいるのは明らかだ。

「それでははじ」……火精将来ッ!」マジカッ!」

初めと同時に鬼道が陰陽術を放った。炎の中に消える横島に一瞬腰を浮かしかけたが、それは本当に一瞬の事で、すぐに腰を下ろした。美神達がうろたえていないのに、私がうろたえていては何の意味もない。更に言えばあの程度で死ぬような柔な鍛え方はしていない。

「やはり月神族と結託していたのではないか?」

「あの程度の実力で本当に神魔を退けたのか?」

「帝、やはり1度西郷と高島、そして横島の師達も調べるべきでは?」

横島が負けたと判断して、好き勝手言う陰陽師達だが帝は小さく笑い。

「お前はまこと私を楽しませてくれる。なあ、横島よ」

火柱が弾け飛び、そこから横島が無傷で姿を現し、手を閉じたり開いたりしながら困

感した様子で向かい合っている鬼道に視線を向けた。

「なんだ、ビツクリしたけど……これくらいなら全然行けるッ!!」

不安げな表情を一転させ、強気な表情を見せる横島を見て、私はやっと安堵し、椅子に背中を預けるのだった。

〈美神視点〉

先制の不意打ちには驚きはしたが、焦りはしなかった。不意打ち、騙し討ちはあると考えるべきと助言をしていたのだ。その通りになった程度の認識だった。正直に言えばあの程度の炎なんて横島君にとってはマツチの火に過ぎない、それに開幕の不意打ちで力が抜けたのか、横島君は実に生き生きし始めた。

「ッ！火精将来！」

「おせえッ！救急如律令！霊符の力を散らしめよッ！禁ッ!!」

剣指で空中に文字を描き、鬼道の陰陽術をキャンセルし、そのまま自分の陰陽札を構える。

「救急如律令！風精招来ッ！」

横島君の姿が掻き消え、鬼道の苦悶の音が響く。横島君の前蹴りが鬼道の胴を捕らえ、そのまま上空に向かって蹴り上げられる。

「陰陽師の癖になんと言う事を！」

「あのような行動を許してよいのですか！」

「先に不意打ちしておいて何を言う、それにだ。陰陽術で己を強化し戦うことの何処が間違っているのだ？」

西郷さんのまともな言葉に反論など出来るわけがない。

「でやあッ!!」

「がっ!？」

ただ空中で回転踵落としを相手の腹に叩き込むのは正直陰陽師としてはどうかと思
うけどね……。

(ヒャクメ、どう?)

(んーまだそれらしい反応はないのねえ)

私の予想では鬼道が狂神石を使って自分の霊力を強化していると予想していたんだ
けど、今の所それらしい予兆はない。

「土精将来ッ！」

「雷精将来ッ！」

地面から伸びる無数の腕を雷精を呼び出した横島君が高速で駆け、その余りにも鈍足
な腕を完全に回避する。

「救急如律令！火精将来！」

「靈符の……ぐうううツ!!」

横島君の陰陽術をキャンセルしようとした様子だが、横島君の霊力の練り込みのほうがかつかつ発動までの時間が短く、鬼道は変装のローブごと炎に巻かれる。のたうち回り、転がる姿を見れば鬼道の力量で横島君に勝てないのは明らか。

「これで決まり……だと良いんですけどね」

「そもそも行かないわね。蛭ちゃん、精霊石の準備」

どうもあのローブは変装用ではなく、狂神石の力を押さえ込む為の物だったようだ。明らかに霊力が変質しているのに気付き、精霊石の準備をした瞬間。横島君がバク宙で鬼道から距離を取る、だがその胸には一文字の切り傷と切り裂かれた服の下から血が滴っているのが見えた。

「横島!?!」

「大丈夫！ちゃんと避けたツ！」

避けたと言いつつ、陰陽札を胸に貼り付け治療を行う横島君の目は険しい、その視線の先には額に札を張られた小柄な少女……いや、鬼の姿があった。下着のような面積の少ない服の上に着崩した着物——幼い容姿なのに、いや幼い容姿だからこそある魔性の色気と言うものがあつた。

「ヒヤヒヤヒヤ！貴様なんぞが私に逆らうのが悪いのだ！私こそが真なる帝！平安京の……あえ？」

【ニタア……】

変装が解け自分こそが真の帝と叫んだ鬼道だが、その言葉を最後まで言う事は無かった。鬼に胸を貫かれ、心臓を抉り出された鬼道は金魚のように口をパクパクさせながら、その場に倒れ動かなくなった。そして鬼は抉り出した心臓を美味そうに飲み込み、身の丈の倍以上の刀を大きく振りかぶった。

「西郷！」

「分かってる!!」

「シズク！清姫ツ！」

その動きを見て私達がそれぞれの名を叫び、障壁が張られるのと振るわれた刀から飛び出した魔力刃に反応の遅れた陰陽師達と兵士——そして帝の屋敷の壁を引き裂き、反応の遅れた兵士と陰陽師は腰から両断され、崩れた瓦礫の中に消えた。

「だ、大丈夫か！」

「な、何とか！それよりそっちは？」

精霊石とシズクのバリアのお陰で無事だが、後ほんの少し反応が遅れば私達も両断されていたかもしれない……それが分かっているから背筋に冷たい汗が流れた。

「帝も、躑躅院も幸華も無事だ！」

砂煙の中から聞こえてきた高島の声に安堵していると私達の耳に茨木の声が飛び込んできた。

「酒呑！何をしておるのだ！そんな姿はお前らしく「あぶねえッ!!」……しゅ、酒呑い……」

声を掛ける茨木に向かって刀を振るう鬼……茨木から告げられた名は「酒呑」……。それが何を意味するか判らないわけが無かった。

「本当に鬼道は余計な事しかししないわねえッ!!」

金時から生きているかもしれないと聞いていたが、陰陽術と狂神石で使役されているなんて想像もしていなかった。日本で随一の知名度を誇る鬼と戦うなんて本当に冗談じゃない。

「本当ですわね！」

「……全くだ、ここで滅ぼしておいても良いかもしれないな」
「横島様に害なすなら、死ぬ覚悟をして貰いましょうか」

【にいいい……ッ!】

シズクと清姫の殺気の溢れた視線を向けられて笑うなんて、私でも出来ない。それだけ実力に差があるからだ、幼い少女の姿をしていても、龍神。私達よりも数倍強い。だ

がそんな視線を向けられても笑う、それはシズクと清姫を相手にしていても、勝てるという余裕の表れなのか、それとも好敵手を見つけたという笑みなのか……どっちにせよ良い笑みではないのは確実だ。

「蛍ちゃん、ヒヤクメ、横島君の方へ行くわよ！」

「はい！」

「分かつてるのね〜」

この場はシズクと清姫に押さええて貰って横島君の様子を見に行かなければ、狂神石に飲まれた鬼の攻撃を受ければ、横島君の狂神石が活性化するかもしれない、そう思って横島君に駆け寄ろうとしたのだが……。

「変身ッ！」

【カイガンツ！金時！雷光！正義！ゴールデン・スパークツ！】

雷鳴が下から上に上がり、雷を振り払って変身した横島君が姿を見せる。その姿はあの夜のシェイドの物とは違っていたが、それでも狂神石の力を使う相手と戦わせるのは嫌だった。だから私と蛍ちゃんは高島の下へと向かった、たとえ自分に出来る事が微々足る物でも黙ってみるなんて事はしたくなかったから……。

G S 芦 蚩 外 伝 平 安 大 魔 境
その 2 2 へ 続 く

その22

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その22

〔横島視点〕

目の前に迫る靈力刃を見て、俺が咄嗟に掴み変身したのは金時魂だった。直感と言うのか……靈感が囁いたというのか、これを使うべきだと本能的に感じたのだ。

【カイガンツ！金時！雷光！正義！ゴールデン・スパークツ！】
「じゃあツ!!」

全身に走った雷電を右腕を振るうと同時に飛ばし、迫ってきた靈力刃を弾き飛ばし黄金喰いを装備し肩に担いだ。靈力刃と雷のぶつかりで生まれた煙を弾き飛ばし、背中に庇っている茨木ちゃんに声を掛ける。

「茨木ちゃん、シズク達の所へ行くんだ」

「……いや、我が朋友……酒呑、どうしたんだ酒呑」

信じられ無いと言う様子の茨木ちゃん。その様子は自分の友人が自分に刃を向けたことに動揺し、茫然自失になっているようにしか見えなかった。

「大丈夫、俺が元に戻すから」

「だ、だが」

「大丈夫、大丈夫だから」

今の精神状態で茨木ちゃんがこの戦いに巻き込まれたら、間違ひなく彼女は死ぬ。それでも渋る茨木ちゃんを突き飛ばすようにして美神さん達の方に押す。

「ぐがあッ!？」

黄金喰いで巨大な刀を受け止めたのだが、その凄まじい力に耐え切れず思わず呻き声を上げた。

【にいいッ!!】

歯を剥き出しにして楽しくて楽しくてしょうがないという表情の幼い少女の鬼。その姿は可愛いや愛くるしささえかんじさせるが、その膂力はその可憐な容姿とは比べ物にならないほどに強かった。

【てめ、酒呑!! あんな糞みたいな陰陽師に操られてるんじゃねえッ!!】

金時の声が響くとその鬼は更にその笑みを深めて、身を乗り出すように俺の顔にその顔を近づけた。

【ナアコゾウ……オマエハ……コンドハクビ……キツテクレンノ?】

ガラスをすり合わせたような不快な音……だがそれは紛れも無く少女鬼の声だった。

(なっ!?!なんだ!?!急に……ッ!?)

だが俺はその言葉の意味を理解する事が出来なかった。今まで片手で振るっていた黄金喰いがとたんに重くなった、両手でも支えきれなかった。

【金時！何を呆けている！】

【っ！くうっ！】

心眼の一喝で再び黄金喰いは軽くなったが、押し込まれていた身体は酒呑童子の膝蹴りが跳ね上げられ、即座に叩き込まれた回し蹴りでボールのように弾き飛ばされる。

【がはっ!?!】

屋敷の僅かに残った壁に叩きつけられ、そのまま跳ね返り4つ這いになって呼吸を整える。肺……をピンポイントで蹴り抜かれた……い、息が出来ない……。

【なアコゾウ……アントキノツツキ……シヨウナア？チャーントセエヘント……】

【うおっ!?!】

目の前に迫っていた鋭い爪を咄嗟に顔を仰け反らせ交わす。だがマスクが砕かれ、ほんの少し素肌が露出したのが判った。

（マジかよ……）

今まで色んな戦いをしてきた、だけど……仮面を砕かれた事なんて1度も無かった。

【……へエ……オイシイチャナア？】

爪先の血を舐めた鬼がその視線を向ける。札で顔が隠されているのに、その下の悪意

に満ちた目に睨まれた気がして足が竦んだ。

【アンタノチイ……モットノマセテナアツ!】

地面を蹴り凄まじい勢いで突っ込んでくる酒吞童子。連続で振るわれる爪を紙一重で交わし、反撃に拳を突き出した。

「え!?!」

だが俺の拳が捉えたのは酒吞童子が羽織るように着ていた着物だった。

【ナンヤアコゾウ……スケベエヤネエ?】

からかう様な声が頭上から聞こえて顔を上げる。そこには下着と言ってもいいほどに布面積の少ない布で体を覆った酒吞童子の姿があり、その姿に一瞬視界を奪われた直後、俺の頭に宙返りしながら放たれた踵落としがめり込んだ。

「がはあつ!?!」

その小さな体からは信じられない力と威力、俺は地面に叩きつけられ、そのままの勢いで僅かに弾んで宙に浮いた。

【タアントクライヤ?】

「うおおおツ!?!」

何時の間にか小脇に抱えられていた瓢箪から吹き出された風に吹き飛ばされ、地面の上を転がる。

「ぐっうあ!？」

【アーアーオトコナノニナサケナイネエ……】

砕けた瓦礫などで全身を打ち据えられ苦悶の声を上げる俺を見て笑う酒吞童子。俺は咳き込みながら立ち上がり、震える手で黄金喰いを手に立ち上がる。

【エーコヤネエ……ジャア、モット……アソボウカアツ!!】

弾丸のような勢いで突っ込んでくる酒吞童子に俺は武者震いではない、純粹な恐怖で手が震えるのを感じながらも黄金喰いを手に自分を鼓舞する為に叫び駆け出すのだ。……。

く美神視点く

少しでもいい、西郷さんにもでも高島でもいい、陰陽術で強化して貰って横島君の支援をしようと思っていた。だがそれは余りにも難しい事であると言う現実を私達は思いついて知らされていた。

「あれに割り込めると思ってるなら、お前は現実を知らない。大人しく結界の中にいろッ！」

その怒声と共に躑躅院、六道、帝と共に結界の中に引きずり込まれた。

「でも私の弟子が戦って」

「現実を見るのだ。確かに横島は美神の弟子だろう。だが……その強さは既に自分を越えていると良い加減に認めるべきだ」

西郷さんの言葉に私は息を呑んだ。それは判っていた事、そしてそれと同時に認めたくないことでもあった。眼魂とか、陰陽術とか、霊力の固形化とか……そう言うのを差し引いても、横島君は今の私よりも……ううん。きつと、日本にいるGSの誰よりも強いだろう。

「……悔しく悲しいだろう。だが、お前の気持ちだけで横島を危機に追いやってはいけない」

「厳しい事だけだよ……大人しくしてろ。下手に割り込んだら、死ぬぞ」

子供に言い聞かせるような口調……だがそれが現実だと言うのは私にも判っていた。横島君は私の事を師匠として尊敬してくれているし、敬ってくれてもいる。だけど、私が師匠として出来る事なんて横島君に足りない知識を伝授する事と、権力などの政治闘争から守る事しか出来ない。こんな有様で師匠なんて名乗るはおこがましいって事は判っている。

「美神さん。私達には私達に出来る事をしましょう」

「……ええ、判ってるわ。このまま黙ってみているなんて事は出来ないしね」

西郷さんと高島に言われても、頭で理解できても感情で理解出来ない物はある。確かに横島君と肩を並べて戦う事はもう出来ないだろう。

それでもそれならで、自分達にも出来る事はあるのだ。

「ヒヤクメ、あんたを頼りにしてるわよ」

「な、何をさせる気なのね!？」

「あんたの目を使うわよ」

私達の目と動体視力では、どう足掻いても酒吞童子の動きについていけない。それならばヒヤクメに先読みさせて、そこを狙い打つしかない。タイミングを計る為に横島君達と酒吞童子の戦いに視線を向ける。やはり、3対1でも横島君達が徐々に押され始めていた。

「ソレソレ、ヨケナシンデマウヨオ?」

「くっ! 負けるかあッ!」

「ヨシヨシ、イイコヤネエ……ジャアコンナノハドウヤア?」

高速で手にしていた刀を横島君に投げつける酒吞童子、それは前に突っ込んでいた横島君には回避出来るタイミングではなかった。

「舐めんなあッ!!!」

だがそう思ったのは私達だけで、横島君はパーカーを1度脱ぎパーカーを振るい投げ

付けられた刀を弾き飛ばした。

「へエ、ズイブントキヨウヤネえ。コンナノハドウヤア」

虚空から現れた瓢箪を手に取りとうとする酒呑童子を見て、横島君が地面を蹴って一気に間合いを詰める。

「……させるかッ！」

瓢箪が何かの武器だと思ったのだろう、だがそれは罠だった。手にした瓢箪は靈力に変換され空中へ霧散する。

「ナンヤア、ツマランナア？」

「う、嘘だろ？」

黄金喰いの一撃は酒呑童子の2本の指で完全に防がれていた。そのありえない光景に横島君だけではない、私も蚩ちやんも言葉を失った。完全に横島君が誘いこまれた、狂神石で狂いながらも、酒呑童子は完全に戦況をコントロールする知性を残していた。

「マダマダ、ソナンジャア……ツマランヨオ？」

無造作に振るわれた右足が横島君の胸を捉え、横島君が呻き声を上げて凄まじい勢いで吹っ飛んでいく。

「横島様?!」

「リュウジンガニンゲンニサマツケヤナンテエ、オモロイナア」

「しゃああッ！」

【アハハハハッ！オモシロイナア！】

耳障りな笑い声と共に跳ねるように駆け回る酒呑童子には清姫のも、シズクの攻撃も届かない。全て紙一重で……いや、おちよくるように業と紙一重で避けているのが2人の表情を見れば判る。

「まさかあれほどの鬼とは……高島、調伏出来るか!？」

「馬鹿言え！あんな化け物を何の装備もなしで戦えるか！それよりも、結界に意識を向ける！帝達を殺させる訳にはいかないんだからな！」

西郷さんの言葉を高島の怒声が遮る。横島君、シズク、清姫を相手に遊ぶ様に戦う……神話、伝説に名を刻まれた鬼……その中でもダントツの知名度を持つ、酒呑童子の強さは目と肌で感じている。それでも、このままじつとしているなんて事は出来ない。

「茨木、あんた精霊石大丈夫？」

「……ちよつとびりつとするが大丈夫だ」

「じゃあ、あんたの腕に術式を刻んでもいい？あの酒呑童子を止める為に」

「殺すのではなく止めるのだな？」

「ええ、正直私達は劣勢に追い込まれてる。正気に戻したら可能性が低くても協力してくれるかもしれないのなら……殺しはしないわ」

「……判った。横島の師と言うお前を信じよう」

茨木が頷いてくれたので、私と蚩ちやんは茨木の右腕に精霊石のブレスレットやペンダントを握らせ、狂神石の波動を精霊石で中和する作戦に出た。あれほどの鬼だ、一時的にでも正気に戻れば、狂神石の力を押し返すかもしれない……もしかりに正気に戻らなくても、一時的に動きを弱めさせる事も出来るかもしれない……私達はその可能性に賭ける事にするのだった。

くシズク視点く

酒呑童子は茨木童子の言った通り、私に縁のある鬼と言える。いや、私だけではなく、龍である以上……「八岐大蛇」に類する私達にとって酒呑童子は非常に厄介な相手と言える。

「ンン？ンン？アレマアネエサンヤナイノ。ドツカデミタコトアルナアオモウタンヤ」

「……嘘を言え、お前は私を知らない、そして私もお前も知らない」

「ンフフフ、ツレナイナア……オンナジチヒイテルノニ」

邪龍である八岐大蛇の息子とされる酒呑童子は確かに私に取っては妹とも言えるし、

弟とも言える。

「……横島に牙を剥くのならお前は私の敵だ」

【アーヤツパリイ?】

氷柱の雨を舞うように避け、挑発するように氷柱の一部を砕き、その上に座り杯を煽る。その姿は確かに絵になっているが、私達の神経を逆撫でするだけだ。

【エエ、オトコミタイヤネエ、マ、カオハフツウヤケド】

「ほつとけ馬鹿ーッ!!」

顔が悪いと言われて怒鳴る横島、これはもう殆ど反射的なものだろう。

【落ち着け、安い挑発だ。それにお前の顔は愛嬌がある】

「え、あ、うん。ありがとう」

心眼のフォローで落ち着いた様子だが、愛嬌があるので落ち着くのは正直どうかと思う。

【イバラキモナツイテルミタイヤシ?オモロイケド……ソナノガミタインジャンヤ
ヤ】

手にしていた盃をゆつくと傾け、その中身を地面に垂らす。何をしているのかと困惑したのは一瞬の事だった……

「うっぎいつ……、これはあ……」

「……毒酒……ッ!!!」

【ソフフ、ヴァーカ。タダウチガハナシテルオモタ?】

神魔は普通の酒ならば酔う事は無い。よった真似事はするが、本当の意味で酔うことは無い。しかし神使鬼毒……これだけは別だ。酒呑童子を酔わせ、死因となった酒……その逸話によつて神使鬼毒は神魔さえも酔わせる酒と化している。その魔性の酒精はこの場にいる全員を蝕み、そしてその氣力を根こそぎ奪つていた。

「うっ……」

「頭が……」

「き、気持ち悪い……うっぷ……」

【オヤスマー】

そして神魔でも酔う酒の香りに何時までも人間が耐えられる訳が無い。美神達も結界の中で倒れて動かなくなる、横島は暫く抗っていたが、頭を押さえて倒れ、変身も強制解除に追い込まれてしまつていた。自分以外の全員が酔いが回れ倒れているその光景を見て酒呑童子は楽しそうに笑う。

【コノママサケニトカシテノンデミンナコロシテマオカ?】

「ッ!!!」

酒呑童子の言葉に倒れていた横島が砂利を握り締め、その目を真紅に染めながら立ち

上がる。

「……………止めろ……………横島……………」

【そんな心に心配せんでもええよ】

今までの不愉快な声ではない、鈴を鳴らすような酒吞童子の声が響き、横島の額を弾いてその場に引っくり返す。

「……………お前まさか！」

狂神石に飲まれて単純な事しか出来ないと思いきんでいた。だがそれが根底から間違っていた事に私は今初めて気付いた。

【んふふふ、操られた振り美味いやろお？】

にまにまと笑いながら酒吞童子は額の札を剥がし再び盃を煽る。そして横島を見て、面白いことを思いついたと言わんばかりに邪悪な笑みを浮かべた。

【小僧は面白なあ、でもあんたには殺気が足りへん……………だーかーらー】

酒吞童子は結界を蹴り碎き、倒れている螢を肩に担ぎ上げた。

【この娘、貰ってくわあ】

「ふ……………ぎ……………けん……………なあ」

両目を真紅に輝かせた横島が立ち上がりかけるが、その手足に力が入らないのか立ち上がることが出来ず再び崩れ落ちる。

【今度はもつと楽しませてなあ？じやないと……】

この娘殺すで？と酒呑童子はその鋭い爪を螢の喉元に向け笑うと、地面を蹴つて帝の屋敷の屋根の上まで飛び上がる。

【茨木に案内されといで、楽しみに待つてるでえ？】

そう言い残し酒呑童子は屋根の上から屋根の上へと飛び移り、あつという間に見えなくなつた。

「ほ……たるう……」

螢を攫われ、戦いでは終始振り回された。狂神石の脅威を知るからこそ、酒呑童子もそれに飲み込まれていると言う先入観。それに私達は完全に騙された……

(ああ、そうか、そう言うことだな)

あいつにとつては操られた振りをして遊べる内はそれで遊ぼうと思つていた。所が想像以上に横島の周りが面白かつたから操られている振りを止めて、自分で考えて遊ぶ為に螢を連れ去つた。

【眠れ、横島】

「……な、ん……で」

まだ立ち上がろうとしている横島の額から心眼の音が響き、横島の身体が糸が切れた人形のように崩れ落ちた。普段なら怒る所だが、これで横島が怒りのままシエイドに再

び変身する事は回避出来た。

「……屈辱だな」

「ええ、全くその通りですわね」

酒呑童子が消え神便鬼毒の酒精が薄れて来たところで立ち上がるが、まだ美神達は倒れたままだ。とりあえず、動けるようになって来たから倒壊しているが、1度横島達を室内に運ぶ事にする。

「ヒヤクメ、手伝いなさい」

「……駄女神なんだから手伝える時に手伝え」

酷いのねと喚くヒヤクメを無視して、横島を抱き上げようとすると清姫に手をつかまれた。

「私が運びます」

「……黙れ無能」

「ひんにゆー」

「あ?やんのか?」

酒呑童子に言いようにやられた事の苛立ちを清姫で発散しようとするが、呻いている横島を見てそれ所ではないと我に帰り。私と清姫は嫌でしようがなかったが、2人で横島を担いで屋敷の中へと運びこんだ。

「いやいや、何で横島さんを運んだらそれで終わりなのね〜!」

いつまでも手伝いに来ない2人にヒヤクメは半泣きになりながら美神達を背中に担いで屋敷の中へと運び込んでいくのだった……。

一方そのころ、アスモデウスから酒吞童子が狂神石の支配を振り切り、自我を取り戻したと聞いて笑みを浮かべていた。

「非常に面白い個体だな」

『笑い話ではないぞ?あの鬼の酒は我と言えど猛毒だ』

「神便鬼毒か……確かにあれは神魔にも効果を発揮する毒だと言わざるを得ないが、それならば近づかなければ良い。どうも酒吞童子は横

島に随分と興味を持っているようだ、ならばどうなるか見届け、酒吞童子が弱った所で再び狂神石を投与して、連れて帰ってくれ」

『連れて帰るのか?あの鬼を?』

「ああ、狂神石を克服した鬼に興味がある。それにだ、狂神石は未知数の部分が大きい。サンプルは多いほうが良い」

アスラが幽閉された理由である狂気の波長。それを固形化した狂神石はガープにとっても未知数であり、そしてそれを克服する神魔など今までいなかった。酒吞童子を

分析すれば、より強力な狂神石を作れると言うガープにアスモデウスはしようがない奴だと言わんばかりに肩を竦め、通信を切った。

「さてと、すまないな。話を戻そう、アスラ。お前に向かってもらおう所だが、このことを潰してきて欲しい」

「なんだ、また僻地か……」

「そう不服そうな顔をするな。ここは神魔混成軍の武器を開発している場所だ。それに歯応えのある敵だっているだろう」

ガープの言葉にアスラは獰猛な笑みを浮かべ、ガープの頼みを引き受ける。

「蘆屋。レイとアスラと共に向かえ、回収出来そうな物は回収して来い」

「畏まりました、ではアスラ殿、レイ。参りましょうか？」

「……了解」

「楽しみだ。今度こそ血沸き肉踊る闘いである事を望むぞ」

横島達が平安時代で戦っている頃。ガープ達は新たな策略、そして謀略の為に動き始めているのだった……。

G S 芦屋外伝平安大魔境 その23へ続く

その23

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その23

〈美神視点〉

蚩ちゃんを攫われた、私もヒヤクメも危惧していた横島君が独断行動に出ると言うのは無かった。だけど、明らかに苛々とした素振りを隠そうともせず、時折その瞳が真紅に輝くのを見て状況はあんまり良くないと言うのはすぐに判った。

「神便鬼毒の対策が出来ない事には酒吞童子の元へ向かつてでも死ぬだけだ。だからもう少し落ちつけ」

「……俺は十分に落ち着いてますよ」

「嘘付け、シズク。ちよつと頭を冷やしてやれよ」

高島がそう言うよりも早くシズクは立ち上がる。

「俺は大丈夫、ちゃんと」……不安はわかる。蚩は大丈夫だ、少し落ち着け」

シズクが横島君の両頬に手を当てて、目を逸らそうとした横島君と無理やり視線を合わせる。

「大丈夫かな」

「……大丈夫だ。酒呑童子はお前に何かを見た。それを見るまでは人質である蛍に手を出す事は無い」

「そうですわ。あの手のタイプは自分が楽しむ事を優先しますからね」

シズクと清姫に言われて少しだけ落ち着いたのか、私を見てすいませんと言う横島君。だけど謝るのは横島君では無い、むしろ私のほうだ。

「ううん、謝るのは私。近くにいたのに何も出来なかったんだから……」

本当ならば何としても蛍ちゃんを連れ去ろうとするのと阻止しなければならなかった。だけどそれが出来なかったのは私のミスだ——神使鬼毒……いや、神変奇特酒のせいで動けなかったと言っているのは言い訳にはならないのだ。

「とりあえず何とか神使鬼毒……ううん神変奇特酒に対策を何とかしないと」

神使鬼毒と言うのは恐らく、酒呑童子の伝承に組み込まれて、変質した名前だ。本来の名は神変奇特酒——頼光に授けられた神酒で、人間が飲めば力を与え、鬼が飲めば力を奪うと言う酒だったはずだ。

「すつこい稀少なお酒なのね、神魔でも滅多に飲めない極上のお酒なのね」

そう笑ったヒヤクメだが、次の瞬間には真剣な表情を浮かべた。

「でも、本当なら人間に力を与える筈なのね、なんで横島さん達が動けなくなったのか……それが判らないのね」

「狂神石で性質が変わったって言うのはどうよ?」

「メフィストの言うことも最もだと思うが……そう思い込むのは良くないぜ? そもそも神変奇特酒じゃない可能性だってある」

そうかなと首を傾げるメフィストにそうだと言う高島。先入観と思ひ込み……それに足を掬われたばかりだから高島の言う事も最もだ。

「……いや、あの香りは間違ひなく神変奇特酒だ。断言出来る」

「ええ、少し邪悪な靈力が混じり変質してますが間違ひないです」

2人の言葉を聞いてヒヤクメに視線を向けるとヒヤクメは手をぶんぶん振る。

「あんな稀少なお酒なんて殆ど飲んだことが無いから絶対なんて言えないのね〜!」

本当に肝心な所で役に立たないんだから、でもシズクと清姫がそう言うのならば神変奇特酒で間違ひないだろう。

「神便鬼毒と言われて何の事か判らなかつたが、神変奇特酒の事だつたのだな……となると対策は取れる」

帝達を安全な場所に送り届けてくる為になかつた西郷さんが話の中に入ってきた。

「本当に対策なんて取れるの?」

「……取れるちゃあとれる。だけど俺としては出来れば外れて欲しかつた」

高島が頭を掻きながら言うのと西郷さんがその気持ちも判ると肩を竦め、その理由を教

えてくれた。

「正八幡大菩薩に授けられた酒だ。確かに稀少ではあるが入手できないわけでは無い。それを飲んで赴けば神便鬼毒は無力化出来るだろうだが稀少な品だから、用意出来て一人分だ」

その言葉にやっぱりと私達は思った。神変奇特酒が稀少と言う訳では無い、用意出来る量が一人分と聞いて、またこうなつたと誰も口にしないが感じていた。英霊との戦いに人間は介入出来ない——それは当たり前前の事だ。神話に名を刻まれた存在は神に近い、そんな相手に牙を剥こうと考えること自体がおこがましい。本来ならば英霊と戦える存在として清姫とシズクがいる……だけど相手の持つ酒は神魔さえも酔わす酒。こうなると神魔であること自体がハンデイになる……つまりこの場で蛍ちゃんの救出に迎えるのは一人しかいなかった。

「俺が行きます。金時も力を貸してくれるから」

また横島君一人で送り出す事になると言う事を意味していて、どうしても暗い気持ちになつた。だが横島君は既にやる気になつていて、それがますます私達を気落ちさせていた。

【酒呑は俺が止めるさ。どーんつと任せて俺達を送り出してくれ】

確かに金時がいれば心強いが、金時も金時で酒呑童子と因縁がある、そこがどうして

も不安要素になる。

「眼魂を持つていくなら、シズクと清姫も同行出来るんじゃないかしら？」

私はその事に気付iki提案したが、それは茨木童子に却下された。

「酒呑は横島と金時だけを待っている。他の人間や神魔がいれば……」

【あいつは躊躇い無く蛍を殺すと思うぜ】

いいアイデアだと思ったのだが、やはり私達はいつも横島君が行くのを見ていない。そしてそれは今回も同じ、何故なんで横島君ばかりがこんなにも辛い戦場に行かなければならないのか……どうして私は見ているしか出来ないのか……。この無力感
は私だけでは無い、きつと横島君に関わる全員が胸に抱えている思いだろう。

「……横島、汝は酒呑を殺すか？」

他人がいれば酒呑童子が蛍ちゃんを殺すと警告した茨木童子は横島君にそう問いかけた。

「俺は茨木ちゃんの友達を止めたい、そして蛍を取り返したいだけだよ」

茨木童子は横島君を見つめ、横島君もその目を見つめ返す。暫くそうしていると茨木童子は諦めた様子で溜め息を吐いた。

「判った。酒呑の所に案内する、いる場所は吾にしか判らないだろうからな」

「ごめんね」

「良い……横島なら酒呑を元に戻してくれると吾は信じる」

元に戻す……。その言葉に私達は首を傾げた、私達の予想では酒呑童子は狂神石の影響を受けていないと感じていた。

「違う、酒呑もあの石の影響を受けている。もつと酒呑童子は意地悪だ」

……だから狂神石の影響を受けているとドヤ顔の茨木童子に屋敷の中に満ちていた悲壮感が消え。1人また1人と笑い出し、何時の間にかいつもの雰囲気へと変わっていったのだった……。

く蜚視点く

酒呑童子に連れ去られた私は何処かの山の中……ううん。多分、大江山の中にいた。だけど私は目の前の光景を受け入れられないでいた。

「貴女は何がしたいの？」

【んく？果物は好かん？】

私の前に果物を置いて、自身も口になっている酒呑童子が何を考えているのか判らなかつた。

「別に嫌いってわけじゃ」

【ほな食べたらええ。毒なんてあらへんで】

にここにこと笑う酒呑童子。今は機嫌がいいけど、気分を損ねると自分が危ないと思ひ目の前の果物を口に運んだ。

「あ、美味しい」

【美味しいさかい勧めたんや】

こころごとと上品に笑う酒呑童子が何を考へているか本当に判らなかつた。

「何の為に私を連れてきたの？」

何で私を連れてきたのか、そして人質なのに拘束もしていない。その理由が判らず、思はずそう尋ねる。

【確かめたい物があるんや】

そう言った酒呑童子の瞳は不安と恐怖に揺れていた。その目の色は私に良く似ていた……

【王子様はお姫様を助けに来るんやん？うちはそれ見たい】

「お姫様つて私？」

【そう、あの子供にはあんたがお姫様。だから連れてきたんや、それに……あんたはなんとのううちに似てる】

狂神石に狂わされているとは思えない、しつかりとした口調に驚いた。そしてそれと

同時に、狂神石に飲まれていないのならば、その力を与えられても狂っていないのならば……仲間になってくれるのでは無いか？と言う淡い期待を抱いた。だがそれは誰でもない、酒呑童子に否定された。

【狂いそうになるのを必死に耐えてる、あんたの考えてるようなことはあらへん】

ころころと上品な笑みを浮かべているが、耳を澄ますと歯を噛み締める音が聞こえてくる。平気そうにしているが、その実本当は今にも狂いそうなのだろう。

「そのために私に話しかけたの？」

【氣い紛れるさかいな】

私と話をしているのは自分が正気を保つ為の行動であり、人質ではあると同時に私は完全に狂わないためのストツパーだったようだ。丁度そのとき茂みを掻き分けて、茨木童子が姿を見せ、その後ろに横島の姿があった。私を見てほっとした表情をしている横島を見て、私もやっと安心出来た。

【来たか、茨木。あんたはうちの敵か？】

「否、吾は見届けるだけだ。横島にも、酒呑にも敵対したくない」

【甘いな、そやけど茨木らしいわ】

酒呑童子は楽しそうに笑い、舞うようにその場に浮かび上がった。

【小僧も一緒か？】

【ああ、俺ツチもいる】

横島の後ろに坂田金時が姿を見せると酒呑童子は楽しそうに笑った。楽しくて楽しくてしようがないと言わんばかりに唇を吊り上げた。

「蛭は返して貰う」

【アーイー！シツカリミナーツ！シツカリミナーツ!!】

金色のパーカーが横島の周りを踊りだす。それを見て、酒呑童子は虚空から身の丈をゆうに越える刀を引き抜き構えた。

【ええで。うちを倒せたらね】

「判った。あんたを倒して、蛭を取り返して、茨木ちゃんとの約束も守る」

【なんや。えらい欲張りやな、鬼よりも鬼らしいで】

このとき初めて、酒呑童子が横島を見たようだ。目を見開き、驚いたような顔をしたと思うと、声を上げて笑い。そう口にした、しかし和やかな雰囲気はこれで終わり、酒呑童子からは刺すような殺気が溢れ始めていた。

【茨木、この子連れて行って、巻き込まれたら危ないさかい】

「……判った」

予想外な事に酒呑童子は私を茨木童子に預けると言つて、茨木童子は私を肩に担いで引き返す。

「もうちよつと優しく」

「五月蠅い」

振動と肩がお腹にめり込んで凄く痛いのもう少し優しくと言ったが五月蠅いと両断されてしまった。

「蛭を先に返してくれるなんて優しいんだな」

「うちの目的はあんた達やさかい、来た段階であの子はもうどうでもええ」

横島と金時を誘い出すという役目を終えた私はもう用済みだと笑い、私にも茨木童子にも視線を向けず、ただ横島とその周りを踊る金時パーカーゴーストだけを見つめる酒呑童子は穏やかに、しかし獰猛な殺意を隠しもせず笑った。

「ほなそろそろ始めよか？」

「変身ッ！」

【カイガンツ！金時！雷光！正義！ゴールデン・スパークツ！】

酒呑童子の言葉に領き、横島が変身する。雷の中に消えた横島が腕を振るい雷の中から姿を現すと同時に、酒呑童子は地面を蹴り横島へと飛び掛っていくのだった……。

〈茨木童子視点〉

正直吾はこれで良かったのかと悩んでいた。酒呑は鬼として尊敬しているし、何よりも大事な友である。しかし横島もまた、それと同じくらい大切だと思っている。人間なのに、不思議と父や母と共にいるようなそんな安心感があった。

【あの時の続き見たいやなあー！】

「くっ!?!」

高速で振るわれる酒呑の刀に横島は対応しきれていない、だが辛うじて紙一重でかわす事が出来ているのは横島の反射神経が秀でているからだろう。

【鬼はんこちら、手の鳴る方へ♪】

「鬼はそっちだろ!?!」

【あはははッ! そうやねえッ!】

横島の反撃は舞うようにかわし、手を叩いて自分はこっちだと笑う酒呑童子。それを見て吾は確信した、やはり酒呑も辛いのだ。確かに鬼にとつては戦いも娯楽である。だが自分を倒す可能性のある相手にあそこまでおどけるような素振りを見せるのは酒呑らしくない。

「……全然見えない」

蛭が呆然とした様子で呟く。確かに酒呑も横島の動きも早い、だが酒呑の動きにいつもの切れは無い。

【酒呑……お前……】

横島に憑依している金時もそれに気付いたのか、若干やりにくそうにしている。だが酒呑はその視線に気付くと目に怒りの色を浮かべた。

【いらんこと考えとつてええの?】

【「ガッ!?!」】

刀を地面に突き刺し、回し蹴りを叩き込む酒呑。その威力は凄まじく、吹っ飛ぶ横島を見て思わず声を上げかけたが、どちらにも味方しないと云った以上声を出すのを堪え、浮かしかけた腰を下ろす。

【不意打ちちやうと勝てへんの?】

酒呑の挑発に明らかに金時に怒りと動揺の色が浮かんだ。そうだ、そうだよな……金時だつて、あの決着は納得していかないのだろう。

【いいや、違うぜ。酒も、騙し討ちも必要ねえ。真っ向からお前を倒す!!】

【ふふふ、やってみい?】

金時の言葉に酒呑から怒気が消えた。それを見て安心して吾は酒呑と横島の戦いを見ていられるようになったのだ。

「やっぱり尾を引いてるの?」

「当たり前だろうに」

戦つて負けるならいい。だけど酒に毒を混ぜて動けない所を闇討ちすると決めたあの牛女を吾も酒呑も憎んでいる、どうせ死ぬのなら、どうせ悪と裁かれるのならば……戦つて、思う存分相手を傷つけ、自分も傷ついて……。

「その上の敗北ならば吾らも文句は言わない、だがあんな結末……受け入れられる物か」英霊となつたとしてもそれは変わらない。よりによつて、あの牛女が操られ、それを倒す為の抑止力として召喚されたが、時代も時代なので吾は完全に受肉し、酒呑童子も受肉したが、1度敗れた事で霊体になっている。それでも、吾達はここにいる。確かにここに……。

（ああ、そうだ。これだ、酒呑が吾に案内せよと言つた意味が判つた）

ここは吾達が酒を飲み、宴会をした場所——姿は見えないが、同胞の声が聞こえてくる気がする。

【へへ、やつぱり酒呑は強ええな！】

【当たり前、そう簡単に負けたりしいひん】

酒呑と金時の声が重なる。戦いではある、だが今は純粋な力比べになり。あの時の、騙し討ち、闇討ちであやふやになつた戦いの続きだ。

回りにあの時の仲間の声は聞こえない、その姿も見えない。だけど確かにいると感じていた……。

「そら、避けんと死んでまうで？」

「誰が！」

金時の姿こそ違うが、これはあの時ありえなかつた真つ向からの戦いだ。吾はそう感じていた、だからどちらも応援しないと云つた自分を僅かに後悔した、横島も酒呑も応援したいと思つた。何度も白刃が交差し、互いの拳が交差する。だがそれは決して粗暴では無い、確かに互いの命を奪い去る必殺の剣舞ではある。だがそれには恨みも憎しみもない、ただ純粹にどちらが上かと言う戦いだ。それは見る者全てを引きつけ、そして魅了する。命のやり取りだからこそある怪しい輝きと魅力、それに吾も虫も、そしてその当事者である酒呑も横島も金時もそれに気付かなかつた。

「うぼ……はは、やっぱしかあ」

風切音と酒呑の諦めきつた声……酒呑の腹に西洋剣が突き立っているのを見た瞬間。

吾は立ち上がり、剣を投げた相手目掛けて右腕を突き出していた。

「……姦計にて断たれ、戻りし身の右腕は怪異と成つた！走れ叢原火ツ!!——羅生門大

怨起ツ!!」

凄まじい勢いで飛ぶ吾の右腕、それは確かに下手人を貫いた。だが手応えが無かつた……。

『狂神石を克服したと思つたが、その振りとは騙されたよ。だが狂神石を克服していな

いのならば、噛み付いてくる駒はいらん。去ね』

山の中に木霊する男の声——それはアスモデウスとか言う西洋の神魔の声だった。仕留められなかった事に唇を噛み締める。

【酒呑！おい、酒呑！！こ、こんな決着なんて認めねえぞッ！！】

胸に剣が突き立った酒呑の名を叫ぶ金時の叫び声を聞いて吾も金時の元へ走るのがあった……。

く金時視点く

横島との憑依を解除して、血を吐き倒れる酒呑を抱き止める。

【おい、おいッ！酒呑ッ！なにやってるんだよ！お、お前ならこの程度で死ぬわきやねえだろー！】

【いやあ、えらい前から無理しとったさかい……ここまでみたいやな】

口元を血で汚した酒呑の姿に頼光の大将に首を切られ、俺の腕の中でお先にと笑った姿がダブる。息を吸っているのに息が出来ない、どんどん息苦しくなるのを感じた。

「しゅ、酒呑……」

【泣かへんの……うちは十分楽しんだ】

【楽しんでたって何だよ！こ、こんな終わり方なんざあんまりだツ!!】

こんな終わり方なんざ、俺も酒呑は勿論、横島だつて望んでいない。

「……止めないのか？」

「いい。どうせ止めてもやるだろうし……：しょうがないから、私も美神さんに謝つてあげるわ」

【そうだな、それに酒呑童子が協力してくれることになれば、私達も楽になる。今回は目を瞑ろう！】

背後で横島と蛭が話をしているのが聞こえるが、俺達はそれ所ではなかった。

【首今度こそ切つてくれへんか？】

消滅しかけている身体で髪を持ち上げてうなじを見せながら言う酒呑に俺は思わず息を呑んだ。

「しゅ、酒呑!?!お前何を!?!」

【2回もあないな不意打ちで死にたないんや、だから小僧に今度こそ首を切つてもらはんや】

だから消える前に首を切つてくれと言われ、俺は黄金喰いを手にする。だけど、みつともないくらいにその腕は震えていた。

【酒呑……良いのか？】

【ええで。いや、ほんまはかなんけどあないな奴に殺されたない】
「や、止めろ！また酒呑を殺すのかッ！」

消えかけているが強い意思を込めた口調で言われ、俺は茨木が静止するのを無視して黄金喰いを振り上げ、目を閉じて振り下ろした。

「駄目だッ！」

【な、よ、横島!?!】

目を閉じた一撃は横島が割り込んだことで防がれていた。

【何で止める!?!】

「止めるに決まってるだろうが！そんなにつらそうな顔をしている奴を黙ってみてられるか！」

そう言われて初めて気付いた、俺の目から涙が溢れていることに……。気付いてしまつと、俺はもう黄金喰いを持っていられなかった。

【酷いな。せめて小僧に殺されたいのに……】

「大丈夫、俺にはこれはどうにかする手段がある」

横島が両手で印を結ぶと白い眼魂がその手の中に現れる。

「これに入れば死にはしない。だけどその代りにこれからの戦いを手伝って貰う」

【はは。なんや、やつぱしあんたは鬼よりも鬼らしいで、助ける変わりに一緒に戦えつて

事やろ?」

「そうなる、だけど俺は金時も茨木ちゃんも辛い顔をしているのは見たくないだけなんだ」

横島の言葉に酒吞は楽しそうに笑い出した。そして髪を下ろし、胸元まで消滅している身体を横島に向ける。

「ええで。あの無礼者を殺せるんやろ?手伝うわ」

「それじゃあこれからよろしく、酒吞さん」

横島はそう言うのと酒吞に眼魂を当てる。酒吞の姿が眼魂の中に消え、紫と赤と黒の3色に染まった眼魂を茨木に渡す。

「いい、良いのか?」

「多分と言うか確実に、暫く酒吞さんが意識を取り戻す事は無いだろうし……茨木ちゃんも友達だから、預けるよ」

「……ありがとう。横島」

「俺も言うぜ、ありがとうよ」

あんな不完全燃焼で終わらなくて良かったと横島に感謝の言葉を告げる。

「ありがとうって言うなら美神さん達の説得手伝ってくれよ。絶対怒られるからさ」

「そうよね……茨木と金時も協力してくれれば上手く説得出来るかも」

師匠に怒られると青い顔をしている横島と蛭に俺と茨木が任せてくれと言ったのは当然の事なのだった……。

G S 芦蛭外伝平安大魔境 その24へ続く

その24

G S 芦菟外伝平安大魔境 その24

（美神視点）

横島君と蛭ちやんが無事に帰って来たことを喜ぶ間もなく、私と高島と西郷さんは再び帝の屋敷に呼ばれていた。

「鬼の討伐、大儀であった。少なくともはあるが、褒賞を用意した。まこと大儀であった」

米と絵巻とかか……米は正直持ち帰るのが辛いけど、絵巻とか屏風はありがたいわね。平安時代の職人の品なら非常に高値が付くだろうしね。

「美神よ。この際私に仕えて見る気は無いか？」

「……お言葉は嬉しいですが、お断り致します」

確かにこの時代の人間ならば帝を抱えとなることを喜ぶだろう。だけど私達はこの時代に骨を埋める訳にはいかない、だから断ると帝は扇子を開いて楽しそうに笑った。その予想外の反応に少し驚いた、最悪の場合無理やりにも宮仕えにでもされるかと思っていたからだ。

「昨夜神仏が枕元に立ってな、お前達の事は聞いた。遠き未来を生きる人間とな……?」
にやりと悪戯っぽく笑う帝に思わず目を見開いた。まさか神魔がここで関わってるといふのは正直、私にとって計算外だったし、何よりも予想外の事だった。

「故にこれが最後の誘いだった。これは未来へと持ち帰り、未来での戦いに備える為の資産とするがいい」

「……破格のお心遣い、感謝します」

「ははは、本当ならばお前達に陰陽寮を率いてもらえれば安心だが……そうも言ったらぬ。まだ辛い戦いが続くと思うが、頑張ってくれ」

その言葉を最後に帝は屋敷の奥へと消え、私達は褒賞を積んだ牛車に乗って帝の屋敷を後にしていた。

「西郷さんも帝から聞いていたの?」

「いや、帝から聞く前に気づいていた。立ち振る舞いや、もっている物を見ればおおよその予測は付く」

「まあ、それは俺も同じだけだな。陰陽寮で基本部分だけ作られてた陰陽棒の発展みたくのも持ってたしな」

……隠しているつもりだったけど、割と最初からバレていたのだと判り、思わず力が抜けた。

「道真公の事が判っていても、神魔は力を貸さない。いや、正しくはかせないのだろうな……」

「それは仕方ないだろうな……俺達だけで何とかしなければならぬと言うことか……」

帝の枕元に立ったのだから、そのまま道真公を撃退するのに協力してくれてもいい物なのだが……。やはり平安時代と言う事で魔族の動きも活発なのだろう。いや、それよりも道真公を撃退するのに力を貸す事が出来ないと言うのが本当の事なのかもしれない。

「狂神石か……」

「ええ、多分それだと思う」

ガープ一派の最大の武器である「狂神石」……それによって神魔軍の中の誰かが操られたら情報は全てガープへと流れてしまうし、誰が操られて、誰が操られていないのかと言うことも判別が難しくなる。

「なるほどな、少ない戦力を大きくする。そのための常套手段だな」

「裏切り者がいるかもしれないと思うだけで、精神的にも疲弊する。実に嫌な一手だ」
戦力として有効ならば、何時までも操ればいい。

戦力として使い物にならないと判断したのならば、使い捨てればいい。

そしてこちら側は誰が操られているのか判らないと言う本当に最悪の一手だ。

しかしそれが戦力に乏しいガープ達が、数で勝る神魔を翻弄し、勝利し続けてきたその手段となると、その効率の良さには驚きを隠せない。

「横島君は大丈夫かしら？」

狂神石に操られていた頼光の眼魂を作る時に、僅かだが狂神石を取り込んでしまった。そして月神軍との戦いで、その狂神石の力を開眼してしまった。この事は出来れば隠し通しておきたいところだけど……横島君を中心にして事件が起きることを考えれば、それを隠すと折るのは不可能に近い。だから平安時代の最高の陰陽師と言える二人の意見を聞いてみる事にした、すると二人の意見は真つ二つに割れたのだ。

「私は横島の性格からすると、怒りに飲まれる可能性は高いだろう。隠そうとせず、早々に明らかにしてしまえば良いだろう」

「横島は戦いを嫌う、それに人を信じやすい。上手く立ち回れば、隠し通すことも不可能では無いと思うぞ」

高島と西郷さんは顔を見合わせているが、確かにそのどちらも横島君の性格を良く捉えていると思う。

「結局の所は上手い対処法は無いと……？」

「悪いが私にはどうすれば良いか等と容易に助言する事は出来ないな」

「まあ俺の知り合いの神魔の伝を使ってみるけど……確実にとは思わないで欲しい」

出来る限りの手段は皆取ってくれる訳だけど、横島君に関しては爆弾を抱え続ける事になるのだろう。それでも、私は横島君を見捨てたくは無い……これは前世の縁とか、そんな安い言葉じゃない。まだ霊能に目覚める前から横島君の面倒を見ていたのだ、今更1つや2つ爆弾が増えた所で横島君を見捨てると言う選択は私には無いのだ。GS協会だろうが、オカルトGメンだろうが、横島君を最後まで守り通してみせると私は決意を新たにし、高島の屋敷へと続く道に視線を向けたのだが……。

「先に謝っておくわ、なんか大変なことになってる」
「……そうみたいだな」

屋敷の方から上がる火柱と水柱を見て、絶対大変なことになっていると悟り、家主の高島に私は深く頭を下げるのだった……。

くヒヤクメ視点く

横島さんの魂の調子を見ていたんだけど、結果は私としては信じられない物だった……。勿論それは皆一緒に鋭い視線を向けられて、背筋に冷たい汗が流れたのを感じた

のは言うまでも無いのね。

「……もう1度調べなおせ」

「それか貴女の目が腐っているんじゃないんですの?」

シズクさんと清姫様に言われても、結論は絶対に変わらないのね。と言うか、私自身が何度も何度も調べてその上でのこの結果なのだ。何度調べても、この結果は変わりようが無い。

「狂神石は横島さんの魂の何処にも残滓が見えないのねッ!」

今までのことを考えれば、魂の中に狂神石のあの赤黒い独特の靈力反応があるはず……だけど幾ら調べても、それらしい反応は見えないのだ。魂に干渉している狂神石の今までの情報を考えればありえないのだが、データ上は横島さんに狂神石の影響が無いと言うのが私の出した結論なのである。

「……余り感情的になるな、常に冷ややかであれと言う心情はどうした?」

「……それとこれとは話が違う」

「そんなに横島が大事なんですか?」

「大事ですわ!もう龍族なんてどうでも良い位に!」

……同じ声が3つも4つも重なっているので正直かなり混乱しているけど、結果は変わらない。横島さんの魂の中には狂神石の残滓は無い……それが私の診察の結論なの

だ……でも何故狂神石の残滓が無いのか……そこが不思議でしょうがない。

(確かに暴走しているのね)

黒いウイスプの姿を私も見ている。あの時は完全に狂神石に呑まれていたし、その直後の診察では狂神石の反応があった。だけどそれが無い——樂觀的に考えれば、心眼と横島さんの魂の抵抗力で狂神石の性質が無効化された。という見方もあるけど、神魔も英霊も抵抗できない狂神石の力に人間の魂の抵抗力で無効化できるとなるとやはり疑問が残る。

「あのさ。話をこじらせるつもりは無いんだけど、1個気になったこと聞いて良い?」
「なんなのね?」

メフィストさんに何が気になつているのかと尋ねる。するとメフィストさんは縁側に視線を向ける。

「しゅーてーん。今日は良い天気だぞ、明日も良い天気だといいなあ」

【……】

酒呑童子の眼魂を大事そうに抱えて、声を掛けている茨木童子がそこにはいた。

「……あれがどうかしたのか?」

「いや、眼魂つて魂が入っているんでしょ?」

「そうなりますわね?」

眼魂の性質は英霊や神魔といった、魂が主体になっている存在を収用できる物質と考えて良い筈だ。あるいは、固形化した魂と言っても良いだろう。メフィストは私達の回答を聞いてそれならあたしの考えている通りと笑った。

「じゃあさ。狂神石の性質が眼魂に封じられているんじゃないの？」

「「あ……」」

それは考えてみれば当たり前の事だった。横島さんが暴走した時は眼魂から常に赤いオーラが溢れていたし、横島さんの身体からもオーラが出ているので横島さんの魂の中に狂神石が残っていると思っていたのが間違いだったのかもしれない。

「じゃあ、あの赤黒い眼魂が出現した時に……」

「……奪い取って封印すれば」

「横島さんから狂神石の影響を取り除けるかもしれないのねー!」

あくまで可能性の話だが、横島さんから狂神石の影響を取り除けるかもしれない。そう思うと、今までなんの光明も無かった道に光が差し込んだように思えた。

「なら今の段階は竜気で押さえこんでおくのが一番確実ですね」

「……まあ、私と清姫の竜気なら……」

平安時代のシズクさん達がそう口にした瞬間。私達の時代のシズクさんと清姫さんが姿を消した、平安時代の2人がきよときよとするのを見ながら私は天を仰いだ。

「何？大變なことにでもなるの？」

「……たぶんと言うかこれから確実になるのね……」

竜気で封印すると言う大義名分を得てしまったら、あの2人の事だから暴走するのが目に見えていた。

『え？え？何？心眼をどうするのッ！』

心眼を奪われたみたいなのね。理路整然と攻めてくるから先に心眼を奪うのはきつと大正解なのね。

『大丈夫です、ね。何にも怖くないですからね？』

『……すぐに済む』

『蛍ー！蛍ー！助けてー！ツツ!!』

私の目だから判るけど、完全に肉欲に染まっている2人に迫られるのは怖いのね……横島さんでも助けを求めるのは当然だった。

『み、みむう？』

『びぎゅー？』

『ノノーブ？』

『……大丈夫。問題ない、これは横島の為になる』

『そう言うことですから大丈夫ですわよ？』

チビ達が助けてという声に出てきたみたいだけど……シズクさんに横島さんの為になると言われて、どうすればいいのか判らないのか困惑した鳴き声を上げている。

『何!?何事!?って何してるの!?!』

すると横島さんの助けを求める事を聞いたのか、廊下を走る音と障子が勢い良く開く音が響いた。まず、間違いなく蛍さんが来たみたいなのね。

『ちい、邪魔者ですわね』

『……大丈夫、すぐに済む』

『つ、つめたあ!?!足元凍らせるとか酷くない!?!って言うか何するつもりなのよーツ!!!』

そして助けを求める声を見せた蛍さんだけど、庭から聞こえてくる冷たいという言葉悲鳴にこれは絶対大変なことになっていると確信した。竜気を注ぎ込むという名目で横島さんとキスをするつもりなのだろう……ガツツリ肉食系の2人なら絶対それをする確信していた。

『いやいや!待って!お願い!』

『大丈夫ですわ、すぐに終わりますから』

『……念の為だから』

『『邪魔をするな……』』

「家が吹き飛ばないようにして欲しいのね」

「まあそれくらいならやりますわ」

「……高島の帰る家を無くす訳には行かないしな」

邪魔者の動きを止めて、いざ横島さんに迫れば最大の敵は目の前にいる。屋敷の中心にも、びりびりと伝わってくる殺気——その近くに居るであろう蛍さんと横島さんの事を思い、南無と呟き、庭から上がる火柱と水柱に本当に大変なことになったと頭を抱え込んで、机の下に潜り込むのだった……。なおシズクさんと清姫様の争いは美神さん達が戻ってくるまでの間の1時間ずっと続いていて、戻って来た時の美神さんの怒声に私へ向けられた物じゃないと判っていても、身が竦んでしまうのだった……。

酒呑童子が狂神石に適合しているのではなく、その桁並外れた精神力で押さえ込んでいると言う報告を受けたガープはアスモデウスに作戦の最終段階に入るように告げていた。

「アシユタロス。お前にも協力してもらおうぞ」

「良いとも、だが姿は隠させてもらおう」

協力するのは構わない、だが正体を隠すと言ったアシユタロスにアスモデウスは首を傾げた。

「それほどまでにお前の娘に正体を明かすのが嫌か？」

「まだその時じゃない。それにあの子は私を本当に父親だと思っている。まだ利用価値はある——そうだろうか？」

あくまでその時が来るまでは自分の娘……蜜には自分の正体を隠すというアシユタロスにアスモデウスはそれも良かろうと頷いた。

「無意識の内にあちら側の陣営の情報を流してくれているのだ。それを失うのはまだ痛いかな」

「そうだ。それに精神攻撃にもなるし、人間側の陣営の出鼻を挫く為にもな」

本当はそんな事を思っていないくとも、アシユタロスはするように振舞わなくてはならない。

「過去のお前は協力を拒否したな」

「仕方ないだろう、未来を知る私とお前がいるんだ。無理に動く必要は無いのさ」

アスモデウスに協力する上でアシユタロスは保険を残した。それは平安時代の自分だ。かなりギリギリだったが、未来のアシユタロスは過去の己を引きこむことに成功していた。だからアスモデウスと共に動いても、最悪の場合はアシユタロスが用意した保険を起動してくれるだろう。それが、アスモデウスと協力する上でアシユタロスが出来た横島達への贈り物だった。

【アシユタロス様、アスモデウス様、準備は出来ております】

道真公が黒い稲妻と共に表れる。その目は紅く染まり、全身から溢れ出る紅い靈力……道真公もまた狂神石を投与され、その靈力を増加させていた。しかし今までの神魔と違い暴走していないのがグープによって、更に改良された狂神石の力だった。

「平安京の靈力溜まり、そして靈脈を破壊する。良いな」

【全てはお2人の思うがままに……】

今までは隠れながら美神達の手伝いをするという事も出来た。だがこうしてアスモデウスと共に立った以上、もう表立って美神達に協力することも出来ない……ここからが、アシユタロスにとつての本当の戦いの始まりであり、決して気を緩める事の出来ない騙しあいが始まる瞬間なのだった……。

そしてこの日の深夜——平安京の靈力の溜り場、靈脈、そして平安京を守る結界の基点が全て黒い稲妻によって破壊されたのだった……

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その25へ続く

その25

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その25

く美神視点く

帝の所から戻った時に、足元を凍らされている蚩ちゃんも横島君。そして横島君の唇を奪おうとしている色惚け竜神には肝を冷やしたけど、今はそれとは全く違う要因で肝を冷やしていた。膨大な魔力が込められた雷で私は目を覚まし、部屋を出ると高島も神妙な顔でメフィストと共に夜空を睨んでいた。丁度その時、夜よりもなお暗い黒い稲妻に眉を顰めた。どう見ても自然現象では無い……これはアスモデウスの攻撃と考えて間違いないだろう。

「……………これ大丈夫なの？」

雷が落ちる度に、平安京の結界が緩んでいるのが判る。ピンポイントで結界の基点だけを破壊して、悪霊や鬼を平安京に引き入れようとしている。巨大な力を持っている。せに、油断もおごりも無い。こちらの戦力を減らし、分散させる嫌な一手を打ってくる。「……………かなり厳しいな、美神。お前は屋敷にいてくれ、俺はシズクと清姫、それとメフィ

ストを連れて出る」

「判ったわ。ここは預かるわ」

「ああ。すまないが頼む、メフィスト。行くぞ」

「OK、行きましょう」

メフィストが高島の手を掴んで空を飛んで行く、姿が見えないからもうシズクと清姫も屋敷にいないだろう。

「……結界を張っておいて正解だったな」

「そうね。横島君と蛍ちゃんは寝かせておいた方がいいわ……」

私でも魂に響いてくる何かを感じているのだ。先祖がえりの蛍ちゃんと狂神石の影響を受けている横島君は起こさない方が良く……どんな悪影響があるかも判らないからだ。

「慎重に行くべきですね。どうも、本格的に動き出したみたいですしね」

「……凄く真面目なことを言ってるけど、横島君と蛍ちゃんが疲労しているの2人のせいでからね？」

思いつきり目を逸らしているけど、その程度で誤魔化されたりはしない。横島君の様子を見るという建前で横島君を襲ったのは事実なのだから、暫くは目を光らせておく必要があるだろう。

(……それにしても、本当に堅実で困るわね)

神魔にとつて人間は弱く、歯牙にもかけない存在だ。だがアスモデウスやガープは違う、対等……じゃないわね。自分達の足もとを掬いかねない存在として酷く警戒している。確かに、様子見をしていたり私達の成長具合を見極めると言う名目で攻め手を緩める事はある。

(全部の鍵は結局の所……全部横島君なのよね)

私達をあえて泳がしているのも、私達を何時でも殺せるのにそれをしないのも……全て横島君が鍵となっているのだろう。

私達をあえて生かさず、殺さずで痛めつけて横島君の激情を駆り立てる。

霊力と言うのは強い感情に左右される……横島君の霊力を負に傾けて、そこから何かをするつもりなのだろう。

「なににせよ、気を緩めることは出来ないって事は確かね」

こうして派手に動き出したのは横島君が狂神石を取り込んだことも関係しているだろう。

いや、もしかすると今回で横島君を連れ去りに動く可能性も十分にある……。

それは子供でも判る簡単な理屈だ。超レアな稀少技能をいくつも持ち、そして狂神石の影響を受け始めている……。

それは普通に攫つて洗脳するよりも簡単なことだろう、狂神石は向こうの持ち物、私達の防衛策なんて簡単に突破する事が出来るだろう。

「ここからが正念場つて事ね」

今までの事件を考えれば、宣戦布告を除いてアスモデウスやガープが表立つて動く事はなかった。部下や操つた英霊を使い、自分達が動く事はなかったのに、今回はアスモデウスが出張つてきている……間違いなく、大きく動くつもりだと見て間違いはないだろう。

「……こんな時に皆がいてくれれば良いのにね……」

小竜姫様達や、琉璃やくえす、唐巢先生に冥華おば様……皆がいれば、何か妙案も浮かぶかも知れない。だけど、今は過去、そして平安時代で孤立無援とまでは行かないけど、この時代の人間に死なれると現代で何が代わるか判らない。そうなると、表立つて頼むのは本当に難しい、1度歴史改変を目の当たりにしているのだ。

「……1人で何もかも背負う必要は無い」

「横島様を守りたいのは私も同じですからね」

「ありがとう、でも、横島君を襲つたのとこれは別だからね」

舌打ちするシズクと清姫、良い感じの話をしていてもそれとこれとは話は違う。だけど、この緊張感があるのに、不思議と緩い空気があるこの状況はいつも通りの私達と言

う感じで、肩の重みが少し取れたような気になるのだった……。

〔蛍視点〕

美神さんからアスモデウスの本格的な攻撃が始まったと聞く前に、私は今の状況を把握していた。お父さんからの使い魔でアスモデウスと行動を共にすることになったと言う事を知り、そして今まで通り、何もかも普段通りではないと言う事を知らされた。

(……良く持った方なのよね)

正直過激派に属して、あれだけの情報と、そして私達の為にお父さんが行動出来ただけでも凄い事なのだ。平安時代を脱出し、元の時代に戻ればまだ少しは以前のように暮らせる可能性はあるが……恐らくアスモデウスの監視がつくことになるだろうから、完全に普通りとは言えない。こちらの情報を流しつつ、向こうの情報をこちらへ流す……Wスパイと言う命懸けの仕事をすることになるお父さんの身の安全を私は祈りたい……だけど、祈っている時間さえも私達には許されなかった。

「蛍ちゃん！ 新しい矢！」

「はいッ！ どうぞッ!!」

霊体ボウガンの矢を美神さんに投げ渡し、破魔札を手の平に乗せたまま飛び掛つてきた鬼の顔面に叩きつける。

「ぎゃあッ!!」

「これでトドメッ!!」

怯んだ鬼からバックステップで後ずさり、神通棍を鬼の頭部に叩きつけて砕いて美神さんと背中合わせで立つ。

「これ、本当に不味いですね!」

「数が多すぎるわッ!でも撤退も出来ない……ッ!」

今私達がいるのは帝の屋敷へと通じる大通り、それは今や悪霊や鬼によつて完全に埋め尽くされ、唯一結界が残っている帝の屋敷に平安京の民全員が集まっていると言う状況だ。

「狙え!撃てッ!!!」

西郷さんの合図で陰陽札を貼り付けた矢の雨が降り注ぐ、それによつて悪霊達の動きが止まった隙に後退する。

「……水神の力甘く見ないでもらおうか」

「……薙ぎ払わせて貰う」

「ふふふ、こういうのも面白いですわね」

「そうですね、では行くとしましょうか」

「転身火生三昧ッ!!」

2人のシズクの手の当てた部分から地面が凍りつき、鬼達の動きを封じ込めそこに清姫達が変身した竜の業火が襲い掛かる。

(……なるほど、これね)

平安京を焼き尽くした業火と言うのはまずこれだろう。では、その後怒りに任せて虐殺を行った清姫が幽閉されたという事件もその通りに起きるのだろうか？

「せいッ!!おりゃあッ!!美神さん!蛭!大丈夫かッ!」

鬼に肩口から体当たりし、少し下がって連続パンチ、よろめいた所に回し蹴りと格闘技の凄いコンボをしている横島の言葉に大丈夫と返事を返す。

【いっくぜえッ!!黄金衝撃(ゴールデンスパークッ!!)】

金時が斧を振り翳し地面に叩きつける、斧を基点に走った電撃が鬼達を感電させ動きを止める。

「よっし今のうち、急急如意令ッ!我に従えッ!!」

高島のばら撒いた陰陽札が鬼の額に張り付くと、鬼達の体に鎧が展開され高島の指揮下に下る。

「この場を食い止めろッ!!行くぞッ!」

「中々早かったな……ようこそ諸君」

逆立った赤髪の男……アスモデウスが私達を笑いながら出迎えた。そこに驚きも、予想外と言う色もない。辿り着くのが当然とわかつているような様子だった。その直後、鋭い金属音が私の背後で響いた。驚いて振り返ると、霊波刀が鋭い爪を防いでいた。

「ほう……あれを防ぐか、前よりも早くなっているな？横島忠夫？」

「……しくじったわ……」

私達の頭上を飛び越えてアスモデウスの隣に立つ道真公……横島が気付かなければ、私はあの爪で動脈を切り裂かれていた。ぞつとしながら首筋に手を当てる。

「あ、ありがとう」

「いや、蛭が無事で良かった」

私を見ないでそう言う横島……その姿も口調もいつもと同じなのに、何故か私は今の横島が怖いと思ってしまうのだった……。

くアスモデウス視点く

ガープが横島を気に掛ける意味を我は今初めて理解した。なるほど、確かにこの人間は面白い……。

「では改めて名乗ろう。ソロモン72柱アスモデウスだ」

横島達を見下しながら再び己の名を名乗る。ヒヤクメががくがく震えているが、私の魔力に当てられたと言う所だろう。

「なんで、蛭を殺そうとした」

「何、人は大事な物を失えば力を発揮するだろう？それを手伝ってやろうと思つてな」

我はガープのように美神令子や芦蛭をそこまで重要だとは思っていない。大事なのは文珠、必要なのは特異点である横島忠夫だけ……そしてその魂を魔に傾ける為に必要な犠牲と言うのならば、ガープの計画だったとしても簡単に美神達を殺すだろう。

「てめえッ！」「横島君ッ!!」っ!!」

横島の目が真紅に染まりかけた時、美神の一喝でその瞳に知性が戻る。

「なるほど、良い判断だ。美神令子」

「お褒めに預かり光栄だわ。アスモデウス」

軽い挑発のつもりだったが、まさかその名前を呼ぶだけで横島を正気に戻すとは……思つた以上に強い信頼関係があつたと今悟つた。そしてそれと同時に横島を狂わせるには、美神や蛭を殺せば、それで事足りるとも理解した。

「道真、美神達を抑えろ。我は、横島の今の実力を見極めるとしよう」

【判りました。存分にお楽しみください】

雷が鳴り響き、横島だけを分断する。

「美神さん！ほた……ッ！」

「ほう？悪くない反応だ。特異な能力だけでは無いと言うことだな」

我の斧の一閃を回避する人間と言うのは初めて見たかもしれん。これは期待が持てるな……少なくとも一蹴で終わるわけでは無いと判っただけでも楽しみが生まれたという物だ。

「……お前を倒さないと美神さん達には合流出来ないって事か」

「お前に出来るかな？横島忠夫？」

「出来る、出来ないじゃない……やると決めたら迷いはねえ」

【アーイー！ガツチリミナー！ガツチリミナー!!】

グループを一時的に退けた眼魂か……なるほど、あちらも本気と言うことだな。

「良いだろう、我が膝をついたのならこの場は大人しく引き下がる事を約束しよう」

「……本当だろうか？」

「当たり前だ、神魔である以上……ある程度の誇りはある。約束した以上はそれを護ろう」

「ほえ面かくなよ！変身ッ！」

【カイガン！グレイトツ！15の英雄！結集！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!】

ガーブの報告では使いこなせていないと聞いていたが……さてさて、どれほど楽しませてくれるか楽しみだ。

「ぬんツ!!」

「おらツ!!」

上段からの一撃を受け止めるのではなく、側面を叩いて軌道を逸らす。

「なるほどなるほど、前よりは使いこなしていると言っことか」

「くっ!これならどうだ!」

「甘い甘い。その程度では掠り傷にもならんぞ」

顔を狙った一撃を受け止められると即座に飛んで飛び膝蹴りを叩き込んでくるが、避ける事も防御する事も無く腹筋に力を入れるだけで防ぐ。

「そら、蹴りとはこうやってやるのだ」

「がぼはあツ!」

思いつき踏み込み、横島の胴体を蹴り飛ばす。足先に何かを碎いた感触と無様な声を上げて吹き飛ばす横島に道真公と戦っている美神達からの悲鳴が聞こえる。

「どうも少しやりすぎ……【ダイカイガン!グレイトツ!オメガシューティングツ!!】

……ふははははッ!!!良いぞッ!!!」

横島を吹き飛ばした方向から飛んできた霊波砲を斧で両断する。

「くそ……化け物かよ」

ふらつきながらもまだ闘志を燃やしている横島を見て笑みを浮かべる、先ほどの蹴りは確かに横島の肋骨を砕いただろう。だがまだ、その闘志は消えていない。人間と侮っていたが……なるほど、ガープが注目するのも納得だ。

「さあ、続きだ……アスモデウス」

「良いだろう。我に膝をつかせて見るが良い。さすれば、約束通り我は退くぞ?」

我の言葉に返事を返さず飛び掛ってくる横島をみて、これは思った以上に楽しめそうだ……我は久方に感じていなかった戦いへの高揚を隠し切れず、高笑いを上げるのだ……。

くアシユタロス視点く

この霊脈のコントロールと言う名目で私は姿を隠していたが、状況はかなり不味い。「そら、剣とはこのように振るうのだッ!!」

「がはあッ!!」

グレイト魂……今横島君が持っている眼魂の中では一番強力なそれでも、アスモデウスには届かない。根本的にアスモデウスとグレイト魂ではマイト数に数百倍の差があ

るのだ。どう戦っても勝ち目などある訳がない……だがそれは蛍達も同じだ。

【貴様らの貧弱な霊力など、私には届かない】

「くそつたれ！流石は道真公かッ!!」

高島は確かに人間としては破格の霊力を持っている。だが、狂神石によってパワーアップしている道真公には届かない……。

(……)までは無かつたんだがな……)

私ではなくアスモデウスが出てきたことで状況は前回よりも遥かに悪い……このままでは緑に抵抗も出来ず蛍達は死ぬ。

「……行けッ！」

「シャアアッ!!」

【今……何かしたか?】

シズクと清姫の氷柱も火球も道真公を覆っている魔力に弾かれる……やはり平安時代の英霊だからこそ、その力の上昇幅が文字通り桁違いなのだ。

「これならどうッ!!」

【いいや、それも無意味だ】

メフィストの雷の矢も届かないのではどう考えても、今の蛍達に道真公を突破する手段は無い。だがこのままでは、横島君がアスモデウスに押し潰されるのは時間の問題

……。

(しかたない、届けッ！)

この時代の私が横島君達を信じてくれた証……魂の結晶をメフィストに向かって投げる。

「いたっ!? つてこれ……」

辺りをきよときよとと見回しているメフィストと目が合う、慌てて口元に手を当てる。するとメフィストは悪戯っぽく笑い、魂の結晶を飲み込んだ。

(……やはりこうなってしまうか……)

メフィストが魂の結晶を取り込んでしまえば、転生した後である美神君にも魂の結晶は渡ってしまう。流れは変わっていても、魂の結晶をメフィストが取り込むという自体は回避出来ないようだ。

「高島あ！横島に合流してやってッ!!」

力強く霊力の矢を引き絞ったメフィストがそう叫び、道真公の作った雷の壁を破壊する。

「わかった後は頼むぜッ!!」

「ヤッテミーナ、ヤッチマイナー!」

高島の腰に現れていたゴーストドライバー。その上に巨大な眼魂の形状をした追加

パーツが装着される……。

(あれは!?)

平安時代に来て何時の間にか無くしていた巨大な眼魂……何故高島が持っているのか、何故高島がゴーストドライバーを使えるのかと言う謎に私が混乱している間に一瞬だけ開いた雷の壁の隙間に身体を滑り込ませながら高島が叫んだ。

「変身ッ!」

【ゼンカイガン! ジュウニシンシヨオツ!! ネズミウシトラウサギリウヘビニウマヒツジサルトリイヌニイノシシツ! ダイヘンゲーツ!!】

あれは六道家の12神将の眼魂!? あんな物があつたのかと困惑すると同時に、私は少しだけ安心していた。

「おらッ!!」

「ぐっ!? ふはははははッ!! 良いぞ良いぞ、高島か、我を楽しませろッ!!」

「冗談が過ぎるぜ!」

アスモデウスの斧を弾き、高島が巨大な眼魂の形をしたベルトのボタンを押し込んだ。
だ。

【シヨウトラッ! ヒーリングライトッ!!】

眼魂から召喚された霊力状のシヨウトラが横島君に覆い被さる。私の予想が正しけ

れば、あれは12神将全ての力を使える眼魂のはず……シヨウトラの力は治癒能力。あれで横島君は最初のアスモデウスの蹴りで負傷していた肋骨を回復させる事が出来る。そうすれば互角とまでは言わないが、アスモデウスが自らに課した敗北条件……「膝をつかせる」と言うのを達成できるかもしれない……そして魂の結晶を取り込んだメフィストを主軸にすれば道真公を退ける事も出来るかもしれない……。

(危うい……余りにも危うい綱渡りだ)

あくまで可能性が生まれただけであり、状況が劇的に変わった訳では無い……それでも可能性が生まれた。ほんの僅かな可能性を引っくり返せるのは、人間だけだ。

(頑張ってくれ……諦めないでくれ)

諦めてしまえばそこですべての道は閉ざされる……絶望的な状況でも諦めず、どれほど苦しくてもくじげないでくれ……私はそれを祈ることしか出来ないのだ……。

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その26へ続く

その26

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その26

前の帝の屋敷は酒呑童子……いや、鬼道のせいで破壊されてしまった。だが平安京の最重要人物である帝を護るといふのは当然の事であり、帝お抱えの霊地には数多の屋敷が用意されている。つまり、鬼道によつて屋敷は破壊されたが、その日の内に帝は新しい屋敷へと住居を移しており、今いる屋敷は幸か不幸か道真公の稲妻によつて唯一破壊されなかつた霊地の上の屋敷だった。

「あ……皆が行つたわ」

「……話には聞いていたが、こういうことか」

六道家当主「六道幸華」の周りにいた12神将が霊力の光になつて、空を飛んで行つた。それが突然の事であれば全員パニックになつていたが、事前に高島から説明を受け居ていたからか驚きは少なかつた。

「皆が助けになつてくれればいいわ」

「そうだな。外つ国の神魔だからな……高島殿が無事ならば良いのだが……」

戦う事の出来ない者は無事に帰つてくる事を祈る事しか出来ず、空気に乗つて響いて

くる靈力のぶつかり合いにどうか、無事に戻って来て欲しいと心から祈る。

(高島、死ぬんじゃないぞ)

そして西郷もまた心から祈る。鬼道と鬼道派の陰陽師が一掃された今高島の陰陽寮当主になる道を阻む者はいない、苦しい道を歩んで来た高島の努力と苦勞が救われる時が来たのだから死なずに帰って来いと西郷は祈る。

「……不吉な」

帝の部屋の鏡が音を立てて砕けた。それは西郷や、幸華、そして躑躅院の高島の無事を祈る気持ちを嘲笑うかのように、自然では決してありえない方法で砕けた鏡を見て、帝はその顔を歪めるのだった……。

く高島視点く

何故か判らないが、再び俺は横島と似た姿に変身する事が出来ていた。しかも今回は謎の男に渡された巨大な球体を使った変身だった。

【アンチラ ラピッドエッジッ!!】

腰帯から聞こえてくる声は何を言っているかは判らないが、その前の12神将の名前でどんな能力かはある程度予測がついた。

「行くぜツ！」

目の前に現れた兎の耳を連想させる三日月状の刀を持ち、アスモデウスとやらに斬りかかる。

「ツ！なるほど、厄介な能力だな」

「はっ！俺の引き運も満更じゃねえツ！」

上級神魔が展開している魔力壁、それを豆腐のように容易く切り裂くこの刀は紛れもなくアンチラの能力による物だ。

「ハローアロー森で会おうツ！」

「いけっ!!」

「よっしや、そのまま撃てツ!!」

俺が障壁を切り裂き、その隙を見て横島の狙撃がアスモデウスを襲う。1対1ならば間違いなく、俺も横島もアスモデウスの敵では無いだろう。だが2人ならば戦術は広がる、打てる手段は大きく変わる。

「1+1は2……ではないということか、面白いツ！やはり戦いとはこうで無ければなツ!!」

虚空に右手を翳し、そこから現れた牛の角が裝飾された盾を構え、左手で巨大な戦斧を構えるアスモデウス。そのめには先ほどまで無かった爛々と燃える闘志の色が浮か

んでいた。

「人間って侮ってくれてもいいんだぜ？」

「はっ、人間の可能性は神魔にとっても脅威だ。そんな愚かな真似はしないッ！」

盾を構えて突進してくる。巨大な質量が高速で向かってくる、それだけでもかなりの脅威だ。一瞬でも怯めばその隙に畳み込まれ、押し潰される。

「メキラ デイメンジョン・ステップッ！」

軽く地面を蹴ると俺の身体はその場から消えうせ、アスモデウスの背後を取っていた。

「短距離転移かッ!？」

「どういうことか俺も判らんが、続けて行くぜッ！」

【アジラ ドラゴンブレスッ!】

右腕に嵌るアジラの頭部を連想させる箆手を突き出すと、そこから放たれた炎がアスモデウスを包み込んだ。

「こんな炎なドッ……これはッ!？」

「は、流石、アジラの能力だッ!!」

アジラの能力は石化と炎、その2つの性質を持った炎はアスモデウスの足元で炎を石化させ、アスモデウスの動きを拘束していた。

「横島ツ!!」

「おうツ!!」

【ピカラッ! パワードボアツ!】

【カイガン! ベンケイ! アニキ!ムキムキ!仁王立ち!】

全身に漲る力は紛れも無くピカラの物。腰帯から飛び出した剣を両手で握り締め全力で振るい、横島は僧服を連想させる衣装に身を包みながら跳躍しつつその手に現れた巨大な槌でアスモデウスを殴りつける。

「ぐうっ!?!」

確かな手応えを感じアスモデウスの身体が吹き飛んだ。有効打撃とは言い難いが、確かに傷を与える事は出来ているだろう。

「今度は俺だぜ、高島ツ!」

【カイガン! ニュートン! リンゴが落下!引き寄せまっか!】

両手が紺色の球体になった横島が手を翳すと吹き飛んでいるアスモデウスが凄まじい勢いで戻ってくる。

「はっ!お前とは戦いやすいぜツ!!」

大きく足を振り上げると上空に猪の蹄状の霊力の塊が生成される。それを確認し足を振り下ろすとその猪の足は高速で飛来し、アスモデウスを踏み潰そうとするが、アス

モデウスの強力の前に完全に受け止められる、それならばと足を振り上げアスモデウスを上空に蹴り上げる。

〔サンチラ ライトニングスネークツ！〕

〔カイガン！ ノブナガ！ 我の生き様！桶狭間！〕

〔吹っ飛ベツ！！〕

俺の手に現れた電撃の槍と、横島が手に持つ銃から放たれた靈波砲がアスモデウスを飲み込み吹き飛ばす。1対1ならば、俺達はどう足掻いても勝てない。だが同じ考えを持ち、そして相手が何をしようとしているのか判る俺と横島ならば、圧倒的格上のアスモデウスにもその牙は届く。勝てないにしろ、手傷を負わせアスモデウスを撤退させられるかもしれない、それにアスモデウスの言った膝をつけば撤退するという誓約を満たせるかもしれない……それは本当に小さい勝利の目だが……確かに俺達にも勝利の目が僅かに生まれるのを感じるのだった……。

くアスモデウス視点く

地面に戦斧を突き立て、強引に姿勢を立て直したアスモデウスは激しく震えていた。人間如きに背中をつきかけた……と言う怒りでは無い、人間が、弱く簡単に死ぬ生き物

がそれだけ、たたらを踏むことも無く、無造作に蹴りを叩き込んできた高島を驚つかみにする。

「効いてない!?!」

「いいや、悪くない。良い一撃だった。だが我を倒すには力不足だツ!!」

高島を振り上げそのまま地面に叩きつける。苦悶の声を上げながらバウンドする高島にスパイクを振るいその姿を大きく弾き飛ばす。

「高島!?!」「他人を心配している暇があるか?」「変身ツ!」

「カイガン!ムサシツ! 決闘!ズバツト!超劍豪ツ!」

横島の姿が真紅へと変わり、両手に持った刀で我のスパイクを防いだ。その姿を見ると、心が震えてくる。

「ああ、良いぞツ!神魔など我の剣と一合ともかわせなかったからな!」

「ぐっ!ぎっ!がああツ!!」

苦しみながらも我のスパイクを、斧を受け止め、受け流し続ける横島。確かに人間ではある……だがその技量は一部だけではあるが、神魔の領域に踏み込もうとしていた。

「うあつ!?!」

「残念だったな。ここで死ぬか?」

下からの切り払いで横島の手から刀が2本とも飛ぶ。そのがら明きの胴に斧を振る

おうとしたその瞬間、自分の身体が後にずれるのを感じた。

【バサラ バキュームカウ！】

「そうそう簡単に……決着なんて言うなよ」

凄まじい力で吸い寄せられ、我の戦斧は僅かに横島を掠めるだけに留まる。

「ああ、そうだな。これほど面白い戦いは早々決着をつけるものでは無いなッ！」

盾の側面に付けられた刃で高島へと斬りかかると同時に、前を向いたまま斧を後に向かつて振る。

「くそっ！」

「ははは、そんな奇襲など我には通用せんぞッ!!」

斧に横島を引っ掛け、振るう勢いで横島を高島に目掛けて投げつける。

「うおっ!?!」

咄嗟に横島を受け止めて足を止めた高島。これこそが、我の狙いだつた。

「この程度で死んでくれるなよッ!!」

盾を構えてシールドチャージを高島と横島に叩きこむ。確かに高島と横島を捉えた手応えを感じ、吹き飛んだ2人の後を追って歩き出す。さつきから女の悲鳴が聞こえて戦いに集中出来ない。こんな面白い戦いは久しぶりなのだから、心から楽しむ為に戦場を変えたのだ。

【シヨウトラ ヒーリングライト】

「そうだ。そうでなければ、つまらない」

靈力の光に包まれその傷を癒している高島と横島を見て笑う。ただ、回復するだけならば興醒めだ、力の差を知り絶望などされては面白みもない。だがこの2人はまだ我を倒そうとしている、気力が折れていない。その事に笑いながら、我は斧とスパイクを背中にマウントし、虚空から取り出した燃え盛る強弓を構える。

「さあ、狩りの始まりだ。これを越えて、我に牙を突きたてて見せるがいいッ!! 我は約束は護るぞ! 抗って見せるがいいッ!」

膝をつけば下がるという誓約を破るつもりは無い。だから我に膝をつかせて見ろと叫び、我は炎の矢を横島と高島目掛け打ち出すのだった……。

く横島視点く

凄まじい勢いで迫ってくる炎の矢を打ち落とす。だがそれが限界だった、一步も前に出ることが出来ない。嵐のように射出される弓矢、それを弾き、防ぐのだけで俺も高島も手一杯だった。

「どうした、さっきまでの勢いはどうした。もっと楽しませろ」

バトルジャンキーだったのはある程度予測がついていた。だがまさか近く遠まで完壁にこなすオールラウンダーとは夢にも思っていなかった。

「くそつたれ、陰陽術を使ってる間もねえ！」

「こなくそおツ！」

アスモデウスが射撃で俺と高島の足を止めている理由は明らかだ。陰陽術と文珠を使わせまいとしているのだ、確かに陰陽術も文珠も使えばその瞬間に流れを変えることが出来る。だがそれはアスモデウスの求める戦いでは無いのだろう、劍指を作ろうとすれば、矢でピンポイントで指を狙ってくる。文珠も取り出す隙もありはしない……弾けはする。だが、ここで千日手……何か打開策が無ければ、このまま力尽きるまでアスモデウスは攻撃を止めないだろう……。

（俺の計算通りに……な）

アスモデウスがそう考えていると俺は考えていた。正直に言えば、心眼が魂の中にいる俺は文珠を使おうと思えば、心眼に使わせることが出来る。そこからアスモデウスへと肉薄することも不可能では無い、だが俺も高島もそれを敢えてしない。

（かなり大胆な一手を取るな）

（……正直かなり危険な賭けですけどね！）

アスモデウスがこっちに来る前に互いに陰陽札を張って、念話で会話できるようにし

ている。だから完璧とまでは言わないが、ある程度は連携が出来ている。

(なんとか、美神達が道真公を倒してくれればな。反撃にも打って出れる)

(大丈夫ですよ。美神さん達ならやってくれます)

俺達がこうして耐久に出たのはアスモデウスと道真公が合流する事を避ける為だ。ただでさえ強い、道真公とアスモデウスが共闘すればそれこそ俺達に勝ち目は無くなる。こうして俺達がアスモデウスを足止めする事で美神さん達が道真公を何とかしてくれる……俺と高島はそれを信じるしかない。道真公も俺達と同じで文珠を使える。もしその文珠でアスモデウスが強化されればそれこそ手の打ちようが無くなる、こうして俺達が劣勢に追い込まれていると……思わせることでアスモデウスをここに足止めする。そして美神さん達が道真公を倒す、あるいは正気に戻るまで追詰める。そうしなければ反撃に打って出ることが出来ない。

(問題はアスモデウスがこっちの策を見抜いているかどうかだな)

あからさまに耐久すればアスモデウスもこっちの思惑に気付くだろう。この炎の矢の雨をかかわすのは並大抵の事では無い……放たれたと思つた瞬間には既に顔の目の前に来ているからだ。それでも俺なら弾ける、そして高島も同じだ。

「ほうっ！」

アスモデウスの声に先ほどまでと同じく喜色の色が混じる。俺と高島はガンガンブ

リードでアスモデウスの矢を弾きながら、少しずつ、本当に少しずつだが前に出ていた。「良いだろう、何処まで弾けるか……見せて貰うとしよう」

あからさまに激しくなった炎の矢の雨に冷や汗を流しながら、それでも歯を食いしばって前に出る。

(美神さんなら……蛍なら、シズク達ならやってくれる)

絶対に美神さん達ならば道真公を倒してくれる……俺と高島はそう信じ、少しずつ炎の矢に挟られながらも一歩、一歩……亀のように遅い足取りでも確実にアスモデウスに向かつて歩み始めるのだった……。

G S 芦蛍外伝平安大魔境 その27へ続く

その27

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その27

く美神視点く

平安時代最強の悪霊……「菅原道真」……現代では雷神にして学問の神として崇められている。悪霊、そして神としての2つの側面を持つ道真公は間違いなく最強の悪霊と言っても過言では無い。

【抗うな、人間がワシに勝てると思ってるのかッ!!】

突き出された道真公の手から放たれる雷電——それは人間を火達磨にするところか、街を1つ滅ぼしても余りある威力だ。

「悪いけど、さつきまでのあたしと思わない事ねッ!!」

メフィストが地面に両手を叩きつけ、その直後地面から噴き登る火炎が道真公の雷と相殺しあう。

「今よッ!!」

「ありがとねッ! 蚩ちゃんッ!」

「はいッ!!」

同時に道真公の目を狙って霊体ボウガンを打ち込む。以下に悪霊と言えど、元は人間である。目等の急所を狙えば咄嗟に顔を庇うのは当然の事である。

「……人間で駄目なら、竜神はどうだ？」

「……驕るなよ。人間霊が……」

「たつぷりと炙って差し上げますわ」

「横島様が心配ですから、早く死んでくれますか？ああ……もう死んでましたね？」

……正直言つてシズクと清姫を敵に回す方が危険すぎる。それを改めて実感した、1000年前のシズクと清姫の凶暴性が並じやない。

「ぬ、ぬがああああーッ!!」

氷の散弾と炎の中に飲み込まれ苦悶の声を上げる道真公——英霊と言えど、あの火力と物量には押し勝てないのは当然だと思う。

「それより、メフィスト。急にパワーアップしたけどどうしたの？」

「判らないけど……多分、贈り物だよ。あたしにね」

贈り物……か、そういえばメフィストの創造主も平安京にいる筈だけどその姿を見せないのは正直言つて謎だ。

(……アスモデウスの味方つていうわけでは無いのかしら?)

平安京には複数の神魔がいた。その中にはアスモデウスと同格の神魔がいて、その神魔がメフィストを作った。だけど何かをしたせいでメ

フィストは記憶を失った……。その段階でメフィストを作り出した神魔は撤退した？ 思想に違いがあった？

「ッ!!」

強烈な殺気を感じ身体を反転させると、稲妻の矢が私の顔の前を通過して樹木を薙ぎ払った。

「ふーふーッ！ 悔るなよッ！ ワシは、ワシは雷神道真ぞッ!!! 竜神だとしても、ワシの負けは無いッ!!!」

業火と氷を打ち砕きその下から姿を見せたのは、既に道真公ではなかった。

「……狂神石って事ね」

「ですわね……ッ」

赤黒い灵力の甲冑を身に纏い、その目を真紅に輝かせる道真公。その姿は辛うじて人型だが、人間には見えなかった。

(倒しきれないわね……)

直感で悟った……確かにメフィストも強くなっているし、私達も現代とは比べ物にならないほどに強力な霊具を装備している。だがそれを差し引いても、道真公には勝てな

い……。倒しきるには一手届いてない……。ちらりと横島君と高島に視線を向ける。アスモデウスを相手に2人がかりでイーブン、私達は6人がかりでやつと道真公とイーブン……。眼魂の力の凄まじさに驚愕すると同時に、その凄まじいまでの靈力にただただ素直に驚いた。ちらりと横島君と高島の戦いに視線を向ける。

「自ら空中に飛ぶとは死にたいのか？」

アスモデウスが飛ばす炎の矢が空中の高島に向かって凄まじい勢いで連続で放たれる。

「させるかよッ！変身ッ！」

【カイガン信長！我の生き様！桶狭間！】

空中に浮かんだ靈力の火繩銃から靈波弾の嵐が放たれアスモデウスの矢の軌道を僅かに逸らす。その隙に高島は別の12神将の力を発動させる。

「弱点はどこだッ！」

【クビラッ！サーチアイッ！】

「ふははははッ！我に弱点などないぞッ!!」

「そう思ってたッ！横島あッ!!合わせろッ!!」

【シンダラッ！ソニックムーブッ!!】

「しゃあッ！」

「ダイカイガンツ！グレイトオメガドライブツ！！」

上空で風に身を包んだ高島の姿が掻き消えたと思つた瞬間、凄まじい激突音と靈力の波動が周囲に撒き散らされる。

「ぬっ！狙いはそつちかッ！」

「その矢をぶちおつてやらあッ！！」

メキメキと嫌な音を立ててアスモデウスが手にしている矢に亀裂が走るが速度を優先した一撃では威力が足りない、しかし矢を盾にして動きを止めたアスモデウスに向かつて飛び上がったグレイト魂の飛び蹴りが続けて叩き込まれアスモデウスの矢を真ん中から宣言通りに叩きおる。

「その程度で勝つたつもりかッ！！」

アスモデウスの豪腕が横島君と高島の頭を鷲づかみにし、そのままの勢いで投げ飛ばす。

「横島！」

「蛍ちゃん！自分達に集中しなさいッ！」

シズクと清姫が前衛を務めてくれるから何とか食い止める事が出来ているのだ。支援を止めている余裕はないと蛍ちゃんを一喝し、霊体ボウガンの引き金を引いた。

「……私達が前衛に出る」

「間違っても正面を切って戦おう何て思わないでくださいね、そのかわりちゃんと支援をしてください」

シズクと清姫が前に出た……それは先ほどまでならば私達でも戦えるという判断だったが、ああなった以上私達では対処出来ないと言う事を如実に示し、支援をしろと言うのは態度ほどシズク達に余裕が無い事を現していた。

「ごめん、お願いするわ、蛍ちゃん、こっちー」

「は、はいッ!」

蛍ちゃんを呼んでヒヤクメの前まで下がる。どう考えても私達に勝利の可能性はゼロだ……だがアスモデウスには自分達が課した敗北条件がある。

(全うで勝てないのなら足元を掬う、それが私のやり方よッ!)

アスモデウスの告げた自らの敗北条件……それを聞いて何かが引つかかっていたが、それが何なのか今私に判った。横島君の戦い方を見て、師匠なのだから見本に手本になる戦いをしなければならぬと無意識に思っていたのだが、それが私にとつての間違い。人間と神魔では根本的に力が違うのだ、そんな相手とまともに戦うなんて馬鹿にすること……神魔と戦う上での大前提は3つ。1つは「いかに相手の油断を誘うか」2つ「どうやって戦力差を覆すか?」そして3つ……「死なない事」……これらを満たす事で漸く私達は神魔と互角に戦える。

「横島、もう無理とかいわねえよなッ！」

「当たり前だあッ!!」

「はははッ！良いぞッ！もつと抗って見せろッ！」

アスモデウスの巨大な斧を2人がかりで防ぎ、戦い続けている横島君と高島と比べれば私達の戦いはまだ余裕があるのだ。それに、横島君と高島が私達の方にアスモデウスを向かわせていないのは私達ならば何とかしてくれと信じているからに違いない。

「ヒヤクメ、この辺りの霊力の流れを確認して、あと霊脈も生きているかもね」

何度も不自然に行なっている足踏み……それは高島からの合図だ。それを見逃すほど私は馬鹿ではない、判っていない様子のヒヤクメに向かって霊力と霊脈の流れを確認するように叫ぶ。

「み、美神さん、急にどうしたんですか？」

「急にも何もないわ、私には私の戦い方がある。横島君達には横島君達の戦い方がある……そんな当たり前前の事を忘れてたって事に気付いたのよ」

卑怯で結構、私の戦いはどこまで行っても自分達が生き残る戦い方なのだ。真っ向から戦おう何て考えるのがまず私達にとっては無謀なのだ。

「見せてやろうじゃない、美神流の戦い方っていうのをねッ！」

相手が見せた隙を見逃すのは私の戦い方では無い、横島君が真っ向から戦うのなら

ば、私は横島君が対処出来ない方法で戦えばいいのだから……。

くヒヤクメ視点

戻って来たのねえ……私は美神さんに言われた通りの作業をしながら背筋に冷たい汗が流れるのを感じていた。

「私の予想が正しければ、盲点はあるのよ。急いでね？」

「……ういっ！」

この笑っているのに目が笑っていない微笑……未来の美神さんにそっくりなのね……ツ。その笑みの怖さと頼もしさの両方を知っているがどうしてもいやな思い出のほうが強い。

「(い)と(い)は？」

「い、いけそうなのね！」

蛍さんと一緒にモニターを見ていると美神さんの読み通り、霊力の吹き溜まりがあった。霊脈から僅かに零れた霊力が溜まる場所……川で言う支流の事だが、霊力の流れならそれは違う。純度の高い霊力が一箇所に留まっている……それは霊脈の流れよりも遥かに稀少で、そして利用しやすい純粋な霊力の塊である。

「……ちっ、暴走しているのか」

「……だが暴走しているのならば対処は容易い」

絶対嘘なのね、暴走して理性が飛んでいる相手ほど厄介な敵は存在しないのね。相手が道真公と言う規格外の神魔と互角に戦えるのは、シズクさんと清姫様だからなのね……っつて!?

「回避！回避——っ!!」

「叫んでる暇があったら走って!!」

道真公の振るった刀から飛び出した雷が私達の方に飛んできて美神さん達と慌てて逃げる。

「ちよつと！ちゃんとかつちに来ないように相殺してよね！」

「やってるわよっ！でも向こうの攻撃が激しいのよっ!!」

同じ声のトーンだから美神さんが2人いるように思えるのね……額に浮かんだ汗を拭い、霊力の流れを確認していると私のコンピューターに誰かがアクセスしてくる。

（お父さんです。心配しないで）

蛭さんがお父さんと呼ぶのはアシユタロスのことなのね。アスモデウスと協力する振りをして、向こうの陣営に潜り込む……そんな命懸けの任務なのに、私達に協力してくれている……。

(それを無駄にする訳には行かないのね)

アスモデウスもガープも狡猾だ、仲間だと言っても全面的に信頼するわけでは無い。アシュタロスがアスモデウス陣営にもぐりこみ、その情報をえるのは文字通り命懸けの事だ。そんな中、私達の支援をしてくれている……それを無駄にする訳にはいかない。

【死ねいッ!!】

刀に電撃ではなく、黒い霊力を乗せて振るってくるのを見て、私は思わず声を上げた。
「美神さんと蛍さんは耳を塞いでッ!!」

あれは死の魔力だ、高純度の呪詛は人間の命を一瞬で刈り取る。それを無造作に飛ばしてくる道真公に最早神としての格は存在していない。

「あ、あぶなあ……何今の……」

「し、死んだと思いましたよ」

「あれは高濃度の呪詛の塊なのね、逃げることに専念するのね!」

神魔にはあれは効かない、あれはあくまで美神さんと蛍さんを同時に殺すもの……美神さん達に逃げ回るように指示を出して、私は霊脈と霊力溜まりの位置を確認し、その2つを利用出来る位置を調べ上げる。

(見つけた!)

膝をつかせれば、アスモデウスと道真公は撤退する。それはアスモデウス自身が口に

し、自らに課した誓約……それを踏まえれば私達は勝利する必要は無い。文字通りアスモデウスと道真公の足元を掬う……それだけで勝てる。そしてそれに気付いて動き出した美神さんは実に生き生きとしていた。横島さん達の見本になろうと、清廉潔白……は言いすぎだけど、美神さんらしからぬ戦いをしていたが、このアイデアを思いつく辺りを見ればもう何も心配は無いだろう……。

(悪魔よりあくどいって言われてた美神さんが復活するのは怖いけど……絶対に必要になるのね)

アスモデウス達は前回のアシユタロスよりも遥かに慎重で、そして邪悪だ。そんな相手と互角に立ち回するには美神さんの頭脳が必要不可欠だ……敵に回すには厄介で、そして味方にしても厄介だけど……美神さんの存在はアスモデウス達と戦うには絶対に必要になる……。

くシズク (現代視点) く

千年前の私と清姫に道真公との戦いを任せ、私と清姫は美神の悪巧みに協力していた。

【邪魔をするなあッ!!】

(やはり決め手が足りない)

普通の神魔ならばもう倒せているが、やはり狂神石に影響を受けている神魔は厄介だと判断し、美神達の作戦通りに動きだす。

「ずいぶんとずるがしこいことを考えますわね」

「……私とすればそっちの方がらしいがな」

横島が真つ当……とは言い難いが、直接戦闘に秀でた成長をする度に美神は悩んでいた。その悩みのせいで本来の頭の回転が劣っていると私は感じていた。

「……美神は戦闘者ではない、あいつは盤面を見て戦場を作るゲームメイカーだ」

「なるほど、確かにその通りですわね」

美神の霊能者としての素質は道具使い。その反面、ヒーリングや霊視はやや苦手としている。それでも使いこなせないだけで、人並み以上には扱える。そして戦場の中で、冷酷な判断も取れ、相手の裏を欠く戦術にも秀でている。しかし普通の軍師ではなく、自らも戦場に立ち、戦場をかき乱し、ほんの一欠けらしかない勝利をもぎ取ろうとする。「なるほど、だから横島様から美神を引き離さない訳ですか……」

「……納得したか？」

「ええ、貴女らしい、陰湿でねちっこい考えとだけ言っておきますわ」

私は横島を取り囲む人間関係を見てきた、その中で横島にとって益のある人間はと考

えると不思議な事に美神が一番だと思うのだ。

(前世の縁か)

私は忘れていたが、確かに高島はメフィストと言う女魔族と繋がりがあった。そしてそれが遠い未来で師弟と言う関係で再び繋がった……これは何とも面白く、そして奇縁と言わざるを得ないだろう。

「……横島は単純だからな、そこを補う人材として美神が一番優秀だ」

霊脈の上に氷の杭を打ち込む、私の隣で清姫が同じく炎の杭を打ち込んだ。

「見ていて心配になりますね。でもそこが良いんですけどね……」

「……まあな、私もそう思う」

保護欲をかき立てると言うのか、横島の純粹さは見ていて心地いいものだし、横島から向けられる信頼も悪いものではない。高島の子孫とかそう言うのを関係無しに、もう私は横島に絆されている。

「……さっさと仕上げるぞ、横島を長時間戦わせるのは不安だ」

「言われなくても判ってますわ」

道真公に攻撃を繰り出し、目晦ましをしながら私と清姫、そして美神と蛭達は戦場を駆ける。

「どうしたどうした！防いでいるだけではつまらないぞ!!」

高島と横島が必死に攻撃を防ぎながら私達を見た。その目を見れば何を言いたいのかは判っている、この戦いは最初から勝つ必要は無い。アスモデウスが神として宣言した「膝をつけば退く」これは誓約であり、神言だ。神が口にした事は覆せない、だから私達は自分の発言には注意している。

「遊びと侮った事を後悔させてあげましょうか」

「……ああ、その通りだな」

一時しのぎだとしてもアスモデウスと道真公を撤退させれるのは大きな意味がある。予想にもしてない方法で、アスモデウスと道真公の足元を掬う……それだけが私達が全員無事で戻る為の手段なのだから……。

G S 芦笛外伝平安大魔境 その28へ続く

第29話

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その28

くアシユタロス視点く

魂の結晶を取り込んだメフィストが加わってもなお、道真公との戦いは蚩達が劣勢に追い込まれていた。その理由は明白、後期型の狂神石の力が大きいのだろう。

(やはりガーブの技術力は恐ろしい)

ライダーの技術を応用した狂神石によって鎧と武器を手にした道真公は恐ろしいほどに強い。ライダーレベルかと言うとそうでは無いが、元々持ち合わせている圧倒的な霊力と神通力が狂神石で強化されている。その攻撃力と防御力は段違いに高い……1000年前のシズク君と清姫君、そして現代の清姫君とシズク君が頑張っているがそれでもやや劣勢と言う所だろう。

「漸くここまで来たか、良いぞ。遊びはここまでにしておこうか」

「いやいや、もつと遊んでくれていいぜ？なあ？」

「遊びついでに膝をついてくれてもいいぜ？」

……いや、本当に横島君には驚かせられる。アスモデウス相手にあんな軽口を叩く相

手はいない、さらにそれが戦闘中となればなおの事。だが横島君と高島はあえて挑発とも取れる軽口を叩いた。

「はははははッ！良いとも、だが我をもつと楽しませたのならば考えてやらんでもないッ!!」

風を切る鋭い斧の一線を高島は跳んで、横島君はスライディングで避けると同時に足に蹴りを入れる。

「やっぱ駄目？」

「そんなので我が膝をつくかッ!!」

横島君を踏みつけようとするが、それを転がって回避する横島君に安堵した。今のアスモデウスはまだ遊んでいるが、それでも装備は本気物だ。踏みつけは勿論、剣や斧、勿論盾での一撃ですら人間にとつては致命傷になるだろう。それでも距離を取ればアスモデウスの炎と矢に貫かれる……リスクを背負って懐に飛び込んでもなお、アスモデウスは近接の方が遥かに強い。そんな相手にインファイトを挑む……それがどれだけの勇気と、精神を削る事を想像するのは容易い。

（頑張れ……）

私はもう表立ってそちらに協力する事は出来ない。こうしてアスモデウスの元に戻った以上私はあちら側の人間として振舞わなければならない、それなりの理由を作つ

て蛭は私の事を知らないと言う事でゴリ押し、そして人間界で活動を続けると言う立ち位置をもぎ取ったが、それでもそれなりの成果を示さなければ怪しまれる事になるだろう。

(ギリギリだ、ギリギリの綱渡りになる)

人間側、神魔側、そしてアスモデウス陣営の3つの陣営を渡り歩き、そしてそれぞれの情報を適度に流すというのはどの陣営からも追われることになると言う事に繋がるということとは覚悟している。

(……だがこれが私に出来る唯一の罪滅ぼしだ)

かつての世界で私のせいで横島君と蛭を引き裂いた。それを償うには、私も命を賭けなければならぬ。ガープの思惑に乗りつつ、そして横島君達を支援する方法は幾らでもある。

(負けるな、くじけるな)

神魔は確かに強い、だけど神魔には神魔であるからこそその縛りがある、不自由さがある。確かにそれを覆す狂神石もある——だがそれはあくまで少しだけルールを捻じ曲げるだけ、神魔であるが故の不自由さこそが生きている間は成長を続ける人間が神魔を唯一越える点だ。心が折れなければ、気持ちで負けなければ……その刃は神魔にだって届く、だから気持ちで負けるなど私は心の中で横島君達を応援し続けるのだった……。

「ガープ視点」

閉じていた目を開き、私はやれやれと肩を竦めた。

「アスモデウスの悪い癖が出たな、しようがない奴だ」

横島と横島の先祖である高島が変身した。それを見て興奮して、自分に不利な条件を背負ってまで戦うとは私にも想定外だった。

「いや、あれほどの戦いならば我とて戦いたいぞ。ガープ」

「そういうな、アスラ。お前はインドの神々に対しての切り札なのだからな」

不服そうに顔を歪めるアスラだが、戦力差を覆せているのはアスラの能力を物質化させた狂神石ありきだ。アスラに倒れられては私達も計画の変更をせざるを得ないのだからアスラを投入できるのは必ず勝てる不確定要素のない戦いになる。不確定要素の塊である横島達との戦いにはどうしてもアスラを投入できないのだ。

「あれは戦いとも呼べぬ、蹂躪だった」

「んふふふ、そうは言いますが拙僧はそれなりに楽しめましたよ」

「我は対等な戦いを望んでいるのだ」

神魔混成軍の武器開発所の襲撃を頼んだが、私が計画を進めている間に殲滅を終えて合流してくるとは私も想像していなかった。

「お前のところならばと思ったが、ここも戦いは無いのか」

「しようがなかるう？ 私の行動を確認されない為の陽動でもあったのだからな」

人間界の大まかな英霊の関係のある土地すべては神魔によつて既に制圧されている。英霊召喚には触媒が必要である、私が英霊召喚を実用段階に入れたと聞いてそれを利用してさせまいとじているの行動だが、実はそれは無意味に等しい。

「……ガープ……さ、ま……」

「どうぞ……おとおり……ください」

「ご苦労、では死ね」

死ねと呟くと同時に神魔の頭が弾け飛んだ。それを見て蘆屋は目を輝かせ、アスラは興味深そうに目を細め、レイは何も感じていないのか何も口にすることは無かった。

「なるほど、既に把握していると言うことか」

「その通り、警護は警護として意味を持たず、私達には快適なフリーパスなのだよ」

死んだ神魔を足蹴にし、私達は悠然と足を進める。

「態々ガープ様が動くという事は特別な英霊なのですか？」

「なに、神魔には従わぬ英霊がいるのでね。駄目押しに来たに過ぎない」

正直英霊を召喚すると言うだけでは既に目的は達成しているのだ。今回態々こうして足を運んだのは、簡単に言えば神魔への嫌がらせだ。後は英霊召喚の安定度を上げる

程度の触媒を手にするだけに過ぎない。

「すぐに戻るが、どうする？」

「……戦いが無いのなら戻る」

「私も特に面白みも無いですし、戻りますね」

「……帰る」

アスラ達が帰るのは当然。どうどうと歩き回り神魔を挑発し、触媒を奪って帰る。それだけの仕事に他の面子は必要ない、2度手間などせずに即座に基地に戻ればよかった物を……。

(アスモデウスの悪癖が出ているとなると、まだ面白い事がありそうだな)

月神軍の影響で横島は狂神石に手を出した。そうなれば私の計画は予定を越えて1つも2つも進んだと言える……ならば最後のダメ押しをアスモデウスに頼む事にしよう。

(高島の抹殺……これでどうなるのか楽しみだな)

横島がまだ辛うじて安定しているのは恐らく前世の高島の存在があるだろう。その高島が死んだ後に切っ掛けがあれば狂神石の力は活性化するかもしれない……それを見極めるのも悪くない。

「後は美神達が気付くかどうか……か」

もし気付かなければ、私の見込み違いだが……私と似たタイプの美神令子ならば、そして本来道真が持つはずの知力を奪って力を与えたその意味を人間達が気付くかどうかだ。アスモデウスの性格は判りきっている……自分が不利になる条件を人間へのハズレとして与えるのは想定内で、想定外では無いのだ。むしろ私の計画通りと言っても過言では無い、だってそうだろう？人間が神魔相手に真つ向から戦って勝てる訳が無い、そして横島が成長しきつていない段階で手に入れることも私の望む結果では無い。ほんの少し、ほんの少しだけ人間に勝利の目を与える。それが強者から弱者に対しての思いやりと言う物だ。

「さてと、これはいただいて行くよ。高い授業を払ったな、神魔よ」

安置されていた円卓の欠片を悠々と奪い去り、その場を後にする。勝手に私達を警戒して戦力分散してくれるのは良いが、このままではアスラとアスモデウスの不満が爆発しかねない。だからこそその今回の挑発——神魔が次はどんな一手を打って来るのかを考え、考えられる手全てを無意味にさせる事が可能であると言う結論を出し、監視カメラに悠々と手を振り、見せ付けるように円卓の欠片を見せてその場を後にするのだった……。

〈美神視点〉

シズクの純度100%の水によって道真公の雷攻撃は脅威では無くなった。そのタイミングで私と蛍ちゃんも道真公との戦闘に参戦する事になった。

【ぬっぐうッ！ ちょこぎいなッ!!】

正直言つて破魔札も、霊体ボウガンも殆ど効果は無いし、高島が用意してくれていた陰陽札も決して効果が高いものではない。だがそれでいい、それで良いのだ。

「……………うだな？」

「……………ああ。組み合わせを間違えるなよ、私」

道真公の攻撃はすべてにおいて雷が付与されている。それは雷神なのだから当然の事だ、それを純度100%の水の壁が防壁となり私達の間を作りだされればどうなるか？ 答えは簡単だ。

「あら、どうしたの？ 雷神道真公ともあろうお方の攻撃がこの程度？」

威力はそぎ落とされ、防御札で簡単に無効化出来るほどの弱い攻撃にまで弱体化する。

【舐めるなよ、人間がッ!!】

「あんまり人間を侮るからそうなるのよッ！」

出力を上げてシズク達の水の壁でも防御できないレベルの稲妻はメフィストが迎撃

私達に出来る戦術は出来る限り全てを打った……ヒヤクメも霊力溜まりと霊脈の流れを上手く引きこんでくれている。

圧倒的な戦力差は道真公の知らない未来の知識で埋めた。

相手の冷静さを奪って私達の流れに無理やりに引きこんだ。

罰当たりと言う事は覚悟して道真公への挑発も続けた。

自分の直感と霊力のささやきを信じて限りなく低い可能性だがそれにも賭けた。

そして逃げ回っているように見せて、こちら辺周辺に配置できる限りの罠も仕掛けた。

ちっぼけな人間が自分に出来る全てを振り絞り、そして相手の足元を掬う手段を考え、殆ど無いといっても過言では無い勝利を目指して、自分の知恵と相手が何時冷静になるかも知れないという恐怖の中自分に出来る全てを出し切った。

後は道真公が私達の思惑通りに動いてくれるか……すべてはそこに懸かっている。

(間違いなくかかる筈)

神魔である事を誇り、自分を見限った人間を、陥れた人間を憎んでいる道真公ならば……間違いなく私達の計画通りに動いてくれる。そう確信しているからこそ、私はこの一手に出た。正直に言えば、霊力溜まり、霊脈を利用したって私達じゃどう足掻いても道真公を単独で倒すなんて不可能だ……いや正しくはやってはいけない事だ。

(これが判っているからアスモデウスは道真公を手駒に選んだに違いない)

今は悪霊になっていても後に神社に祀られて、学問の神として、そして雷神として祀られる道真公を倒す訳には行かないのだ。つまり最初から私達は道真公を倒す事が出来ないという縛りを与えられている。勿論倒せるなんて思っていない……いや、シズクや清姫が手加減なしで攻撃すれば勝てる可能性はある……だがそれをすれば、歴史が大きく歪む。ガープの性悪さを考えれば道真公は最初から捨て駒、そして私達に倒させるという目的があつたと考えても無理は無い。つまり私達の勝利条件は最初からアスモデウスが設定した物から前提が間違っているのだ。

1 アスモデウスに膝をつかせる

2 道真公を正気に戻す

3 万が一、いや憶がいちにもありえないがアスモデウスの撃破。

私達に用意された生き残る術は最初から複数用意されていたと見て間違いない。つまり最初から謎解きパズルのような……そう、それこそ詰め将棋のような物だったと見て間違いない、そうでなければ知力が売りの道真公を暴走させるなんて言うことに意味なんてないからだ。

【己……神魔を侮った事を悔いるが良いッ!!】

怒りに身を任せ道真公が両手こちらに向ける。それはきつと本来の道真公ならば絶

対にやってこないであろう、最悪の一手。だけど、それこそガープによって私達に与えられた勝利への一手なのだ。

「ヒヤクメえッ!!!」

「判ってるのねッ!!!」

【なにいつ?】

道真公の霊力を霊脈に流し込み、霊脈の上に設置していた術が連鎖的に発動していく、だが私の打った一手はそれだけではない。

「横島君！高島あッ!!!」

その名を叫ぶ。道真公の霊力全て霊脈に流し込めば、どんな被害が出るかなんて想像するのも嫌だ。だから半分だけ、半分だけ霊脈に流し込み、術を強化するのに使う残りの半分はシズク達の水鏡によってアスモデウスに向かって跳ね返す。それが私の考えた私達が生き残る、唯一の手段だった……。

く横島視点く

美神さんが何かしていると言うことは判っていた。だから俺と高島は途中から美神さん達が道真公を倒すんじゃない、アスモデウスが美神さん達が何をしているのか、それに気付かせない方向で攻撃と防御を繰り返していた。

(さ、流石に少し厳しくなってきたな)

高島の言葉に俺は返事を返す気力も無かった。アスモデウスの攻撃は苛烈で、正直防ぐのも手一杯なのを自ら前に出れば精神的疲弊は半端では無い。

(横島言いにくいが……そろそろ限界が近い、気力を振り絞れっ！)

グレート魂をここまで使い続けたのは正直初めての事だ。いつまで変身を維持出来るかも不安になって来たその時……待ち望んでいた声が響いた。

「横島君！高島あッ!!」

「ぬっ、これはッ！」

美神さんの叫び声、そしてアスモデウスの困惑した声が響いたと思った瞬間。凄まじい轟音が周囲に響き渡った……。

「横島、お前の師匠最高だなッ!!」

【ゼンカイガンツ！ ジュウニシンショーツ!! オメガドライブツ!!】

「何言ってるんだよ、そんなの当たり前だッ!!」

【ダイカイガンツ！ グレイトツ!! オメガドライブツ!!】

俺達の攻撃を阻み続けていたアスモデウスの盾に稲妻が命中し、盾を構えて踏ん張っているアスモデウス目掛けて高島と共に跳んだ。

「いっけえええええええッ!!!」

約束通り道真公を連れて撤退したアスモデウス——もしかしたら約束を反故にされ
ると思っていたので約束通り撤退してくれた事に安堵した。ガープの仲間と聞いてい
たから負けを認めないかと思つたが、想像以上に気高い性格だったようだ。

【オヤスマミー】

同時に変身が解除され、その場に膝をついた。

「や、やばかったな……」

「そ、そうですね……でも何とかなつて良かったですよ」

だが問題の先送りに過ぎない、道真公もアスモデウスも健在……そしてまた会おうと
いつてアスモデウスは去つていた。確実に再びアスモデウスと戦う事になるだろう
……だけど今は何も考えたくない。俺と高島は体力、そして靈力の枯渇により美神さん
達が俺達の名を叫ぶ声を聞きながら、糸が切れた人形のようにその場に倒れこむのだっ
た……。

「……靈力の枯渇……あの姿はあそこまで靈力を使うのか」

「考えている暇があるのなら高島様を運びましょう」

高島は1000年前のシズクと清姫が運ぶ準備を始める。

「……高島よりはかましましたが、横島も危ない状況だな」

「早く運びましょう、美神達も異論は無いですね」

「異論なんてあるわけないわ、早く行きましょう」

そして美神達も横島を背負い、慌てて帝の屋敷へと引き返す、だが美神も蛍達も気付かなかつた蝙蝠が口に含んでいた小さな棘……それが横島の首筋に突き刺さり、身体の中に溶けるように消えていくのに誰も気付く事はないのだった……。

G S 芦蛍外伝平安大魔境 その29へ続く

その29

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その29

（美神視点）

アスモデウスと道真公から退いてくれたお陰で皆無事だが、次は確実に最後まで戦う事になるだろう。1度目は顔見せ、2回目は遊び、3回目は本気となるだろう。

「正直な所聞くけど……アスモデウスか道真公。どっちか倒せる？」

私達の最大戦力——「メフィスト」「シズク」「清姫」に尋ねる。大体なんと言われるか判っていても、淡い希望なら砕けてしまった方が良い。

「いや、無理。あたしの霊力とかも上がってるけど桁が1桁も2桁も違うよ。正直自殺行為」

「……日本がどうなっても良いなら可能」

「人も妖怪も、神も等しく滅びますが」

「止めて下さい、お願いします」

倒す手段があつたとしても、帰る場所が無くなるなんて冗談では無い。やっぱり判っていた事だけど今の私達の戦力ではアスモデウスを倒す事ができない……どう考えて

もその結論に帰着する。

「……お前達が未来から来たと言うのなら、上手くやってアスモデウスを退けるのは無いのか？」

「普通に考えたらそうなんだけど……こつちには横島君がいるからね」

「横島がいると何か不味いのかい？」

メフィストの問いかけに頷く、普通ならば未来と言うのは過去が在る段階定まっている。だから大丈夫と考えるのが普通だ、なんせ未来から来た私達が居るのだ。未来はこの後も存続していると考えるのは当たり前だ。

「前に過去の西洋に跳んだ事があるんだけど……その時の行動で未来が変わったわ」

「そんなことがありますの？」

「普通はありえないわよね……だけどガーブ達と言うには横島君は特異点……過去を書き換える事が出来る楔らしいの、つまりもう未来は変わっている可能性は十分にあるわ」

高島が変身している段階でまずおかしいのだ。確実に横島君に影響を受けている……この段階で横島君の特異点としての力は間違いないと発揮され始めている。

(……どこから書き換わっているのかも判らないのよ)

帝が横島君を気に入っただのは確実に横島君の影響だ。ではその後は？

なよ竹のかぐや姫の物語でかぐや姫と藤原の姫が一緒に逃げたなんて話は聞かない、それ所か藤原の姫が葉を盗んだという話だった筈。

それに陰陽寮が壊滅したなんて話も聞かないし、鬼道が狂神石によって失脚したなんて言うのも聞かない。

それに何よりも、まだ私達の前に「シズク」が居る。

「……何か？」

「ううん。なんでもない」

高島が処刑される前にシズクは高島によつて封印されている筈……これはシズクからも聞いていたので確実な話だ。

(いつ高島は処刑されるの?)

別に高島が処刑される事を望んでいるわけではない。だが今の流れではどう考えても高島が処刑されるという流れにはならない、高島の処刑の理由は藤原の姫に手を出したから……だけどその藤原の姫は横島君に懐いて、かぐや姫との友好を結んだ……。

(もう歴史は変わり始めている……)

私達の知る平安時代の大きな事件が既に変わっている……。つまり歴史の改変はもう始まってしまっていると考えると考えて間違いないだろう。

「つまり横島がいるから歴史が書き換えられてるって事？」

「多分ね……だから私達が未来から来たって言っても、無事に戻れる保障は何処にもないのよ……」

過去はもう書き換えられて現在になりつつある……つまりもう私達が無事に未来に帰れる保証も無く、全員揃って……うん、それこそ5体満足でいられるという保証も無くなってしまったのだ……。

（蛍視点）

眠っている横島の額に乗せていたタオルを手に取るとまるでお湯に浸していたように熱い。冷たい井戸水の中に浸して、良く絞ってから額に乗せるけど、多分またすぐに熱くなる事は容易に想像出来た。

「蛍。井戸水を汲んできたぞ」

「うん、ありがとう。茨木」

「べ、別に礼を言われるほどでは無いが……吾も横島が心配なのだ」

私の向かい側に座り、荒い呼吸をしている横島を心配そうに見つめている茨木の姿を見ているととても悪鬼として恐れられた茨木童子には見えず、外見相応の幼い少女にか見えなかった。

「ノブウー」

「大丈夫、横島は強いからな」

チビノブ達とも仲が良いみたいだし……私達と合流する前にどれだけ横島が茨木の世話をしていたのかが良く判る。チビ達が懐くという事がまず珍しいのだ、チビ達の中ではもしかすると茨木は自分達の仲間と言う認識なのかもしれないわね。

「茨木はどうするの？」

「どうするとは？」

「私達は未来……今日からずーっと明日の未来から来たの。私達が帰るとなったら……茨木はどうする？」

私の問いかけに茨木はうーんつと腕を組んで悩む素振りを見せた。

「ずっと明日と言われても吾には全然想像がつかん……だけど、横島と離れるのは嫌だな。横島の側は心地よい」

鋭い歯をむき出しにして笑う茨木。今の所は悩んでいると言うか良く判ってない感じだと思うけど……多分もう会えなくなるとなると絶対ついてくるわね。

「みみーむうー？」

「ぶぎいー！」

「ほほう、そんな美味しい物があるなら吾も未来とやらに行くのもいいかも知れんなあ」

……チビ達は完全に仲間と言うか同類って認識みたいね。判らないと言う茨木を説得しているし……後は未来に帰った後が問題よね。

(琉璃さんの心労がマツハね)

鬼の首魁が2人も横島の家に転がり込んだと聞いたら、それこそ琉璃さんが心労で血を吐きそうな未来しか想像出来ない。それに京都で出会った紫ちゃんも確実に横島に懐いているし……また横島の周りに人外が増えると知ったら琉璃さんがどんな反応をするかなと思わず苦笑する。

(……)うでも考えてないと駄目なのよね)

美神さんに聞いたが、もう私達が無事に未来に帰れる保障は何処にもない。アスモデウスにも道真公にも敗れて、ここで死んでしまう可能性だって十分にあるのだ。その不安を忘れるように帰れた時のことを考えてないと、不安で押しつぶされてしまいそうだった。

(蓮華や揚羽になんて説明しよう、お父さんも自分で何か考えているのかな)

アスモデウスと協力して今回は動いていた。それはガーブ達が本格的に動き出すから内部にもぐりこんで情報収集をしようとしているのだと思うんだけど……余りにもリスクが高い。蓮華はまだしも、揚羽に逆行の記憶が無いので何でお父さんが居ないと泣き出したらどうしようとか、自分でもどうすればいいのか判らず混乱していると障

子がゆっくりと開いた。

「お邪魔するのねー」

「ヒヤクメ……待ってたわ」

高島の様子を見ていたヒヤクメが戻って来て、思わず安堵の溜め息を吐いた。グレイト眼魂は横島への負担が大きい、それなのにアスモデウスと戦うのに相当長い時間変身していた。その反動が出て、横島が昏睡状態なのは明らかだ。ヒヤクメに今の状態を聞いて、どうなるのか聞かないと正直気が気じゃなかった。

「……うん、大丈夫なのね。霊力が枯渇している訳でもない、単純に短時間で一気に霊力を使い過ぎたのね」

霊力の枯渇ではなく、一気に霊力を消費しての霊力の回復の為の睡眠と聞いて本当に安心した。

「じゃあ心眼が姿を見せないのは……」

「霊力の譲渡をしているのね、心眼は高密度の神通力と竜気の結晶体だから普通に寝て回復するよりも早く回復すると思うのね」

心眼も姿を見せないから魂に何か影響があったのかと心配していたので、そうじゃなくて良かったと心底安堵した。

「目の神よ、では横島は寝ていれば回復するのか？」

「そうなのね、多分早くて今日の夜、遅くて明日の朝まで寝ていれば回復すると思うのね」

具体的な横島が目覚めるまでの時間も聞いて、漸く私も気を抜く事が出来た。

「シズクと清姫は？」

「2人には協力して貰ってるのね、最悪の場合に備えてるの」

最上級に龍神2人に協力して貰うような事となれば、それは1つしかない。アスモデウス対策だろう……。

「何か策があるの？」

「……一か八かのギャンブルになるけど……私達とアスモデウス達をシズクさん達の霊力と神通力、そして平安京の霊脈を使って未来へ跳ぶのね」

「美神さんへの負担は？」

それほどの負担が掛かる美神さんの事を考えれば、私としてはその作戦には反対だ。どうなるかなんていうのは私にも判っていて、美神さんへの負担を尋ねるとヒヤクメは明らかに目を逸らした。

「相当大きいのね……でも私達にはそれしか今は打つ手がないのね」

最上級の神魔と戦うには準備も仲間も足りない……そして助かるかもしれない術は美神さんを再起不能にするかもしれない方法しか残っていない……修行をして力をつ

けたつもりでも、結局私に出来る事は殆どなくて……。

「嫌になっちゃうわ……目の前にある壁が大きすぎるんだもの……」

修行して、頑張つてやっと目の前にある壁を乗り越えたと思つたら、それよりも大きな壁がすぐに立ち塞がる。それは私の努力も何もかも無意味だと言われている気がして、私は深く溜め息を吐くのだった……。

くメフィスト視点く

アスモデウスと道真公への対策を話し合った後。あたしは高島の部屋に居た、タオルを引きちぎらないように気をつけて絞り、高島の額に乗せる。

(……不思議な縁だよね)

誰を助けたいと言うのは忘れて、どうしても思い出せないし、あたし自身の創造主の事も思い出せない。それでも助けたいと思つたのは本当の事だし、人間じゃないのに助けてと言つて助けてくれた高島の事を考えると胸の真ん中が暖かくなるような気がする。

「……ん、んん……め、メフィスト？」

「あ、起きた？大丈夫？」

ゆつくりと目を開けた高島に大丈夫か？と尋ねると高島は腕で目を隠して小さく溜め息を吐いた。

「めちやくちやしんどい、前と全然違う」

「そう……水でも飲む？」

「……貰う」

前と言うと多分横島が暴走している時の話だろう。高島を抱き起こして、水の入った竹の入れ物を差し出す。

「ありがとう、もういいよ」

「ん、判った」

高島をもう一度布団に横にさせる。シズクからこうすればいい、ああすればいいと聞いておいて本当に良かったと思う。あたしだけじゃ、どうすればいいかなんて全然判らなかつたしね。

「そう言えばさ、お前は悪魔なんだよな。悪魔って契約をするって美神に聞いたんだけどそこはどうなんだ？」

「……まあ、一応そうだけど……今はそれ所じゃないでしょ？」

美神……あたしが人間に生まれ変わった存在で、そして高島が生まれ変わった横島……正直それを見てあたしは嬉しかった。人と悪魔の寿命は違う……だからあたしは

高島が死んだ後も生きなければいけない。

(記憶がなくてもまた会える)

それが判ればあたしは大丈夫。どれだけ時間が掛かってもまた会えると思っていれば、心が砕けることは無いのだ。

「いや、今だからお前と契約したい」

真剣な顔で言う高島を見て、凄く嫌な予感がした。

「どこが悪いの?」

「いや、そう言う訳じゃない。俺ってさ、忘れっぽいから思いついた時に契約したいんだよ」

誤魔化すように言う高島に何かを感じ取ったのかもしれない、本当ならばそんな状態での契約なんてしたくない……だけど。

「良いよ。高島……お前はあたしに何を望む?」

悪魔と契約するという事は魂に刻まれた契約だ。それを覆す事は出来ない、永久に続く永遠の契りだ。魔力を解放しながら高島に何を望むのかとあたしも神妙な顔をして問いかけると高島はにっこりと歯を見せて望みを口にした。

「……生まれ変わってもまた会おう……約束だ」

高島の言葉にあたしは目を見開いて、そして笑った。確かにこれは大切な契約だと

思った……死ぬと思つて生きる者は居ない、だけど、万が一と言うこともある。

「ん」

「何？」

高島が小指を向けてくるが何を言いたいのかわからず何か？と尋ねると高島が子供のよな顔で笑う。

「今度は俺との約束だ、こうやって小指同士を結んでだな。指きりげんまん、嘘ついたら針千本飲ますつて言う約束さ」

「何それ、随分とおっかない約束の仕方じゃない？」

「嫌か？」

「ふふ、別にいいよ」

高島が横になる部屋で高島とメフィストが小指を絡ませあい、子供のように弾んだ声で、そして楽しそうに指きりげんまんと歌う声が、夕暮れの光が差し込む部屋の中に響いているのだった……。

くアスモデウス視点く

『随分とやられたみたいだな、アスモデウス』

「ああ、少しばかり油断していた」

からかうような口調のガープに苦笑しながら返事を返す、我自身横島を侮っていた訳では無いが……あの男、想定以上に底が知れない。

『その有様では、無理は利かないな。道真公を使って戦え、状況が悪ければ離脱しろ』
「……仕方ないな」

今度は最後まで戦おうと言い残したが、蹴りを叩き込まれた胸は肋骨がへし折れ、呼吸するのも辛い。こんな有様では戦い所では無いので、最後の戦いは見ているだけで終わりそうなのが心残りだ。

『そう残念そうな顔をするな。ここからが始まりだ』

「……判っている」

人間の底力と可能性の2つを見た。横島をガープが気に掛ける理由も判った……これだけでも十分な収穫と言える。

『お前達の動きで現代の様子が変わり始めている。やはり横島は特異点だと確信した、これで平安時代での仕事も終わりと言っても良い、

後は……横島にもう少し楔を打ち込んでおいて欲しい』

「やれやれ、お前は回りくどい手が好きだな」

『悪いか?』

「悪いと思っていないんだらう？なら、それは間違つては居ないんだらうよ」

ガープの回りくどいが悪辣な、時限装置のような幾重にも張り巡らされた策が数で劣り、敗走に追い込まれた我達を何度も救つてきた。だからその事を悪いとも言わないし、その事にも反対しない。

集団戦術に秀でた我と、相手が嫌がることを、数の利を引つくり返す戦術をガープが考える事で神魔混成軍を出し抜いてきたのだ。今さらガープの謀略に反対する訳がない。

『それは結構。ではアスモデウス、悪いんだが横島にもう少し狂神石を投与してくれ。それで平安時代での仕事は終わりだ』

「やれやれ簡単に言つてくれる」

横島の周りの警戒は桁違いに強固だ。それを出し抜いて、狂神石を投与しろと言うガープに流石のアスモデウスも苦言を言う。

『大丈夫だ。しっかりと計画は練っている。後はお前がその通りに動いてくれればいい』

「判つた判つた。ではその計画とやらを聞くとしようか」

負傷して思うように動けないアスモデウスに入れ知恵をするガープ——平安時代での最後の戦いは武闘派のアスモデウスでは無い、悪辣で陰湿な一手を打つガープの謀略

その30

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その30

（蚩視点）

横島はヒヤクメの診察通り、翌朝目を覚ましてくれた。正直霊力が枯渇している筈だから、最後の戦いには参加出来ないと私も美神さんも考えていた。だがそれは私達が横島が起きたと知った時に簡単に覆されてしまった。

「つとと、ふふ、横島様。調子が良さそうですね？」

「おお、寝たのが良かったのかなあ……バリバリ元気ツ！」

庭で清姫と霊力の循環をさせながら組み手をしている横島に私も美神さんも驚きに目を見開いた。そして縁側に腰掛けているシズクも目を細めて、信じられ無いと言う顔をして、清姫と横島を見ていた。

「ちよつとどういうこと？大丈夫なの？」

横島に聞かせるわけにはいかないと判断したのか、美神さんが小声で尋ねる。

「……横島の霊力の許容量が凄まじい勢いで跳ね上がっている」

【……恐らく狂神石の影響だ】

シズクの膝元から心眼がそう告げた。狂神石の影響と聞いて、私も美神さんも思わず眉を細めた。

【靈力の最大値が今は上がっているだけだが……警戒は緩めれないな】

「そうね……心眼。横島君をお願いね」

判っていること返事を返す心眼を見ながら縁側に腰掛ける。

(……早い、私なら押し潰されている)

清姫は外見こそ可憐な少女だが、その実日本を焼き野原に出来るほどの竜気を持つ龍神だ。そんな龍神と靈力を巡回させる組み手が出来るとは思えない。

「もしかしてヒヤクメと協力してるのが関係している？」

昨日ヒヤクメが言っていた事を思い出して、それで竜気が低下してるから靈力組み手をしているのか？と尋ねるとシズクは首を左右に振った。

「……私達の靈力も神通力も既に回復してる、横島はベストな状態の清姫と靈力組み手をしている。小竜姫ほど、竜気のコントロールが上手くない清姫とな……」

その話を聞いて私も美神さんも改めて信じられないと思うのと同時に、横島の伸び代の凄まじさを知った。私達が1つずつ成長しているのに対して、横島は一足飛びで凄まじい勢いで成長している。経験と知識の差で今はまだ私達の方が上だけど、横島が私達

を追い抜くのも時間の問題かもしれない。

「はい、お疲れ様でした」

「ありがとな。清姫ちゃん」

「いえいえ、私も楽しかったですよ」

しつとりと汗を浮かべている清姫と、けろりとしている横島。その姿を見ると龍神よりも霊力が多くなっているのかと正直怖くなってくる。

(多分あれじゃないかしら。竜気のコントロールの問題)

(……そうだといいですね。本当に)

(ええ……そうね)

清姫が竜気のコントロールが下手だから、横島にダメージを与えない為に慎重にコントロールしていて、その影響で清姫が息を切らしている。私も美神さんもそうであつて欲しいと思つた、それは横島が自分達よりも強くなる事を恐れたのでは無い。龍族で神族の清姫を上回るほどの霊力を発揮する……それは危惧していた「魔人化」をどうしても思い出させたからだ。今まで現れたどの魔人にも未熟な同胞と呼ばれていた横島が本当に「魔人」になつてしまうかもしれないと思うのが恐ろしかったからだ。

「悪い、全員。大広間に集まってくれ、今……道真公からの使いが来た」

今まで見たことがないほどに真剣な顔をしている高島の声に、平安時代での最後の戦

いともうすぐ側に迫っていると悟り、私達は縁側から立ち上がり、大広間へと足を向けるのだった……。

く美神視点く

大広間には帝、躑躅院、幸華、西郷さんを始めとして、鬼道の失脚後勢いを失った陰陽寮、そして平安京の重鎮や、霊能者のトップが集まっていた。そして全員が全員この世の終わりだと言わんばかりの青い顔をしていた。

「良く来てくれた、今から道真公からの使いの言葉を改めて告げる」

帝が手にしていた書状を広げると空中にアスモデウスと道真公の姿が映し出された。

『人間達よ、我はお前達の戦いを存分に楽しんだ。英霊長尾景虎、英霊源頼光、そして酒呑童子を下し、そして我と道真公を相手にして全員が生き残った。その強さに我は素直に驚き、そして賞賛したい。人間も神魔に牙を剥くほどに力をつけたのだと、その傲慢にして不遜の』

心構えを我は賞賛しよう』

……何が賞賛だ。思いつきり挑発してくれているじゃない……アスモデウスはガープと違って武人氣質だと思っていたけど、やっぱり最上級神魔。その言葉の節々に人間

を見下している響きが隠されている。

『我に膝をつけさせた横島忠夫、高島忠助に至っては今一度戦い。その首を奪ってやろうとも思ったが、我はこの様。しかれば再戦の時はまたいざれとしよう』

胸元を肌蹴させたアスモデウスの胸板には2つの足跡がくつきりと刻まれていた。あの跡の深さから見れば、間違いなく肋骨を損傷している。神魔の回復力は人間を越えているが、変身していたのが効いていたのか回復が阻害されているのかもしれない。

『故に神魔としてここに宣言しよう。本日正午……道真と人間達の決闘を申し出る。これで道真が敗れば我は今回の戦で敗北を認め下がるう、そして神魔として誓う、この戦いに「我」は決して関与しない』

映像でも判る、アスモデウスは今ここに神魔として、道真公との戦いに関与せず、道真公が敗れば撤退する事を神魔として誓ったのだ。

『では本日正午までに返答を待つ』

その言葉を最後にして書状は再び折り畳まれ、帝の手に収まった。

「この件に関しては私の一存で承諾した。道真公を調伏すれば、神魔が下がるというのならば、この取引は受けざるをえない」

英断ではある。負傷しているとは言えアスモデウスは最上級神魔——人間を殺すには十分に力を持っている。最初から私達にはアスモデウスの申し出を受け入れるしか

道は無かったのだ。

「都からの避難を始めている。高島、西郷。お前達のみ残り、美神達へと協力せよ」

「御意ツ!!」

「そう言う訳だ。私達に戦力は殆ど無い、お前達に全てを任せる事を許せ。生き残れば、京にある物は全て持ち去つても構わない。よろしく頼むぞ」

完全に逃げ道を断たれているが、どつちにせよ。私達はアスモデウスを倒さなければ生き残る術などないし、これから道真公クラスの悪霊や神魔と戦う事もざらになるだろう。それならば、ここで経験を積んでおく事も悪くない。

「必ずや、成し遂げます」

「うむ、頼んだぞ。では我らも京より逃げる。更地にしてくれないも構わんぞ、どうせ建て直すからな」

からかうように笑う帝を先頭に広間を出て行く人間を見送ると、大広間が一気にがらんとする。

「じゃあ、正午までに作戦を決めよう。倒すのは道真公だ、確かに道真公は強いが……勝てない相手じゃない」

「そうね。前ので戦い方のコツは掴んだわ」

シズク達に純水を精製してもらい、それを盾にして道真公の雷を防ぐ。これが一番確

実でそして堅実な戦い方になるだろう。

「しかし、1度通用しなかったのだ。相手が対策を立ててくるのでは無いか？」

「それは勿論あると思うわ。刀や弓矢も扱っているしね……でも最大の攻撃パターンを防げるっただけで安心感は全然違うわ」

パターン？ 西郷と高島には通じていないけど、蛍ちゃん達が判っていてくれれば良い。

「狂神石で根本的な能力が上がっていても、相手は雷神。雷を扱う事が存在意義みたいなところはあるわ」

通用しないと判っていても、神魔として、雷神として雷を使わないわけにはいかないのだ。そこを否定してしまえば、道真公の神としての格に関わってくるからだ。

「……なるほど、神魔であるからこそその不自由さをつくか、悪辣だな」

「……このずる賢さがあるから、神魔と戦って生き残ってきたんだよ」

同じ声なのに馬鹿にする声と褒めている声があるから正直困惑するわね……でも正直、そういう所を突かなければ私達が道真公に勝てる勝率は殆ど0に等しいと言っても良い。ほんの僅かな勝率を工夫と罫で埋める事で、私達はやっと神魔と互角に戦うことが出来るのだから。

「ヒヤクメは霊脈の流れのコントロールと結界の構築をお願いね」

「OKなのね。私にどーんツと任せるのね」

「頼りにしてるわよ、横島君。金時の様子は？」

【俺ツチなら問題ないぜ、戦える】

「だ、そうです」

「OK、良かったわ。今回の道真公との戦いの主軸は金時をメインにするわ、横島君と高島は極力変身しない方向で行きましょう」

相手の最大の攻撃さえ防げると判っているのだ。それならばリスクを背負う必要は無い、もっとも安全策で、そして堅実に理詰めに関戦を進める為に私は正午までの時間を徹底して作戦会議に費やしたのだが……それらが全て裏目に出るとはこの時の私は思いもしないのだった……。

く西郷視点く

京を守る為に戦う事に私には何のためらいも恐怖も無かった。その為の力であり、そして研磨し続けてきた術である。京を守るために死ぬのなら、本望とさえ思っていた。

「では約束通り、道真とお前達の決闘を始めよう。我はお前達の戦いには介入しない、道

「道真公！貴方は神魔なんでしょう！操られていて恥ずかしくないのッ！」

「学問の神！そして雷神なのでしようッ!!」

「負けるなッ！自分を取り戻せッ!!」

狂神石と言っても完全に神魔を支配出来る訳では無い。封じられた自我を取り戻せば、道真公ほどに高位の神魔ならば狂神石の呪縛を跳ね除ける可能性もあるのだ。僅かでも邪気を逸らせば、僅かでも隙が生まれる可能性は十分にある。

【ちつと痛い歯を食いしばってくれよなあッ!!】

「行くわよッ！ 道真ッ！」

英霊坂田金時とメフィストの攻撃に道真公の身体が吹き飛び、鎧が碎けるのが見える。

「せい、やつ！はっ!!」

「燃えなさい」

薙刀と炎を打ち出し、道真公を追詰める1000年後の清姫様と清姫様。確かに道真公は強い、だが頭数が多ければ得手、不得手を組み合わせて強大な敵を打ち倒す事も出来る。協力し合う事……それこそが人間の強みであり、そして最大の武器なのである。

「いい加減、正気に戻れッ！この馬鹿ッ!!」

「いつけえッ!!」

美神達の打ち込んだ矢が道真公の胸部を撃ち抜いた。それは致命傷には程遠い一撃だがそこを最初から狙っていて、私達の攻撃は全てこの一瞬の為の物だった。

「が、がががきがあがえあげあばあー……ッ!？」

言葉にならない叫び声をあげて道真公が暴れ回るのを見て、後ろに控えていたヒヤクメ様に視線を向けた。

「やったのね!そこが狂神石が溜まっている場所だったのね!」

狂神石はその名の通り、石を連想するかもしれないが液状の物質である。液体としてどこかの蓄積している可能性が高く、そしてそれが道真公の場合は右胸に狂神石が集中しているそこを打ち抜けば、狂神石が身体の外に出て、道真公が正気に戻る。もしくは行動不能になる可能性が高い、それが私達が道真公へ勝利する為の唯一の道しるべだった。

「よっしやあ!これで……」

パンつと言う乾いた音が響いたと思った瞬間。高島の頭が吹き飛んだ……目の前で起きた光景が私には受け入れられなかった。

「……た……高島?」

思わずその名を呼んで倒れた身体を抱き起こす……額の中心が打ち抜かれていて、血液と脳髓が溢れている。即死だった……誰がどう見ても即死だった。

「高島がどうし……高島あッ!!」

「……貴様ッ!お前は戦いに関与しないのではなかったのかッ!!」

メフィストの叫び声とシズク様の怒声がやけに遠くに聞こえた。目の前にいた、今まで一緒に戦っていた……それなのに私は何も出来なかった。目の前で高島が死んだのを見ている事しか出来なかった。

「嘘は言っていない、我はこの戦いには関与しない。それに嘘偽りは無い」

【だが、私は違う。私は関与させてもらうぞ、美神令子、芦菫】

アスモデウスの肩の上から飛び立った蝙蝠から発せられた嘲笑う声……全て、そう最初から全てがガーブの手中だったのだと今気付いた。

「うっ、うあああああああー……ッ!!!!」

「横島君ッ!」

「横島あッ!」

【ギギイッ!?!】

横島の苦悶の声に振り返ると、空中から急に浮かび上がったかのような金色の蝙蝠がその首筋に噛み付いていた。それを見て美神達が駆け寄り、首筋に噛み付いていた蝙蝠を振り払うが横島の目は開いていて、呼吸が浅い……確実に致命傷だ。地面に叩きつけられた蝙蝠の口から溢れている血液を見て、私はそれを悟ってしまった。

「最初から横島君が狙いだっただのね！」

【当たり前だろう？ 特異点の力を得たいのは何も人間だけではない、神魔とてその力が欲しい。まあ……私の狙いはそれでは無いがね。立ち上がれ、横島】

蝙蝠から発せられる言葉に反応するように横島の身体が跳ね起き、凄まじい勢いでこつちに向かってきた。

「ぐっ!？」

回し蹴りを喰らい高島の遺体から引き離される。だがすぐに体勢を立て直し、横島を見ると高島の着物の中から巨大な球体を取り出しているのが見えた。

「我は約束通り、手を出さぬ。契約としてそれは変わらぬ」

【だから私が動く、喜ぶが良い。我らはもう手を出さぬさ。道真も倒れた所だしな】

道真公が動き止めて地面に横たわっているが喜べる訳が無い。道真公に変わる敵が……味方だった筈の横島がその目を真紅に輝かせてこちらを睨んでいるのだから……。

【ああ、そうだ逃げられるのは詰まらん】

金色の蝙蝠の身体が弾けたと思った瞬間。今まで私達の味方をしてきていたヒヤクメ様が作った魔法陣が牙を剥いた……まさかこれはッ!?

「わ、私の術式を乗っ取ったのね!？」

【何を驚く、貴様程度の術式を奪う事など訳は無い。見届けてから消えろ、美神令子】

乾いた音を立てて、美神とメフィストの身体が結界の中に閉じ込めれた。

「アーイー！ユガンデミナーツッ！ユガンデミナーツッ！！」

そしてそれと同時に響く、聞いているだけで寒気と恐怖を誘う不気味な歌声。横島の周りを13のパーカーが踊っているのが見える、それを見た瞬間咄嗟に陰陽札を投げつけたが……それは横島に当たる前に消し炭になって消えた。

「なんとという霊力だ!? 桁が違う!」

道真公ですら当たる前に無力化するなんて真似は出来なかった。だが横島はそれを平然とやってのけた……それは今の横島の霊力が道真公を越えていると言う事を現していた。

「蛭ちゃん！私は良いから横島君の変身を阻止しなさいッ!」

「美神さん……でも!」

「……ちいつ!!」

高島の死、横島の洗脳、そして美神達が結界による封印……私達が勝利の為に準備した全てが無碍になった。最初から道真公は捨て駒だったのだ……それを倒せば終わる、神魔が己の名を使った契約をしたから大丈夫と思った……それら全てが罨であったなんて、誰も予想など出来る訳が無い。

「……変……ッ!身ッ!!」

その31

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その31

〔蚩視点〕

絶望と言うのはこういう事を言うのかも知れない……どこか他人事のように私はそう考えていた。道真公は確かに倒す事が出来た……だけどまさかその瞬間にガープが出て来て、高島を殺害して、横島に狂神石を再投与するなんて思ってもみなかった。

(いえ、その可能性は考えられた筈だわ)

今までもガープはこちらが勝利を確信した時、あるいは隙を見せた時に現れていた。道真公を倒しかけた時に私達は確かに気を緩めていた……それは前回のアスモデウスとの戦いの中で約束通りにアスモデウスが撤退した事から今回もそうだと思っていた。

「……………」

「……………、なにを……………」

私を呼ぶ声があるが、それもはつきりと聞こえない。目の前の現実……高島が死に、美神さんとメフィストが転移させられ、横島が再び暴走している。しかもアスモデウスにダメージを与える事が出来るほどに強力な12神将魂で暴走してしまっていると言

うこと……どう考えても希望なんて無い。考えても考えても自分が死ぬという結末にしか辿り着けず、私の思考は完全に停止してしまっていた。

【がアツ!!】

「き、金時?!」

目の前で響いた金時の苦悶の声に我に帰った。目の前で金時が歯を食いしばり、シエイドが片手で振るった斧を黄金喰の柄を両手で握り締めて受け止めている姿が目の前に飛び込んできた。

「……蛍ッ！何をしてるこの馬鹿ッ!!」

「つつうー!」

シズクに頬を張られてその痛みと怒声に止まっていた思考が再び動き始める。

「シヤアアアアアッ!!」

【!?!】

清姫の吐いた炎から逃れるように飛び退いたシエイド。それと同時に金時が荒い呼吸を整えながら、その場に膝をついた。

【うつし……正気に戻ったな。近かったから当てられてたんだらうな、大丈夫か?】

「吾が呼んでも反応が無かったのだぞ、大丈夫か?」

当てられていた……? シズクと清姫を見ると2人も小さく頷いた。

「……あれだけの魔力だ、当てられるのも判るが気をしつかり持て」

「私達の誰かが死ねば、横島様は発狂したまま戻れなくなりますわよ」

清姫の言う通りだろう、横島の性格からすれば私達の誰か1人でも殺す、いや大怪我を負わせたならその事に責任を感じ、思いつめてしまいうだろう。それに……ちらりと屋敷の前に視線を向ける、へたり込んでいる1000年前のシズクと清姫、そして西郷さんの中央で倒れている高島の姿を見て、私は思わず俯いた。

(メフィスト……それに1000年前のシズク達の事を思うと心が痛い……)

脳を吹き飛ばされて死んでいる高島、もう神魔であつても生き返らせることは出来ない。歴史を変えた事で高島の死を回避できるかもしれない……そんな風に考えていたけど、そんな上手い話は無かった。高島は死んだ……もう私達に高島を救う事は出来ないけれど、それでもその遺体がこれ以上傷つかないように……この戦いを何とか切り抜けて、高島を埋葬するのを手伝いたいと思った。その為に横島の心を傷つけず、何とかして変身を解除させるしかない。

「……ライダーを相手に怪我もしない、死にもしないとか厳しいにも程があるわね」

「……でもやるしかない」

「横島様を取り返しますわ」

高島の死にシズク達だって、少ないショックを受けているだろう。それでも私達を手

伝ってくれると、横島を救い出してくれると言う2人には感謝しかない。

【はっ、良いね。男の俺ツチがこんなことじゃあ立ち止まれないわなあッ!!】

「行くぞ、金の字ッ!!」

【おうよッ!!】

茨木童子と金時が同時に地面を蹴りシエイドへと飛び掛る。私は指の間に精霊石と境界札を手にし、金時達の支援に入る事を選択した。悔しいけれど、私ではシエイドと1秒だつてまともにも打ち合えない。打ち合つた瞬間にその瞬間に身体ごと両断されるだろう……正面から戦えないのなら、私に出来る最善の戦いをするしかない。逃げ回る、相手の視界に入らないというみつももない戦いだとしても、それが今の私に出来る戦いなのだから……

くアスモデウス視点く

狂神石で暴走した横島を相手によく戦うと我は正直感心していた。12神将魂とか言っていたが、あれは最上級とまでは言わないが、それでも上級神魔に匹敵する神通力と霊力を発揮している。通常の英霊と人間ならば、分も耐える事も出来ず殺されている

筈だが、蛭達は正直良く耐えていた。

【なかなか粘るな、想定外だ】

「お前は想定外でも、我にとつては想定内だ」

ガープはまだその目で12神将を見ていなかったからスペックなどで計算をしていただろうが、戦いと言うのはスペックや霊力量で決まるものではない。戦での駆け引き、そして戦略眼、戦術を分析する頭脳で決まる。

「今の横島ならば、苦もなく我ならば倒せる」

【そんなに弱体化しているか？】

「話にならないな」

狂神石で霊力などの総容量が上がっていったとしてもその戦いは獣その物だ。獣が恐ろしいのは瞬発力と闘争心だけ、そこに戦略や戦術が加わらなければ、脅威とは足りない。ない。

【ツ!!】

【つがあツ!!】

坂田金時が獣のような声をあげ、渾身の力を込めてシエイドの一撃を防いでいるが、まだに五体満足だ。これには正直言つて落胆……いや、もしかすると狂神石に横島が抗っていると考えれば、ガープにとつては面白い事なのかもしれない。我にとつては暇

以外の何者でもないがな……。

【そう落胆するな、アスモデウス。お前に客人だぞ】

「そのようだな」

視線を向けると屋根を砕きながら、凄まじい憎悪をその瞳に宿している1000年前の龍神2人の姿がある。

「……殺してやるッ！」

「ふーッ！ふーっ！」

流石日本と言う辺境の地でありながら邪龍の中でも上から数えた方が早いシズクと、竜神王の孫娘……肌突き刺すような殺気が心地いい。ゆつくりと立ち上がると、ガブが手の中に小瓶を落とす。

【応急処置程度だがましになるだろう】

「すまんな、感謝する」

瓶の中の狂神石を飲み干す、魔力が増幅させる感覚を味わいながらゆつくりと息を吐いた。胸に走っていた鈍い痛みは薄くなったが……全力で戦うには不安が残るか。そんなことを考えながら右拳を振るい飛来した炎の槍を街に向かって弾き飛ばす。

「良い攻撃だ。憎悪と殺意が込められている」

手の表面が焼け焦げているが、それも即座に回復する。しかし、痺れた手の感覚は戻

らない。それほどまでの憎悪と殺意が込められた一撃だと我は笑いながら虚空から取り出した剣を構える。

「ギリッ!!」

高島を殺した我を憎悪を込めた視線を向け氷と水で出来た龍の首を背後に控えさせるシズク、そして竜気で作られた炎を纏う清姫の姿を見れば判る。あれは我を殺すに届きうる刃だと……。

「女の情念は恐ろしいな、まあ、それ故に楽しめそうではあるが」

契約上我は横島達との戦いに割り込むことは出来ない。だがこうして襲ってくる相手を迎撃すると言うのは契約の範囲外だ、1000年前のシズク達を殺せば、今横島の周りに居る2人が消えるのか、それを試してみるのも悪くない。そんなことを考えていると私の視界に影が落ちた。反射的に腕を振り上げ、上空からの襲撃者の一撃を受け止める。だがその直後に蹴りが顎に叩き込まれ、水平に吹っ飛んだ所を剣を叩きつけ、強引に動きを止める。

「随分面白いそうなことをやってるじゃねえか。アスモデウス、ガープ。俺も混ぜろよ」
「ビュレト……ああ、良いぞ混ぜてやろう。その代り……お前の首をここにおいて行けッ!!」

「はっ!それは俺の台詞だッ!!」

我とビュレトの剣の一撃がぶつかり合い、周囲に火花を散らす。

【なるほど、再び戻ってきたか……これは面白くなりそうだな】

未来に飛ばした筈の美神達がビュレトと小竜姫を連れて戻って来た。ここから先はもつと面白い戦いが出来ると我は微笑み、容赦なく放たれる氷柱の雨と炎を盾で弾きながら、ビュレトに向かって走り出すのだった……。

〈美神視点〉

凄まじい衝撃を感じたと思つたら私達は原っぱに仰向けに倒れていた。それに気付いて、慌てて立ち上がる。

「小竜姫様、ビュレト！成功してる!？」

正直私は時間転移をコントロールしているわけではない。上手くいったのか、失敗したのかそれが判らずそう尋ねる。

「心配するな、成功している。アスモデウスとガープの気配がする」

「それと……これは横島さんですか……早く止めないと不味いですね」

無事に再び平安時代に戻って来れた。だがまだ安心出来る訳が無い、むしろここからだ。

「行きましよう、メフィスト」

「……うん、高島を殺したあいつを……私は許さない」

目に激しい憎悪の色を宿して飛び立つメフィストの後を追ってビュレトも空を飛んで行く。その姿を見つめていると、背後から小竜姫様に抱きかかえられる。

「行きましよう、時間は余りありませんから」

「ええ、判ってるわ」

私を抱えているから小竜姫様は余りスピードを出せない。だけど、メフィストとビュレトが先行してくれたので蛍ちゃん達は無事だと思える。

「それで美神さん、12神将魂の特徴は？」

「冥子の12神将の能力の限定的な再現って所だと思っわ」

アンチラの何でも切れる耳の剣、アジラの石化を含む火炎を初めとして、12神将の能力を使えることは間違いない。

「一番確実な対処法はベルトを横島さんから外す事ですね？」

「ええ、それが一番確実だわ。生身ならまだ対処法も増えると思うから」

変身されていると霊力とかの通りが悪い、だけど生身ならまだ対処法もあると言うと小竜姫様も私の意見に賛同してくれた。

「見えたッ！結構派手にドンパチしてるわねッ」

こうなると帝の考えで平民や貴族が避難していたのが幸いに思えてくる。アスモデウスとビュレト達の戦いはかなり離れているけど激しいのが良く判る……その余波で家などが吹き飛んでいるのを見て本当に良かったと思うのと同時に、これが清姫が投獄された事件に繋がるのかとか色々考えてしまう。

「シズクさんと清姫様の事ですか？」

「ええ。小竜姫様はどう思いますか？」

「そうですね……どうなるかは私にも判りません」

1000年前の私達が転移する前の出来事とはあまりに変わりすぎている。それが吉と出るか、凶と出るか……それは全て戻ってみないと判らないって事ね。

「小竜姫様、もう良いです。ここで飛び降ります」

「……大丈夫ですか？」

「心配ないですよ、それに私よりも蛍ちゃん達の方を心配してあげてください」

私達が居なくなつてからどれくらい時間が過ぎたのかは判らない。でも周りの被害の大きさを見る限りでは相当の時間戦っていたのだと容易に判る、だから蛍ちゃん達を助けてあげてくれと頼むと小竜姫様は私を抱えていた手を放す。

「良い加減にしなさいッ！横島君ッ!!」

屋根の上に着地する前の間に霊体ボウガンの矢を打ち込む。それは横島君の背中に

命中するがやはり変身しているのが大きいのかダメージらしいようすは見えない。

【アジラッ！ ドラゴンプレスッ！】

「っ!!」

空中に現れた龍の前から転がって回避する。つい一瞬前まで私が居た所が焼き尽くされているのを見て思わず背筋に冷たい汗が流れたが、それと同時に違和感も感じていた。

(石化してない?)

高島が使った時は炎が石となり、その場に残り続けていたが今回は炎だけだ。それに違和感を感じながら屋根の上から降りて蛍ちゃんの元へ走る。

「皆大丈夫!?!」

「大丈夫です! 私達は全然平気です」

瘦せ我慢……ではない。ノーダメージとまでは言わないが、蛍ちゃん達のダメージはかなり軽微だった。

【オラアッ! ベルト外せえッ!!】

「どりゃあああーッ!!」

金時が背後に回りこんでベルトを茨木童子に向ける、茨木の細腕で振るわれているとは思えない大剣がベルトに向かって振るわれる。

「ちいつー！」

【ツ!!】

【ごっ!!?がはあッ!?!】

劍はベルトに命中する直前で弾かれ、茨木は反撃に放たれた靈力弾を飛び退いてかわす。だが金時は肘うちからの背負い投げで背中を強く打ちつけ激しく咳き込んでいた。

「このっー！」

【!】

顔目掛けて放たれた蛭ちゃんの靈体ボウガン。シェイドはそれを片手で受け止め、蛭ちゃんと手の中の矢を見て迷う素振りを見せてから、矢をへし折った。

「もしかして……あんまり攻撃してこない？」

「攻撃に反応するんですけど、積極的と言うかなんと言うか……」

「……攻撃に敵意がない時とそうじゃない時がある」

「来ますわよッ！」

清姫の警告の声に反射的に飛び退くと稲妻が目の前を横切って行った。当たれば人間なんて簡単に消し炭になる一撃だろう……だけど速度が遅かった。

「横島君も抗ってるって事ね」

心眼かもしれないけど、横島君は狂神石に抗い、私達を殺さないように狂神石の魔力

に抗っている。なら私達のやる事は1つだ、横島君がまだ正気を保っていられるうちに、狂神石に抵抗できている間にベルトを横島君から切り離す。戦って倒すのではない、ベルトを何とかして横島君から引き離せれば、助けるチャンスがある。

「なるほど、そういうことですね。なら私がッ！」

【シンダラ ソニックムーブッ！】

私達の話聞いていた小竜姫様が超加速に入るが、それと同時にシエイドの姿も消えた。私達の回りで地面が砕け、凄まじい亀裂が走る。私達には知覚出来ない止まった世界の中で小竜姫様とシエイドが戦っているのだろう。超加速での戦い……どちらが勝つかと見つめているとシズクと清姫が手を突如明後日の方向に向けた。

「シズク、清姫？」

「……ちよつと静かにしている」

「タイミングが重要なんですわ」

私達には見えないけど、シズクと清姫には超加速の世界が見えているのかも知れない。そう思つて瞬間、小竜姫様の姿が上空に現れ、両手で握った神刀を頭上に掲げている姿が見えた。

【ッ!?!】

そしてその前に誘い込まれたかのように現れたシエイドの頭目掛けて、小竜姫様が神

刀を振るった。

「せいッー！」

【ッ!?!】

「ちよつとーッ!?!?!?!」

交通事故のような音を立てて地面に叩きつけられ、バウンドしたシエイドの姿に容赦が無いにも程があると悲鳴を上げたが、そんな事はお構い無しでシズクと清姫の水と氷を伴った嵐と、炎の渦がシエイドに向かって放たれた。悲鳴を上げる間もなくシエイドの姿が霊波の渦の中に消え、金時がその中に飛び込む。ベルトを奪いに向かったと思つた瞬間、金時の身体が凄まじい勢いで吹っ飛ばされてきた。

「だ、大丈夫か!?!」

【ああ………いってえ、完全に隙を突いたと思つただけどなあ………駄目だ。かなり本気になつてやがる】

今の一撃がきつかけとなつたのか、煙の中から姿を現したシエイドは、赤黒い狂神石の霊力を身に纏い、凄まじい威圧感を放ちながら悠然と私達の前に立ち塞がる。

「どうも………からが本番みたいですね」

「ええ、でもベルトが外れかけ………チャンスはあるわ」

恐らくベルトが外れかけ、宿主から離れかけた事による狂神石の防衛本能とでも言う

べき物が今の横島君を動かしているのだろう。そう考えれば勝機はある……私達はそう考えて外れかけているベルト見て好機と思うのだった……。

横島の魂の奥深く……変身していても、英霊や神仏でも侵入出来ない横島の魂の最深部……横島忠夫と言う人間を形作るもつとも魂の重要な部位では外以上に激しい戦いが繰り広げられていた

【いい加減抵抗を諦めたらどうだ？】

「ふざけるなッ！貴様こそ横島の身体から出て行けッ!!」

黒い横島が心眼が背中に庇っている横島に触れようと何度も手を伸ばし、心眼に弾き飛ばされる。

【ひどいことを言うなよ。俺も横島だぜ？】

「だとしてもだ！横島にお前を触れさせるものかッ!!」

【やれやれ、同じ横島なのに嫌われた物だぜッ!!】

「いいや、違う！お前は横島では無い！」

心眼と黒い横島の手から放たれた霊波砲同士がぶつかり合い火花を散らす。

【判っているんだろ？認めろよ、心眼。お前は俺に勝てない。絶対にだ】

「だまれえッ！」

「いいや黙らないさ、お前は確かに横島の心を守っている。だが横島の魂からすれば異物だ、狂神石で顕現化した俺は横島の心の一部だ、どちらが上か判らないわけじゃないだろう？」

「そうだとしてもお前に屈する理由にはならないッ！」

心眼は小竜姫によって与えられた竜気の結晶、だが黒い横島は狂神石によって生まれたとしても横島の魂の一部。その力の差は歴然で、徐々に押し込まれているが、それでも横島を守る為に心眼は奮闘し続けていた。だが心眼が横島を守れるのも、もう時間の限界が迫っているのだった……。

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その32へ続く

その32

GS 芦蚩外伝平安大魔境 その32

く小竜姫視点く

狂神石で暴走している横島さんの圧力は凄まじい物で、背中に冷たい汗が流れるのを感じた。元々持ち合わせている膨大な霊力と狂神石の魔力の相乗効果で、仮に防御をしてもその上から押し潰すという圧倒的な脅力、しかも狂神石の力を使っているのでも手に攻撃を喰らえば、私も狂神石に浸食されるかもしれないと言う攻撃するのも、防御するのも難しいという圧倒的な不利な状況だ。

(でもだからと言って、諦める理由にはならない)

例え勝てないとしても私には諦める理由にはならない、私は横島さんを助けに来たのだ。それを成し遂げる事も出来ず諦めるなんて事は出来る訳も無い。

「ビカラ、パワードボアツ!!」

「ッ！ ちいつ、馬鹿力がッ!!」

美神さんの言葉に振り返ろうとした瞬間、機械合成音による不気味な声と背筋が凍りそうになる霊力と魔力が再び現れた。

【ダイカイガンツ！ 12 魔神将ツ！ オメガドライブツ!!】シツ!! 【が、があああ
あーツツ!!?】

後ろ回し蹴りで吹き飛ばす金時さんは霊力の爆発に飲み込まれながら苦悶の声を上げてその姿を消した。消滅……した訳じゃない、過度のダメージによって一時霊体化したのだろう。

「……ちつ、強い」

「ええ。そうですわね……」

「……これが横島さんが到達しえる1つの高みと言うことなのでしょうね……」

横島さんは今も成長を続けている……雛と言ったらおかしな物だが、まだどんな成長を遂げるのか判らない未知の所がある。霊力、魔力、神通力、そして竜気……それら全てを發揮し始めているその姿は横島さんが到達しえる1つの姿なのだろう。

「……あんなのを横島の1つの形として認めるのか?」

「まさか、ただありえる1つと言うだけですよ。認める、認めない以前の問題です」

確かに今の横島さん……いや、シ Eid は最上級神魔にもその手が届くかもしれない。けどそれとこれとは話が違う。あんな知性も何も無く戦闘しか出来ない。しか

も横島さんらしい柔軟な発想も、楽しささえ感じさせてくれるやり取りも無い。あんな強いだけの今のシェイドを横島さんと認めれる訳が無い。

「今の横島様にあれだけの力を使わせるのはリスクが高すぎます。ベルトを奪いましょう」

「ええ、そうしましょう。幸い外れかけていますからね」

さっきの私の一撃でベルトは腰から外れかけている。直接的な方法で打ち倒すのではなく、ベルトを外して変身を強制解除させる。私達の作戦はそれに決まり、ゆつたりとした動きで拳を握るシェイドの腰のベルトを睨みつけるのだった……。

くビュレト視点く

俺と千年前のシズクと清姫、そしてメフィストの4人を相手にしても、アスモデウスの方が一枚上手だった。いや、正しくはアスモデウスとガープの方が一手上だった。

「ちいつ、なんだ、随分と見ない間に嫌な戦い方を覚えたな？ええ、ガープ」

【知性的と言って貰いたいな。私はお前達のように脳味噌まで筋肉ではないのだよ】

分身だからそこまで強力な術は使えない、だが幻術、防御、強化を自在に切り替えアスモデウスと共に上手く戦っている。

「でやあッ!!」

「温いな。そんな雷が我に効くと思うなッ!!」

並みの神魔なら一撃で戦闘不能にする事も可能なメフィストの電撃も片手で殴り飛ばし、炎の弓を構えるアスモデウス。

「ッ! ぐっ!?!」

それを見てシズクが氷の壁を作り出したが、その壁を容易に貫通しシズクの身体が凄まじい勢いで後方に向かって吹き飛ばされた。

「シャアアッ!」

「お前は我をなめているのか? 我の本懐は炎を操る事だぞ」

「きやあッ!?!」

清姫の炎を片手で吸収し、自分の炎も混ぜて打ち出すアスモデウスに清姫の身体も吹き飛んだ。それを見て、俺は舌打ちした。

「お前から邪魔だ! 小竜姫の方を手伝って来いッ!」

「な、何を」

「お前らの攻撃が対策されてるんだよ! 弱り切ったところを捕獲されたどうするつもりだ! 未来がどうしようもなく乱れるんだぞッ!」

俺の言葉にメフィスト達が驚いた表情をするが、俺の考えで間違いない。1000年

前のシズクと清姫がいなくなれば、横島の側のシズクと清姫も消える。そしてメフィストが死ねば、美神も消える。そうなれば、横島の戦闘能力は格段に落ちるだろう、いやもつと言えは守る相手がいなくなり、未来に戻ると同時に横島がガープ達の手中に落ちていると言うことにもなりかねない。そうなれば俺達は完全に詰み、過去に遡れるガープと過去を変えて未来を変える能力を持つ横島によってガープにとって都合の良い世界を作られたらそれで終わりだ。

「思いのほか冷静だな。お前一人で我とガープに勝つつもりか？」

「は、俺だってただ無駄に時間を過ごしていた訳じゃねえ」

メフィスト達が離脱し、数の利は失われた。だがそれでも俺は負ける気なんて毛頭無かった。

「てめ、肺怪我してるだろ？ 丁度良いハンデだと思わないか？」

「……ふっ、そうだな」

肺に恐らく折れた肋骨が刺さっている。呼吸が乱れているのが近くに行けば良く判る。狂神石をモルヒネ代わりにして我慢しているんだろうが、それも長くは持たないだろう。

【だが、お前一人でッ！】

「っと、悪いな。俺は昔から手癖が悪いんでな」

ノーモーション、詠唱なしの魔術。天界の連中に聞きまわってやっと身に付けた新しい俺の武器だ。

【付け焼き刃で私とアスモデウスに勝てるっても？】

「わるいな、生憎俺は最初から勝つつもりなんてねえよ」

剣を両手に構えて腰を落とす。正直に言えば俺自身の手でアスモデウスとガープを殺して、こんな馬鹿な事は止めさせたい。だが狂神石の力を持つアスモデウス達には勝てない、いやもつと言えば俺がベリアルが抜けてからずっと2人で戦い続けてきたアスモデウス達の方が俺よりも強いのは明らかだ。

「横島の暴走を止めれば、俺達の勝ち……そうだろうか？負傷を押ししてもここに残っているのはその為だろ？」

横島が狂神石に完全に飲まれるのか、それとも美神達がそれを止めるのかそれを見届ける為だけにアスモデウスはここにいる。俺が来たから戦う流れになったが、そうでなければ慎重な性格のアスモデウスが負傷をしていて戦うという選択はしないだろう。

「ならば時間の奪い合いだ。精々楽しませろよ」

【付け焼き刃ではないか、確かめてやろう】

「はっ！言ってるッ！油断してるとてめえらの首を刈り取るぜッ!!」

横島の暴走が止まるのが先か、それとも狂神石の力が無くなりアスモデウスが力尽き

るのが先か……時間の奪い合いとは上手く言った物だと笑う、俺もアスモデウスも実力ではなく時間により勝敗が決する。一秒でも長く、相手を足止めする。一秒でも早く相手を戦闘不能にする——互いにそれだけを考えてほぼ同時に地面を蹴り、互いの獲物の剣を振るうのだった……。

〔西郷視点〕

高島が死んだと言つても何時までもほうけている時間はない。京を守る為に、私は立ち上がらなければならぬ。

（そうだと、高島）

私は貴族、高島は平民……それでも私達は友情を育んできた。どちらかが死んでも、京を守るために戦うと私達は約束したんだ。その誓いを無碍になど出来る訳が無い。

【う……西郷】

「た、高島」

立ち上がろうとした時、高島の身体から抜け出た魂が私に声を掛けてきた。

【横島は俺が何とかする。メフィストを呼んでくれ、それとこれを道真公へ】

メフィストを呼べ、そして正と刻まれた文珠を渡して消えた高島に最後まで自分勝手

な奴だと涙が零れる。

「メフィスト！高島が呼んでいるぞ！」

「え!?高島殿がッ!？」

私の呼びび声にメフィストが振り返り私の元に来る。すると消えていた高島が姿を見せて、邪魔だと言わんばかりに手を振る。その姿に最後まで自分勝手な奴だと泣きながら笑い、倒れている道真公の元に駆け寄り正……即ち正気と言う言葉が込められた文珠を発動させる。

【む……せ、拙者は……】

「道真公。お力添えを、貴方を操った西洋の悪魔を打ち倒す為に貴方のお力をお貸しください」

シズク様達は奮闘しているが暴走している横島を止めるには力が足りない。確かに今は押しているが、それでもまだ力が足りないのだ。

【……拙者にはそれほど力は残っていないが……力になれるのならば】

「助かります」

道真公に肩を貸して高島の元へ戻ると、美神や蛸も高島の遺体の側に集まっていた。

「ちよつと正気!？」

【ああ、正気も正気だ。今の横島は完全に暴走している楔が必要だ】

「で、でも！そんなことをすれば高島殿は転生出来なくなるかもしれない！」

メフィストの転生出来なくなるの言葉に慌てて高島の元へ足を向ける。

「おう、西郷。道真公を正気に戻してくれたんだな。ありがとよ」

「何の話をしていた？」

「横島と俺の魂は良く似ている。道真公の文珠と、メフィストとの契約で俺の魂の一部を横島の魂に移す」

理屈は判る……だがそれは横島に自分の魂の欠片を残すという事……それは高島が完全な形で転生するという事を諦めたという事に他ならない。

「……私は、横島君を止めてくれるって言うなら、高島の策に乗りたい」

「わ、私もです」

高島は美神達にとっては過去の人間だ。自分達にとつての未来の人間の横島を救いたいと思うのは当然の事だ……だがメフィストはそれを受け入れられない。

「い、いやだ。あたしは嫌だよ!？」

「メフィスト……頼むよ」

「い、嫌だ……だってもう高島殿に会えないって事だろ!？あたしはそんなの嫌だ」

確かにそれを言われれば私だって嫌だ。だが……そうではない、そうではないのだ。

「死とは、少しの別れに過ぎない。メフィストはまた高島に会える」

何千年もの時を経て、美神と横島として人間として2人は出会える。

「私はどうだ？未来で横島に会えているか？」

「はい……西郷さんも会えてます」

そうか……時を越えてもなお、私と高島の縁は切れないか……。

「なら、メフィスト。力を貸してやって欲しい、高島の最後の願いだ」

「つくう……判った。判ったよ……」

「すまない、ありがとう」

「最後まで我侷な奴だ、いつまでも振り回される私の気持ちを知れ、馬鹿」

私は笑えているだろうか……別れの時は互いに笑って見送ると約束したんだ。だか

ら私は泣かない、泣きたくない。約束を……誓いを守る為に。

「今度は迷惑を掛けないように気をつけるよ。だから、またな」

「ああ。また」

さよならは互いに言わない、遠い未来でまた会おうと約束する。私と高島の最後はこ

んな形が相応しい。

【願ってくれ、その想いを。俺は横島に届ける……道真公。文珠を……】

【ああ。判った】

3つの文珠が美神達の前に浮かび上がり、願、願、届の3つの文字が刻まれた。その

靈力を感じ取ったのか横島が振り返りガンガンブレードベルトに翳す。

【グルルルッ!!!ガオオオオオオーッ!!!】

半透明のショウトラのオーラが現れ、雄叫びを上げると横島が頭上に振り上げたガンブレードの中に飛び込み、その刀身を漆黒の靈力が包み込んだ。

「まだかッ?」

「駄目ッ!この位置じゃ遠すぎるッ!」

文珠を使うには距離があり、そして高島とメフィストの別れにはまだ早すぎた。

【メイジテミナー!メイジテミナーッ!!!】

【ウオオオオオオオオ——ッ!!!】

【ダイカイガンショウトラッ!ハウリングバイトッ!!!】

頭上から袈裟切りに放たれた刃から飛びだした巨大な犬の頭部が地面を抉りながら美神達に迫る。

【させん、させんぞおッ!!】

その前に躍り出たのは道真公だった雷その物が刃になったような剣を振りかざし、漆黒の牙と鐳迫り合う。

【ぐ、ぐうう……すまぬ、操られた事をこの程度で償えるとは思えぬが……許し……】

【ガオオオオオオッ!!!】

大ッ!!! 陰陽師ッ!!!

漆黒から白銀へ、12神将の衣装を持つ全身鎧を纏った白銀の仮面の戦士が私達の前に現れた。高島の最後の力であり、未来へと託した希望の姿を見て、私は堪えていた涙を抑えきれず涙を流すのだった……。

くシズク（千年前） 視点く

高島の魂が横島の身体に入ったのを見て、私も清姫も漠然として悟った。これで高島とは別れなのだ……魂の最後まで燃やし尽くして、そしてあいつは逝ってしまうのだろうか……。

「……悲しいな」

「そうです……ね。悲しいですね」

私達に申し訳なさそうな視線を1度だけ向け、高島は地面を蹴ってアスモデウスへと飛び掛る。

「ぐっ!!? き、貴様何を!?!」

【人間の底力、人間の覚悟を見せてやるぜッ!!】

剣指を切ると空中に陣が浮かび火や水が飛び出し、アスモデウスにへと襲い掛かる。

「お前……いや、何も言わないぞ。俺は」

【ああ、ただの馬鹿な人間の馬鹿な意地だ。何も言わないで、最後まで見届けてくれ】
両手に剣を持ち、アスモデウスに切りかかり、蹴りを、陰陽術を交えながら高島は最後の戦いに身を投じる。

「……私は慢心していたのかもな」

「そうですわね」

最上級の龍神と言う立場に私は甘えていたのかもしれない。高島を守る事も出来ずに死なせてしまい、そして命を、魂を燃やして戦うその姿をただ見ているだけしか出来ない……。

「……私は霊脈の上で眠る。もっと力をつける」

「そうですか、では私は天界へ帰りましょう」

「もう2度と、こんな思いをしない為に……」

「シズクさん、清姫様……」

小竜姫が悲しそうな視線を私達に向ける。その目は何を言っても私達の決意が変わらないこと、そして自分が何も出来ない事を感じているのが痛いほどに伝わってきた。

「……見届ける。お前も、1000年の時を越えて、見ているだけではない。今度こそ、あの悪鬼を打ち倒す為に」

「……2度、私達は敗れません。その誓いを立てましょう」

「はいッ!」

神魔であるからこそ私達は不自由だ。だが、それでも自分の意志までは不自由になつたつもりはない。愛した男を……例え、この愛が叶わないとしても、その思いは決して誰にも覆されるつもりも、否定されるつもりも無い。

(もう2度と……こんな思いはしない)

きつと清姫もそう思っているだろう。何も出来ず、見ている事しか出来なかつた……この悔しさを、アスモデウス達への憎しみを決して私は忘れない。1000年後の私が横島の側にいるというのなら、2度とこんな思いをしなくて済む様に、もつと力を付けることを誓った。

【でやあッ!!】

「がっ、ぐううっ!」

剣による一閃と陰陽術の追撃によってアスモデウスが全身から煙を散らしながら転がり落ちてくる。

「これが……横島のかか、ふふふ、ふはははははッ!見届けたぞ確かにその力をッ!」

【てめらはここで1度退場だ。いや、そのまま表舞台になんか立つんじゃねえ】

「ありえもしない事をいう物ではない。だが敗北は認めよう。この痛みを、お前の魂を受けて我は敗北を認めようぞッ!!」

大の字に手を広げ、打ってこいと言わんばかりに吼えるアスモデウス。その隙だらけの姿を見ても私達は動かない、アスモデウスに引導を渡すことが出来るのは……横島の身体を蝕む狂神石を振り払う為に己の存在を賭けた高島だけだ。私達に出来る事はこの戦いの結末を見届け、2度とこんな思いをしない為に力をつけることだ。

【ダイカイガン！ 陰陽師オールドライブッ!!】

【でやあああああー！ーッ!!】

「ぐ、ぐううう、ぐおおおおおおおおーッ!!」

5つの五芒星が空中に浮かび、五芒星の中心を潜り抜けながら急降下した高島の飛び蹴りがアスモデウスの胸部を捉え、大きく蹴り飛ばされたアスモデウスの姿と雄叫びが爆発の中に消え、地面に高島が着地すると同時に白銀の姿は鮮やかな黄色の姿へと変わった。

【オヤスマー】

「……………う……………あ」

「横島！」

「横島様ッ！」

千年後の私と清姫が横島を抱きかかえる姿を見ながら、私達の前で陽炎のように消えかけている高島をジッと見つめるのだった……。

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その33へ続く

その33

G S 芦蚩外伝平安大魔境 その33

（清姫（千年前）視点）

私とシズク、そしてメフィストの3人の前に消えかけの姿で浮かび上がる高島様の魂を見て、私は思わず目から涙が溢れた。魂は欠損し、もはや高島様の魂は人間の魂としての最低限のエネルギーさえも失っていた。

「あーなんだ。うん、今までありがとう。楽しかった」

「……言う事欠いてそれかお前は」

自分が消えかけているのに楽しかった、ありがとう何て言葉は普通は出てこない。陰陽師であるからこそ、もう自分が転生出来ないかと判っている筈なのに……どうして笑えるのか私には判らなかつた。私も、シズクも西郷も何を言えばいいのか、消えかけている高島様に色々言いたい事はあるのに、何も口に出れない中……メフィストが一步前に出た。

「高島殿……まだ一つ。契約残ってるけど……」

「また会おう、それで頼むぜ。メフィストだけじゃない、清姫も、シズクも、後ついでに

西郷も」

「私はついでおか、まあ、それで良いのかもしれないな。それで、死ぬ間際だ。もう一個くらい我俣を聞いてやるぞ?。」

【はは、悪いな。じゃあ、メフィスト達を頼む。力になつて欲しい!】

消え去る最後の瞬間まで私たちの事を思い、そして心配する高島様は小さく笑い、思ひ出したように手を叩いた。

【あ、後、京を守つてくれてた四聖の獣と神鹿と、あと……あー、一杯頼む!】

「……やれやれとんだ貧乏くじだ。お前を悼む時間もないじゃないか!」

高島様が京でやった改革は非常に多岐に渡る。高島様の死後、それらの契約を頼むと言われ西郷は苦笑し、高島様に指を向けた。

「良いだろう。全部引き受けてやる、来世では私に迷惑をかけるなよ!」

【はは、そいつは約束できねえな……つともう時間みたいだな!】

姿が空中でポロポロに崩れ始める、自分が完全に消え去ると言う恐怖があるだろうに高島様は歯を出して、私達が好きだった顔で笑った。

【またな! 未来で、俺じゃない俺でまた会おうツ! その時はまた頼むぜ、俺は情けない、弱い男だからさツ!】

皆がいないと駄目なんだと言って高島様の魂は空気に溶けるように私達の目の前で

消え去った……。その姿が消えるまで、じつと私達はそれを見つめ続け、靈力の残滓も消えたところで小さく振り返る。

「……ちっ、靈体がボロボロだ」

「ちよつと!? どうすれば良いのよ!?」

「水! 水ですわ! 綺麗な水!!」

「湧き水で良いの!?」

「わ、湧き水ですわ! えつとえつとツ!!」

「おい、あの馬鹿超加速で何処へ行きやがったツ!!」

横島と言う高島様の転生者の周りには人間も神も悪魔もすべてが等しく集まっている。それは私達が好きだった高島様の周りの出来事だ……。どれほど1000年。その長い時を経て、またああやって集まれるのなら私も待つてみようと思う……。また楽しい、幸福なときを過ごす為に……

「シズク様はどうなさいますか?」

「……私は眠る。1000年、力を蓄えよう……。2度とあえられないために」

「では私は天界に戻りましょう。もつと強い力を得るために」

見ているだけしか出来なかつた。そんな弱い自分ではない、今度はちゃんと最後まで守れるようにもつと強い力を手にしたい。

「判りました。ではメフィストは？」

「……あたしは……うん。人間になるよ、1000年後にあたしは高島を最後まで守れるように力をつける。また恋するのか、それとも今」

度は違うのか……それは判らないけど後悔だけはしない為にね」

1000年の先にまた会える。そして今度は絶対に、後悔するような事にならないように力をつける事を私達は誓い合うのだった……。

く美神視点く

アスモデウス達は退ける事が出来たけど、高島の死や、私達の知る歴史から大きく変わったシズクと清姫の事。そして何よりも、2度にわたる狂神石の力による変身——問題は山積みと言っても良いだろう。

「びびりこー」

「うん、いめんな？」

「びびりこー」

狂神石の影響は横島君の手足の麻痺と言う深刻な後遺症を残した。握力は殆ど無く、立ち上がる事は出来ても歩く事は出来ない。と移動と食事に介助に必要な有様だった。

それでも「普通」だ。いや、普通になるように気絶している間にヒヤクメに頼んだのだ。
(美神さん……)

(普通にしていけない、これが最善なのよ)

横島君にシエイド 12 魔神将として暴走した記憶を残すのは得策ではない、横島君は案外考えすぎる性格だ。本当ならばシエイドの事自体を忘れさせたいが、かぐや姫と藤原の姫の事を忘れるのは間違はなく横島君が反発する。落し所としては2度目の暴走の記憶を封印する……これが私が最善だと思った手段だ。

「どうかしました?」

「ううん、なんでもないわ。とりあえず無茶をせず大人しくしてね、挨拶をしたら現代に戻るから」

正直に言えばもう少し安静にしたいが、平安時代では何時横島君の記憶が戻るかわからないし、医療設備も決して優れているわけではない。時間移動の不安はあるが、最善策として横島君を早く現代に連れて帰るべきだと私は考えていた。

「本当に美神さんだけで良いんですか? 俺達も行ったほうが」

「病人がなに言ってるのよ、大人しくしてなさい。道真公。準備はお願い出来ますか?」
蛭ちゃん達に目配せし、横島君に余り今回の戦いは言わないように合図をし、道真公もその話に乗ってくれた。

「うむ。任せておけ、お前達を未来へ送り届けたら、拙者も天界に戻る」

帝への挨拶は私だけが行く事にした。横島君は今動かせる状況じゃないし、高島の死の事を批判させる訳には行かない。

「……同行してもいいぞ?」

「ううん、大丈夫。横島君をお願いね」

シズク達にそう声を掛け、私は帝の屋敷へと足を向けた。

「良く来てくれた。美神、今回の件は、苦勞だった」

叱責されると思っていたのに、労いの言葉を投げかけられ私は正直困惑した。

「高島の死については皆心を痛めているが……私達は事前に聞いていた」

「え?」

高島の死を事前に知っていたと聞いて、私は思わずそう尋ね返す。すると、目を真っ赤に染めた六道幸華が口を開いた。

「自分はこの闘いで死ぬけれど、美神達を責めないで欲しいと、もしも自分の事を思うのなら、未来まで続く騒乱を見据え手助けして欲しいと」

「私も六道も1000年も家が続けられるかは判らないが、それでも助けられる範囲なら助けられる」

「私もだ、京の復興もあるので、それほど渡すことは出来ないが……これからの戦いに役

立てて欲しい」

平安時代の質の高い破魔札や陰陽札、それに大量の霊具の数に驚くのと同時に、自分の死後の事も考えてくれていた高島には感謝しかなかった。

「ありがとうございます」

責め立てられることも覚悟していた。それなのに激励された事に情けないと思いつつも深く頭を下げて、与えられた宝を手に帝の屋敷を後にするのだった……。

【では未来へと送ろう。此度の戦い、まこと感謝にします】

横島君を病院に連れて行かないといけないし、何よりも今回の事でどれだけ歴史が変わったのかと言う不安もある。

「西郷さん達に別れは」

「手紙だけは置いて来たわ。これ以上は触れ合わないほうがいい」

あまりに過去を変えすぎては何が起きるかも判らない。心情的には別れを告げたいが、手紙だけで帰る事になるだろう。

「それでやつと、茨木童子さんは？」

「吾は横島と行くぞ」

……琉璃に丸投げする事になるけど、うん。茨木童子は鬼のはずなんだけど、どうしようもないポンコツ感があるから大丈夫だろう。

「……ま、良いだろう。鬼にしては良い奴だ」

「面白いから良いんじゃないですかね？」

シズクも清姫も問題ないと言っているので私はこれ以上何も言えないと言うか。何を言っても無駄だと判断したので諦めるしかない……でもとりあえず琉璃の愚痴とかは聞こうと思うのでそれで許して貰おうと思う。

「良いんですか？」

「引き離すほうが危険だわ」

置いていくのならばつて鬼火を作り出したことを考えれば連れて帰るのが一番安全だ。

「では道真公。お願いします」

【うむ。では、また未来で会おう】

落雷が私達を包み込み、私達は平安時代を後にした。様々な出会い、そして別れ、これからの不安……様々な思いを抱えて、私達は平安時代から現代へと引き返していくのだった……。

この平安時代での戦いが現在に生きる全ての命の明暗を分ける。大きな戦いの予兆であると言うこと、そしてこの戦いが私達に途方もない絶望を与える種となる事を私達は知る良しも無いのだった……。

平安大魔境
おまけその1へ続く

おまけその1

平安大魔境 おまけその1

〔躑躅院視点〕

道真公の助力によって再び過去に跳んだ美神と小竜姫様達。彼女達が無事に横島を連れて帰ることを祈る神代琉璃達を見ながら、私は小さく微笑んでいた。

（横島君の評価は改めなければならないな）

唐突に頭の中に浮かんだ知らない記憶——。これが噂の横島君がガープに狙われている理由の1つ、特異点と言う能力による物なのかと思うと中々に面白い物がある。

（シズク様と清姫様の大暴れは無くなつて、変わりに鬼道家の反乱……ふうん。なるどね……）

歴史が書き換わる事で、2つの記憶が脳裏を駆け巡る。古い記憶が消え、新しい記憶になる。その痛みは中々に強烈だが、その程度でどうにかなるほど私は甘い人生を歩んでいない。その痛みさえも呑み込み、己の糧とすれば良いのだ。

「どうかした？ 躑躅院」

「いえいえ、なんでもありませんよ。神代会長、横島君が無事に戻って来て欲しい……私

が考えているのはそれだけです」

「そうね。はあ……本当に無事に帰ってきて欲しいわ」

横島君と言う存在はこの現代で活躍している全てのGSの急所と言っても良いだろう。味方を鼓舞するという意味でも、そして精神的な支柱と言う意味でも横島君の存在は非常に大きいと言わざるを得ない。

(そしてその影響は私にもある)

美弥の為に横島忠夫を手にする計画を私は考えていた。だが、横島君に対する私の評価は既に変わり始めて……。

「何か？」

「いやあ？別に、ただなあ。お前の気配がどうも不穏な物でな？いや、ワシの気のせいなら良いんじゃないよ？」

流石大英霊と言った所か……上手く自分の内面を隠すのは得意にしていたつもりだが、さすがに大英霊織田信長の眼力を誤魔化すのは無理だったと苦笑する。

「いや、いや、私の妹の美弥も横島君を随分と好いているようなのでね。前途多難だと思っただですよ」

「この状況で良くそんなことが考えられますわね？躑躅院」

「待ちなさいよくえす。こういう状況だから、逆に良いのかもしれないわ」

絶望的な状況だからこそ、また心が休まる時を考えるのは当然の事。そして神宮寺が噛み付いてくるのも計算の内、そしてそれを神代琉璃が諫めるのも計算の内。

「全くこんな状況なのに妹の事を考えるとはお前も相当な兄馬鹿じゃな！」

「ふふ、兄と言うのは何時も下の者を考えるものですからね」

まだ疑いの視線はあるが、私はどうやって神代琉璃達を出し抜くか考えていたのかと思ってくれた事で僅かに敵意と監視の視線が弱まった織田信長と牛若丸の事を考えていると、獣の姿で伏せて紫の面倒を見ていたタマモとシロが跳ね起き、それと同時に人間の姿になった。

「…………お兄さん帰ってくる？」

眠っていた紫が目を擦りながら尋ねるとタマモとシロは再び広がった暗雲を見つめながら返事を返す。

「ええ、感じたわ。近い、でも…………これは」

「…………何か嫌な感じがするでござる」

2人の言葉を聞いて、流石九尾の狐と私はタマモの評価を改めた。ただの少女のように振舞っているが、傾国の大妖怪。その実力は弱体化していても並みのGSより遥かに高い。まだその姿を確認していなくとも、横島君の不調を感じ取っていた。

(記憶の通りならば…………)

横島君は平安京で、狂神石を投与され、2度に渡る暴走状態に陥っているはず。つまり、戻って来た頃合には肉体も霊体もボロボロで動かせる状況に無いはずだ。無論それを100%信用出来る訳では無いが、それでも50%くらいは信用できると思う。

「神代会長！ 横島君達は戻ってきましたか!?」

「さ、西条さん。ど、どうしたんですか、そんなに慌てて」

屋敷に転がり込むようにやってきた西条は額の汗をハンカチで拭い、荒い呼吸を整えながら空を見上げた。

「い、いえ、何か、上手く説明できないのですが……横島君達が戻ってくるようなそんな気がして……」

【戻ってくるぞー！】

道真公の声が響き、一際大きい雷鳴と共に高島の屋敷に複数の人影が見える。戻って来たと神宮寺達が喜色の笑みを浮かべたが、煙の中から響いた美神の怒声にその表情は凍りついた。

「横島君が重傷！ 寝かせる準備！ それと東京のナイチンゲールに連絡して早くッ
!!!」

その一喝で私が与えられた記憶は間違いいではないと判り、誰にも見られないように顔を隠しながら、私は歪んだ笑みを浮かべるのだった。

くくえす視点く

横島が戻つて来た。それは喜ばしい事だし、やっと肩の力を抜けると思つていた……だが状況はそんなに甘い物ではなかつた。

「……うう……ううん……」

布団で横になっている横島の額からは大粒の汗が浮かび、それを皆で交代して看病しているが、どれほど濡らしたタオルも数秒で乾いたタオルになってしまうほどの高熱だ。

「つまりなんですか、横島が無理をしているのに気付かなかつたと……う？」

「そうではないくえす。俺も小竜姫もその状況には気付いていた、だが平安時代で横島の治療が出来るか？」

「それは……」

確かに平安時代は霊的な物に満ちた時代ですが、それに追従する霊的な知識があるかと言われるとそうではない。

「……無理は承知だったが、あのままでは横島が弱る一方だつた」

「それに周りの人を考えて無理をしていたのよ」

横島の性格を考えれば、それは十分に考えられた。私は浮かしかけた腰を座布団の上に戻し、美神達から目を逸らした。

「すいませんでしたわ……な、なんですのよ。その顔は」

「いや、くえすが謝るとか正直信じられないわ……」

「うるさいですわよッ!!」

自分でもキャラではないと判っているが、自分の非があるのに謝らないほど私は心の狭い人間ではないつもりだ。

「私ね。紫!」

「そうか! 吾は茨木童子! 大江山の鬼の首魁よ!!」

「すごーいッ!」

「そうかそうか。お前は見所があるな!」

……あの鬼の小娘、今なんて? 私と琉璃が顔を見合わせ、それから美神に視線を向けると思いつきり美神と蛭は目を逸らした。

「色々あつて……」

「はしよるな!!」

何がどうあれば、鬼の首魁の茨木童子を仲間に出来るのか私達にちゃんと説明して欲

しい。

「そしてこれが吾の友の酒呑童子だ。今は、調子が悪くて寝ているが、その内紫にも会わせてやろう！」

「はーいー！」

縁側ではしゃでいる紫と茨木童子を見て、再び美神達に視線を向ける。

「ちよつと、話聞かせてくれますか？」

「ちよつと休んでからに……！」

「良いですけど、納得出来るまで説明してくださいよ」

どうして酒呑童子なんて言う超ビッグネームまで仲間になっているのか、眼魂になっているようですけどあの口ぶりでは絶対中身入りの眼魂だろう。

「もう横島だから仕方ないわね」

「せんせーだからしょうがないでござるな」

【むしろ横島なら当然？】

【流石主？】

……諦めの境地と言うか、自分達もその分類だから気にしていかないって言うタママ達ですけれども、もう少し考えるべきだと私は思うのですよね。

「令子ちゃん、東京のナイチンゲールと連絡が取れたよ。すぐに来てくれるって」

「そ、良かった……シズクの治療でも正直あんまり効果が無かったのよね」

ナイチンゲールが来ると聞いて安堵した様子の美神はやっと肩の力を抜いて、小さく笑った。

【やはり状況は深刻でしたか】

「道真公……ええ、かなり不味い状況でしたね。これからはもつと横島さんの事を見ておかなければなりません」

「英霊、神魔、手の空いている者は東京に呼び寄せる必要があるかもしれん」

ビュレト様がそこまで言うほどに状況は悪いという事なのですか……一体平安時代で何が起きたのか……美神達が落ち着いたら何があったのか詳しく聞くべきだろう。

【急患はどこですか!?!】

地面を挟りながら現れたナイチンゲールが来て、美神達も検診になってしまったので話は1度中断される事になったが、横島達が戻ってきてても、心休める時は無く、これから起きるであろう戦いに備えなければならぬのは明らかなのだ……。

くオーデイン視点く

小竜姫とビュレトの報告を見て、龍神王と共に深い溜め息を吐いた。

「横島に狂神石の投与……か」

「ますます不味いな……どうしたものか……」

横島を排除すれば、ガーブ達の侵攻が緩やかになると思っている若い神魔は少なからずいる。だが横島を排除すれば、それ以上の災厄が訪れる事となるだろう。

「英霊の追加増員か……候補はいるか？」

「……ジャンヌがすぐに動かせるが……」

「ジャンヌ・ダルク……か」

ガーブに使役されたのは別側面、正しい意味のジャンヌ・ダルクならすぐ派遣出来る。と龍神王は言うが、それも決して得策とは言えないだろう。

「横島からいらぬ反発を買うのではないか？」

「その可能性はある」

反転英霊のジャンヌと友好を結んだ横島にジャンヌを会わせるのは正直危険だと思
う。

「だが他にすぐ派遣出来る英霊となると……数が絞られる」

「それに神魔を送り出すのもな……」

今の横島には不安要素が多すぎる。狂神石の影響を何処まで受けているのか、そしてその横島の側に神魔がいることでどれだけの弊害が起きるか……。パツと思いつくだ

けでも、とんでもない数の影響が容易に想像出来る。

「横島を中心にして狂神石の感染が広がりでもしたら……」

「流石の我達でも止められぬ」

横島の存在は間違いなくジョーカー。どんな相手にも負けるが、どんな相手にも勝つ可能性がある最高の切り札。だがそれはほんの少しの擦れ違いで、神魔にも牙を剥きかねない最強の鬼札だ。

「最高指導者の意見を聞いて見るか？」

「そうだな、流石に私達の考えでは……」

席を立とうとして、背後に現れた強烈な気配に我も龍神王も足を止めた。振り返りたくないとかからそう思っても、視線は引き付けられるように後を向いていた。

「なんだ、神魔の軍隊の司令室と言う割には味も素っ気も無いな」

「はは、オーデイン達にはそんな余裕もないさ」

ルイ様と魔人姫。その2人が和やかに談笑しながら、我達の後にいたのは肝が冷えたとかそう言うレベルではない。本気で死を覚悟した……我と龍神王の視線に気付いたルイ様は本当に楽しそうに、しかしそれでいて邪悪な笑みを魔人姫と共に浮かべた。

「横島は私が助けてあげよう」

「狂神石などで狂う横島は見たくないしな」

横島を助けると言うほどにあの2人も横島を注目している。それはそれ自体がある意味、横島の守りとなるだろう。何処の馬鹿がルイ・サイファーとマザー・ハーロツトの2人を敵に回したいと思う？ そんなのはただの自殺行為に等しい。

「だけど、馬鹿な神魔が横島を害してみなよ？」

「お前らを殺すからな、部下の失態は上司が命で償え」

あの2人ならば殺すと言えば、瞬きの間に我らを殺すことも可能だろう。それだけの力が、ルイ様と魔人姫にはある。

「さて、じゃあ行こうか」

「うむ！ 久しぶりに横島の顔を見に行くか。土産は何が良いだろうか？」

「そうだねえ、チビ達がいるから果物とかが良いんじゃないかな？」

「そうかそうか、ああ、忘れる所だった。冥界の女神も拾って行かないとな」

「鹿とガゼルの違いってなんだろうってずっと鹿公園にいたっけ？ やれやれ困った女神だよ」

本当に楽しそうに虚空へと消えていく2人。その2人の気配が消えたと同時に、我と龍神王は同時に膝をついた。

「横島を警戒している神魔を全員ピックアップしよう」

「ああ、それも早急にな」

横島は人外に愛される。ルイ様と魔人姫のそれが愛玩動物を見るものなのか、それとも異性に向ける物なのかはわからない。可能性とすれば、前者だが、後者が無いとは言い切れない。

「とにかくだ、馬鹿を全員拘束しなければ」

「ああ……大変な事になる」

今回は我達に釘を刺しに来たのだ。横島が狂神石を投与されるのも、それを全て知った上で、何もせず。自分達が見たい物を見たから後は横島を処分されては困ると釘を刺しに来たのだというのは明らかだった。

「横島はどうなるんだ……」

「判らない少なくとも……英霊に祀り上げられる可能性は十分にあるだろうな」

既に横島は幾つ物偉業を成し遂げている、それは現代ではありえない英霊としての条件を全て満たす物だ。だが逆を言えば、横島は全てを救うが、全てを破壊する素質も持ち合わせている。

「救世主か……それとも」

「人類悪か……慎重に見届けなくては……」

世界を救う救世主「セイヴァー」としての素質を横島は我達にも幾度も渡り見せてきた。だが狂神石に取り込まれたことで全人類を滅ぼす可能性を秘めた人類悪「ピースト」へ

の適正も得てしまった……。

「正念場だな」

「ああ、その通りだ」

ここからはより慎重に、しかし大胆に行動して横島を守らなければならないだろう。魔人へと至らせない為に、そして人類悪へと辿り着かせない為に……オーデインと龍神王は動く事を決めたのだった……。

平安大魔境 おまけ その2へ続く

平安大魔境 おまけ その2

平安大魔境 おまけ その2

（蛍視点）

ナイチンゲールさんの襲来によって私達は強制的に京都で療養となつてしまった。その時のナイチンゲールさんの弁がこちらなのだが……今考えても至極真つ当なことであらうの根も出なかった。

「は？意識不明の重傷者を連れて東京に帰る？それに平気そうにしていますけど霊体がボロボロですよ？ミス・令子、ミス・蛍——その足。へし折って欲しいんですか？」

完全に目が据わつていて、やるといふ気迫に満ちているナイチンゲールさんに私と美神さんは即座に降参。元々横島が回復するまでは動くつもりは無かったけど、本気で足を折られると思ひ私達は京都で療養を続ける事に賛成せざるを得なかった。

「何時までも滞在してくれて結構ですよ？ 全て躑躅院が持ちますので、ごゆっくり療養してください」

あんまり躑躅院に貸しを作りたくない美神さんとくえすは苦虫を噛み潰したような顔をしていたけど、ナイチンゲールさんが睨みを聞かせていれば躑躅院の提案を受け入

れるしかなかった。

【はい、ゆっくり息を吸って、はい、吐いて】

「あいたたたたッ!!! もうちよつと優しくッ!」

【それだけ弱つていると言う証拠です。ゆっくりとりハビリに務めなさい。はい、捻りますよ】

「ま、まつ……うぎゆううーっ」

美神さんがナイチンゲールさんに物理的に曲げられているのを見て、あれ次私なんだよなあと思わず遠い目をして天井を見つめる。

(美神さんは結局どうなるんだろ?)

メフィストと高島の悲恋——1000年前に起きていた私ルシオラと横島の恋愛と似たような出来事。その記憶を美神さんが知ったらどうなるんだろ? 今の関係性と変わってしまうのだろうか……私はそれが不安でしようがなかった。

「……ん? ちゃん? 蛭ちゃん? 大丈夫?」

「え。あ……は、はい。大丈夫です。すいません」

琉璃さんに何回も声を掛けられているのに気付いて、呼びかけにすぐ答えれなかった事を謝罪する。琉璃さんは私の様子を見て、平安時代での戦いの後遺症と思つたのか無理はしなくていいわよと声を掛けてくれた。

「ちよつと考え事をしてて」

「横島君の事よね。まだ目を覚まさないのよね」

「……そうなんですよ、流石に心配で」

熱は引いたけど、これで2日目も眠り続けている横島の事が心配だと言うと琉璃さんもそうよねと呟いて、私の隣の座布団に座った。

「横島君もそうだけど、紫ちゃんも心配だわ」

琉璃さんに言われて、自分が横島の事しか考えていなかったことに改めて気付いた。横島が昏倒し、その側を離れない紫ちゃんも食事も必要最低限で衰弱の一途を辿っている。

「みむー」

「ぶぎゃ」

「う、うん。食べる、食べるけど……食欲ないの」

【のぶー!】

「う、起きたらお兄さんに怒られるかな?」

【のぶのぶ!】

「わ、判った。食べるね」

チビ達がいることで何とか食事をしてきているけどそうでなかったら、多分横島が

起きるまで紫ちゃんは食事をしなかつただろう。

「言つておくけど、蛍ちゃんも同じだからね？」

「……すいません。判つてはいるんですけどね」

かく言う私も食欲がまるで無く、朝と夜にお粥を少量食べるだけで終わつてしまつて
いる。琉璃さんに指を突きつけられ、すいませんと謝る事しか出来ない。

「あ、くえす、小竜姫様、ビュレトさん、お帰りなさい。首尾はどうです？」

「結界とかを強化しておきましたから、雑霊や悪霊が寄つて来ることは無いですわよ」

「これで一段落でいいだろ。またメドーサがつかいっぱしりになつたが」

「メドーサが一番早いですしね」

——メドーサさん可哀想ね、横島の事を心配していたけど天界と魔界を行ったり来たり、
少しくらいお見舞いさせろつて叫んでいたのもわかる。

「茨木童子の事つてどうなります？」

もう一つ気掛かりなこと、平安時代からついてきた茨木童子と酒吞童子の事を尋ねる。
鬼としては最上位の知名度、姿形は子供でもその力は上級神魔に匹敵する。

【そおいつ!!】

「う、うがああーっ！もう一回！もう一回勝負だ！」

【良いですとも、何回でも遊びましょうぞ!】

今は牛若丸と簡易のサツカーで遊んでいるけど、その気になれば京都の街なんて一瞬で火の海に出来るレベルの鬼なのだ。彼女の取り扱いは神魔の中でも非常にデリケートな問題になるだろうと思っただけだ――。

「お咎めなし、横島さんの側においておくようにとのことです」

「確かに鬼としては危険な部類だが、横島に懐いていけば積極的に横島を守ってくれるだろうとオーデインと竜神王は決断を下した」

「……それはそれで良いんですけど、思ったより……そのスムーズに行きましたね」

英霊でいえば反英霊の極地みたいな茨木童子を良く受け入れることを決定したと思うと言うと小竜姫様が苦笑しながらその理由を教えてくださいました。

「清姫様とシズクさんですよ。1000年前の出来事が書き換わったから、発言力が段違いになってるんです」

「……マジですか?」

「大マジだ。下手をすれば先代竜神王まで連れ出してくるぞ」

高島の処刑に怒り狂い京都を焼いたがどう変わったのかは判らないけど、少なくとも平和的な意味でその名前が有名ならそれに越した事はないかな?

「起きたあ!お兄さん起きたよーッ!はやくー!ー!!」

屋敷の中に響いた紫ちゃんの悲鳴に屋敷にいた全員が横島の部屋に走る。

「…………ふああ…………もふもふだ。温かくて眠くなるなあ。あふ」

「二「寝るなあツ!!」二」

増えたりぼーと子狐フォーム、子犬フォームのシロとタマモ、チビとチビノブ達に埋もれてもう一回寝ようとしていた横島に私達が思わず寝るなど叫んだのは言うまでも無い…………。

くくえす視点く

横島が目覚めた。それだけで屋敷の雰囲気が一気に明るくなったように感じた、つくづく横島はムードメイカーという事を思い知らされた気分だ。

【はい、口を開けてください】

【あー】

【喉の炎症などは無し、はい、では後を向いてください】

【はーい】

今は横島は診察中だが、それでも起きて動いていると言うだけで安心感がある。あの

まま眠るように息を引き取るのではないかという不安が全員の頭の中にあつたからだ。急性魔力中毒、霊力枯渇による死の多くは眠るように息絶える事なので、その最悪の可能性はどうしても頭から離れなかった。

【はい。とりあえず、今は大丈夫なようですね。何か違和感等がありましたら教えてください。それと数日の間は絶対安静です、良いですね】

「チビ達とかと遊ぶのは？」

横島の周りでボールや棒を抱えて尻尾をぶんぶん振っているチビ達を見て、ナイチンゲールはにつこりと笑う。

【絶対駄目です】

がぼーんつと言う効果音が出てきそうな顔でボールや棒を落とすチビ達。何時も思うんですけど、チビ達って表情が豊過ぎますわよね……。

【2〜3日で霊力が回復すると思うので、それまでの辛抱です。良いですね、散歩などは禁止です】

「はーい」

主治医に言われては横島も降参するしかないのか判りましたと返事を返していた。

「紫ちゃん。チビ達と遊んでくれる？俺ここで見てるからさ」

「うん！判った！いこチビ！」

「吾もいくぞー!!」

「みむー♪」

「びぎー♪」

【ノブブブー♪】

横島本人は遊んでくれないけど、横島が見ていると言うだけで一気に元気になりましたわね。横島自身も遊んでいるチビ達を見て穏やかな表情をしていますし、安静にしているように言っているのも念には念を入れてるって感じなのかもしれないですわね。

「あ、あの。清姫様、そのこちらはお待ち帰りを」

「何か問題でもありますか?」

「い、いえそのですわね。あの——」

「問題ありませんわよね?」

「……はい」

小竜姫が清姫に言いくるめられてますわね。一体何を持ってきたのかと思いつながら玄関先に視線を向けると龍に引かれた牛車が3台ほど停まっていた。

「……ほう、これは良いな。霊力の回復と霊体の強化に役立つ」

「でしよう? お爺様に頼んだから快く用意してくれましたわ♪」

「……あの爺も偶には役に立つな」

「ええ、持つべきものは権力者の親族ですわ」

ここから見るだけでも尋常じゃない靈力や神通力を秘めた食材ですわね……横島に食べさせて少しでも早く回復させようという考えなのでしょね。まあ、それに関しては私は反論も無ければ異論も無い。早く横島が回復してくれたほうが私に取っても都合がいい——ただ気になるのは元から清姫が横島を見る視線は普通ではなかったけれど、戻ってきてからは更にその瞳に宿る狂気の度合いが増していると言うことでしょうかね。

（一体平安時代で何があったのやら）

茨木童子の事は聞いたが、どうして横島が狂神石に飲まれたのか、そして何があったのかに関しては美神も蛍も口を閉じている。横島も起きたのだから、それに関しても話を聞きたいと思いつながら中間管理職の小竜姫の背中が煤けているのを無視して、ビュレト様と結界に関しての話聞きに行こうとしていると美神の部屋から蛍と美神の話し声が聞こえて足を止めた。

『それでその美神さんはその……』

『ないない、1000年前の私の前世の魔族が横島君の前世と恋仲だったとしても、私にそういう気持ちはないわ』

『本当……ですか？』

『本当よ。嘘は言わないわ、それに私に取っては蛍ちゃんも横島君も可愛い弟子なのよ。その弟子との関係性を壊すほど、私は馬鹿じゃないわよ』

「なるほどね……ギクシヤクしているのはそこでしたか」

美神と蛍がどうも距離感を計り損ねているのは感じていましたが、そういう事情だったのかと判った。確かに前世同士が好きあつていたと判れば、蛍とすれば気が気じゃない。正直私も本当か？と疑っている気持ちがない訳ではない。美神は横島にかなり甘いですし……そんな事を考えていると琉璃と目が合った。一瞬私も琉璃も気まずそうに目を背けたが、すぐに視線を合わせた。

「さっさと西郷さんと美神さんくっつけましょうか？」

「ですわね。ちよつと手を回しなさい」

「OK」

ライバルを確実に蹴落とせるタイミングを見逃すほど私も琉璃も甘くはない、西郷も美神も私達の勘では互いを思い合っている様子なので、さっさとくっつけて蹴落としてしまうという目的で私と琉璃は結託するのだった。

く小竜姫視点く

良く晴れた空を見つめながら私は深く深く溜め息を吐いた。

「はあ〜〜〜」

過去が変わった事で清姫様が囚人として投獄されたという歴史が消えたのは喜ばしい。やっぱり龍族の中でも指折りのエリート、そして貴人だ。罪人ではなく、龍族の姫として扱われているだけでも私としては本当に喜ばしい。

「だけどやりすぎですよ……」

龍族の最上級階級でなければ口に出来ない天界でも高級な肉と魚、そして野菜の数々。そしてそれに加えて、霊薬までも大量に運び込まれている。以前では罪人として龍族の姫だったとしても権力の無いお飾りの姫だった清姫様だが、そこに今は龍族の姫としての十分の後ろ盾を得た。恐らく清姫様は自分の血筋と立ち位置を十分に使うだろう——横島さんに食べさせる為の食料に薬……職権乱用と言われても当然の行為だが、先代の竜神王様の孫娘と言う立ち位置の清姫様にそれを指摘出来る者はいない。

(でもこれは追い風になる)

横島さんの立ち位置は今回の件で更に危うい物になってしまった。狂神石の力に飲み込まれかけたと言う事が公になれば、横島さんを排除するべきという声も当然が上がるだろう。その時に先代の竜神王様の孫娘である清姫様が背後についていれば、龍族の

動きはある程度封じられる。

(後はブリュンヒルデさんとオーディン様次第)

天界での横島さんを守る基盤は出来た。孫馬鹿で有名な先代の竜神王様がバツクについていると判れば血気盛んな若い龍族だったとしても、横島さんに牙を剥くりスクの高さを考えて動くことはない。そして天界で守りの基盤が出来た間に魔界も準備を整えてくれれば横島さんの身の安全は確保出来たも同然。

「気は重いですけど、これで大分状況は良くなつたと言えますよね」

清姫様が余りにも横島さんに対して想いが強すぎるが……それが横島さんを守る事に繋がれば良い。

(……そ、それにその……うん、大丈夫)

清姫様が本妻となつたとしても妾くらいなら私にもチャンスがあるので、1人頬を紅く染めていると背後に凄まじい神通力と魔力を感じて、一瞬で思考を切り替えて反射的に神刀を振るつたのだが……。

「な、ななな、なああああああッ」

神刀を指一本で受け止めている少女を見て、私はおもついきり上擦つた声を上げてしまった。何故ならば、そこにいたのは、今この場に最もいてはいけない人物——いや、神魔だったからだ。

「うんうん、良い太刀筋だよ。横島君への危険性を考えて排除しようとするのは好感が持てるよ」

神魔の中で触れてはいけない者——「ルイ・サイファー」様が私の神刀を指一本で受け止めていた。

「太刀筋も鋭い、うむ。天界も良い人材が揃っているな！良い事だ！」

「は、はわわわわッ!? な、何をするのだわッ!？」

その後で上機嫌に笑う少女も腰を抜かしてへたり込んでいる少女も私よりも遥かに格の高い女神。その姿に私は目を大きく見開き絶句した、そしてどうか間違いであつて欲しいと思つたが目の前の光景は変わらず私の目の前にある。

「そう警戒しなくても良い、私達は横島君のお見舞いに来た。それだけなんだからね」

私の神刀を普通につかんで私の腰の鞘に戻してルイ様は楽しそうに笑つた。

「あの2人は私の連れだ。身分は証明する、通してくれるよね？小竜姫？」

「は、ははははははい……お、お通りください」

ルイ様に言われれば私に逆らえる訳が無く、ルイ様とお連れの2人が屋敷の門を潜るのを見届け、その場にへたり込んだ。

「誰か助けてえ……」

ほんの僅かな時間で悪夢のような展開になつてしまった。こういうのは私ではなく、

ヒヤクメの役割なのにといいながら私では処理しきれない異常事態に心から助けると
呟くのだった……。

平安大魔境 おまけ その3へ続く

平安大魔境 おまけ その3

平安大魔境 おまけ その3

くブリュンヒルデ視点く

人間にとっては禁忌の地、触れていけない物として神魔が存在しますが、神魔にとつてもアンタツチャブルという物は数多存在します。

その中で最も危険度が高い存在——それが「明けの明星」事、ルイ・サイファア様。

次に神魔の両方相手取り、10にも満たない数で神魔を全滅寸前にまで追い込んだ「魔人姫」

そして最後に古の神々である。

今の神魔よりも遥かに強力な力を持ち、簡単に人間界を滅ぼせる存在として決して触れてはいけないと言われているそれらの存在が……。

「やあ、横島君。近くを通りかかったから遊びに来たよ」

「なんだ、調子が悪そうだな。大丈夫か？」

「こ、これ、お見舞いなのだわ」

「わあ、ありがとうございます。嬉しいです」

……普通に横島のお見舞いに来ているといふ事実には私は卒倒しそうになった。美神達もその顔から血の気が引いている、唯一平気そうにしている横島が本当に人間なのかと思ってしまうレベルだ。

(とういかやはり彼女は……)

ルイ様が連れてきている金髪で童顔の少女。見目は愛らしく、毒気なんて感じられない天真爛漫な少女に見える。しかしルイ様が普通の人間を連れてくるわけが無い。

(恐らく彼女が……魔人姫)

私がネロと名乗った少女を観察しているとネロと目があつた。その瞬間心臓を驚ぶかみにされたような威圧感を感じた。

「ネロちゃん？ どうかした？」

「ん？ いや、何でもないぞ。ただ見慣れない顔がいるなあと思っただけだ」

「ああ、ブリュンヒルデさんかな？ 結構お世話になってるんだよ？」

「そうか、ふーん……そうなのか」

逆に観察されるような視線を向けられる。横島が普通に対応してなければ悲鳴を上げてしまいそうになった……光さえ届かない深遠。それを覗き込んだような恐怖を覚えた。どうして横島はあの3人と向かい合つて平気なのか私には不思議でしようがなかった。

「横島の友達か？」

「お兄さんのお友達？」

「うん、レイさんと凜さんとネロちゃん」

茨木童子と紫ちゃんが普通に横島の背中に抱きついて、茨木童子は右肩から、紫ちゃんは左肩から顔を出して3人に視線を向ける。

「茨木童子だ、よろしくな！」

「紫だよ。よろしくね！」

……どうもあの3人の重圧を感じていないのは、横島だけではなく茨木童子と紫ちゃんもだった。余りに気軽い声にレイ様が一瞬驚いた顔をしたが、すぐに満面の笑みを浮かべた。

「よろしく。レイ・サイファード」

「うむ！」

「よろしくねー、お姉さん」

普通にレイ様と握手を交わしている茨木童子と紫ちゃんの姿に私は初めて類は友を呼ぶという本当の意味を知った。

(天然トリオ……とでも言えば良いんでしょうかね)

色々考えているでしょうが余り意味の無い事を考えている横島と、深く物を考えない

茨木童子、そして純粹で細かいことを気にしない紫ちゃん。多分この屋敷の中で全く重圧を感じていないのはこの3人だと思う。

「……まあ、人数は増えたが時間が時間だ。昼食の準備をするか」

「おお、良い時に来たな！ 余も貰うぞ」

「そうだね。私もいたどころかな」

……まあ、そうですね。帰るつて事はまずないつて判つてましたけど……ルイ様と一緒に食事とか絶対味が判らないと思うんですね。ビュレトさんも遠い目をしているので確実に考えている事は一緒だと思う。

「横島は料理はしないの？ 前のオムライス、凄く美味しかった」

「あーすいませんね。俺今動けないので、また今度に」

一瞬古の女神が何を言ったのか理解出来なかった。え？古の神々にオムライスを出した？というか、横島が料理を出来ると言うことにも驚いた。

「じゃあ今度を楽しみにしているのだわ」

ぱあつと華の咲くような顔をしている古の女神を見れば社交辞令などではなく本当に楽しみにしているのが良く判った。横島が本当に何者なのか……実は人間じゃないつて言われても私は全く驚かずに受け入れることが出来ると思うのだった……。

く琉璃視点く

ルイさんが来ただけでも発狂しそうなのに、それと同等の女神が2人とか本当に辞めて欲しい。

(て言うか、横島君の口振りだと普通に何回も遊びに来てるのよね?)

横島君の周りの境界とかかなり強化しているし、破られたら判るようになっているんだけどそれらの痕跡は無かった。それらから考えられる結論は1つ——格が違うと言うことだ。

「と言うか、横島。あんた料理できたの?」

「普通のは出来るぞ?」

「し、知らなかったでござる……」

私達が警戒している中。タマモちゃん達が横島君に声を掛けた。シロちゃんは何にも考えてない感じだけど、タマモちゃんは警戒はしている。

「と言うか、料理作れるのなら私達にも今度作りなさい」

あくまで普通に、普段通りに振舞うことが私達の生死を分ける。くえすもそう判断したのか横島君にそう声を掛ける。

「ふふん、お前は横島に料理も作って貰った事が無いのか。横島のオムライスは美味

かったぞぞ？」

ネ口の挑発に思いつきり青筋を浮かべるくえす。お願いだから堪えてと心のそこから思った……というか、くえすの煽り耐性が余りにも低かった。

「そんなに大層な物じゃないですけど、食べたいって言うなら作りますよ？元氣になつてから」

横島君が不味い状況になっていると判断したのか、料理を作ると口にした。

「楽しみにしてますわ」

「あ、でもあくまで普通の料理ですからね？過度な期待はしないでくださいよ？」

あくまで普通の男子高校生が作れるレベルの料理だったとしても、横島君が作つてくれると言うだけで私達は興味を持っていた。

「それならワシも食べるからな！」

【私もです】

「横島の料理って私も興味があるのよね」

皆が口々に横島君の料理に興味があると言うと横島君は困ったような、それでも楽しそうな顔をして笑った。

「じゃあ皆で食べれる何かを作ろう。大阪の伝統の味を作らせ」

大阪の伝統の味と言うと——確実に好み焼きだと思うけど、本場の大阪の人が作る

お好み焼きって凄い興味があるわよね。

「じゃあその時は私も食べに来よう」

「余もだな！」

……なんか今回と同じで味とかが全然判りそうに無いけど、横島君が楽しそうだから良い……のかな？

「みむうー」

「チビは今日も元気ね、良い子良い子」

「みむう♪」

「ぶぎぎー♪」

【ノブノブー♪】

……いや、凜さん凄くない？私チビが横島君以外に懐いている所なんて殆ど見たことないんだけど……

「……なんで？」

蛍ちゃんの何でって言葉がこんなにむなしく聞こえたのって初めだと思っわ。横島君と殆ど一緒にいる蛍ちゃんに今だ懐かないのに、何故凜さんに懐いているのか謎でしようがない。

「ほら、横島君。私とも仲良しだ」

「み、みむうう……」

「あのすいません、チビを苛めないでくれますか？」

ルイさんに震えながら擦り寄り寄るチビ。めちやくちや怯えているし、震えている。多分死んだ目をしている小竜姫様達の心境を今一番正確に現しているのがチビなんだろう。なとルイさんの手の中でめちやくちや怯えながら、擦り寄っているチビを見て私はそう思うのだった……。

くシズク視点く

清姫と共に昼食の準備をしながら大広間から聞こえて来る横島の声を聞いて、私はやつと合点がいつていた。

「……私が目的も無く出かけていたのはあいつらが原因なんだろうな」
「多分私もですわね」

ルイ・サイファー。神魔の中で触れてはいけない、近づいてはいけないとされる者――そんなやつらのメイドが横島に預けられているのだ。普通に考えて横島の事をルイが相当気に入っているのは明らかだが、まさかここまでとは思っていなかったというのが

本音だ。

「大丈夫なんですかね？あんなのに魅入られて」

「……まあ今の所は害はないだろう」

ルイは己の興味を満たすこと、そして楽しむ事を最優先にする。横島を気に入っているのは、横島の周りで起きる出来事、そして横島の周りに集まる人外を見て楽しんでいるのだろう。ちらりと厨から大広間を見ると流星に布団には入っていないが、座布団の上には座りひざ掛けを掛けられた横島が楽しそうに笑っている。

「横島様は本当に楽しそうですわね」

「……あいつにとつては種族とかはどうでもいいんだろう」

自分の側に集まってくれて、そして楽しく過ごす事が出来れば良い。結局の所、横島は寂しがりやで、その寂しさを癒してくれる者。自分の側に寄り添ってくれる相手を欲しているのだろう。

「……歴史が変わってどうだ？」

「お爺様に頼み事がしやすくなつたのと横島様への愛が溢れておりますわ」

「……それだけじゃないだろ」

私が言いたいのはそういう事では無い。清姫はふうつと小さく溜め息を吐いて、嫌そうな顔をしながら口を開いた。

「貴女にすこーしだけ好感があるんですよね」

「……吐き気がするな」

「こつちの台詞ですわ」

私と清姫は水と油、決して相容れない存在の筈なのに、千年前の出来事が大きく響いているのだろう。前までは顔を見るのも嫌だったのに、今は少し話をしてもらいたくはないかな？

「はあ……なんでこんなことになるんですかね」

「……横島を好いてしまった段階で諦めろ」

横島の側にいれば、側にいたいと願えばこうなるのは必然だった。喧嘩するほど仲が良いとか言っておきながら、私と清姫が口論しているのを見て悲しそうにしていた横島だ。横島を悲しませたくないと思えば、そして1000年前の高島の死に対応出来なかった事を考えれば、私達同士の相性の悪さなんて関係ない。横島を死なせない為に協力する必要があったという結論に辿り着くのは当然の事だった。

「横島様はきつと太陽なのでしょうね」

「……そうかもな」

明るく照らして包み込んでくれる。その温かさを知れば、横島から離れたくないと思ってしまう。そう思ってしまうえば、離れたいと思っても離れる事が出来なくなってしまう。

まうのだ。

「こんにちわ！帰ってきたと紫に聞いたので遊びに来ました」

「天魔ちゃんいらつしやい」

「天魔ー♪」

庭から聞こえてきた天狗の姫の楽しそうな声を聞いていると、申し訳なさそうに天狗が食材を手に厨に入ってきた。

「あのシズク様、清姫様。お食事時に申し訳ありません」

「その天魔様が横島殿の所に行くと駄々を捏ねられたので……こちらその食材です。お納めください」

深く頭を下げて食材を置いていく天狗達を見て、私も清姫も諦めたように溜め息を吐いた。

「普通の料理は止めますか」

「……だな、味噌汁だけ仕上げるから、それまで頼む」

「はいはい、判りましたよ」

どの道この人数じゃ普通に料理を作っていたら時間ばかりが過ぎてしまう。ここは材料を適当な大きさに切り分けて、バーベキューみたいにしてしまったほうが早いと判断し、私は清姫に下拵えを頼み、作りかけの味噌汁を仕上げる為に冷蔵庫から味噌を取

り出すのだった……。

くエレシユキガル視点く

横島達が滞在している屋敷の庭に石釜が作られ、その上に鉄板が置かれてばちばちと音を立て、私含めてルイ達皆が鉄板の周りで肉が焼けるの楽しみに待つ中。ちらりと後に視線を向けると横島だけが簡易の机と椅子に腰掛けて、1人の女性にしかかられている。

【横島はこの机と椅子から離れない事、良いですね】

「駄目ですか？」

【駄目です。全く何故調子が悪いというのに立食なんて……確かに良い天気で気持ちも判りますが……もう少し自分の体調を考えることです】

横島は体調が悪いと言うのは知っていたので、尋ねてきたタイミングが悪かったかもしれないと暗い気持ちになっていると、魔人姫に背中を叩かれた。

「な、なにをするのかわ？」

「一々暗い顔をするな！楽しんでる顔を見れば横島も元気になる。そういうものだ、な、横島！」

「勿論ですよー。でもたまにこっちに来てくれると嬉しいでーす」

楽しんで食べてくださいと言いつつも、1人だけ机というのは寂しいのでこっちに来てくださいという横島。その顔は明るく、仲間はずれを悲しんでいるようには見えな
い。その顔を見ると、悪いことをしたと俯いているのは余計に横島を悲しませているよ
うな気がしてきた。

〔ノブノブー♪〕

「ごはんごはん♪」

チビノブ達と紫ちゃん達がお皿を持って横島の元に向かう。いやチビノブ達だけ
じゃなくて、初めて見る黒い魔女も野菜や肉を取ったら横島の方に早足で向かってい
る。

「これじゃんけんで負けたら地獄過ぎるんだけど」

「30分ごとだから頑張りましょう」

お肉や野菜を焼いている蛍達は鉄板の前で大汗をかいている。

「大丈夫？はい、これお水」

可哀想になってきて水を渡すと2人とも笑顔でそれを受け取って口にする。

「ふーありがと、でも次はじゃんけんで負けないからね」

「焼いてると食べている所じゃないのよ、皆食欲凄いから」

確かにその通りだと思う、焼き係りになると食べている所じやないと思う。最初のじゃんけんで勝てて良かったと少しだけ思いながら、お肉と野菜を自分の皿の上に乗せる。

「あー」

「はい、あーん」

「あー」

「はい、あーん」

横島が紫ちゃんや天魔ちゃんの口にお肉を入れて上げている姿を見ているととても穏やかな気持ちになってくる。

「お肉が足りないでござるよー」

「野菜を食べなさい、馬鹿犬」

「狼でござるよ!?!」

「うめー、こういう風に食べると肉を焼くだけでも美味しいのー」

「ですね。あ、美神殿、蛍殿、焼くペースが遅いですよ?」

「2人で間に合うかあッ!!」

遅いと言われてトングを片手に怒鳴り声を上げる美神と蛍。2人ともがんばっているのに、遅いつて言うのは酷いと思うのだわ。

「はい、こつちでも焼き始めましたよー」

「肉が足りないのはこつちに来てくださいねー」

2人だけで焼いていては間に合わないかと判断したのか神魔2人が鉄板の準備を終えて、こつちでも焼いてると声を掛けると人の波が2つに分かれる。

「ふふ」

「なんだい？そんな面白いかい？」

「私、こういうのは初めてだから楽しくて面白いわ」

「そうかい、じゃあ私は誘って正解だった訳だ」

ガゼルと鹿は違うのかと考えて鹿公園にずっといたら、この楽しさは味わえなかったと思うと誘われて良かったと思う。明るい太陽の下でこうやって食事をするのがこんなに楽しいなんて知らなかった。

「あー」

「いや、ネロちゃんは自分で食べれること無い？」

「貴女何してるんですの？」

「駄目か？」

「駄目です」

「不公平だぞー」

紫ちゃん達と同じ扱いをしろーと言っている魔人姫を見て思わず噴出した。それと同時にこの楽しさは横島に出会わなければ味わえなかったと思いつながら私は手にしているお肉を口に運ぶのだった。

平安大魔境 おまけ その4へ続く

おまけ その4

平安大魔境 おまけ その4

（琉璃視点）

茨木童子と言えば平安時代で酒吞童子と共に平安京を荒らしていた非常に強大な鬼、と言うのが霊能者の常識である。恐らく現代のGSでは勝てないとまで言われる強力な鬼であり、力強い大男等を想像している人が多いと思う。勿論私もそうだと思う。た……だけど事実というのは時に残酷である。

「てやあー！」

「ぬあつたあッ!?!やるな、紫ッ！」

……今屋敷の庭で童女に紛れてサッカーで戯れている少女が茨木童子なんてきつと誰も夢にも思わないだろうし、茨木童子って言われてもきつと誰も信じないと思う。

「2人とも頑張れー」

横島君の声援に2人とも満面の笑みを浮かべている、信じられるかしら？あの可愛い女の子が2人とも人間じゃないとか絶対誰も信じないと思うのよね。

「ふいっいッー」

「よっしッ！ てーいッ！」

「なんのお！うりぼー！」

「ぴぐうッ！」

人造神魔と日本の歴史上1・2を争う鬼が日本家屋で猪とサッカーをしている……。

「美神さん。これどういう状況ですかね？」

「私に聞かないで」

歴史研究家とか霊能者が確実に発狂するであろう光景——いや、多分どんな人間が見ても発狂しかねない光景である。正直に言うとな私もかなり来ているのを感じている。

【ノッブノッブ♪】

「みむうー♪」

「頑張れ紫ー！」

天魔ちゃんとチビノブ達が2人の応援をする光景を見て私は自分の常識が崩れ落ちそうになるのを感じた。

「横島と一緒にいるのに常識は必要はないわ」

「いつだってせんせーは常識を超えていくでござるからな」

「それ褒めてる？貶してる？」

「褒めてるわ(ぎぎる)」

そっか、このレベルになれないと横島君と一緒にいるのって難しいのね……。美神さんと蛍ちゃんが遠い目をしているのってこれが原因なんだって判った。

「それで実際どうするつもりなんですか?」

「もう横島君の家に居候で良くない?」

横島君には懐いているけど基本的に人間が嫌いらしいので、引き離す方が危険だ。となれば、もう横島君に預けてしまえばいいんじゃない?と半分考えるのを放棄してくえすの問いかけに返事を返す。

「琉璃、考えるの放棄しないでくれる?」

「正直私は紫ちゃんの事で手一杯ですよ」

紫ちゃんが自分の能力をコントロール出来るように妙神山に行かせるように説得するだけでも手一杯だったのだ。そこに茨木童子なんて面倒見切れるわけが無い。

「人化でもして貰うつもりですか?」

「まあそれがベターかな、ベストではないけど」

ベストは神魔に預けることだけど横島君も茨木童子もきつと了承しない。それならばリスクは覚悟で横島君の家に預けるしかない。

「横島の家がどんだん魔窟になるわ……」

「何を言ってるの蛍ちゃん。今更よ」

昨日昼食を食べるだけ食べて帰って行ったルイさん、凜さん、ネロさん。その内の一人でも日本を終わらせる事が簡単に出来る強大な神魔だ。そんな最上級の神魔が入り浸る横島君の家が魔窟でない訳が無い。

「ベルゼブルも入り浸ってるしな」

「ルキフグス様もいますから、下手をすれば日本で一番安全な場所なのではないですかね？」

「……ですなぁ……ふう」

ビュレトさん達の話聞いて私はますます横島君の家が魔窟だとおもった。と言うか、ルキフグスって魔界の重鎮じゃない……なんでそんな人が横島君の家でメイドをやってるのよ……と思わず叫びたくなった。

「大丈夫ですか？小竜姫様」

「はい……なんとか……でも疲れました」

疲労困憊という様子の小竜姫様。その背中には中間管理職の悲哀がこれでもかと滲んでいた。その姿を見て、何と言えば良いのか判らず、美神さん達と困惑していると今この場で一番聞きたくない人物の声が私達の耳に届いた。

「ふふ、可愛いですね」

「本当だよなーあれ？美弥ちゃん何時の間に来たの？」

「ついさっきです」

横島君の隣に当たり前のように座っている躑躅院美弥。その姿に私達は思わず腰の中ほどまで上げていた。

(……何時の間に現れたのか全然判らなかった)

私だけではない、くえすも美神さんも信じられないと言う顔をしている。躑躅院美弥は霊能者としての能力はないはず——躑躅院の妹という事だけけど……何か秘密があるのかもしれない。でなければ私達の感覚をすり抜けて横島君の隣に座っているなんて事はありえないからだ。

(躑躅院美弥……か、何者かしらね)

躑躅院に関しては余りにも謎が多すぎる——しかしそれは容易に踏み込めばこちらの首を取りかねない魔境だ。1000年前から暗躍を続け、そして日本の政財界等にも手を回している。ある意味では六道家に匹敵する力を持っていると言っても過言ではない、陰陽寮を解体し、GS協会の傘下に入ると聞いてもやはり警戒を緩める事は出来ないだろう。

「今度東京に遊びに行きますね」

「うん、その時は訪ねてきてくれると嬉しいな」

「はい！必ずお伺いしますね」

横島君と楽しそうに話している躑躅院美弥は歳相応の少女に見える。だけど私達に加え、神魔であるビュレトさん達にも気付かれなくて横島君の隣に座っていた事を考えると普通の少女と考えるのは余りにも危険だ。その何も判らないと言う様子自体が擬態の可能性もあり、私達は躑躅院に対する警戒を強める事を決めるのだった。

くくえす視点

「そろそろ移動しても大丈夫ですね。ですが、東京に帰ったら詳しい診察を受けて貰います。では私はこれで」

ナイチンゲールの了承も得た事で明日の夜には東京に帰ることが決まり、今までゆつくり観光も出来なかつたので京都の街を散策することになったのですが……。

【きゆう……きゆううーん……】

背後から付き纏う悲壮感さえも伴う動物の声。しかしここで振り返ってはいけな……振り返つてしまえば、そこであの神獣の赤子である神鹿は絶対に横島から離れなくなるからだ。ここは非情でもいい突き放すしかないのだ。

「美神さん」

「駄目よ。これ以上ペットを増やさないで」

「琉璃さん」

「流石の私も怒るわよ?」

美神と琉璃に頼もうとした横島が最後までいう事無く叱られて沈黙する。今私達の後ろには白い毛並みの子鹿が付き纏っていた。勿論横島に拾われたくて付き纏っているのだが、東京で鹿を飼うなんて不可能である。しかもこうしているだけで神通力を放っている神獣なんて飼える訳が無い。だから、こうして無視をして諦めてもらうしかないと思っていたのですが……。

「お父様から許可を得ました!私が飼います!」

「天魔ちゃん!ありがとーッ!」

ふんすつと胸を張る天魔を抱き上げ、横島が子鹿の元へと走った。

【きゆう!】

「あんな、俺の家じゃ。お前は面倒見れないんだよ」

【きゆうん……】

「だけど天魔ちゃんの所にいたら、今度遊びに行けるんだ」

【きゆう!】

「と言う訳で、子鹿さん。私の友達になりませんか?」

【きゆうきゆうん♪】

天魔と横島の回りをくるくると回る子鹿。どうも天魔の使い魔になることで子鹿は横島に会えると認識して、天魔の使い魔になることを了承したようだ。

「良いんですの？」

「横島君の家に来なければ良いわ」

「正直乙事主に進化したうりぼーだけで私達は手一杯なのよ……」

横島を慕う小動物は見た目は可愛いが、その強さは桁違いだ。これ以上増えたら困ると美神と琉璃は言いますが、大事な事を忘れていると思うんですよね。

「モグラちゃん忘れてませんか？」

「絶対人化習得したら帰って来ますよ」

忘れていたと言うか思い出さなくなかったんでしようね。今妙神山で修行しているモグラ、あの規格外の龍族の赤子。人化出来ないと言う理由で横島の手元を離れているが、あれも絶対横島の家に帰ってくるでしょう。

「それに紫ってあれでしょ？ 妙神山で修行するのは認めただけど、昼は横島の家にいるって言ったじゃん」

「せんせーは人気者でござるなあ！」

人気者とかそういう言葉で片付けて良い問題ではないんですけどね……。人造神魔の紫は妙神山での修行を認めたが横島が高校から帰宅する時間には横島の家に行く

言つて聞かなかつた。それを認めてくれないならば、妙神山に行かないと言われれば小竜姫も折れるしかなかつた訳だ。

「だが俺はそれで良いと思う」

「私も同じ意見ですね」

ビュレト様とブリュンヒルデがそれで良いと了承した。確かに琉璃や美神には迷惑や負担をかける事になるだろう……だがそれは今の横島には必要な物だ。

「……精神安定になる」

「横島様は子供や小さい動物が好きですからね」

今も天魔や紫、そして茨木童子と戯れているが、その顔には笑顔が満ちている。美神達の言う平安京での狂神石に飲まれたというのが嘘のように思えるが、確実に横島の中に狂神石の狂気は眠っている。

「むむ？これは菓子か！」

「御菓子？私も食べる♪」

「私もー♪」

「じゃあ皆で買おうか、美神さん達も食べますかー？」

笑顔で私達に食べるかと尋ねてくる横島。怒りや憎悪に囚われれば再び狂神石は簡単に姿を見せるだろう、そうならないために横島が心穏やかに笑顔で過ごせる為に紫達

の存在は必要不可欠だ。

「ただなあ、アリスの奴が横島を魔界に誘っているんだよな」

「そういえば、魔界の子供達が自分の使い魔を捕まえる時期が近いですね……多分、その次期に横島を呼び寄せるつもりでしょうね」

ただ必要不可欠なのは判りますけど、魔界の凶暴な使い魔をアリスの所に行った時に連れて帰ってくるかもしれない。そう聞いて、美神と琉璃の目から光が消えた。

「まあ頑張ってくださいな」

「私じゃどうにも出来ないんで」

「鯛焼きはクリームにしてよ」

「拙者は漉し餡でござるよー♪」

アリスの所に遊びに行かせるのは了承したが、魔界の獣を連れて帰ってくるかもしれないと言う事に冷や汗を流している美神達に頑張れと声を掛け、鯛焼きを注文している横島の所に足を向けるのだった……。

〈心眼視点〉

平安時代から戻って来てから沈黙を続けている。心眼は横島達が笑い合う中でも戦いを続けていた。

【言つただろう？闇は消えない、芽生えた憎悪は消えることはない。未来永劫横島の魂の中で燻り続ける】

心眼の努力を嘲笑うかのように、水の中に黒インクを垂らしたように、滲み出るように黒い影が心眼の前に現れる。

「だろ。横島とて人間だ、憎悪や殺意を消し去る事は出来ないだろう……だがそれに横島を支配させないのが、私の役目だ」

黒い影を拘束するように多角形の結界が展開され黒い影を覆い隠した。

【ほう？俺を封じれるとでも？】

「別に封じれるなんて思っていないさ。現にお前は私よりも強い」

小竜姫様の竜気で構成されている私よりも狂神石によって構成された闇の人格の方が力が強い。こうして結界で封印しても、そこから抜け出るのは時間の問題だし、何よりも横島の中に憎悪と殺意が芽生えたらその瞬間に結界は砕けるだろう。

【時間の無駄は止めたらどうだ？】

「それを決めるのは私だ」

月神族のせいで生まれた憎悪と殺意は消える事はない。仮に月神族を見ればその瞬

間に横島は切れ、再び闇に墮ちるだろう。それ程までに横島の月神族への憎悪は深い、今まで綺麗な部分しか見ていなかっただけに、その闇に——いうならばその現実を横島は受け入れられない。ならば少しでもいい、狂神石に抵抗出来るようにするのが私の役目だ。

「少しずついい、闇を横島に馴染ませればいい」

結界の中から少しずつ零れる闇——それを少しずつ、少しずつ横島の魂に混ぜ合わせる。こうする事で、少しは狂神石の力に耐えられる様になる筈だ。

「はっ、お前が手綱を引けると思ってるのか？」

「やり遂げる、私は横島を狂わせない。絶対にだ」

私の竜気で相殺出来る量になるから一気に馴染むことは無いが、時間を掛ければ私もコントロールが可能になる筈だ。

【はっははっ！良いぞ。お前に俺が御せるか見届けてやろうじゃないかッ！お前が一番判っている筈だ。憎悪と愛情は紙一重、お前も狂う、狂うぞ！俺が狂わせてやるッ！ははははッ!!!見物だな、高潔な竜の魂が闇に染まるのを近くで見れるとは、これほどの喜劇はないッ!!!】

横島の姿をした闇が溶け、液状になり結界の中で沈黙する。結界の中から少しずつ、少しずつ零れる闇を私は呆然と見つめた。

「違う、私は……私は……私は横島を守るんだ。闇になんか……染まらない、染まる筈がないんだ……」

私は横島の心を守り、魂を安定させる者……そこに己の感情などない。だから闇に染まる訳がない……そう思っても、闇が残した嘲笑が私の耳から離れる事はなかった。それは自分で見えないようにしていた、己の感情を指摘されているような、言い様のない不快感が私の中に残り続けるのだった……。

（ 枢視点 ）

心配そうに見つめているゴモリーを背後にしてボクは首に巻いているチョーカーを外した。

「うっぎいッ!?!」

「枢ちゃん!?!」

その瞬間に脳を圧迫する凄まじい量の情報の数々に苦悶の呻き声を上げる。ゴモリーが近づいてくる気配を感じて、手を向けて来るなど合図を出す。ゴモリーが近づいてくれば、ゴモリーにひかれて更に情報が増えてしまう。あんな性格でも最上級の神魔だ、チョーカーを外している時に近づかれる訳にはいかない。浮かんでは消える様々な

光景の数々、しかし普段とは違う物をボクは感じていた。

(なんだこれ……)

1つの光景が2つも3つも枝分かれをして、その先で消えていく……未来が分岐する光景は何度も見てきた。しかし、その道中が消えているなんて言う光景は初めて見た。今までと違う何かが起きている……普段の半分も未来を確認出来ない中。ボクは殆ど無意識でチョーカーを首に巻いていた。

「大丈夫?」

「大丈夫じゃない。今回は異常だよ、こんな事があるなんて……クヒヒ……どうなっているんだい」

いつもの様に横島を中心にして事件が起きる事は判った。だけどそのどれもが道中で道が途絶え、どうなっているのかまるで理解出来なかった。

「とにかくだ。早く会長殿達には戻って来て貰わないと困るね」

先の見えない未来は良い、起きる事は判つていてもそれがまだ先の話ならば、そこまで警戒することも無い。だけど横島にすぐ起きるかもしれない事で容認できない物があつた。

「そんなに不味いの?」

「不味いかどうかは判らないよ……クヒヒ。反転英霊と美神達が対峙している光景だけ

じゃね」

黒い鎧を纏った色素の薄い女。それが美神達と敵対していた——ガープによって召喚されたのか、それとも横島と何か関係性があるのか？それはボクには判らない。

「横島は？」

「いなかった。いなかったから焦っているのさ」

美神達の側にも、黒い女の側にも横島の姿は無かった。ボクが見る未来は横島を基点にしている、それなのに横島がいなかった。それは一種の焦燥感をボクに与えていた。何かがあつて、横島が死んだのか、それとも入院しているのか？それともガープに攫われてしまったのか？何が起きたのかは判らない。だけど黒い女がいるときに横島がボク達の側にいない……それが恐ろしかった。横島に何が起きたのか、これから何が起きるのか？不安ばかりが募っていく。

「くひ、しょうがない。六道家に行こう」

「OK、抱き上げるわよ」

ゴモリーに抱き上げられ、ボクは六道家へと向かった。会長がいらないなら、今東京で一番信用出来て、そして横島の為に動いてくれるのは六道冥華しかない。

(どうなるって言うんだ)

ゴモリーに抱きかかえられ、空の上を移動しながらボクは得た情報を必死に整理して

いた。余りにも分岐した未来、途絶えた過程……横島の周りの未来がそこでばつさりと途絶え、そして別の未来に繋がる。

(そんな……いや、きつとボクの考えすぎた)

まるでそう……途切れた場所で1度歴史が途絶え、また別の歴史に繋がる——それが意味するのは1つ。文明の消滅……ガープによって世界が滅んだのか、何が起きたのかはわからないがまるでパッチワークのように別々の光景が繋げられる……そんな悪夢のような光景を見た。

「大丈夫？ 顔色が悪いけど……」

「大丈夫。早く六道家に向かつてほしい……」

余りに鮮烈な光景だった、だがそれゆえにボクの脳裏からその光景は消えようとしていた。それはありえない事である、瞬間記憶能力者であるボクが記憶を失う。それは本来ならば、絶対にありえない事だ。

(修正力……の仕業なのかもしれない)

今思うと普段持ち歩いてる手帳も無かった。それはボクが見た光景を残させない様にする為の修正力なのかもしれない、もしそうならば、世界は1度滅びる事を承認した事になる。

(冗談じゃない)

世界の終焉なんて認めるわけにも受け入れる訳にも行かない。それが修正力から許されないことであつたとしても、ボクはそれを認めない。何をしても世界が定めたそんなクソみたいな結末を受け入れる訳には行かないのだ。

(横島がいない世界なんていらないッ！)

途切れた世界、繋がった歴史。しかし繋がった世界は幾つもあると言うのに、そのいずれにも横島の姿は存在しなかった。ボク達がいるのに、横島だけがいなかった。そんな結末、そんな幸福は必要ない。

(消えるな消えるな……)

だが世界はボクのそんな思いを嘲笑うかのように、ボクが見た光景を消し去っていく……六道家に辿り着き、慌てて受け取った紙とボールペンで書いた1つの光景——空中に浮かぶ時計の前に立ち、蛇が全身に巻きついた横島の姿……だがその目に何時もの穏やかな光は無く、冷酷な光を宿した真紅と翡翠のオッドアイの瞳になった横島が両手に眼魂を持つその姿——もつと見たはずなのに、ボクが覚えていて、そして記録として残す事が出来たのはたった1枚のその殴りかきにも等しい横島の絵だけなのだ……。

平安大魔境 おまけ その5へ続く

おまけ その5

平安大魔境 おまけ その5

く美神視点く

3日程度の予定だった陰陽寮の視察だったけど、平安時代に跳ぶとか、横島君の不調とかでなんだかんだで1ヶ月近く京都にいる羽目になった。躰躰院がGS協会の傘下に入る事を認めたのは良いが、あんな腹に一物所か2つ3つも抱えていそうな狸って呼ぶには若すぎるけど……あんな老獺で琉璃の寝首を搔く気満々の相手を抱える事になった琉璃には心底同情する。

「……ふーん、随分と大変だったワケ」

「なんで私の所に来るのよ。琉璃のどこに行きなさいよ」

私の事務所のソファで我が物顔で座り、京都での出来事を聞いてくるエミに帰れと遠回しに言うのと、エミは報告書を見ながら琉璃からこっちに来るように言われたと返事を返した。

「横島の方で大変なんだから少しは手伝ってあげたら？」

「はいはい、判つてますよ。それで何が聞きたいのよ?」

大体の事はもう報告書で判つている筈。それなのにこうして尋ねてきたって事は公に出来ない情報を求めて来たと見て良いだろう。1ヶ月の間にたまった依頼書を見て急ぎの物から、そうではないものを分けながら何を聞きたいのかとエミに尋ねる。

「横島——あいつ大丈夫なワケ? ちらつと見たただけ……随分と不味いんじゃないの?」

「……そうね。でも小竜姫様達でどうにも出来なかつたのよ。私達に何が出来るのよ」

見る相手が相手ならば横島君の状況は一目瞭然だろう。性質の悪い物に取り憑かれているのと同じ状況だからだ、エミや唐巢先生クラスになればその状態を見抜けない訳がない。

「狂神石じゃないの?」

エミの核心を突いた言葉に私が黙り込むとエミは深い溜め息を吐いた。

「OK、それで判つたワケ」

「今は安定してるわよ」

「別にチクるつもりは無いけど、今まで以上に気をつけないと……どこから情報が漏れるか判らないワケ」

眼魂はまだしも、文珠使い、稀有な妖使いの才能、霊力の物質化——それに加えてう

りぼーの乙事主化に、今回の狂神石の事——その1つでも国際GS協会やバチカンにばれたらやばい案件だ。

「私の方でも協力してくれそうな相手は探しておくけど……気をつける事ね」

「ありがと、困った時は頼むわ」

「はいはい、あーあ。なんでオタクの為に私が骨を折らないといけないワケ」

面倒そうに言いながらも態々エミが尋ねて来てくれたのは私の事——いや、横島君の事を案じての事だろう。良いも悪いも、横島君の存在はとても大きくなってしまってきている……私達がどれほど隠そうとしてもガープとの戦いが激化すればするほどに、横島君の存在を隠すことは難しくなるだろう。

「どこに知られても厄介事にしかならないし……考えるだけで頭が痛くなってきたわ」

神魔と英霊に深い繋がりを持つ横島君は何処の陣営からも喉から手が出る程欲しい人材であるのと同時に、何よりも排除したい存在だ。

これからそれがより如実になる事を想像すると、本当に頭が痛くなってきた。手放してしまえば楽になるが、私には手放すと言う選択肢は無かった。

(あんなの見ちゃったら駄目に決まってる)

私の前世は横島君の前世である高島に出会う事で人らしい感情を得て高島に恋愛感情を抱いた。生憎私には恋愛感情と言うよりも出来の悪い弟を見ているような気持ち

なので、メフィストには悪いけど男女の関係になる事はまずないだろう。その分、横島君を何をしても守ろうという気持ちが強いの。これはきつと蛭ちゃんも横島君をずっと見てきたからで、蛭ちゃんと横島君の間に割り込もうという気持ちが無いのが大きいと思う。だけど守るにしても横島君の周りを取り囲む環境は既に1人のGSで守りきれない状況では無くなってしまっているのも事実。難しいと思うが、信用出来る味方を増やし、善人の振りをして横島君を陥れようとする相手を遠ざける事が必要になるだろう……。

「まずはマリア7世ね。はあ……休んでいる時間なんて無いじゃない」

最重要依頼にカテゴリされる赤と黄色のラインの入った依頼書——マリア7世の来日と、中世でマリア姫に預けたジャンヌ・ダルクの旗を博物館で展示後正式な持ち主に譲渡する為に来日する。AまたはSランクGSによる警護の依頼が出ていた、巷では正式な持ち主とは誰だ?という話題になっているが、マリア7世の言う正式な持ち主とは横島君の事だろう。

「すっごく嫌な予感がするわ……」

ジャンヌ・ダルクオルタの所持していた旗……英霊召喚の触媒としてはこれ以上の物はないだろう。それに横島君とジャンヌ・オルタは性格的にかなり相性がいいように思える……。

「……というか、横島君は基本的にプライドが高い相手と相性が良すぎるのよ……」

横島君と言えば動物と子供って言う印象が強いけど、私からすればプライドの高い相手とも相性がかなり良いのだ。それはプライドの塊みたいなくえすが絆されていて、そして結構な頻度で横島君の家にいる高城……いやベルゼブルを見れば判る事だろう。私自身もプライドが高い方だからわかるけど、こうなんと言うか横島君といると片意地を張る必要が無くて凄く楽だし、横島君も聞きに回ってくれるので愚痴を言いやすいし、無理に話しかけてくることも無いので凄く安心出来る場所でもある。

「……あ、駄目だ。胃が痛くなってきた……」

中世では死に別れ……うん。多分死に別れで良いと思うんだけど死に別れたので良いけど、もし再召喚されたとなれば確実に横島君の家に居座るだろう。そうなれば確実にくえすと衝突するだろうし、蛍ちゃんもまたいじけるだろう。というかそれ以前に反転英霊なんて言う爆弾が横島君の家に居座ることを想像すると胃が強烈に痛くなり、唐巢先生から譲って貰った胃薬に思わず手を伸ばすのだった……。

〈西条視点〉

1ヶ月に及ぶ長期間僕の変わりにオカルトGメンを取り仕切ってくれた教授に素直に頭を下げた。

「すまないね、教授。迷惑を掛けた」

【いやいや、構わないよ。マイボーイの為だ、これくらいの苦労何の問題も無いヨ】

冷静な犯罪界のナポレオンと呼ばれる顔と孫のデレデレとする老人の顔。その2つの顔を使い分ける教授に苦笑しながら椅子に腰掛ける。

「何か大きな事はあつただろうか？」

山になっていると思つたのだが、教授が処理してくれたのだろう。思つたよりもずつと少ない書類に目を通しながら、何か大きな出来事はあつたか？と尋ねる。

【ウン。そうだね……マリア7世の来日と国宝の旗の所有者の件があつたかな？】

「なんて対応してくれたんだい？」

マリア7世がジャンヌ・ダルクの旗を持つて来日すると言うのは日本の警察だけではなく、インターポール、更には国際GS協会等も関わってくる一大イベントだ。しかもその旗を日本に住む正式な所有者に譲渡するとなれば余計に大きなイベントになるのは当然の事だった。

【国際問題にする気かな？賠償金や違約金を払う準備をしておくことを勧めるヨと言つたら引き下がったよ】

「美術品、歴史的価値があるからね。馬鹿な政治家やコレクターは喉から手が出る程に欲しいだろう」

ただ今回の展示もマリア7世がマリア姫の遺言に従つての物で、国外に出すのも大きな問題になっている。しかも、所有者が日本人と言うのもどういうことだという事で議論になっている。

「教授。1つ聞きたいのだけど」

「何カナ？久しぶりにマイボーイの顔を見に行きたいのだけれど？」

ハンチング帽にトレンチコート、そしてマフラーとダンディズムの化身みたいになっている教授。その姿に苦笑しながら、どうしても聞かなければならないことを僕は尋ねた。

「英霊、ジエームズ・モリアーティに聞きたい。あの旗は触媒となりえるか？」

英霊を召喚すると言うのは1回でも成功すれば奇跡と呼ばれるほどの大儀式だ。魔法や魔術に関わる人間がそれこそ血眼になって成し遂げようとしている奇跡——しかし英霊召喚は余りにもリスクが高い、召喚の為の魔法陣に必要な魔力や生命力、そして英霊とは伝説になるほどまでに昇華された武人や豪傑が多い。そんな存在を召喚したら分不相応と言う事で英霊自身に処罰されることもあるだろう。そういう面では横島君は凄まじい奇跡を現在進行形で起していることになる。

（大英霊織田信長、悲運の武将源義経の幼年期牛若丸……そして坂田金時。そのどれもが日本では知らぬ者がいないほどの大英霊達だ）

男として伝承や伝説になっている人物がまさか女だったとは思わない事で有名にはなっていないが、それこそ今世紀の霊能者の中で歴史に名を残すほどの大偉業だ。まあ本人達がメロンパンを貪り、遊びと言って修行に明け暮れているのが幸いだが、それこそ下手をすれば世界中から英霊召喚をしたい魔法使い達が押しかける事態になりかねない。

「なるよ、絶対ね。私と彼女に面識は無いが、同じ立場ならば何をしても召喚される。いや、座を挟じ開けるだろうネ」

「出来るのか？ そんな事が」

「出来るヨ。絶対ニネ」

英霊の座は最上級神魔の転生システムに類似していると聞く、その座にいるオリジナルから分霊が召喚されるのだが……ジャンヌ・オルタという本来存在しない英霊だとそれはどうなるのか？ 分霊ではない、オリジナルが顕現するのではないだろうか？

「マイボーイが行く時は周りの警備をより厳重にするべきだヨ。じゃないとどうなるか判らないからネ」

それこそ横島君一人だけにすべきだという助言をしてくれた教授に感謝の言葉を告げて、僕は机の上の書類に視線を向けた。

「どうしてこう馬鹿しかいないんだらうね……」

所有者の特定と可能ならば金銭による所有権の譲渡等を企んでいる馬鹿には頭痛を覚える。

「真の所有者……そんなの一人に決まっているじゃないか」

横島君がその展示会に招待されているのはリストを見て判っている。そして横島君とあの旗が向かい合うことで間違ひなく英霊召喚は成される……つまりマリア7世が譲渡すると言っている真の旗の所有者——それは反転英霊「ジャンヌ・ダルク・オルタ」本人に他ならない。

「これはとんでもない事になるな……」

下手をすればジャンヌオルタの怒りを買って大惨事になるだろう。しかもかといってジャンヌオルタを傷つけなければ横島君の反感を買うのは確実——完全な詰みに等しい状況に僕は頭を抱えざるを得なかった……。

く琉璃視点く

茨木童子に伊吹という少女の戸籍を与えて横島君の家に下宿していると言う事にして、横島君の母親の遠縁という風にしたが正直穴も穴だらけのとんでもない誤魔化しだと思つている。でも正直横島君の遠縁つて事にしないと、横島君の家に下宿もさせられないし、限りなくブラックのグレイゾーンを突くしか茨木童子を横島君の家に下宿させ

る方法は無かったのだ。

「あー……疲れたあ」

机の上に突っ伏して乙女としては絶対に駄目な呻き声を上げたが、誰も見ていないのだからこれくらいは許して欲しいと思う。

（躑躅院に横島君の事に、マリア7世の来日……もう本当勘弁してよ）

横島君の事は惚れた弱みがあるとしても、躑躅院のGS協会の傘下入りの電撃会見で政治家から電話は続くし、マリア7世の来日が1週間後に控えているとか……もう本当に勘弁して欲しい。

『会長。小竜姫様がお越しです』

少し休もうと思ったけど、どうも休んでいる時間はないようだ。小竜姫様を会長室に通してくれるように頼み、乱れた襟を整えて小竜姫様を出迎える。

「お疲れ様です。琉璃さん」

「小竜姫様もお疲れ様です」

小竜姫様の顔を見ればその顔に濃い疲労の色が浮かんでいるのは明らかで、互いにお疲れ様ですと言葉をかわし現在の状況を確認しあう。

「今の所は竜神王様と清姫様が動いているので天界側から横島さんに刺客が来ることはないと思います。勿論警護のランクも上げるので、

安全は確保出来ると思います」

「ありがとうございます。茨木童子と紫ちゃんの事は……？」

「そちらも大丈夫です。ただもし茨木童子が暴れたら……処罰の対象になるでしょうね」

「やっぱりですか」

人間界を荒らした鬼。やはりというか、やっぱりと言うか……その分類は反英霊に当たる。天界も警戒を強めるのは当然の事だった。

「でも紫ちゃんは天竜姫様のお友達になったみたいです。クマゴローと遊んでましたよ」

夕方には横島君の家に来るけど、天竜姫様と仲良くなってくれたのなら人造神魔だったとしても天竜姫様の怒りを買う事を恐れて手を出す相手はいないだろう。

「とりあえずこれで一安心ですね」

「ええ、とりあえずこの後私はメドーサとブリュンヒルデと合流して、横島さんの警護の打ち合わせをします。大変だと思いますが、人間のほうは何とかして琉璃さんと西条さんで抑えてください」

かなり苦しい案件だけど、天界と魔界から排除するべきでは？という意見が出ている横島君の警護と保護をする小竜姫様達の方がよっぽど大変な筈だ。だから私は迷う事

無く任せてくださいと返事を返し、暫く打ち合わせを続けてメドーサ達の所に向かう小竜姫様を見送った。

「うあ……そうだった。これがあつたんだ……」

溜まっている書類を見ていて、私は思わずうげつと呻いた。

「六道女学院の除霊実習……もうそんな時期なのよね」

夏場に行なわれる除霊実習にGS協会も協力する。これからガープの侵攻があるかもしれないのだから戦闘に耐えられる女学院の生徒の選別もある。それに、舞ちゃんの六道女学院への編入もあるし……まだまだ気を休めることが出来そうにない事が判り、私は心の底から溜め息を吐いた。しかもそこに電話が鳴ってまた厄介事と思いつながら受話器を取った。

『もしもし西条だけど、今大丈夫かい？』

「はい、大丈夫ですよ、どうしました？」

『教授に聞いたんだけど、やつぱりマリア7世の持つてくる旗は触媒になるそうだ。そしてジャンヌオルタが召喚される確立は100%……凄い音がしたけど大丈夫かい!?』

思わず机に突っ伏して額を強かに打ちつけた。英霊召喚成功率100%とか本当にやめて欲しい、しかもジャンヌオルタって横島君への好感度が高すぎてガープに召喚されたのに反逆したのよね……。

(駄目だ。どう考えても大惨事になる未来しか見えないッ！)

報告書から分析出来る性格はくえすと同様でプライドが高く、心を許した人間には甘い。つまり横島君に凄く甘いという事だ、争い的な大惨事ではなく、横島君を巡る恋愛の場面の大惨事になると悟り、私は受話器越しに大丈夫かと私を心配してくれる西条さんの声を聞いても大丈夫と返事を返す気力が無く、横島君を狙う恋敵の多さ。そして全然想像していなかった部分での強敵ジャンヌ・オルタの参戦を予感し、競争率高すぎいっと呻く事しか出来ないのだった……。

美神、西条、琉璃の3人が横島の事で頭を抱えている頃。横島は京都土産をブラドール伯爵や、三蔵の元に届ける為に散歩に出ていた。

「やあ、少年。気分はどうかな？」

「はあ、どうも」

フードを目深に被り、その手に古めかしい本を手にした謎の人物に横島は呼び止められていた。

「君は運命と言う物を信じるかね？」

突然の問いかけに横島はその男が危険人物だと悟り、無視をしてその前を歩き去ろうとした。しかし男はそんな横島を見て、むしろ楽しそうに笑った。

「この本によると君には6つの道があり、君の回りの人間には3つの選択があるとある。聞いておきたまえよ、後悔したく無ければな」

後悔したくないのなら話を聞けと言われ、横島は足を止めた。それを見てフードの男は本を捲り謡うように横島に与えられると言う6つの道を指し示した。

1つは破壊者となり、己を失う道

1つは神の器となり、支配と言う名の救済を齎す道

1つは護りたい者を護る事も出来ず、共に死ぬ道

1つは命を削り、短い仮初の平和を愛する者と生きる道

1つは従属を誓い、支配の下で生き続ける道

1つは誰からも忘れ去られ、大切な者達に平和な世界を残す道

「そして少年を取り囲う者に与えられしは3つの選択。6つの道と3つの選択……これが世界の明暗を分ける大きな分岐点となる」

1つは与えられた救済を受け入れ、失った者さえも忘れろという選択。

1つは互いに互いを憎み合い、魂無き器を作ると言う選択。

1つは残されたほんの僅かな時間、限られた幸福を噛み締め死を迎えるという選択。

「己の選ぶ道を悔いる事無く、そして歩み続けるが良い。救世主となるか、破壊者となるか、それとも王となるか。私はお前の行く末を見届けよう。それが私……」レクス・

ロー」が選んだただ一つの選択である」

横島にそう告げた男——レクス・ローの姿は強い風が一陣吹くと共にその姿を消し、残された横島は周囲を見渡してレクス・ローの姿を探したが、その姿を見つけない事は出来ず。狐につままれた様な顔をして、土産を届ける為に再び歩き出すのだった……。

「大いなる選択は今この時より始まる。終焉か、それとも繁栄か……世界の意志に抗うか、私は全てを見届るとしよう」

「ヴィートウスツ!!」

風によって捲られたローブ——レクス・ローと名乗った男の腰にはゴーストドライブとは異なる、機械的なデザインベルトが巻かれていた。

「変身」

「逆行! パラドクスタイム! スゴイ・ネガイ・オモイ 仮面ライダーフォーティス、フォーティス、フォーティスツ!!」

レクス・ローと名乗った男の姿は仮面ライダーへと変わり、京都土産を手にして歩いていく横島を見つめたと思うと一瞬でその姿を消すのだった……。

G S 芦 蛭 絶 対 幸 福 大 作 戦 !!!
F a i n a r u へ 続 く